

博士学位申請論文

エッジワースの功利主義論と経済学  
——不平等性の功利主義——

上宮 智之

エッジワースの功利主義論と経済学

——不平等性の功利主義——

（要旨）

上宮 智之

本稿は、「エッジワース・ボックス」(Edgeworth Box)の名とともに知られる経済学者フランシス・イシドロ・エッジワース(Francis Ysidro Edgeworth, 1845-1926)の功利主義論と経済学との関係性についての研究である。端的に言えば、本稿の目的は、1880年前後に展開されたエッジワースの功利主義論がその後の彼の経済学にも大きく反映され、前者が後者とは切り離せないことを示すことにある。

エッジワースは、『数理精神科学』(*Mathematical Psychics*, 1881)のなかで無差別曲線や契約曲線の概念を提示し、今日の数理経済学に先鞭をつけた人物として、ジェヴォンズ(William Stanley Jevons)の後継者と評価されることが多い。たとえば、メイナード・ケインズ(John Maynard Keynes)は、「ジェヴォンズの後裔」の一人とエッジワースをみなして差し支えない、と述べている(Keynes 1933, 148fn/訳 200)。

他方で、イギリス経済学会(The British Economic Association)——のちに王立経済学会(The Royal Economic Society)——の事務局やその学会誌である『エコノミック・ジャーナル』(*The Economic Journal*)誌の編集者を任されるなど、ジェヴォンズの死後、エッジワースはマーシャル(Alfred Marshall)の影響下にあった。このため、彼を、マーシャルという恒星を軌道周回する経済学者、あるいはマーシャルに次ぐ「二番手」的存在の経済学者とする評価もある(Barbé 2010, 124-25; Creedy 1990, 18)。実際、エッジワースのオックスフォード大学ドラモンド講座経済学教授(Drummond Professorship of Political Economy, 1891-1922)就任の裏には、マーシャルの意向と影響力とが見え隠れする。

もちろん、エッジワースはときとしてマーシャルに匹敵するか、それ以上の経済学者として評価されることもある。たとえば、シュンペーター(Joseph Alois Schumpeter)は、「経済学の分析装置にたいする実際に斬新な貢献（無差別曲線、契約曲線、収穫逦減、一般均衡、その他）においては、それらはマーシャルの『経済学原理』に匹敵するもの、いな、それ以上のものである」(Schumpeter 1954, 831/訳下巻 153)と述べている。さらに、ハロッド(Roy Forbes Harrod)も、「[エッジワース] の名声は今も高まっており、やがて、経済学における独創的思想家としての彼の歴史的地位がアルフレッド・マーシャルの地位を凌ぐように

なったとしても当然のことと思われる」(Harrod 1971, 42/訳 73)と、エッジワースを経済学史上の重要人物としてみなしている。しかし、これらの評価もあくまで基準はマーシャルにあり、むしろマーシャルが主流であることを強調している。

いずれにせよ、限界革命以降のイギリス経済学の主流にはジェヴォンズやマーシャルという大河があり、その存在の重要性は認知されてはいるものの、エッジワースは、あくまで、その大河につながる一つの支流として扱われる傾向にある。

大河たるジェヴォンズやマーシャルにかんしては、その研究ツールとして、その日記や書簡、著作目録——たとえば、Black and Könekamp(1972)や Black(1973-81)、井上(1986a and 1986b)、Inoue and White(1993 and 2001)、Whitaker(1996)——などが 1970 年代以降に急速に整備され、さらなる近代経済学史研究の進歩を促した。これに比して、エッジワースという支流にかんするそれらは、彼が「すべての国の経済学者との、世界中でもっとも広い、個人的な面識があつたに違いない」(Keynes 1933, 264/訳 349)人物であつたにもかかわらず、未整備のままであつた。しかし、21 世紀に入ってようやく、バッチーニ(Alberto Baccini)によるエッジワースの著作目録(Baccini 2003)、そして、バルベ(Lluís Barbé)によって多くの書簡を含むエッジワースの詳細な伝記(Barbé 2010)が公刊され、エッジワース研究は現在、縦横夢隅にその幅を広げることが可能となったと言っても過言ではないだろう。本稿も Baccini(2003)や Barbé(2010)に多くを負っている。

冒頭に述べたとおり、本稿の主題は、エッジワースの功利主義論と経済学である。この主題自体は決して珍奇なものでも、斬新なものでもない。メイナード・ケインズをはじめ、多くの経済学者は、エッジワースが功利主義の信奉者であることを認めている。サミュエルソン(Paul Anthony Samuelson)も、「古い世代の経済学者にとっては効用の個人間の比較はほとんど問題なしにおこなわれた。功利主義的伝統にひたつたエッジワースのような人にとっては、個人の効用は——いな、社会的効用すら——朝食のジャムと同じくらい現実的なものであつた」(Samuelson 1948, 206/訳 212)と評している。

しかし、このエッジワースの功利主義論と経済学との関係性をめぐる経済学者たちの態度はさまざまである。たとえば、メイナード・ケインズは、1870 年代から 80 年代にかけて信じてきた功利主義的心理学を晩年にいたるまでにエッジワースは完全に信じられなくなり、その結果として、エッジワースが功利主義から経済学の限界理論へと関心を移行させた、と述べている(Keynes 1933, 259-60/訳 343-44)。シュンペーターもまた、エッジワースの地位を見計る観点の一つに功利主義を挙げたが、最終的には、「エッジワースの場合も

ジェヴォンズの場合と同様、その経済学的著述のいずれかから功利主義を取り除いたとしても、その科学的内容には何ら影響するところがないのである」(Schumpeter 1954, 831/訳下巻 153)との評価を与えており、この両者の関係を必ずしも重要視していない。このように、エッジワースの経済学は彼の功利主義論とは独立的に成立するというのが一つの理解である。

これにたいして、クリーディー(John Creedy)は、前述のシュンペーターの評価を、エッジワースの経済学にたいする功利主義の影響を著しく軽視したものとして非難する(Creedy 1986, 130)。つまり、エッジワースの経済学は、終始、彼の功利主義論を抜きにしては語れない、という理解も存在するのである。本稿において示す見解も、全体として、このクリーディーの見解と合致するものであり、このため、以下のような構成を採用する。

1章においては、エッジワースの理論的業績とされる今日の「エッジワース・ボックス」と実際に彼が『数理精神科学』において説明した「ダイアグラム」とを比較する。この両者は、少なくとも Kaldor(1934)以降、慣習的に連続するものとみなされてきた。しかし、1970年代に入ると、Walker(1973)、Tarascio(1972)、Jaffé(1974)、Weatherby(1976)らが、「模索過程」、「無差別曲線体系」、「初期保有量」をキーワードとして、これに反論を試みた。「エッジワース・ボックス」とエッジワースの「ダイアグラム」とを独立的なものともみならずこの1970年代の動きにたいしては Creedy(1980a)が反批判し、さらにこれに Tarascio(1980)が反論することによって、「エッジワース・ボックス論争」ともいべき論争が生じた。この論争にたいする一定の解答を、その後の Newman(1990)や Mirowski(1994b)なども参考としながら、導き出すことが1章の目的である。

「エッジワース・ボックス」は、今日、「2人(グループ)が2財を交換する場合に均衡の性質などを示すために用いられる図」(伊東 2004, 162)と定義される(本稿 10頁参照)。これはエッジワースが実際に『数理精神科学』において描いた「ダイアグラム」(本稿 13頁参照)とその外観において異なる。エッジワースは、この「ダイアグラム」を用いて、自由競争かつ完全情報のもとで、利己的取引者が無数に存在する場合には契約が一意に決定されるが、その数が有限であるならば契約に不確定性がともなうこと、ただし、その数が増加するにつれて不確定性が減る——つまり、契約曲線の範囲が収縮する——ことを証明した。

「エッジワース・ボックス論争」は、(1)このようなエッジワースの説明における再契約理論が完全競争均衡における「模索過程」と同義か否か、また「静学モデル」か「動学

モデル」か、(2)「エッジワース・ボックス」の起源をエッジワースの「ダイアグラム」に求めてよいか否か、を焦点とした。これらの論争を整理し、その結論を言えば、(1) エッジワースがみずからの再契約理論を不完全競争市場モデルから完全競争市場モデルまでを包含する理論とみなしていることから、これは単なる完全競争均衡における「模索過程」とは言えず、また「取引日」など動学的要素も『数理精神科学』におけるモデルでは採用していないため、彼のモデルは「静学」である、(2)「無差別曲線体系」、「初期保有量」といった前提の欠如が「エッジワース・ボックス」と「ダイアグラム」との断絶の理由とされたが、実際にはそれらの前提は「ダイアグラム」に存在し、この二つの図の連続性は肯定される。

しかしながら、これらの論争の焦点となったのは、序文、第Ⅰ部、第Ⅱ部、7編の付録から構成される『数理精神科学』のうち、第Ⅱ部前半部にあたる「経済的計算法」(Economic Calculus)におけるエッジワースの叙述である。現代理論とエッジワースの経済学的叙述とを比較するこの視野は、彼みずから示した『数理精神科学』全体としての目的がシジウィック(Henry Sidgwick)の『倫理学の諸方法』(*Methods of Ethics*, 1874)にたいする補足であったことに照らしあわせれば(Edgeworth 1881, v; 16)、狭範かつ危険なものである。何よりも、ブラウグ(Mark Blaug)の指摘する「神人同型說的罪悪」と「詭弁的の神人同型說的罪悪」の両方を犯している危険性がある(Blaug 1978, 1/訳1巻3)。実際、エッジワースの言説にしたがえば、彼の「ダイアグラム」は、契約取引をはじめとするさまざまな局面にあらわれる不確定性の存在を証明するため、そして、その不確定性を回避する仲裁原理としての功利主義の必要性を論証するためのものである。それゆえ、『数理精神科学』執筆以前からエッジワースが関心を示していた当時の倫理学との比較が必要となるうえに、そもそも、経済学者としてみなされる彼がいかにして倫理学を出発点とし、経済学にも関心を広げるようになったのかをも考えなければならない。このような理由から、2章および3章を通じてエッジワースについての伝記的考察を試み、彼の生誕から1891年のドラモンド講座経済学教授就任にかけてまでの知的環境について論じる。

エッジワースの伝記的著作は、知名度の高い Keyens(1926, 1933 and 1937)をはじめ、多数にのぼる。しかし、これらの中には、エッジワースのトリニティ・コレッジ・ダブリン(Trinity College, Dublin)在籍や卒業にかんする情報をはじめとして、いくつかの齟齬が存在する。これらの齟齬は、エッジワースの書簡や彼が所属した大学機関に現存するマニュスクリプトなどを丹念に網羅した Barbé(2010)の登場によって、大きく解消された。とはいうものの、

この Barbé(2010)にもいくつか看過された点が残っていることも確かである。実際、同書はエッジワースの大学時代の成績などを紹介しているが、それらの成績がどのような学習内容に基づくものかを明らかにしておらず、不明な点も多い。このため、2 章では、トリニティ・コレッジ・ダブリンのマニユスクリプツ・デパートメント(Manuscripts Department)、オックスフォードのボドリアン図書館(Bodleian Library)、ベリオル・コレッジ(Balliol College)およびナッフイード・コレッジ(Nuffield College)の図書館に所蔵されている資料に基づいて、ダブリンおよびオックスフォードにおけるエッジワースの学生時代の動向や学習内容を詳述する。また、3 章においては、彼がオックスフォード大学を卒業してから経済学の研究を開始する経緯、さらにアカデミック・ポスト獲得に向けた動きを活発にし、母校のドラモンド講座経済学教授就任にいたるまでの交友関係や職歴などに目を向ける。この章においても、キングズ・コレッジ・ロンドンのアーカイヴス(King's College, London, Archives)に所蔵されている資料を活用し、Barbé(2010)が誤記している同コレッジ在職時代のエッジワースについての情報を正す。

これらの伝記的考察から浮かび上がってくるのは、ダブリンおよびオックスフォードでの学生時代の間(1861-70)、エッジワースが主に古典の勉学に勤しみ、経済学と触れ合った証拠がないこと、彼が 1870 年代にサヴィル・クラブへの入会を通じて知り合った心理学者サリー(James Sully)の影響のもと、第一著作『倫理学の新方法と旧方法』(*New and Old Methods of Ethics*, 1877)を執筆したこと、またそのサリーを介して功利主義にも言及した哲学者スティーヴン(Leslie Stephen)やジェヴォンズの知己となったこと、ジェヴォンズとの交流をきっかけにみずからの快樂概念と限界効用理論に類似性を見出し、経済学研究を開始したこと、『数理精神科学』がマーシャルによって功利主義的著作とみなされたこと、そしてやがてエッジワースを経済学者として認めたマーシャルがドラモンド講座経済学教授就任を後押ししたこと、などである。

このような事実から言えることは、『数理精神科学』が単なる経済学的な著作ではなく、功利主義的な著作である、ということである。4 章では、2 章および 3 章で明らかにした彼の知的環境や交友関係から浮かび上がった心理学や倫理学といった学問分野の観点から、エッジワースの『数理精神科学』が有した本来の目的とその背景を明らかにする。

上述したとおり、シジウィックの『倫理学の諸方法』への補足を目的とした『数理精神科学』は、1870 年代後半に展開された「物理倫理学」の是非や「実践理性の二元性」をめぐるシジウィック＝バラット論争を背景としている。1 章との関連でより詳しく言えば、

エッジワースが描いた「ダイアグラム」も、この論争の一つの主題となった「実践理性の二元性」問題に解答を提示するためのツールであったことを強く主張する。この際、『倫理学の新方法と旧方法』やそれに続く論文で『数理精神科学』第Ⅱ部後半に「功利主義的計算法」(Utilitarian Calculus)として再録された「快樂主義的計算法」(Hedonical Calculus, 1879)におけるエッジワースの主張にも目を向ける。というのも、功利主義の側面から『数理精神科学』における契約の不確定性やその仲裁原理にかんする議論を考察する試みはすでに、Collard(1975)や根岸(1985)、Creedy(1986)、Newman(1987)、中野(1995)、松嶋(2005)らによってなされているが、これらの考察範囲が『数理精神科学』第Ⅱ部前半部の「経済的計算法」に限定されてしまっているためである。これらの研究が経済理論的、経済学説史的な取り扱いの域にとどまっていることは否めない。

エッジワースが『数理精神科学』において補足する対象としたシジウィックの『倫理学の諸方法』は、自分自身の幸福最大化を目的とする利己主義と人びと全体の幸福最大化を目的とする功利主義との両方をそれぞれ独立したものとして、人間の行為の原理と認めている。この体系が「実践理性の二元性」であるが、これはバラット(Alfred Barratt)の批判の対象となった。それは第一に、物理的な刺激から快樂を測定できるとしてバラット可能と考えた「物理倫理学」にシジウィックが否定的であったこと、第二に、バラットが利己主義こそ人間の本質的性向と考えたことに起因する。このシジウィックとバラットによる論争がシジウィック＝バラット論争であり、エッジワースは、『倫理学の新方法と旧方法』および『数理精神科学』において、この論争に関わることとなる。

『倫理学の新方法と旧方法』において、いくつかの留保条件を置きながらも、バラットのいう物理倫理学には可能性を感じたエッジワースは、物理学と倫理学とを橋渡しするものとして、ドイツ実験心理学における「フェヒナーの法則」に注目した。彼はこのフェヒナーの法則を参考に限界快樂が逓減的となる快樂測定公式を提示すると同時に、各個人の快樂受容能力や快樂刺激閾が異なる場合を想定し、不平等分配こそ社会の快樂最大化の普遍的条件であり、平等分配はその特殊例であることを——ラグランジュ未定乗数法を用いて——導き出した。いわば、エッジワースは功利主義に数学的精密性を与えようとしたわけであるが、ここに平等性を重視するベンサム主義を批判する彼の精密功利主義(exact Utilitarianism)の原点がある。また、基数的に快樂を測定できるとの考えは、快樂の質の差を考えるミルの功利主義への批判でもあった——エッジワースは、質の差にみえているものは、実際には桁数が違うほどに数に差があるだけなのである、と主張した。

エッジワースは、『倫理学の新方法と旧方法』に続く『数理精神科学』において、利己的取引者の間の契約には——取引者の数が無限である場合以外——不確定性が存在し、その仲裁原理として功利主義が必要であることを論じた。これをシジウィック＝バラット論争の第二の論点に照合すれば、利己主義者であっても功利主義という実践理性なしには行為できないことを意味している。つまり、エッジワースの「ダイアグラム」は、同論争にたいする一つの解答を提示するためのものなのである。このようにして、その必要性が導き出された彼の功利主義論は、第一著作に引き続き、各個人によって快楽受容能力が異なれば、平等分配が快楽最大化を必ずしも導かないことを主張するため、『数理精神科学』においても、ベンサム主義を批判対象とするものであった。エッジワースは、この快楽受容能力にかんして優生学的思考をもち、全体的な傾向として上層階級は遺伝的に受容能力に優れた人びとであるとの見解を示している。したがって、快楽受容能力の高い貴族たちがより多くの報酬を得ることも、また男性に比べて労働にたいする受容能力の低い女性たちが厳しい労働から免除されることも、功利主義的根拠に基づいたものである、と彼は主張した。

このように、たとえシュンペーターが功利主義をエッジワースの経済学から取り除いたとしても成立する、と述べたとしても、上述のように倫理的な目的を有している以上、エッジワースの『数理精神科学』は功利主義的な議論を抜きにしては成立しえないのである。

5章においては、エッジワースが経済学研究を開始した頃にイギリス経済学界に生じていた経済学方法論争とそれに平行して発表された『数理精神科学』以降の彼の著作や書評、講演などに注目し、彼の経済学方法論の特徴を考察する。エッジワースの経済学方法論における立場は、Creedy(1986)が「演繹法の擁護者」と簡単に説明しているだけであり——Hutchison(1953)や福岡(1999)も彼の講演の断片を紹介するにとどまる——、同論争におけるエッジワースの主張の詳細はもとより、彼が帰納的・歴史的方法をどのように考えていたかを明確にされていない点にも問題がある。これらをあきらかにすることが5章の目的である。

1870年代後半のイギリス経済学は、経済学クラブによる『国富論』出版100年記念式典(1876)、イギリス科学振興協会からのF部会排除運動(1877)、イングラムのF部会会長講演(1878)に象徴されるように、経済学の科学性やその方法論をめぐる混乱状態にあった。とりわけ、F部会排除運動を具現化したゴールトン(Francis Galton)は当時の経済学の非数学

性を批判し、これを受けてイングラムは経済学を社会学に包摂し、その社会学の方法として、演繹的・抽象的方法ではなく、帰納的・歴史的な方法に依拠することを主張した。

このような時代にエッジワースは、『数理精神科学』第I部において、物理学および道徳科学の主題——すなわち、「エネルギー」および「快樂」——が数量的な概念で把握できるうえ、その目的がそれぞれの主題の「最大化」という共通点をもつことから、物理学と同じように、道徳科学にも数学的手法の導入が可能であると主張した。このような主張は、功利主義に数学的精密性を与えようとした彼にとって必要なものであると同時に、直接的ではないにしろ、ゴールトンの批判に対峙するものであった。

同じく『数理精神科学』にみられる「ダイアグラム」分析は、完全情報などの仮定をおいたうえで、契約取引の場に両者のクローンを徐々に増やすという演繹的推論の形でおこなわれている<sup>1</sup>。このような演繹的・抽象的方法は、現実に即さないものとしてイギリス歴史学派の批判対象となったが、エッジワースはこのような方法は全体的な傾向（一般的教示）を導き出すものであって、詳細を与えるものではないと反論している。これと同様の見解は、エッジワースのF部会会長講演(1889)やドラモンド講座経済学教授就任講演(1891)でも繰り返し述べられた。彼が重要視したのは、この一般的教示が現実に当てはめられたときに有効性をもつかどうかであり、このため、彼がとった方法とは、「経験との比較、およびその一致による修正や立証をおこなう仮説演繹法」(Edgeworth 1881, 126)、すなわち、「仮説→演繹→検証」という帰納法的な段階を経た方法であった。エッジワースは、書評を通じてロジャーズ(James Edwin Thorold Rogers)も演繹的・抽象的方法を用いていることを見出すと同時に、そのロジャーズをはじめとするイギリス歴史学派が推奨する帰納法も偶然性の排除のために無作為抽出や有意検定、加重原理などの演繹的な操作を免れないことを論じることによって、演繹か帰納かという二者択一的な経済学方法論争が架空のものであると結論した。また、不毛な方法論争は科学の進歩をも阻害すると考えたエッジワースは、過度に偏重しないように気をつけながら各人はみずからの知的限界便益が大きい方法に依拠すればよいと主張したのである。

6章および7章においては、エッジワースの功利主義論と政策論との関係に注目する。より具体的には、6章では彼の所得課税論を、7章では男女賃金論に焦点を当てる。

エッジワースの所得課税論については、Musgrave(1959)や井藤(1969)、Creedy(1981 and

<sup>1</sup> 正確には数学的帰納法であるが、数学が演繹的な方法である以上、その内実は演繹的推論である。

1986)、Daunton(2001)、松嶋(2005)、菊池(2006)などが取り上げているが、この議論が功利主義的基礎に基づいているという特徴にかんして、各論者の見解の間に大きな相違はない。しかし、『数理精神科学』においてエッジワースが提示した平等性を批判する功利主義論と彼の所得課税論の根底を支える功利主義との異同を厳密に比較した論者はいない。とりわけ、『数理精神科学』におけるエッジワースの功利主義論は、ベンサム主義やシジウィックを批判するものであったにもかかわらず、エッジワースとシジウィックの所得課税論比較を目的とした菊池(2006)は両者の功利主義の異同について言及していない。またCreedy(1981 and 1986)や松嶋(2005)も『数理精神科学』の「経済的計算法」とエッジワースの所得課税論とを直結させ、「功利主義的計算法」にみられる快樂受容能力の差異の容認とそれに基づいて不平等分配を認める種の功利主義、すなわち「精密功利主義」についての解説を割愛する形の論法をとっている。このような説明は、エッジワースの精密功利主義と所得課税論との関係を見えにくいものになっているため、6章では彼の『数理精神科学』と「課税の純粹理論」(The Pure Theory of Taxation, 1897)などの所得課税にかんする論文との間にみられるに彼の功利主義論の異同について精査する。

エッジワースの「課税の純粹理論」は、所得税の累進に「最終的な経済的基礎を与え」(松島 2005, 65)、この問題にかんして「英語圏にもっとも大きな影響を与えた」(Hayek 1960, 435/訳 7 卷 241)論文である。この論文においてエッジワースは、セリグマン(Edwin Robert Anderson Seligman)やシジウィック同様、公共サービスに要した費用を個別化することが困難であることを理由として、租税を公共サービスの受益者が支払うべき対価とみなす「利益説」を拒絶する。これらの論者と違って、エッジワースはさらに、政府と公共サービスの受益者との間に競争者が無限に存在しないことから、公共サービスとその経費との交換比率が不確定となることもその拒絶の理由とした。この後者の論法は『数理精神科学』における「ダイアグラム」の議論と同じであり、「課税の純粹理論」においても、この不確定性を回避する原理として功利主義が必要となるため、彼は課税負担の分配問題に功利主義的原理を適用したのである。

課税に功利主義的原理を適用したエッジワースは、各個人が同一効用関数をもつことを想定し、課税後の社会の総効用が最大とする最小犠牲原理——これは数学的には均等限界犠牲原理と同義であり、課税後の所得を平準化する累進課税の適用を意味する——を「課税における至高の原理」(Edgeworth 1897, 106-07)として推奨する。彼がこの最小犠牲原理を高く評価したのは、第一に、課税による各納税者の犠牲量を等しくする均等犠牲原理は

想定する効用関数形によって導き出される課税制度が異なる——ベルヌーイ効用関数のときは比例税、非ベルヌーイ効用関数のときは累進税——ためであり、第二に、各納税者の犠牲比率を等しくする均等比例犠牲原理は最小犠牲原理同様に累進税を導くが、課税後の総効用を最大にするという積極的論拠を持ち得ないためである。

しかし、理論的には最小犠牲原理によって推奨される所得平準化の実践を、現実的には各個人の快樂受容能力に差異があることを理由にエッジワースは留保し、限界犠牲がもっとも小さいと思われる少数の高額所得者から全課税額を徴収することを提案した。このように「課税の純粹理論」においても快樂受容能力の差異を重視したエッジワースであるが、『数理精神科学』におけるような快樂受容能力の大小についての優生学的思考は同論文において消散している。このことから、彼の功利主義論のコアが快樂受容能力の差異を考慮しない最大幸福と平等性との暗黙裡な結合への批判であったこということができよう。

エッジワースの男女賃金論も『数理精神科学』と深い関係にある。メイナード・ケインズは、彼が両性間の賃金問題に生涯関心を寄せ、『数理精神科学』にすでにその萌芽が存在することを指摘している。また、エッジワースと交流したボナー(James Bonar)やハロッドも彼の男女賃金論への傾倒について触れており、エッジワースの男女賃金論が彼の功利主義論と経済学との関係を見定める一つの重要な視点となることは間違いない。彼の男女賃金論そのものは経済学におけるフェミニズム研究の対象の一つとして Pujol(1992)によってとりあげられているが、彼の功利主義論と経済学との関係に注目するこの視点は、これまでのエッジワース研究において論じられてこなかったものである。これを7章において取り上げる。

ケインズが指摘するように、エッジワースは早くは「快樂主義的計算法」や『数理精神科学』において、両性間の等しい労働を等しい限界不効用とする概念を提示している。この概念は、彼の二度目の F 部会会長講演、「男女への等しい労働にたいする等しい賃金」(1922)においても登場することとなる。また、『エコノミック・ジャーナル』誌の編集者であったエッジワースが、同誌創刊(1891)からシドニー・ウェブ(Sidney Webb)やフォーセツト(Millicent Garrett Fawcett)らによる女性労働問題を取り上げた論文を採用している点、そしてみずからもスマート(William Smart)の『女性の賃金』(*Women's Wages*, 1892)を書評している点も注目値する。彼はこれらの著作を通じて、また『印刷産業における女性』(*Women in the Printing Trades*, 1904)の出版にかかわることを通じて、慣習や工場法、労働組合の力の不均衡といった人為的な要因のために、男性ほどには女性に労働選択の自

由がなく、またその賃金も低廉であることを実証的に把握した。

1922年のF部会会長講演においては、この人為的独占を除去するため、彼は女性労働組合の興隆、さらに賃金局の設置とその適用業種の拡大という方法で最低賃金を保証することによって、女性にも「等しい労働選択の自由」を与えるべきとして、両性間の競争を認めた。もちろん、両性にとって一般的ではない産業もあるが、エッジワースはその両性が参入できる産業においては、性差に起因する「二次的差異」を考慮して男性賃金からいくらか割り引いた賃金を女性に与えるのではなく、両性に「職業賃金率」を適用することによって競争を促進し、最適な労働再分配が達成されると主張した。

しかし、かりに同じ生産効率をもつ両性が独身であれば、額面において等しい賃金は等しい満足を与えるかもしれないが、男性労働者が全般的に家族扶養者であることを考えれば、等しい賃金額は男性労働者にとって不公平なものである。エッジワースは、かつて『数理精神科学』で示した「等しい労働」とは「等しい限界不効用」であるとの理解を再び提示し、これが成立するならば、「等しい賃金」とは「等しい満足」であると示唆する。このため、家族を扶養する男性労働者が女性よりも高い賃金を得ることは理にかなっていると主張した。ここにもエッジワースの不平等性を肯定する功利主義に即した考えがあらわれている。ただし、ここで注目すべきは、エッジワースが、『数理精神科学』や「課税の純粋理論」においては、不平等分配を肯定的に捉える根拠として個人の快樂受容能力の差異を据えたのにたいして、この男女賃金論にかんしては、個人の経済的生活状況の差異を重視したことである。ここに彼の経済的厚生への関心が読み取れる。

もっとも男性労働者の賃金が自分たちよりも高額であることは女性労働者にとって容易に受け入れられることではなく、両性間の「衝突」につながる。それゆえ、エッジワースは、男性を扶養義務から解放することで男性の効用を減退させず、女性の満足を増進するという点でラスボーン(Eleanor Florence Rathbone)の家族手当構想を仲裁案として評価した。これは、『数理精神科学』の「ダイアグラム」における「功利主義的な点」と同じものと言えよう。もっとも、エッジワースは第一次世界大戦後の苦しいイギリス財政を考慮し、ラスボーンのような国家による給付ではなく、より国家負担を軽減できる学童給食無償化、一定数以上の子どもがいる家庭に限定した制限的家族手当給付、国家ではなく労働組合などによる互助的再分配といった代替的方法を提案した。

これら彼の所得課税論および男女賃金論において方法論の見地から興味深いのは、いずれも同質の経済主体を想定するという単純な事例から議論から異質な経済主体を想定する

複雑な事例へと議論を展開していることである。彼の方法は、単純な事例から一般的教示を得て、それをもって複雑な事例へと応用するという演繹的方法を一貫して採用している。

以上で論じてきたエッジワースの議論はいずれも快樂主義的なものであり、つまり、効用の可測性およびその個人間比較が前提となっている。この前提は、エネルギー最大化について研究する物理学と同じく、道徳科学も快樂最大化がその主題であることを理由として、快樂測定公式を提示することによって——メイナード・ケインズのいう「功利主義的心理学」という立場から——より積極的に打ち出された。

メイナード・ケインズは、このようなエッジワースの「功利主義的心理学」への傾倒はやがてなくなり、「知的生涯の全体を通じて、彼は自分の基礎が足元から崩れ去るのを感じていた」(Keynes 1933, 262-63/訳 347)と述べている。それは、メイナード・ケインズによれば、『数理精神科学』において採用した原子の仮説が精神科学ではうまく作用せず、「測定ではなく、せいぜい一次近似に過ぎない」(*ibid.*, 347/訳 262)からであった。そして、「これらすべての点をエッジワース以上によく意識していた者はいなかった」(*ibid.*, 347/訳 262)という。

しかしながら、このようなメイナード・ケインズの評価には疑問が残る。数学的推論、すなわち演繹的・抽象的方法をしばしば用い、またイギリス歴史学派の批判からそれらを擁護したエッジワースは、これらの方法が、詳細を与えるものではなく、全般的な傾向、すなわち一次近似を与えるものであると述べたはずである。とすれば、一次近似にすぎないことで彼が悲観したとの認識は短絡的なものではないだろうか。

エッジワースから経済学を学んだハロッドは、エッジワースが快樂の個人間比較は可能であると強調しているのを何度も耳にしたことがある、と証言している(Harrod 1971, 43/訳 75)。ハロッドによれば、エッジワースは、その発明者であるにもかかわらず、無差別曲線が基数的測定を不要にしてくれるとの意見には賛成しなかった、という(*ibid.*, 43/訳 75)。

たしかにエッジワースは、『数理精神科学』においては、より多くの観察から得られたデータを平均化することで快樂の個人間比較が可能になると述べている(Edgeworth 1881, 102)。また、人間のなかでもっとも似通っているであろう食べ物の効用や単純労働の不効用の測定から着手することによって、やがて他の効用の測定も可能となるだろうというフィッシャー(Irving Fisher)の考えを「功利主義者にたいする貴重ないくつかのヒント」(Edgeworth 1893b, 41)と高く評価している。このように、みずからの功利主義研究を経済

学研究に適用し、同様に経済学研究を功利主義研究にフィードバックする、というように、エッジワースの功利主義論と経済学との関係は密接なものである。同様の姿勢は、「男女への等しい労働にたいする等しい賃金」(1922)においても見出される。それは、経済的厚生に局限した問題の解答が道徳的善や精神的善を含む幸福全体の問題への解答を考える際の資料となりうる(Edgeworth 1922, 434-35)、と彼が述べていることから明らかである。したがって、メイナード・ケインズがいうような功利主義から経済学の限界理論へのエッジワースの関心の移行はなく、またシュンペーターが述べるように、その両者を切り離すことも困難なことなのである。

最後に、本稿が残した課題——今後の研究課題——についても整理しておきたい。本稿では、『倫理学の新方法と旧方法』や『数理精神科学』といったエッジワースの著作をはじめ、経済学方法論、所得課税論、男女賃金論などをはじめとする論文や書評を中心に、彼の功利主義と経済学との関係について精査してきた。しかしながら、Baccini(2003)にみられるようにエッジワースは多産な著述家であり、本稿で取り扱った彼の著作数の彼の全著作に占める割合は決して高いものとはいえない。エッジワースの契約理論との関連性が深いとされる国際貿易理論や独占理論、戦争の経済学など、本稿において明示的には取り上げることのできなかつた彼の経済学分野の業績は数多い。本稿で明らかとした彼の功利主義論と経済学との関係性が、エッジワースのこれらの著作においても通徹されているかどうかは精査すべき問題であろう。

他方で、本稿との関連性でいえば外在的な問題として今後の課題となるのは、エッジワースの確率論および統計学にかんする諸論文と彼の功利主義論との関係である。本稿で取り扱ったエッジワースの著作だけをみても、これらの分野を意識した言説は随所に散りばめられており、彼がこれらに注目し、多くの業績を残したことは紛れも無い事実である。メイナード・ケインズは、確率論と功利主義とにたいするエッジワースの態度を対比させ、次のように述べている。

「エッジワースははじめ、確率概念にたいして論理的基礎よりもむしろ物理的基礎を求める側に強く傾いて、確率の度数理論の支持者として出発した。これはあたかも、功利主義的倫理学の支持者として、彼が形而上学的基礎よりもむしろ物理的基礎にくみする側に傾いていたのと同じである。しかし、いずれの場合にも、彼の心は異論にたいして敏感であり、またいずれの場合にも、時が経つにつれて、異論の重みは頭の

なかで減少するよりむしろ増大していった。にもかかわらず、彼はどちらの場合にもこれら当初の推定を他のものと取り替えることはしなかったので、その結果、彼はしだいに哲学的基礎にたいしては懐疑的な態度を取るとともに、こうした基礎が本当はどれほど不確実なものであろうとも、その上に首尾よく立てられた実際の応用にたいしては実用主義的な態度をとるようになった。その結果は、彼の興味の中心が徐々に確率から統計学の理論へ、功利主義から経済学の限界理論へと移っていくことになったのである」(Keynes 1933, 259-60/訳 343)。

上述したように、晩年においてもエッジワースは効用の可測性を信じていた。つまり、彼は、当初みずからが抱いていた物理的基礎や哲学的基礎に疑問を感じたために功利主義から経済学へと移行したわけでも、その物理的基礎や哲学的基礎に不信の念を抱いたわけでもない。この意味で、エッジワースの「功利主義から経済学の限界理論」への移行というメイナード・ケインズの評価は妥当なものとはいえない。となれば、今後は彼の「確率論から統計学」への関心移行という評価についても検討する必要があるだろう。この問題こそ、今後の課題のなかでもっとも重要かつ大きなものであろう。

エッジワースの功利主義論と経済学  
——不平等性の功利主義——

|                                    |    |
|------------------------------------|----|
| 目次                                 | i  |
| 凡例                                 | iv |
| <br>                               |    |
| 序章　本稿の目的と問題意識                      | 1  |
| <br>                               |    |
| 第1章　エッジワースの「ダイアグラム」とその解釈           | 9  |
| 1-1. 今日における「エッジワース・ボックス」           | 10 |
| 1-2. 『数理精神科学』における「ダイアグラム」          | 11 |
| 1-3. 1970年代以降の「エッジワース・ボックス」をめぐる論争  | 19 |
| (1) 『数理精神科学』における「再契約モデル」解釈         | 20 |
| (2) 「ダイアグラム」と「エッジワース・ボックス」         | 25 |
| 1-4. 「ダイアグラム」解釈史にみる二つの罪悪           | 29 |
| <br>                               |    |
| 第2章　エッジワースとその知的環境                  |    |
| ——その誕生から1860年代にかけてのエッジワース——        | 31 |
| 2-1. エッジワースの誕生                     | 32 |
| 2-2. エッジワースとトリニティ・コレッジ・ダブリン        | 37 |
| 2-3. オックスフォード大学におけるエッジワース          | 43 |
| 2-4. エッジワースの古典教養水準                 | 50 |
| <br>                               |    |
| 第3章　エッジワースの交友関係と職歴                 |    |
| ——1870-80年代のエッジワース——               | 51 |
| 3-1. 独学するエッジワース——法律と数学——           | 51 |
| 3-2. エッジワースとサリー、ジェヴォンズ——交友関係の広がり—— | 55 |
| 3-3. エッジワースの就職活動——経済学教授職への応募——     | 61 |
| 3-4. 初期におけるエッジワースの経済学講義            | 68 |
| 3-5. 倫理学から経済学への拡張——二つの意味において——     | 73 |

|                                     |     |
|-------------------------------------|-----|
| 第 4 章 『数理精神科学』と精密功利主義               |     |
| ——シジウィック＝バラット論争からの独自展開——            | 74  |
| 4-1. シジウィック＝バラット論争の構図               | 76  |
| 4-2. シジウィック＝バラット論争と『倫理学の新方法と旧方法』    | 79  |
| 4-3. エッジワースによるシジウィック＝バラット論争への解答     | 84  |
| 4-4. エッジワースの「精密功利主義」                | 89  |
| 4-5. 『数理精神科学』の真意とその評価               | 95  |
| 第 5 章 エッジワースと経済学方法論争                | 99  |
| 5-1. 経済学方法論争の幕開け                    | 100 |
| 5-2. 『数理精神科学』における演繹的・抽象的方法の擁護       | 104 |
| 5-3. 経済学方法論争の架空性                    | 109 |
| 5-4. エッジワースの経済学方法論                  | 111 |
| 5-5. 帰納法における演繹的操作                   | 115 |
| 5-6. 方法論争と科学進歩                      | 119 |
| 第 6 章 エッジワースの最小犠牲原理                 |     |
| ——課税論への功利主義の適用——                    | 122 |
| 6-1. イギリスにおける所得税制度の展開               | 123 |
| 6-2. エッジワースの利益説批判の特徴                | 126 |
| 6-3. エッジワースの犠牲説評価                   | 129 |
| 6-4. 最小犠牲原理の実践への適用——精密功利主義との連続性問題—— | 136 |
| 6-5. エッジワースの課税論とその方法——方法論における共通性——  | 141 |
| 第 7 章 エッジワースの男女賃金論                  |     |
| ——『数理精神科学』から                        |     |
| 「男女の等しい労働にたいする等しい賃金」へ——             | 144 |
| 7-1. エッジワースの男女賃金問題への関心の萌芽           | 146 |
| 7-2. エッジワースと 20 世紀前後の女性労働問題         | 149 |
| (1) エッジワースとスマート、フォーセット              | 150 |

|   |     |
|---|-----|
| (2) エッジワースと『印刷産業における女性』                       | 152 |
| 7-3. 女性賃金問題をめぐる F 部会会長講演——両性間の完全競争問題——        | 155 |
| 7-4. 女性賃金問題と家族手当制度——経済的厚生観の観点——               | 160 |
| 7-5. 男女賃金問題と功利主義                              | 164 |
| <br>  |     |
| 終章 エッジワースの功利主義論と経済学<br>——不平等性の功利主義、効用可測性の肯定—— | 167 |
| <br>  |     |
| 資料 1 エッジワースのトリニティ・コレッジ・ダブリンにおける成績             | 173 |
| 資料 2 エッジワースが受けた優等試験の試験範囲                      | 177 |
| 資料 3 キングズ・コレッジ・ロンドン時代のエッジワースの主な担当講義           | 179 |
| <br>  |     |
| 参考文献一覧  | 180 |
| <br>  |     |
| 初出一覧  | 199 |
| <br>  |     |
| 謝辞  | 201 |

凡例

- (1) 本稿における引用文中の〔 〕は筆者による補足をあらわす。なお、[ ]は原著者による補足をあらわす。傍点箇所は、原著においてイタリック部分である（ただし、書名は除く）。
- (2) 本稿における邦訳書からの引用における表記は、用語などの統一のため、筆者において適宜、一部修正をおこなっている。訳者の寛容を請いたい。
- (3) 引用箇所や参照箇所については、原則として、（著者 出版年，頁）の順で示している。参照文献が複数冊ある場合には、(Barbé 2010, 124-25; Creedy 1990, 18)というように、また参照箇所が複数箇所にある場合は、Pareto(1906, 187; 333; 338)のように、;で区切っている。英文献が複数巻にわたる場合は、(Mozely 1882, vol.1, 42-43)のように、vol.によって巻数を示した。邦訳書が複数巻にわたる場合は、(Blaug 1978, 612/訳 4 巻 934)のように、巻数、その後ろに頁数を示した。
- (4) 表記の簡略化のために記号を用いるが、その意味は次のとおりである。なお、各記号の後ろに記した数字は出版年を示す。  
*BAAS* : *Report of the British Association for the Advancement of Science.*  
*CKCL* : *The Calendar of King's College, London.*  
*DUCG*: *Catalogue of Graduates who have proceeded to Degrees in the University of Dublin from the earliest recorded commencements to July 1866: with Supplement to December 16, 1868.*  
*DUC* : *The Dublin University Calendar for the Year.*  
*OUC* : *The Oxford University Calendar.*
- (5) その他の記号はマニュスクリプトの整理番号である。これらについては参考文献一覧を参照のこと。
- (6) 人名については、原則として、初出時に名字のみカタカナ表記（原表記、生没年）で記した。ただし、エッジワース家の人物、あるいは同姓の人物が複数登場する場合にかんしてはそのかぎりではない。なお、*Oxford Dictionary of National Biography*などに掲載されておらず、生没年が不明の人物、まだ生存している人物については生没年を割愛した。

## 序章 本稿の目的と問題意識

本稿は、「エッジワース・ボックス」(Edgeworth Box)の名とともに知られる経済学者フランシス・イシドロ・エッジワース(Francis Ysidro Edgeworth, 1845-1926)の功利主義論と経済学との関係性についての研究である。端的に言えば、本稿の目的は、1880年前後に展開されたエッジワースの功利主義論がその後の彼の経済学にも大きく反映され、前者が後者とは切り離せないことを示すことにある。

エッジワースは、1881年に上梓した『数理精神科学』(*Mathematical Psychics*)のなかで無差別曲線や契約曲線の概念を提示し、今日の数理経済学に先鞭をつけた人物として、ジェヴォンズ(William Stanley Jevons, 1835-1882)の後継者と評価されることが多い。たとえば、メイナード・ケインズ(John Maynard Keynes, 1883-1946)は、「ジェヴォンズの後裔」の一人とエッジワースをみなして差し支えない、と述べている(Keynes 1933, 148fn/訳 200)。

他方で、イギリス経済学会(The British Economic Association)——のちに王立経済学会(The Royal Economic Society)——の事務局やその学会誌である『エコノミック・ジャーナル』(*The Economic Journal*)誌の編集者を任されるなど、ジェヴォンズの死後、エッジワースはマーシャル(Alfred Marshall, 1842-1924)の影響下にあった。このため、彼を、マーシャルという恒星を軌道周回する経済学者、あるいはマーシャルに次ぐ「二番手」的存在の経済学者とする評価もある(Barbé 2010, 124-25; Creedy 1990, 18)。実際、エッジワースのオックスフォード大学ドラモンド講座経済学教授(Drummond Professorship of Political Economy, 1891-1922)就任の裏には、マーシャルの意向と影響力とが見え隠れする。

もちろん、エッジワースはときとしてマーシャルに匹敵するか、それ以上の経済学者として評価されることもある。たとえば、シュンペーター(Joseph Alois Schumpeter, 1883-1950)は、「経済学の分析装置にたいする実際に斬新な貢献(無差別曲線、契約曲線、収穫逦減、一般均衡、その他)においては、それらはマーシャルの『経済学原理』に匹敵するもの、いな、それ以上のものである」(Schumpeter 1954, 831/訳下巻 153)と述べている。さらに、ハロッド(Roy Forbes Harrod, 1900-78)も、「[エッジワース]の名声は今も高まっており、やがて、経済学における独創的思想家としての彼の歴史的地位がアルフレッド・マーシャルの地位を凌ぐようになったとしても当然のことと思われる」(Harrod 1971, 42/訳 73)と、彼を経済学史上の重要人物としてみなしている。しかし、これらの評価もあくまで基準はマーシャルにあり、むしろマーシャルが主流であることを強調している。

いずれにせよ、限界革命以降のイギリス経済学の主流にはジェヴォンズやマーシャルという大河があり、その存在の重要性は認知されてはいるものの、エッジワースは、あくまで、その大河につながる一つの支川として扱われる傾向にあることは間違いない。

大河たるジェヴォンズやマーシャルにかんしては、その研究ツールとして、その日記や書簡、著作目録などが1970年代以降に急速に整備され、さらなる近代経済学史研究の進歩を促した<sup>1</sup>。これに比して、エッジワースという支川にかんするそれは——彼が「すべての国の経済学者との、世界中でもっとも広い、個人的な面識があつたに違いない」(Keynes 1933, 264/訳 349)人物であつたにもかかわらず<sup>2</sup>——、未整備のままであつた。しかし、21世紀に入ってようやく、バッチーニ(Alberto Baccini)によってエッジワースの著作目録(Baccini 2003)<sup>3</sup>、そして、バルベ(Lluís Barbé)によって多くの書簡を含むエッジワースの詳細な伝記(Barbé 2010)が公刊され、エッジワース研究は現在、縦横夢隅にその幅を広げることが可能となったと言っても過言ではないだろう。本稿もBaccini(2003)やBarbé(2010)に多くを負っている。

冒頭に述べたとおり、本稿の主題は、エッジワースの功利主義論と経済学である。この主題自体は決して珍奇なものでも、斬新なものでもない。メイナード・ケインズをはじめ、多くの経済学者は、エッジワースが功利主義の信奉者であることを認めている。サミュエルソン(Paul Anthony Samuelson, 1915-2009)も、「古い世代の経済学者にとっては効用の個人間の比較はほとんど問題なしにおこなわれた。功利主義的伝統にひたつたエッジワースのような人にとっては、個人の効用は——いな、社会的効用すら——朝食のジャムと同じくらい現実的なものであつた」(Samuelson 1948, 206/訳 212)と評している。

<sup>1</sup> たとえば、ジェヴォンズ研究については、Black and Könekamp(1972)やBlack(1973-81)、井上(1986a and 1986b)、Inoue and White(1993 and 2001)、マーシャル研究にはWhitaker(1996)などがある。

<sup>2</sup> メイナード・ケインズが『エコノミック・ジャーナル』誌に寄稿したエッジワースの追悼文(Keynes 1926)は、日本においても、霜村という人物——その詳細は不明——の訳が関西大学の『千里山学報』40号(1926年5月15日発行、12-14)および42号(1926年9月15日発行、14-17)に分割掲載された。エッジワースの死後から約10年ののちには、青山秀夫(1910-92)が『独占の経済理論』(1937)のなかでエッジワースの契約理論を解説することになる。このように、エッジワースは当時の日本人経済学者の間でも注目された経済学者であつた。

<sup>3</sup> Mirowski(1994c)もエッジワースの著作目録であるが、その網羅範囲と規模において、Baccini(2003)はさらに優れたものである。そのほとんどが学術雑誌への寄稿したものであつたエッジワースの完全な著作目録の作成は大変な仕事となる、とケインズは述べたが(Keynes 1933, 256/訳 339)、Baccini(2003)はこれを見事におおよそ完遂したと評価してよい。

しかし、このエッジワースの功利主義論と経済学との関係性をめぐる経済学者たちの態度はさまざまである。たとえば、メイナード・ケインズは、1870年代から80年代にかけて信じてきた功利主義的心理学を晩年までにいたるまでにエッジワースは完全に信じられなくなり、その結果として、功利主義から経済学の限界理論へと関心を移行させた、と述べている (Keynes 1933, 259-60/訳 343-44)。シュンペーターもまた、エッジワースの地位を見計る観点の一つに功利主義を挙げたが、最終的には、「エッジワースの場合もジェヴォンズの場合と同様、その経済学的著述のいずれかから功利主義をとり除いたとしても、その科学的内容には何ら影響するところがないのである」(Schumpeter 1954, 831/訳下巻 153)との評価を与えており、この両者の関係を必ずしも重要視していない。このように、エッジワースの経済学は彼の功利主義論とは独立的に成立するというのが一つの理解である。

これにたいして、クリーディー(John Creedy)は、前述のシュンペーターの評価を、エッジワースの経済学にたいする功利主義の影響を著しく軽視したものとして非難する (Creedy 1986, 130)。つまり、エッジワースの経済学は、終始、彼の功利主義論を抜きにしては語れない、という理解も存在するのである。本稿において提示する見解も、全体として、このクリーディーの見解と合致するものであり、このため、以下のような構成を採用する。

1章においては、エッジワースの理論的業績とされる今日の「エッジワース・ボックス」と実際に彼が『数理精神科学』において説明した「ダイアグラム」とを比較する。この両者は、少なくとも Kaldor(1934)以降、慣習的に連続するものとみなされてきた。しかし、1970年代に入ると、Walker(1973)、Tarascio(1972)、Jaffé (1974)、Weatherby (1976)らが、「模索過程」、「無差別曲線体系」、「初期保有量」をキーワードとして、これに反論を試みた。「エッジワース・ボックス」とエッジワースの「ダイアグラム」とを独立的なものとみなすこの1970年代の動きにたいしては Creedy(1980a)が——この動きを整理しつつ——反批判し、さらにこれに Tarascio(1980)が反論することによって、「エッジワース・ボックス論争」ともいべき論争が生じた。この論争にたいする一定の解答を、その後の Newman(1990)や Mirowski(1994b)なども参考としながら、導き出すことが1章の目的である。その結論のみを端的に抽出するならば、「エッジワース・ボックス」とエッジワースの「ダイアグラム」との間には——経済理論の観点からは——連続性が存在する。

しかしながら、これらの論争の焦点となったのは、主として『数理精神科学』第Ⅱ部前半部にあたる「経済的計算法」(Economical Calculus)におけるエッジワースの叙述である。

現代理論とエッジワースの経済学的叙述とを比較するこの視野は、彼みずから示した『数理精神科学』全体としての目的がシジウィック(Henry Sidgwick, 1838-1900)の『倫理学の諸方法』(*Methods of Ethics*, 1874)にたいする補足であったことに照らしあわせれば、狭範かつ危険なものである。この1章で触れるように、エッジワースの「ダイアグラム」は、契約取引をはじめとするさまざまな局面にあらわれる不確定性の存在を証明するため、そして、その不確定性を回避する仲裁原理として功利主義が必要であることを論証するためのものであり、『数理精神科学』執筆以前からエッジワースが関心を示した当時の倫理学との比較も必要となる。このためには、そもそも、経済学者とみなされる彼がいかにして倫理学を出発点とし、経済学にも関心を広げるようになったのか、を考えねばならない。このようなことから、2章および3章を通じて、エッジワースについての伝記的考察を試み、彼の生誕から1891年のドラモンド講座経済学教授就任にかけてまで知的環境について論じる。

エッジワースの伝記的著作は、知名度の高いKeynes(1926, 1933 and 1937)をはじめ、多数にのぼる。しかし、これらの中には、エッジワースのトリニティ・コレッジ・ダブリン(Trinity College, Dublin)在籍にかんする情報をはじめとして、いくつかの齟齬が存在する。これらの齟齬は、エッジワースの書簡や彼が所属した大学機関に現存するマニュスクリプトなどを丹念に網羅したBarbé(2010)の登場によって、大きく解消された。とはいうものの、このBarbé(2010)にもいくつか看過した点が残っていることも確かである。実際、同書はエッジワースの大学時代の成績などを紹介しているが、それらの成績がどのような学習内容に基づくものかを明らかにしておらず、不明な点も多い。2章では、トリニティ・コレッジ・ダブリンのマニュスクリプツ・デパートメント(Manuscripts Department)、オックスフォードのボドリアン図書館(Bodleian Library)、ベリオル・コレッジ(Balliol College)およびナッフイー・コレッジ(Nuffield College)の図書館に所蔵されている資料に基づいて、ダブリンおよびオックスフォードにおけるエッジワースの学生時代の動向や学習内容を詳述する。また、3章においては、彼がオックスフォード大学を卒業してから経済学の研究を開始する経緯、さらにアカデミック・ポスト獲得に向けた動きを活発にし、母校のドラモンド講座経済学教授就任にいたるまでの交友関係や職歴などに目を向ける。この章においても、キングズ・コレッジ・ロンドンのアーカイヴス(King's College, London, Archives)に所蔵されている資料を活用し、Barbé(2010)が誤記している同コレッジ在職時代のエッジワースについての情報を正す。

4章では、2章および3章で明らかにした彼の知的環境や交友関係から浮かび上がった心理学や倫理学といった学問分野の観点から、エッジワースの『数理精神科学』が有した本来の目的とその背景を明らかにする。

上述したとおり、『数理精神科学』がシジウィックの『倫理学の諸方法』への補足を目的とした著作であったことから、同書が1870年代後半に展開された「物理倫理学」の是非や「実践理性の二元性」をめぐるシジウィック＝バラット論争を背景としていることを考察する。1章との関連でより詳しく言えば、エッジワースが描いた「ダイアグラム」も、この論争に解答を提示するためのツールであったことを強く主張する。この際、エッジワースの第一著作である『倫理学の新方法と旧方法』(*New and Old Methods of Ethics*, 1877)やそれに続く論文で『数理精神科学』にも再録された「快樂主義的計算法」(*Hedonical Calculus*, 1879)におけるエッジワースの主張にも目を向け、各個人の受容能力の差異を重視し、功利主義が無意識に包含する平等性批判——不平等分配による幸福最大化——という彼の功利主義論の特徴を明らかにする。そして、たとえシュンペーターがエッジワースの経済学から功利主義を排除できると述べたとしても、『数理精神科学』が倫理的な目的を有し、それゆえに功利主義とは切り離すことができないものであることを確認する。

続く5章では、エッジワースが経済学研究を開始した頃にイギリス経済学界に生じていた経済学方法論争とそれと平行して発表された『数理精神科学』以降の彼の著作や書評、講演などに注目し、彼の経済学方法論の特徴を考察する。エッジワースの経済学方法論における立場は、Creedy(1986)が「演繹法の擁護者」と簡単に説明しているだけであり——Hutchison(1953)や福岡(1999)も彼の講演の断片を紹介するにとどまる——、同論争におけるエッジワースの主張の詳細はもとより、彼が帰納的・歴史的方法をどのように考えていたかを明確にしていない点にも問題がある。これらを明らかにすることが5章の目的である。

エッジワースは、『数理精神科学』において、「道徳科学」に数学的手法が導入可能であると主張し、功利主義に精密性を与えようと試みたが、このような方法は当時、演繹的・抽象的方法に基づく経済学を批判していたイギリス歴史学派に対峙する立場であった。事実、彼は『数理精神科学』の各所にイギリス歴史学派を意識した叙述を残している。全体として彼は、演繹法とは一般的教示を導きだすものであって、詳細を与えるものではないと述べている。とはいえ、エッジワースが演繹法のみを推奨したというわけではない。彼が『数理精神科学』のなかでとった方法は、「仮説→演繹→検証」という帰納法的な段階を

経た「仮説演繹法」である。また、イギリス科学振興協会 F 部会（経済科学・統計学）(British Association for the Advancement of Science, Section F (Economic Science and Statistics))の会長講演（1889）やドラモンド講座経済学教授就任講演（1891）において経済学方法論にかんして彼が推奨したのは、演繹法でも帰納法でも各人がより限界便益の大きい方法をとることである。そもそもイギリス歴史学派であっても演繹的な手法を用いているうえ、彼らが推奨する帰納法にしても偶然性の排除などの必要性から演繹的な操作を免れ得ないというのがエッジワースの主張するところでもあった。それゆえに彼が経済学方法論を単に架空のものであるだけではなく、科学の進歩を阻害するものであるとみなしていたことが明らかとなる。

6章および7章においてはエッジワースの功利主義論と政策論との関係に注目する。より具体的には、6章では彼の所得課税論を、7章では男女賃金論に焦点を当てる。

エッジワースの所得課税論については、Musgrave(1959)や井藤(1969)、Creedy(1981 and 1986)、Daunton(2001)、松嶋(2005)、菊池(2006)などが取り上げているが、この議論が功利主義的基礎に基づいているという特徴にかんして、各論者の見解の間に大きな相違はない。しかし、『数理精神科学』において彼が提示した平等性を批判する功利主義論と彼の所得課税論の根底を支える功利主義論との異同を厳密に比較した論者はいない。とりわけ、『数理精神科学』におけるエッジワースの功利主義論は、ベンサム主義やシジウィックを批判するものであったにもかかわらず、エッジワースとシジウィックの所得課税論比較を目的とした菊池(2006)は両者の功利主義の異同について言及していない。また、Creedy(1981 and 1986)や松嶋(2005)も『数理精神科学』の「経済的計算法」とエッジワースの所得課税論とを直結させ、「功利主義的計算法」にみられる快樂受容能力の差異の容認とそれに基づいて不平等分配を認める種の功利主義論——彼はみずからこの種の功利主義を「精密功利主義」と称した——を割愛する形の論法をとっている。このような説明は、エッジワースの精密功利主義と所得課税論との関係を見えにくいものになっているため、6章はエッジワースの『数理精神科学』、および「課税の純粹理論」(The Pure theory of Taxation, 1897)などの所得課税論にかんする論文にみられる彼の功利主義論の異同について精査する。

結論のみを先取りするならば、エッジワースがみずからの所得課税論にかんする代表的論文「課税の純粹理論」において宣言しているように、彼の課税論は「功利主義原理」に基づいて「犠牲説」を採用し、「利益説」を批判の対象としている。この彼の利益説批判に

は、『数理精神科学』の「ダイアグラム」で説明された「契約の不確定性」が応用されている。さらに彼は、「犠牲説」のなかでも、「最小犠牲原理」の立場——すなわち、課税後の社会の幸福最大化の観点——から限界犠牲を均等化する累進課税制度を推奨した。しかし、この累進課税制度による所得平準化には、各人の快樂受容能力の差異——効用関数の相違——を根拠として彼は反対している。

エッジワースの男女賃金論も『数理精神科学』と深い関係にある。メイナード・ケインズは、エッジワースが両性間の賃金問題に関心を生涯寄せ、すでに『数理精神科学』にその萌芽が存在することを指摘している。また、エッジワースと交流したボナー(James Bonar, 1852-1941)やハロッドも彼の男女賃金論への傾倒について触れており、エッジワースの男女賃金論が彼の功利主義論と経済学との関係を見定める一つの重要な視点となることは間違いない。彼の男女賃金論そのものは経済学におけるフェミニズム研究の対象の一つとして Pujol(1992)によってとりあげられているが、彼の功利主義論と経済学との関係に注目するこの視点は、これまでのエッジワース研究において論じられてこなかったものである。これを7章において取り上げる。

早くは「快樂主義的計算法」や『数理精神科学』において女性労働に着目したエッジワースが、『エコノミック・ジャーナル』誌の創刊(1891)から同誌編集者として女性労働問題を取り上げた論文を採用している点も注目に値する。また、20世紀に入ってから、『印刷産業における女性』(*Women in the Printing Trades*, 1904)の出版、二度目のF部会会長就任講演「男女への等しい労働にたいする等しい賃金」(Equal Pay to Men and Women for Equal Work, 1922)など、彼はこの問題に目を向け続けた。彼は、「等しい労働」を「等しい不効用」、「等しい賃金」を「等しい満足」と解釈し、男性が家族扶養の義務を免れえないならば、「等しい満足」という観点から男性賃金が高いことは合理的であるとの判断を下しているが、ここにも不平等分配による満足最大化を考える功利主義論が継承されている。また、このような主張が女性労働者やその擁護者に受け入れがたいものであることから、両性間の賃金をめぐる「衝突」を避け、男性労働者の満足を満たしつつ、女性労働者の満足をも満たす仲裁案として家族手当構想を評価した彼の論理は、『数理精神科学』の「ダイアグラム」における「功利主義的な点」と同じもので、やはり彼の功利主義論と深く関係している。

端的に言えば、エッジワースの経済学は、『数理精神科学』において導きだした功利主義こそ人間の実践理性であるという概念を基礎として、またその功利主義は功利主義でも平

等性を認めるベンスム主義ではなく、不平等性を認める功利主義（精密功利主義）に終生依拠している。

終章においては、エッジワースの経済学とそれを支える彼の功利主義論との関係性についてまとめると同時に、これらの議論の前提となる効用の測定性および個人比較の可能性についての彼の見解についても明らかにする。また、本稿が抱える内在的および外在的な課題についても触れる。

## 第1章 エッジワースの「ダイアグラム」とその解釈

エッジワースの名は、今日、標準的なミクロ経済学の入門書において紹介されている「エッジワース・ボックス」——「エッジワースの箱図」、「エッジワースのボックス・ダイアグラム」と表記される場合もある——と、そして、それがはじめて示されたとされる彼の主著と結びつけて、想起されることが多いだろう。

そのエッジワースの主著の正式な表題は、『数理精神科学——道徳科学への数学の適用にかんする一試論』(*Mathematical Psychics; An Essay on the Application of Mathematics to the Moral Sciences*, 1881)である<sup>1</sup>。同書は、19世紀後半のイギリス経済学をリードしたジェヴォンズやマーシャルの能力をしても難解であり<sup>2</sup>、メイナード・ケインズによって、「詩と術学、科学と芸術、機知と学識との、奇妙ではあるが魅惑的な混合物」(Keynes 1933, 258/訳 314)であり、「きわめて風変わりな書物」(*ibid.*, 258/訳 314)と評された。この書物において示された図——彼自身が用いた言葉をそのまま使うならば「ダイアグラム」(Edgeworth 1881, 28)——は<sup>3</sup>、現在われわれが「エッジワース・ボックス」と呼びならわしているものと同じ形状ではない。むしろ、エッジワースによって図示された「ダイアグラム」と「エッジワース・ボックス」とを比較すれば、両者はまったく別物

<sup>1</sup> 従来、*Mathematical Psychics* の訳語として『数理心理学』がよく用いられてきたが (Creedy 1981, 73/訳 77; Keynes 1933, 255/訳 338; 松嶋 1996, 72; 松嶋 2005, 40)、本稿においてはこれを『数理精神科学』とする。これは、第一に、『オックスフォード英語辞典』(*The Oxford English Dictionary*)においては、Psychics が、「心理学的現象、あるいは精神的現象についての科学」(The Philosophical Society 1933, 1550r)と定義されていること、第二に——本稿4章で触れるように——、エッジワースが、同書においてその興味関心を心理学分野に限局しておらず、より幅広い意味合いをもたせた名称が必要なこと、を理由とする。なお、この名称は、たとえば福岡(1999, 186)によってすでに用いられている。

<sup>2</sup> ジェヴォンズは、「本書『数理精神科学』は、われわれがこれまでに会ったなかで読破することがもっとも難しい書物の一つであり、経済科学を取り扱おうとした書物のなかでは確実にもっとも難しいものである」(Jevons 1881, 581)と評している。他方、マーシャルも、「本書の読者たちは、ときとして、エッジワースが自分の手元により十分に理解できるようになるまで留めておいたならば、そして長期間にわたる研究だけが与えることのできる簡潔性を彼が得ていたならば、と思うことだろう」(Marshall 1881, 159)と述べている。

<sup>3</sup> エッジワースは『数理精神科学』刊行以前に、Edgeworth(1876)、Edgeworth(1877)、Edgeworth(1879)と三つの著作を発表しているが、いずれにおいても「ダイアグラム」は示されていない。なお、Edgeworth(1876)にかんしては、著者名が T.Y. Edgeworth と記載されているが、現在これはエッジワースによる著作とされている。詳細なエッジワースの著作目録については、Mirowski(1994c)および Baccini(2003)を参照のこと。

と評価することもできる(Thomson 2001, 63)。この2つの「ダイアグラム」の間に連続性(関連性)があるかどうかの是非については、とりわけ1970年代に複数の研究者によって論じられ、「エッジワース・ボックス論争」とも呼ぶべき論争が起こった。

本章の目的は、エッジワースが描いた「ダイアグラム」の性質とその意図について整理すると同時に、これと「エッジワース・ボックス」との間における連続性の有無を確認し、「エッジワース・ボックス論争」に解答を提示することにある。さらに、これらの目的を通じて、この連続性の有無確認自体が内包する問題点——経済学における「ダイアグラム」理解の狭範さ——を指摘する。

### 1-1. 今日における「エッジワース・ボックス」

はじめに、エッジワースが描いた「ダイアグラム」と「エッジワース・ボックス」という二つの名称が指すものについて、誤解が生じないように、次のように区別しておきたい。

本章において、「エッジワース・ボックス」が指すのは、たとえば、Varian(1984, 199)、西村(1990, 241)、Robbins(1998, 265)、および伊東(2004, 162-63)などにおいて示されている形状の図のことである。他方、「ダイアグラム」は、エッジワース自身が『数理精神科学』において示した図を意味する。本章においては、まず前者の図の概念について簡単に整理し、後者の図については次節において取り扱うこととする。

「エッジワース・ボックス」は、「2人(グループ)が2財を交換する場合に均衡の性質などを示すために用いられる図」(伊東 2004, 162)と定義され、図1-1のように描くことができる。

2人の交換主体 $X$ 、 $Y$ それぞれの効用関数を $u_i = u_i(a^i, b^i)$ 、それぞれの原点を $O_i$ とすれば(ただし、 $i = X, Y$ )、図1-1における曲線 $IU_i$ は、各交換主体にとって、同一効用水準を実現する2財(A財およびB財)の組み合わせをあらゆる無差別曲線であり、 $X$ にとっては図の右上方、 $Y$ にとっては左下方へいくほど、より高い効用水準をあらゆる無差別曲線体系が——たとえば、 $IU'_X < IU_X < IU''_X$ と——描かれる。このとき、両者の無差別曲線が互いに接しあう点は、相手に不利益をもたらすことなしには自己の効用を改善することのできない「パレート最適点」であり、図1-1における、この点の軌跡 $CC'$ が契約曲線である<sup>4</sup>。

<sup>4</sup> トムソン(William Thomson)が指摘するところでは、しばしば「エッジワース・ボックス」として紹介される図1-1のような図は、本来は矩形外にも広がっているはずの個人の無差別曲線を含んでおらず、この点において、論理的には不正確なものである。また、ト

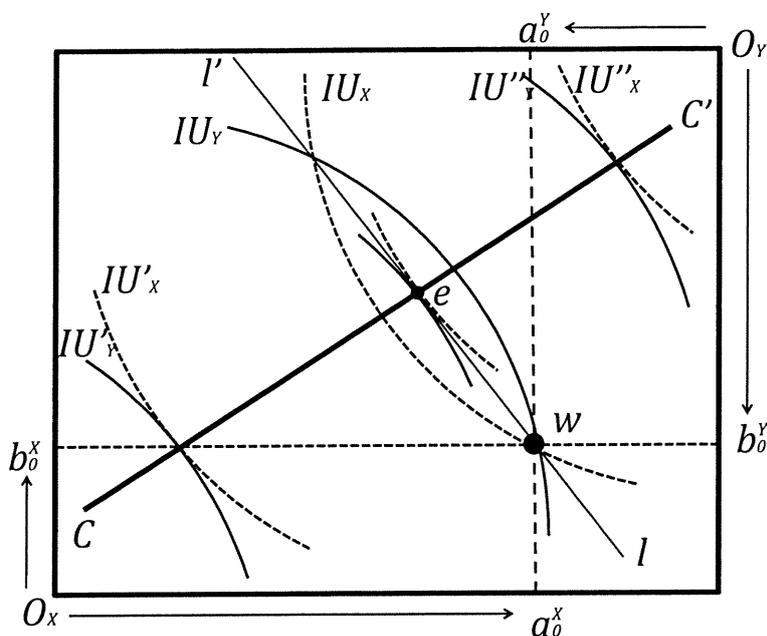


図 1-1

いま、X、Yそれぞれの初期保有量が $(a_0^i, b_0^i)$ 、つまり、図 1-1 における点 $w$ の状態であるとする。この場合、交わっているこの2つの無差別曲線に囲まれた領域のほうが両者の効用水準は高くなるため、XはA財を手放してB財を得ようとし、Yはその逆の行動をとるだろう。したがって、この交換はX、Yともにより高い効用水準となる点 $e(a_e^i, b_e^i)$ で均衡し、このときの2財の交換比率は直線 $l'$ の傾き $-(b_0^i - b_e^i)/(a_0^i - a_e^i)$ によってあらわされる。

これらの関係を多数財、多交換主体の事例にも拡張することは可能であるものの、上述のような2財2交換主体モデルは交換均衡の本質をもっとも端的に解説することができ、この目的のため、図 1-1 のようなエッジワース・ボックスが用いられていることに、おそらく誰も異論はないだろう。

### 1-2. 『数理精神科学』における「ダイアグラム」

エッジワース自身の手による「ダイアグラム」は、序文、第I部、第II部、7編の付録から構成される『数理精神科学』の第II部前半部、「経済的計算法」(Economical Calculus)において、提示されている。この「経済的計算法」は、エッジワースの定義するところに

---

ムソンは Tarascio(1972)および Jaffé(1974)を自らの見解の先駆に位置づけている (Thomson 2001, 63/訳 96-98)。

よれば、「各々が個人効用最大へと向かう快樂の力の均衡体系」(Edgeworth 1881, 16)の研究であり、他方、第Ⅱ部後半部を構成する「功利主義的計算法」は「各々および〔社会〕全体が普遍的効用最大へと向かう〔快樂の力の〕均衡体系」(*ibid.*, 16)である。つまり、「経済的計算法」はあくまで自分自身の効用最大化のみを目指す利己主義的な個人を想定しており、実際にここで分析されたのは利己主義的取引者間での契約取引である。そして、エッジワースは以下のことをこの分析の前提とした(*ibid.*, 16-19)。

- (1) あらゆる行為者は、利己心によってのみ行動する。
- (2) 自由な情報交換が存在する。
- (3) (i)任意の個人は、無数の個人の中の任意の個人と自由に再契約できる。  
(ii)任意の個人は、同時に、無数の個人と自由に契約できる。  
(iii)任意の個人は、任意の第三者の同意を必要とせずに、他者と自由に契約できる。  
(iv)任意の個人は、第三者とは無関係に、他者と自由に契約できる。

エッジワースによれば、(1)は「経済学の第一原理」であるが、これは基本法則というよりもむしろ、経済学が採用する「説明」(*Descriptions*)である(*ibid.*, 16)。利己心による行動は、他者の同意を得られない場合とそれを得ることのできる場合とがある。前者は「戦争」、後者は「契約」と呼ぶことができ、経済的競争はその両方の側面を有しているとエッジワースは述べる。「契約期間には契約者たちの間には和平(*pax*)や協約(*pact*)があり、契約者のうちの何人かが他者の同意を得ないままに再契約するときは戦争となる」(*ibid.*, 17)。

(2)については、構成員がある場所に集められる、または通信設備(*telephone*)などを通じて自由に情報を得ることができる状態をエッジワースは想定しており、これを「標準の競争的フィールド」(*normal competitive field*)と呼ぶ(*ibid.*, 18)。まず、「競争的フィールド」が意味するのは、取引される商品について再契約が可能なすべての個人によって構成される場のことである。さらに、「標準の」とあるが、彼はこのような条件に一般性があるとは考えていない。むしろ、この前提は「想像上の仮定」であるものの、この分析を「抽象科学」とするために必要なものであり、いわば、彼の分析において基準となる競争的フィールドである(*ibid.*, 18)。

(3)に含まれるすべての条件は、エッジワースが羅列的に示したものであるが、(2)によっ

て設定した「標準の競争的フィールド」から「競争のための完全なフィールド」(*perfect field of competition*)を想定するために、同時に満たされなければならない。(i) および (ii) の条件はフィールド上の構成員の無限多数性(*indefinite multiplicity*)を、(iii) および (iv) の条件は無限分割性 (*indefinite dividedness*)を、それぞれ保証する(*ibid.*, 18)。

さらに、以降の議論において用いられる語句として、「決着」(*settlement*)は「当事者全員の同意があるために変更することのできない契約」——お互いに契約することに同意している——、「最終決着」(*final settlement*)は「競争のためのフィールド内における再契約によっても変更することのできない決着」と定義され、「契約が不確定(*indeterminate*)である」とは、「無数の最終決着が存在する」ことをあらわす(*ibid.*, 19)。

以上のような前提と定義のもとで、エッジワースは二つの問題、すなわち、「契約はどの程度不確定であるか」、そして、その不確定性が存在する場合に、「どのような方法によって、その弊害から逃れることができるのか」(*ibid.*, 20)という問題にとりわけ注目する。このため、彼はロビンソン・クルーソー( $X$ )とフライデー( $Y$ )との間の契約関係をモデルとし、「 $(\alpha)$ 競争をともしない契約は不確定である。 $(\beta)$ 完全競争をともしない契約は完全に確定される。 $(\gamma)$ より完全な競争をともしない契約になればなるほどあまり不確定ではなくなり、完全な競争をともしない契約になればなるほどより不確定になる」(*ibid.*, 20)ことを証明しようと試みる。エッジワースが実際におこなった証明は  $(\alpha) \rightarrow (\gamma) \rightarrow (\beta)$ の順に試みられたため、ここでも彼の手順にしたがうことにする。

いま、 $X$ は賃金( $x$ )の支払いと引きかえに $Y$ から労働( $y$ )を得て、 $Y$ は労働の提供と引きかえに $X$ から賃金を受領するものとする。したがって、 $X$ および $Y$ の効用関数 $P$ および $\Pi$ は、それぞれ次のように定義される<sup>5</sup>。

$$P = F(x, y)$$

$$\Pi = \Phi(x, y)$$

このとき、 $X$ および $Y$ にとっての交換成立条件は、

$$\frac{\partial P / \partial x}{\partial P / \partial y} = \frac{dy}{dx}$$

<sup>5</sup> 『数理精神科学』において、エッジワースは両者の効用関数を $P = F(xy)$ 、 $\Pi = \Phi(xy)$ と表記しているが(Edgeworth 1881, 20)、その内容から判断して、本稿においては $P = F(x, y)$ 、 $\Pi = \Phi(x, y)$ と記述する。

$$\frac{\partial \Pi / \partial x}{\partial \Pi / \partial y} = \frac{dy}{dx}$$

であり、この二つの条件より、

$$\frac{\partial P}{\partial x} \frac{\partial \Pi}{\partial y} - \frac{\partial P}{\partial y} \frac{\partial \Pi}{\partial x} = 0$$

が得られる。上式は、「どのような方向に無限小のステップで動くにせよ、 $P$ が $\Pi$ とともに増加することなく、一方が増加すれば、かならず他方が減少するような点 $(x, y)$ 」の軌跡をあらわしており、この軌跡がエッジワースの「契約曲線」(contract-curve)である(*ibid.*, 21)。

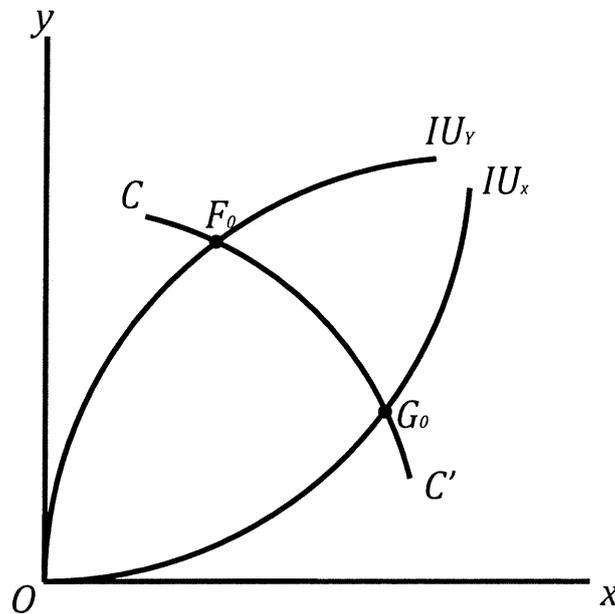


図 1-2

これらの関係は、「ダイアグラム」として、図 1-2 のように描かれる。図 1-2 において、原点  $O$  から伸びる曲線  $IU_x$  および  $IU_y$  は、それぞれ  $X$  および  $Y$  の「無差別曲線」(line of indifference, indifference curve) である。ここで注意すべきは、「エッジワース・ボックス」における無差別曲線が同一効用水準をもたらすことが可能となる「財の組み合わせ」の軌跡であるのにたいして、「ダイアグラム」における無差別曲線は  $X$ 、 $Y$  それぞれにとって同一効用水準をもたらす財の「交換量の組み合わせ」を示していることである。つまり、エッジワースの「ダイアグラム」は、同一効用水準を得られる交換量の把握を容易にする、という特徴をもつ。かりに、図 1-2 において、無差別曲線  $IU_x$  が第 3 次元目にとられた効

用水準にかんしても原点 $O$ から伸びているとするならば、この無差別曲線があらわすのは、賃金を与える（負）効用と労働を得る効用との差し引きがゼロとなる交換量の組み合わせの軌跡である。

このとき、無数の最終決着点の軌跡である契約曲線の範囲は、曲線 $CC'$ 上の弧 $F_0G_0$ によってあらわされ、 $X$ にとっては点 $F_0$ 、 $Y$ にとっては点 $G_0$ に近づけば近づくほど、より有益な（すなわち、効用水準の高い）交換条件となる。

この例においては、 $X$ 、 $Y$ ともに競争相手が存在せず、自分に望ましい条件提示が容易なため、ひとつの最終決着点を見いだせず、契約は「行き詰まり」状態に陥りやすい。これに加えて、エッジワースによれば、「そらとぼけ」、および「値切りという好ましくない技術」への依拠が、十分な数の競争者が存在する市場と比べて、より大きくなる。つまり、競争がない市場においては、最終決着が多数存在しうるために、この $X$ と $Y$ の二者間契約には不確定性がつきまとうのである。

次にエッジワースは、 $X$ および $Y$ とそれぞれまったく同質である第二の $X$ および $Y$ （クローン）を導入し、 $X_1$ 、 $X_2$ および $Y_1$ 、 $Y_2$ の4人で構成される競争フィールドを考える。

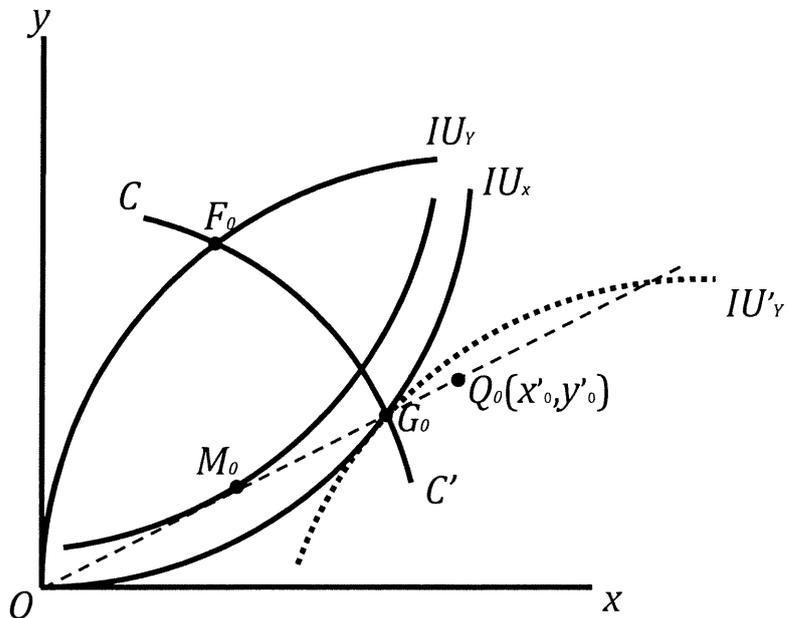


図 1-3

いま、図 1-3 の点 $G_0$ において、 $X_1$ と $Y_1$ との間に契約が成立していたとしよう。この状態において、無差別曲線 $IU_x$ より上方に広がる領域は $X_1$ にとって、そして同様に、無差別曲

線 $IU_Y$ より下方に広がる領域は $Y_1$ にとって、有利な交換条件を示している。このため、原点 $O$ から点 $G_0$ を通る直線を考えてとき、線分 $OG_0$ 上の点は $X_1$ にとって、そして、点 $G_0$ よりも右方の直線上の点は無差別曲線点 $IU'_Y$ と交わるまで $Y_1$ にとって、望ましい。この競争フィールドのなかに $X_2$ を導入すれば、 $X_1$ 、 $X_2$ 、 $Y_1$ という三者による新しい契約関係が生じるが、これによって、たとえば、 $Y_1$ は点 $G_0$ よりも有利な点 $Q_0(x'_0, y'_0)$ をとることが可能になる。 $X_1$ および $X_2$ は、同質の存在がゆえに、 $Y_1$ が提示する条件を等分し、線分 $OQ_0$ の midpoint にあたる点 $M_0(\frac{x'_0}{2}, \frac{y'_0}{2})$ を選択するだろう。点 $M_0$ は線分 $OG_0$ 上に位置するので、これは $X_1$ および $X_2$ にとっても点 $G_0$ よりも望ましい。しかし、いま考慮の外におかれている $Y_2$ がひとたびこの競争フィールドに導入されるならば、「この体制は再び契約曲線へと戻ってしまうだろう」(ibid., 37)。すなわち、 $X_1$ および $X_2$ にとって少なくとも点 $M_0$ と同じように望ましい点へ戻り、このような競争過程によって $Y_1$ および $Y_2$ の利益はいくらか失われる。

では、新しい契約はどのような点に落ち着くのか。それは1対2あるいは2対2のいずれの契約を選択しようとも、 $X$ たちそれぞれが得る効用が変わらない点である。つまり、この契約は図1-3における点 $G_1$ であり、このとき、新たに引かれる無差別曲線 $IU'_X$ は点 $G_1$ および線分 $OG_1$ の midpoint  $M_1$ を通る。これとは逆に、 $Y_2$ をこの競争フィールドに導入したのちに $X_2$ が続く場合を考えれば、契約は点 $F_0$ から点 $F_1$ へと移動し、契約曲線の範囲は $F_0G_0$ 間から $F_1G_1$ 間へと収縮する。

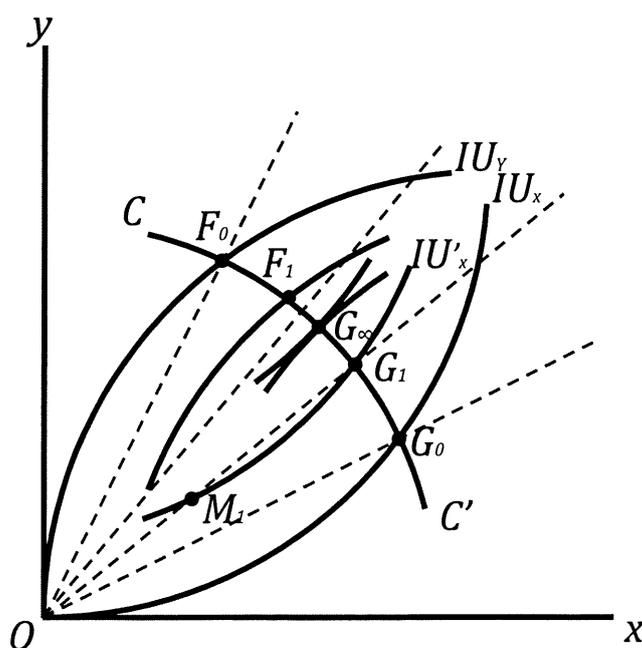


図 1-4

この手順をさらに、3対3、4対4、……という形で、競争フィールドにおける取引者数を増やし続け、最終的にその数が無限にいたる状態、つまり徐々に不完全競争状態からより完全競争状態へと近づけていくことを考えるならば、契約曲線の範囲はさらに収縮し、やがて図1-4におけるように、一点（点 $G_\infty$ ）に落ち着く<sup>6</sup>。このように、無限の競争的取引者が存在する場においては、最終決着の数はひとつに確定されるのである——この過程は「エッジワース・プロセス」(Edgeworth Process)と呼ばれる<sup>7</sup>。

エッジワースは、「個人用役(personal service)の事例」(*ibid.*, 42-43)、「団体・組合の事例」(*ibid.*, 43-45)、「協同組合の事例」(*ibid.*, 45-46)という三つの事例において、さらに契約曲線の範囲を検証する。そしてこのいずれにおいても、競争的取引者あるいは競争的取引団体の数が増える場合には契約曲線の範囲の収縮が、逆にそれらの数が減少する場合には拡張が認められる。

ここで注意すべきは、エッジワースの「ダイアグラム」は、あくまで、競争的な市場における契約取引者数の増大が及ぼす影響についての分析だということである——しかし、この際に彼は「ダイアグラム」になかに「同質」の取引者を追加していったため、1人のXと1人のYとが互いに学習しながら契約点を探っていく様子との理解も可能にしてしまった。

エッジワースがこれらの推論から得た結論とは何か。それは、競争フィールドにおいて、競争的取引者という「原子の多数性」(*multeity of atoms*)が存在しなければ<sup>8</sup>、「経済学者たちが悦にひたって黙従している競争に対して払われている畏敬の念が失われる」(*ibid.*, 50)ということである。端的に言えば、競争的取引者の数が有限である場合、「市場とは不完全なものであり……契約は不確定」(*ibid.*, v)となる。このエッジワースの指摘は、「同一公開市場においては同一瞬間には同種の財貨にたいして二価はありえない」(Jevons 1879a, 91/訳 70)としたジェヴォンズの「無差別の法則」(law of indifference)への反駁を意図したものであるが、このような不確定性が現実には単に経済的な取引におけるだけでなく、「完全競争のようなメカニズムが一般的に欠如している……国際政治、国内政治、そして民族間、階級間、両性間」といった「広い意味合いにおける、あらゆる領域の契約」につきまとう問題であることも強調するのである(*ibid.*, 51)。

<sup>6</sup> これは $OM_n = \frac{n}{n-1}OG_n$ 、かつ $n = \infty$ のときに確かめることができる(松嶋 1989, 41)。

<sup>7</sup> 「エッジワース・プロセス」については、Creedy(1986)、Hildenbrand(1993)、青山(1937)、福岡(1999)、松嶋(1989 and 1996)などを参照のこと。

<sup>8</sup> 原文では、*multiety of atoms* となっているが、これは誤植と考えられる(Edgeworth 1881, 50)。

この契約の不確定性による弊害を回避すべく、われわれはどのような仲裁原理を見いだすというのか。エッジワースは、多数存在する最終決着のなかに、競争フィールド内の取引者それぞれの効用とその総効用とを同時に最大にする「功利主義的取り決め」(utilitarian arrangement)が含まれている、と指摘する。この功利主義的取り決めをあらわす点——功利主義的な点(utilitarian point)——の座標は、エッジワースによれば、自分自身の効用と「有効同感係数」(coefficient of effective sympathy)によってウエイトづけをおこなった他者の効用との和の最大化によって決定されるという。彼自身の言葉を引用すれば、「競争は仲裁によって補われなければならない、利己的な契約者たちの間の仲裁の基礎は〔自分および社会全体の〕総効用を可能なかぎり最大にすることである」(ibid., 56)。

いま、競争的フィールド内にいる $X$  ( $Y$ ) の $Y$  ( $X$ ) にたいする「有効同感係数」を $\lambda$  ( $\mu$ ) とすれば、 $X$  ( $Y$ ) は効用 $P + \lambda\Pi$  ( $\Pi + \mu P$ ) が最大となる点を選択しようとする。この「有効同感係数」は、0 から 1 の間の値をとりうるが—— $0 \leq \lambda, \mu \leq 1$ ——、その値が大きくなるほど、「契約曲線は功利主義的な点へと狭まって」(ibid., 53fn)いき、契約曲線上における「功利主義的な点」の座標は、以下の方程式を満たす。

$$\begin{aligned} \left(\frac{d}{dx}\right)[P + \Pi] &= 0 \\ \left(\frac{d}{dy}\right)[P + \Pi] &= 0 \end{aligned}$$

つまり、 $\lambda = \mu = 1$ となるときに「功利主義的な点」は達成され、エッジワース自身は明示していないものの、「有効同感係数」は $\lambda\mu = 1$ を満たす<sup>9</sup>。明確な原理が契約の選択にないならば、どの取り決めをとっても同じ確率であると考えられることもできる。しかし、契約取引の当事者たちは、コイン投げと実質的に等しい手続きに頼るよりはむしろ、このように決定される「確実な一点を得ることに同意するだろう」(ibid., 55)。

エッジワースは、以上のように、競争的取引者が無数に存在する完全競争状態における契約は一意に決定されるが、そうでない場合は契約に不確定性がともなうこと、ただし、競争的取引者の数の増加が不確定性を減らす——つまり、契約曲線の範囲が収縮する——ことを「ダイアグラム」によって証明した。このエッジワースの貢献は、のちに Shubik(1959)が「エッジワース・ゲーム」(Edgeworth Game)としてゲーム理論と結びつけ、Debreu and Scarf(1963)が「極限定理」(limit theorem)として再評価することになる。

しかしながら、上述したように、ここでエッジワースが主張しようとしたのは、利己的

<sup>9</sup> この証明については、Collard(1975)を参照のこと。また、同論文の要約的解説は、中野(1995, 178-79)においてなされている。

な取引者たちの間の競争のなかに生じる不確定性を回避するために「同感」という利他的な要素が必要となる、ということである。この「同感」を考える効用関数は、自分自身と他者の効用最大化を目指すため、利己心だけでは解決できない契約の不確定性問題を利他心に基づく功利主義によって解決可能であることの証左に他ならない<sup>10</sup>。

なぜ、エッジワースがこのような分析をおこなう必要があったのかについては、次章以降に詳説することにする。本章の目的において重要なのは、『数理精神科学』においてエッジワースの示した「ダイアグラム」が、第一に、競争的取引者の数が有限であるという、完全競争市場との乖離によって生じる契約の不確定性を証明するための、そして第二に、その不確定性を避ける原理としての「功利主義」の必要性を導き出すための幾何学的な道具であったということである。つまり、エッジワース自身の議論は倫理的側面を含んでおり、今日の「エッジワース・ボックス」のように、二者間の交換均衡という経済学的な議論の範疇に決して収まるものではないのである。

### 1-3. 1970年代以降の「エッジワース・ボックス」をめぐる論争

本章1節および2節でみてきたように、「ダイアグラム」と「エッジワース・ボックス」との間には、その目的はもちろん、提示される図形的外観に相違があるように見える。これらの相違のために、そしてそれ以上に、そもそも『数理精神科学』という著書そのものがその難解さにゆえにさまざまな解釈の可能性を内包しているために、エッジワースの議論の解釈について相反する理解が認められる。

エッジワースの議論についての慣例的とされる解釈は、クリーディーによれば、(1)『数理精神科学』における競争的再契約理論が「暫定的再契約モデル」(provisional recontract model)である、(2)『数理精神科学』における「ダイアグラム」が今日の「エッジワース・ボックス」と連続性をもつ、という二つの主題から構成される(Creedy 1980a, 267)。

これにたいして、1971年に限界革命100年を記念したベラジオ会議が開催された直後から、それまでの『数理精神科学』解釈を否定する論文——Tarascio(1972)、Walker(1973)、Jaffé(1974)、Weatherby(1976)——が次々と発表された<sup>11</sup>。より具体的には、これら二つ

<sup>10</sup> 本稿11-12頁ですでに述べているように、エッジワースの「利己主義」と「功利主義」とは区別すべきものである。エッジワースの「利己主義」は個人効用最大化を目指す立場であるのに対し、「功利主義」は個人の効用最大化と同時に社会全体の効用最大化を目指す立場である。

<sup>11</sup> ベラジオ会議は、ジェヴォンズ、メンガー、ワルラスによる限界効用理論の導入が「近

の主題にかんして、(1) についてはウォーカー(Donald A. Walker)が、(2) についてはタラシオ(Vincent J. Tarascio)、ジャッフェ(William Jaffé)、ウェザビー(James L. Weatherby)といった経済学者たちが反論を試みたのである(Walker 1973; Tarascio 1972; Jaffé 1974; Weatherby 1976)。

この潮流に反批判を試みたクリーディーにたいしてもタラシオがさらにリプライシ(Creedy 1980a; Tarascio 1980)、1970年代を中心としたこの時期に、『数理精神科学』への関心の高まりと同書の解釈論争ともいべき動きが現れたのである。もともと、彼らの論点の核は、『数理精神科学』全体の解釈ではなく、「ダイアグラム」が提示された同書第II部前半部の「経済的計算法」におけるエッジワースの「経済学的な」議論にかんする慣例的な解釈が正しいかどうかにあった。

本節では、これらのさまざまな論者の見解を、前半部では(1)の主題について、後半部では(2)の主題について整理する。

### (1) 『数理精神科学』における「再契約モデル」解釈

『数理精神科学』による経済学への貢献のひとつは、前節で言及したように、「競争分析に数の役割を取り込んだこと」(Creedy 1980a, 268)である。競争的取引者の数が増加するにつれて契約の不確実性が減少すること、すなわち契約曲線の範囲が収縮することは、前節において明らかにしたとおりである。クリーディーとウォーカーの見解が異なるのは、この契約曲線の収縮過程におけるエッジワースの再契約モデルの解釈についてである。

Walker(1973)によれば、エッジワースの競争的再契約理論についての慣例的な解釈の起源はKaldor(1934)にある。カルドア(Nicholas Kaldor, 1908-86)は、売り手と買い手との間の価格決定が「変更不可契約」ではなく、「暫定的契約」によってなされる点に、ワルラス(Leon Walras, 1834-1910)とエッジワースの再契約理論の共通性を求めた。カルドア自身の言葉に用いれば、ワルラスにおいては、「全員および市場全体にたいして均衡を保証する価格システムが見つかるまで、実際にいかなる交換もはじまることはな〔く〕」、エッジワースにおいても、「再契約をおこなうすべての当事者にとって利益がある再契約がまったく存在しないところに価格システムが至るようになるまで、ただ暫定的な契約がとりかわ

---

代経済学」をもたらした「限界『革命』」と呼ぶべき一大転換点であったかどうか、そして「革命」が存在したのであれば、その意義とは何であったのか、といった問題を吟味するシンポジウムであった。同会議の報告論文については、Black, Coats and Goodwin(1973)を参照のこと。

されるだけである」(Kaldor 1934, 126-27)。エッジワースの再契約理論は、正確に言えば、価格決定ではなく交換比率を扱うまでにとどまっているものの<sup>12</sup>、カルドアは、ワルラスとエッジワースの議論が共に、交換に先んじて価格決定をおこなうことを想定しており、これらは決して交換過程の結果ではないことを主張した。つまり、カルドアの解釈によれば、エッジワースの再契約理論は「暫定的契約」を前提とした「模索過程」(tâtonnement process)と位置づけられる。そして、このカルドア流の理解は、カルドア以降の経済理論史——たとえば、Shumpeter(1954)、Negishi(1961)、Newman(1965)——においても、ゲーム理論——たとえば、Debreu and Scarf(1963)、Rader(1964)、Aumann(1964)、Vind(1964)——においても、通徹されているという(Walker 1973, 139)<sup>13</sup>。

たとえウォーカーの主張を別としても、カルドア流の理解と同様の見解をとる論者は枚挙にいとまがないだろう。たとえば、ブラウグ(Mark Blaug, 1927-2011)は、ワルラスの模索理論はエッジワースの再契約理論を包含し、仮契約の末に契約の成立をみて交換が行われる、と述べたうえで、両者とも「現実世界の競争的な市場経済が、どのように動くのかという有益な動的理論を用意していない」(Blaug 1978, 612/訳 4 巻 934)との理解を示した。日本においても、1937年時点というカルドアとあまり変わらない時期に、青山秀夫が、エッジワースの理論における「契約は暫定的なものとして考えられ、それが終局的に確定するまでは幾度と無く再契約によって変更され得ると想定される。即ち契約は、より有利な条件を申出るものがあるときは……『再契約』によって常に変更され得る、従って暫定的なる価格をあらわす」(青山 1937, 25)と述べている。このように、さまざまな論者によって——意識的、無意識的を問わず——採用されてきたカルドア的なエッジワースの再契約理論にたいする理解は、実際、慣例的なものと言っていいたいだろう。

このカルドアによる解釈、あるいはカルドア的理解とはまったく別の理解を示したのが Walker(1973)である。同論文の特徴は、第一に、『数理精神科学』におけるエッジワースの再契約理論が整理されていない混沌とした理論であり、彼が想定する完全競争市場は必ずしも再契約理論の延長線上にないこと、第二に、『数理精神科学』以降にも提示された彼

<sup>12</sup> このことは Howely(1960)においても次のように指摘されている。「エッジワースはみずからの分析を価格や交換にかかわる現象の解説には向けなかった。このため、彼の結論は、ジェヴォンズやメンガー、ワルラスが結論したように、交換あるいは価格と『幸福』(felicity)との間の関係をまったく含んでいないのである」(Howely 1960, 94)。

<sup>13</sup> エッジワースの理論に端を発するゲーム理論(協力ゲーム)の展開については、岡田(2007, 142)に簡単にまとめられている。

の再契約理論の変遷を追うことによって、彼自身が『数理精神科学』においてカルドア的な理解とは異なる後者のモデル——すなわち、動学理論——を展開したことを主張する点にある (Walker 1973, 138)。

ウォーカーによる第一の主張は、一定の財ストックと一定の取引者とがあらかじめ与えられた競争的市場における均衡(価格および取引量)が需要曲線と供給曲線との交点によって決定される、というエッジワースの主張に注目することによって可能とされる (*ibid.*, 139)。このエッジワースの主張は、完全競争市場という事例において、暫定的契約も変更不可の不安定契約もエッジワースが想定しておらず、みずから解説してきたはずの再契約理論を考慮に入れていないことを示唆するもの、とウォーカーは主張する (*ibid.*, 140)。そして、次の一文をその証拠として提示することによって、ウォーカーは、エッジワースの完全競争市場の想定が、再契約理論の派生的帰結とは完全に乖離していることを指摘した。

「それぞれの価格でどれだけの物品を獲得できるのかを、自分に必要なもの〔がどれであるかを〕隠そうとはしないで、書き記すことを想像せよ。そして、これらのデータは一種の市場機構に与えられ、冷静に価格が求められる」 (Edgeworth 1881, 30; Walker 1973, 140)。

この「市場機構」によってジェヴォンズの「無差別法則」は満たされ、完全競争市場におけるエッジワースの想定がワルラス的模索モデルに通ずるとというのが、ウォーカーの主張でもある (Walker 1973, 140)。

Creedy(1980a)は、このウォーカーの理解を退ける。クリーディーの主張するところでは、エッジワースの再契約モデルの最終的な帰結は完全競争市場という特殊事例と等しくなり、完全競争市場をも包含している再契約モデルがワルラスのモデルに勝る改善であることをエッジワース自身が認識していた (Creedy 1980a, 269)。この見解は、「〔再契約モデルという〕この一般的な手法の便益とは、不完全競争という特定の事例に適用可能なことである。ここにおいては、一価格での需要と供給という考えはもはや不適切である」 (Edgeworth 1881, 31) というエッジワースの叙述から可能になる。要約すれば、エッジワースが不完全競争市場モデルの延長上に完全競争市場モデルを——不完全競争市場モデルの特殊例として完全競争市場モデルを——位置づけているため、後者についても再契約理論で解説できるとクリーディーは理解しており、これはまさにウォーカーの見解と対峙する

ものである。

このウォーカーとクリーディーとの見解の食い違いにたいして、直接的ではないにしろ、一定の解答を与えていると思われるものが Newman(1990)である。かつて、慣例的な理解を示したニューマン(Peter Newman, 1928-2001)も、契約当時者数の増加による経済コアの反応という設問と契約当事者の数が与えられたときに非コアからコアへと経済がいかに移行するかという設問とを区別すべきであると述べ、慣例的解釈を退けている(Newman 1990, 263/訳 329)。ニューマンは、のちにエッジワースがワルラスの模索過程を否定し、「市場価格がそれによって決定されるころの、このあらゆる駆引きのゲーム、すなわち、均衡の位置に到達するために、そのシステムがたどる道筋は、科学の領域に属するものではないと思っている」(Edgeworth 1891a, 12)と言明していることを例に挙げ、彼の契約理論は後者の設問にたいして使用できるものではなく、あくまで前者の設問にたいしてのみ使用された、と解釈している(Newman 1990, 263/訳 329)<sup>14</sup>。しかし、これは『数理精神科学』におけるエッジワースの叙述を基礎としていないため、必ずしも『数理精神科学』の再契約モデルと「模索過程」との関係についての完全なる解釈として採用できない。とはいえ、前節での強調したように、エッジワースの力点が契約者数の多少分析にあるとすれば、これは一つの傍証と言えよう。

ウォーカーとクリーディーとの間にみられる見解の相違は以上の点だけにとどまらず、エッジワースの再契約理論が動学的要素を含んでいるとしたウォーカーをクリーディーは強く批判する。ウォーカーの理解の特徴は、エッジワースが「取引日(market day)」概念を取り入れて変更不可契約モデルを考えていたこと、エッジワースが『数理精神科学』において用いた例のなかに「非模索市場(non-tâtonnement market)」が含まれていることを理由に、彼の再契約理論が不明瞭かつ動学的要素を包含していると主張する点にある(Walker 1973, 141-42)。

ウォーカーによれば、交換主体たちが当初は均衡取引に必要な情報を十分にもっていないために「取引日」のたびに不均衡取引を繰り返し、この不均衡取引を経ることによって、やがて取引が均衡へと収束する動学的なモデルをエッジワースが想定していたという(ibid., 141)<sup>15</sup>。これにたいして、クリーディーは『数理精神科学』のどこにおいても「取

<sup>14</sup> この評価は、エッジワースの貢献の一つが「競争分析に数の役割を取り込んだこと」とするクリーディーの見解と同一である(Creedy 1980a, 268)。

<sup>15</sup> Walker(1973)は、『数理精神科学』以降、エッジワースの理論研究がこのような「取引

引日」について述べられておらず、ウォーカーが議論を混乱させていると批判する(Creedy 1980a, 271)。少なくとも前節において解説したエッジワースのモデルはたしかに「取引日」について述べておらず、少なくとも『数理精神科学』における再契約理論については、ウォーカーの指摘は不正確なものであろう<sup>16</sup>。

次に、ウォーカーの「非模索市場」についての指摘であるが、まず「非模索市場」について整理しておこう。「非模索市場」とは、「連続した取引日ののちに均衡に到達するが、それぞれの取引日の始まりにおける初期条件が同じであるために、あたかも不均衡取引が存在しないかのように、均衡価格が等しくなる市場」(Walker 1973, 142)と説明される。より簡単には、取引される財が $t+1$ 期に契約される際、前の契約が交わされた $t$ 期における初期条件に戻されるような市場、を想定すればよい。具体的には、ウォーカーは、「借地契約が満了した地主は、おそらく、新たな借地人と再契約する」(Edgeworth 1881, 17)というエッジワースの叙述を引用し、これをその顕著な例とみなす。しかし、『数理精神科学』において土地貸借にかんする契約についてエッジワースはこれ以上のことを言及しておらず、このことはウォーカー、クリーディーともに認めている。クリーディーはむしろ、ウォーカーが引用した部分の直前にある以下のエッジワースの叙述を重要視する。

「契約期間には契約者たちの間には和平(*pax*)や協約(*pact*)があり、契約者のうちの何人かが他者の同意を得ないままに再契約するときは戦争となる。このようにして、最後まで残った入札者と（それ以上高い付け値がないような価格で売るために）契約する競売人は、より高い値をつけた入札者と再契約するのである」(*ibid.*, 17)。

クリーディーによれば、「それ以上高い付け値がないような」と「他者の同意を得ないままに」というフレーズは両方とも実際の交換がおこなわれないことを意味するため、エッジワースの再契約過程が含意するところは、「最終決着にいたるまで財は交換されない」(Creedy 1980a, 270)ことである。

このようなウォーカーとクリーディーの見解の相違は、のちにミロウスキ(Philip Mirowski)によって、「相当な混乱」(Mirowski 1994b, 26)と評価された。というのも、ミ

---

日」を考慮した不均衡取引モデルへとその重心を移行していったことを主張する。

<sup>16</sup> ウォーカーが参照した論文の一つである Edgeworth(1904a, 40)においては、エッジワースは短期と長期という意味で二つの交渉過程—暫定的契約過程と変更不可契約過程—を別個に考えている。

ロウスキの解釈では、「ときとして〔エッジワース〕は、時間とともに用役にかんする契約が繰り返しおこなわれるように描写する場合には、それが連続した学習過程(sequential process of learning)であるかのように叙述し……、また別のときには、仲裁が外部から課される場合には、それが唯一合法的な調停的正式交渉期間(mediated formal bargaining session)であるかのように叙述した」(ibid., 27)からである。したがって、ミロウスキは、エッジワースの再契約理論について、「市場動学についての重要なシナリオ」と「バロック的な比較静学の一つ」との間で二者択一的な解釈を決定することは難しいとの理解を示しているが(ibid., 26)、ニューマンの理解にしたがえば、これは「バロック的な比較静学の一つ」と結論することが可能であろう。

## (2) 「ダイアグラム」と「エッジワース・ボックス」

「ダイアグラム」が「エッジワース・ボックス」と連続性をもつ、という慣例的解釈を真っ向から否定したのが Tarascio(1972)と Jaffé(1974)である。この二つの論文に共通するのは、「ダイアグラム」と「エッジワース・ボックス」との間の連続性を否定すると同時に、後者の起源をパレート(Vilfred Pareto, 1848-1923)に求める点である。

タラシオは、エッジワースによる「ダイアグラム」の目的が取引者数の増加による契約曲線の漸次的収縮を証明することにあつたために、そのなかに提示される無差別曲線は一取引者につき一つであり、取引者自身の「無差別曲線体系」(system of indifference curves)が『数理精神科学』のどこにも見出されない、と主張する(Tarascio 1972, 194)。また、「ダイアグラム」における片方の取引者にとっての図中の原点と軸とを反転させて重ね合わせると、「エッジワース・ボックス」と同様に、契約曲線に沿って正接する無差別曲線が現れるが、「契約曲線の方向は北西から南東へ向き、無差別曲線は原点にたいして凹(concave)ではなくなる」(ibid., 194fn5)。

このように「ダイアグラム」を「エッジワース・ボックス」とは別個のものとするタラシオは、後者の起源がパレートの『経済学提要』(*Manuale di economia politica*, 1906)にあると考える<sup>17</sup>。そして、パレートが他界した翌年に出版されたボーリー(Arthur Lyon Bowley, 1869-1957)の『経済学の数学的基礎』(*The Mathematical Groundwork of Economics*, 1924)が「エッジワース・ボックス」の普及に大きく貢献した、ともタラシオ

<sup>17</sup> パレートによる図は、Pareto(1906, 187; 333; 338)を参照のこと。

は述べている(*ibid.*, 194-95)。

しかしながら、ボーリーの「エッジワース・ボックス」導出については、タラシオによれば、ジェヴォンズ——『経済学の理論』における「オプファー曲線」——、エッジワース——『数理精神科学』における「無差別曲線」および「契約曲線」——、フィッシャー(Irving Fisher, 1867-1947)——『価値および価格の理論の数学的研究』(*Mathematical Investigations in the Theory of Value and Prices*, 1892)における「無差別曲線体系」——、およびパレート——「国民経済への数学の適用」(*Anwendungen der Mathematik auf Nationalökonomie*, 1903)における「無差別曲線体系」と『経済学提要』における「ボックス図」——というように、さまざまな経済学者の貢献による影響の結果である(Tarascio 1972, 195-96)。ボーリーの「エッジワース・ボックス」にはこのような経緯があると主張するタラシオは<sup>18</sup>、サミュエルソンが与えた呼称「ジェヴォンズ=エッジワース=ボーリー=ラーナー・ボックス・ダイアグラム」(Samuelson 1948, 233/訳 241)を修正して、「ジェヴォンズ=エッジワース=フィッシャー=パレート=ボーリー=ラーナー・ボックス・ダイアグラム」とすべきであり、その根源的な貢献者の名前だけをとって、「パレート・ボックス・ダイアグラム」としてもよいのではないか、とさえ提言するのである(Tarascio 1972, 197)。

この Tarascio(1972)と類似した見解を展開するのが Jaffé(1974)である。ジャッフェも、その原資料をパレートの「純粹経済学基礎原理の考察」(*Considerazioni sui principii fondamentali dell'economia politica pura*, 1893)に求める点にこそ違いはあるものの、「エッジワース・ボックス」をパレートの貢献とみなす点についてはタラシオの主張となら変りない(Jaffé 1974, 343)。タラシオ同様に「ダイアグラム」が「無差別曲線体系」を内包していないことを主張するジャッフェは、『数理精神科学』において、エッジワースがこの無差別曲線体系について言及しているのはわずか一箇所に過ぎない——ジャッフェによれば、Edgeworth(1881, 36)における「内部無差別曲線」(*interior indifference curve*)という形で唯一出現する——と述べている(Jaffé 1974, 351)。

さらにジャッフェは、「ダイアグラム」と「エッジワース・ボックス」との連続性が否定される最大の要因を、エッジワースが契約取引者の「初期保有量」(endowment)について

<sup>18</sup> ただし、Bowley(1924, 5)に提示されているボーリーのボックス図の形状は、同一原点を中心に二者の無差別曲線が伸びている点において、「エッジワース・ボックス」というよりも「ダイアグラム」に類似している。

明確に提示していない点に求める(*ibid.*, 344)。ジャッフェ自身の言葉によれば、「技術的にいうならば、エッジワースの契約曲線ダイアグラムは、彼が故意に沈黙することを選んだのだが、初期保有量について明瞭に述べられていたならば、そのときに固有の特徴をもつ〔エッジワース・〕ボックス・ダイアグラムに変換することができた」(*ibid.*, 343-44)。

これにたいして、Creedy(1980a)は、上述のようなタラシオやジャッフェの見解を真っ向から否定する。

第一に、「ダイアグラム」には「無差別曲線体系」が存在しないという2人の指摘にたいして、クリーディーは、 $X$ と $Y$ との間の1対1契約にかんするエッジワースの叙述に注目し、契約曲線の定義に「無差別曲線体系」が包含されることは明らかであることを強調する(Creedy 1980a, 274)。最終決着の軌跡をあらわす契約曲線上の点は、エッジワースによって、「 $[X$ および $Y]$  両者の無差別曲線が相接する」(Edgeworth 1881, 22)点であり、「これらの決着は無数の点によって示される」(*ibid.*, 29)ことが保証されている。これに加えて、エッジワースが、「2人の利益がすべて契約曲線に沿っており、 $Y$ は南東の点 $y_0\xi_0$ に、 $X$ は北東の点 $\eta_0x_0$ に可能なかぎり移動することを望んで〔おり〕」(*ibid.*, 29)<sup>19</sup>、「無差別曲線は同心円の集合で構成される」(*ibid.*, 40)と述べていることも加味すれば、 $X$ および $Y$ の無差別曲線体系はそれぞれ、南東から北西方向および北西から南東方向へと効用水準を高めながら、広がっていることは明らかであろう。

次に、エッジワースが初期保有量を明確に扱わなかったというジャッフェの指摘についてであるが、これは『数理精神科学』の20頁および付録V「ジェヴォンズ教授の交換方程式について」(On Professor Jevons's Formulæ of Exchange)の冒頭をみることによって否定される。

前者において、エッジワースは、ジェヴォンズの『経済学の理論』にしたがい、 $X$ の効用 $P$ を $\Phi_1(a-x) + \Psi_1(y)$ 、 $Y$ の効用 $\Pi$ を $\Phi_2(x) + \Psi_2(b-y)$ と表記した。ジェヴォンズの交換方程式は、第1財を $a$ 量所有する $X$ 、第2財を $b$ 量所有する $Y$ が $x$ 量の第1財と $y$ 量の第2財とを交換することを想定している。これをエッジワースは、ある財の限界効用が他の財と独立関係ではないと考えるため、上述の $X$ についての効用関数を $P = F(a-x, y)$ へと書き改める。このため、効用関数にかんするエッジワースとジェヴォンズとの大きな違いは、加法的効用関数を想定するか否かという点に求められる。また、 $a$ 量の第1財を得るため

<sup>19</sup> 点 $y_0\xi_0$ および点 $\eta_0x_0$ はそれぞれ、本章における図1-2の点 $G_0$ および点 $F_0$ に相当する。

に費やされる労働の客観的尺度—たとえば、労働時間—を $e$ とすれば、 $a$ は $f(e)$ と変換することができ、さらにこのときの労働による苦痛を $\phi(e)$ とあらわすことができる。このため、エッジワースの効用関数は、 $P = F(f(e) - x, y) - \phi(e)$ という形をとる。さらに、 $e$ は契約に直接関係する変数ではないことから $\frac{dP}{de} = 0$ であり、効用関数は最終的に、 $P = F(-x, y)$ 、あるいは交換量に注目すれば、われわれがよく知る効用関数形、 $P = F(x, y)$ へと変換される (Edgeworth 1881, 105)<sup>20</sup>。このように、エッジワースは、ジェヴォンズ同様に、所与の財（在庫品）の交換を想定しており、それゆえに、初期保有量の存在を前提としていたと解釈することができる。

最後に「ダイアグラム」と「エッジワース・ボックス」との間の図としての連続性問題について考えよう。Weatherby(1976)は、両者の関連を明瞭な図を用いて説明している。すなわち、図 1-5 にみられるように、ウェザビーは、「エッジワース・ボックス」のなかに左右反転させた「ダイアグラム」をはめ込んだのである (Weatherby 1976, 295)。

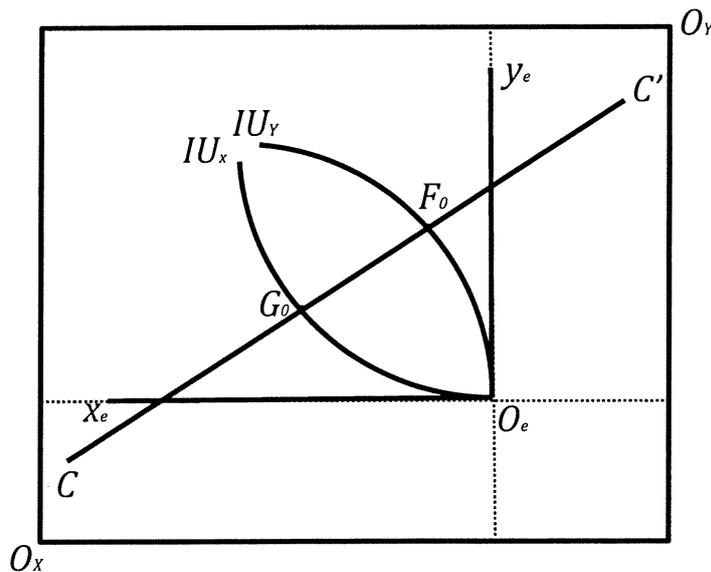


図 1-5

このように理解すれば、タラシオが主張したように、契約曲線の向きが「エッジワース・ボックス」と異なることも、無差別曲線が原点にたいして凹になることもない。また、無差別曲線 $I_x$ は点 $O_e$ からみれば同一効用をもたらす「交換量の組み合わせ」の軌跡であり、

<sup>20</sup> 当然のことながら、 $Y$ の効用関数についても同様の手法が適用できる。

点 $O_x$ からみれば同一効用をもたらす「財の組み合わせ」をあらわしている。ただし、ウェザビーはジャッフェの初期保有量についての指摘を受け入れ、点 $O_e$ の座標を確定することができないことを理由に、エッジワースではなくパレートを「エッジワース・ボックス」の創始者に位置づけている(*ibid.*, 296)。しかしながら、上での考察より、点 $O_e$ の座標が点 $(a, b)$ となることは明確である。

以上のように、エッジワースの「ダイアグラム」がそのまま「エッジワース・ボックス」へと変換できることはないが、無差別曲線体系や初期保有量を根拠として両者の間にまったく連続性がないとするタラシオやジャッフェの慣例的解釈への反駁は勇み足と言えるだろう。

#### 1-4. 「ダイアグラム」解釈史にみる二つの罪悪

これまで考察してきたように、エッジワースの叙述は、今日の経済学の水準からみれば、曖昧で不明瞭さを残しており、再契約理論をめぐるウォーカーとクリーディーの見解の相違、タラシオやジャッフェによる「ダイアグラム」と「エッジワース・ボックス」との間の非連続性にかんする主張をもたらした。

さまざまに解釈の余地を残したエッジワースの解説の曖昧さは、何に起因しているのだろうか。それは、今日「エッジワース・ボックス」が二者間の分配問題分析の道具とされるのにたいし、エッジワースが「ダイアグラム」を契約における利己主義的取引者の数多少問題分析の道具として用いたことにその背景をもつ。より厳密にいうなれば、『数理精神科学』第Ⅱ部「経済的計算法」における「ダイアグラム」は、契約において取引者数が無限でないかぎりには不確定性が生じ、「功利主義」がその不確定性を解消する仲裁原理となることを主張するための道具であった。「契約の不確定性」という部分に視野を限定すれば、「ダイアグラム」を含むエッジワースによる分析は経済学の問題の範疇にあるのかもしれない。しかし、実際にエッジワースが主張しようとした「功利主義＝仲裁原理」となる部分にまで視野を広げれば、あくまで経済学の問題に限定したエッジワース解釈は狭範な視野であることは自明であろう。

本章では『数理精神科学』第Ⅱ部の前半部に据えられた「経済的計算法」の内容を大きく扱ったが、その後半部「功利主義的計算法」をも含めたこの著作全体に目を向ければ、彼はその目的を、「シジウィック氏の快樂主義の区分—行動の原理が一般的に幸福最大化であるとされる『方法』の分類—が徹底されたものではないため」(Edgeworth 1881, 16)、

シジウィックの『倫理的諸方法』(“ethical methods”)への補足を示す」(ibid., v)と設定している。つまり、エッジワースの「ダイアグラム」は、必ずしも経済学のために生み出されたものではない。たしかにその影響が少なからず及んでいるとされているとはいえ、今日の経済学の基準のみをもってエッジワースの経済学への貢献を評価すべきではないだろう。シジウィックの倫理学の方法を視野に入れていることが明らかな『数理精神科学』におけるエッジワースの意図を現代的な経済学の視点からのみ読み取ろうとするのは危険な行為といえる。

ここで注意を喚起したいのは、ブラウグが指摘する次の二つの危険である。

「以前の著作を評価する場合には、つねに二種の危険が存在する。すなわち、一方では、かれらがうけ継いだ分析とかれらが著作した時期との両者の限界を評価することなしに、かれらの誤謬と欠陥のみをみることであり、また他方では、かれらの時代に先がけて、またしばしばかれら自身の意図にも先がけて、ある観念を発見せんとする熱意のあまり、かれらの功績を拡張せんとすることである。いくらか違った言いかたをすれば、近代経済理論の基準によって古き著作を判断するという神人同型說的罪悪も存在するが、しかしサミュエルソンがかつて『かれらが現代の用語と符号とをしようしないために古き著者に同等の内容を認めないという詭弁的神人同型說的罪悪』とよんだものもまた存在するのである」(Blaug 1978, 1/訳 1 巻 3)。

『数理精神科学』執筆前後のエッジワースが倫理学にも大きな関心を寄せていたことを割愛し、現代理論と「ダイアグラム」の関係性に議論を集中させたことによって、「エッジワース・ボックス」論争は、絶対主義的なアプローチが陥りやすい「神人同型說的罪悪」および「詭弁的神人同型說的罪悪」という二罪を犯しているようにも思える。

これら二罪を回避するには、そもそもなぜエッジワースは倫理学にも大きな関心を寄せていたのか、そして、『数理精神科学』がその著作全体として有している目的や意図とはなにか、を明らかにする必要がある。このような理由から、2章および3章では、主にその生誕から『数理精神科学』出版、そしてドラモンド講座経済学教授就任までのエッジワースに焦点をあて、彼の知的環境やその関心の拡張を考察する。

## 第2章 エッジワースとその知的環境

## ——その生誕から 1860 年代にかけてのエッジワース——

本章および次章の目的は、前章末尾で触れたように、エッジワースが『数理精神科学』出版、そしてドラモンド講座経済学教授就任にいたるまでの知的環境や彼の関心を明らかにすることであり、いわば一種の伝記的考察である。

これまでも「エッジワース伝」、あるいは彼の伝記的内容を含む著作は、数多く発表されてきた。そのなかでもっともよく知られているものは、Keynes(1926 and 1933)であろう。これに加えて、ケインズは、『国民伝記辞典 1922-30 年』(*The Dictionary of National Biography, 1922-30*)にも寄稿している(Keynes 1937)。おそらく、その知名度において、ケインズによる「エッジワース伝」にまさるものはないだろうが、その他、エッジワースの生涯に触れた著作の代表的なものとしては、Bonar(1926)、Price(1926)、Bowley(1934)、Hutchison(1953)、Howely(1960)、Hildreth(1968)、Kendall(1968)、Stigler(1978)、Creedy(1981 and 1987)、Hicks(1983)、Newman(1987 and 2004)、Mirowski(1994b)、福岡(1999)、Taylor(2004)なども挙げることができる。

これらの伝記は、中年期以降のエッジワースと交流をもった人物によるものか、彼の死後に書かれたものである(Newman 1987, 86)。このため、彼の幼少期から青年期にかけての情報は少なく、かつ各伝記の間には多くの齟齬が包含される。その例を挙げれば、エッジワースが学生として在籍したトリニティ・コレッジ・ダブリンにおいて学んだ内容にかんして、ポーリーは数学と古典を(Bowley 1934, 113)、ニューマンは古典のみを(Newman 1987, 85)、ケンダルはフランス語、ドイツ語、スペイン語、イタリア語といった諸言語を挙げている(Kendal 1968, 269)。また、多くの伝記資料において、エッジワースが同コレッジに在籍した期間を 1862 年から 1867 年としているのにたいし、ヒックスはこれを 1862 年からの 1 年間とするなど(Hicks 1983, 162)、一致をみない。

これ以外にも、従来の伝記には、誤情報の連鎖という問題も存在する。たとえば、ポーリーは、エッジワースがトリニティ・コレッジ・ダブリンを卒業せずにオックスフォードへと勉学の間を移したかのように叙述したが(Bowley 1934, 113)、本章で触れるように、実際には彼は同コレッジを正式に卒業している。しかし、ポーリーだけでなく、ケインズもこの点について不明瞭な叙述をしているため(Keynes 1933, 254/訳 336)、これらの伝記を踏襲して、エッジワースがトリニティ・コレッジ・ダブリンを卒業していないとするも

のや卒業の有無について触れない伝記も存在する(Creedy 1986, 9 Hicks 1983, 162; Newman 1987, 85; Taylor 2004, 358l)。

上述のような問題が存在するため、従来の伝記を指して、「エッジワースの生涯について完璧な本はない」(Barbé 2010, xxi)と評したバルベ(Lluís Barbé)は、2006年にカタロニア語で、さらに2010年に英語で——クリーディーによる序文を添えて——290頁以上にも及ぶ詳細な『エッジワース伝』(*Francis Ysidro Edgeworth: A Portrait with Family and Friends*)を出版した。同書は、エッジワース自身の書簡や大学記録はもちろん、彼の一族の往復書簡を含むさまざまなマニュスクリプトを丹念に当たり、彼のさまざまな論考の解釈よりも、彼の「記録的伝記」(*ibid.*, xxiv)にこだわった著作である。その詳細さと正確さを追求したこの『エッジワース伝』は、Baccini(2003)によるエッジワースの著作目録の整備と相まって、エッジワースについてより一層の研究を可能にする資料といえる。

しかしながら、バルベ版『エッジワース伝』が、本章の目的——エッジワースの知的環境や彼の関心——にかかわるすべての問題を完全に解消するわけではないように思われる。というのも、バルベは、多くの大学機関にてマニュスクリプトの調査をおこない、彼の学生時代の成績などまで可能な範囲で明らかにしたものの、その成績がどのような内容にたいするものかという点については——少なくとも彼の著書のなかでは——言及していないからである<sup>1</sup>。

このような事情を鑑みて、本章では、エッジワースが実際に学び、試験に臨んだであろう内容にかんする情報を含めながら、エッジワースの知的環境について論じることとする。

### 2-1. エッジワースの誕生

エッジワースは、1845年2月8日、アイルランド島中央部に位置するロングフォード県(County Longford)にある町、エッジワースズタウン(Edgeworthstown)の「エッジワースズタウン・ハウス」と呼ばれる屋敷にて<sup>2</sup>、フランシス・ボフォール・エッジワース(Francis Beaufort Edgeworth, 1809-46)とその妻ローサ・フロレンティーナ・エローレス(Rosa Florentina Eroles, 1815-64)との間に生まれた。

エッジワースが生まれたエッジワースズタウンは、その名前のとおり、プロテスタント

<sup>1</sup> Barbé(2010)にたいする筆者の評価については、上宮(2011)を参照のこと。

<sup>2</sup> 従来の邦語文献において Edgeworthstown は「エッジワースタウン」と表記されてきた。これにたいして本稿ではアイルランドでの発音に忠実に「エッジワースズタウン」とする。

のアイランドへの組織的植民を励行したイギリス王ジェームス1世から譲与された土地にエッジワース家が作り上げた町で、同家は代々この周辺の土地を所有する地主であった。

エッジワース家は、19世紀中葉、たとえばミル(John Stuart Mill, 1806-73)が『自伝』(*Autobiography*, 1873)において「エッジワース型の実践的良識」と評し(Mill 1873, 59/訳57)、優生学者ゴールトン(Francis Galton, 1822-1911)にも、偉大な文人には高い能力をもった親族がいるという自説証明のための一例として挙げられるなど(Galton 1869, 221; 224)、才能に長けた、そしてアイランドの「あらゆるカントリーハウスのなかでももっとも傑出した」一族であった(Butler 1957, 25)。そのなかでも、発明家や教育思想家などさまざまな方面で活躍したエッジワースの祖父リチャード・ラヴェル・エッジワース(Richard Lovell Edgeworth, 1744-1817)、そしてリチャード・ラヴェルの長女でエッジワースにとっては伯母にあたるアイランドの女流作家マライア・エッジワース(Maria Edgeworth, 1768-1849)は、とりわけよく知られた存在である<sup>3</sup>。

<sup>3</sup> リチャード・ラヴェルは、ルナ協会(Luna Society)に属し、1785年の王立アイランド学士院(Royal Irish Academy)の創設、1894年のアイランドにおける初めての電信実用化成功など、多岐にわたって活躍した(Butler and Butler 1927., 161; 168)。教育思想家でもあったリチャード・ラヴェルは、みずからの経験と理念とをもって、『実践的教育』(*Practical Education*, 1798)、『職業的教育』(*Professional Education*, 1809)といった教育関係の著作を娘マライアとの共著で公刊した。とりわけ前者は、「ジョン・ロック(John Locke)の『教育論』(*Some Thoughts concerning Education*, 1693)とハーバート・スペンサー(Herbert Spencer)の『教育論』(*Education: Intellectual, Moral and Physical*, 1861)との間に書かされたもっとも充実した教育論書である」(大嶋・大嶋 2001, 290)。初等教育を重視したリチャード・ラヴェルは、宗派に関係なく入学することのできる男子小学校も1816年にエッジワースタウンに創立した。この学校は、リチャード・ラヴェルの死後、彼の三男ラヴェル(Lovell Edgeworth, 1775-1842)が運営したものの、経営の悪化により、1833年に閉鎖された(Butler and Butler 1927, 218; 222)。

マライアは、作家であると同時に、エッジワースズタウンの荘園運営に熱心で、経済学にも深い関心をもった。ジャガイモ生産の収益率について親交のあったリカードウへ送った彼女の書簡は、のちに、エッジワースが編集者を務めていた『エコノミック・ジャーナル』誌に掲載された(Anon. 1907, 435-38; Sraffa 1952, 252-56/訳 279-85)。

リチャード・ラヴェルは四人の妻との間に設けた子どものなかには、生理学者トーマス・ベドース(Thomas Beddoes, 1760-1808)の妻で、ロマン派詩人で生理学者でもあったトーマス・ラヴェル・ベドース(Thomas Lovell Beddoes, 1803-49)の母となったアンナ・マライア(Anna Maria, 1773-1824) (Halsey 2004, 756r; Nave 2004, 754r)、数理解物理学者ロビンソン(Thomas Romney Robinson, 1793-1882)の後妻となったルーシー・ジェーン(Lucy Jane, 1805-97) (Bennett 2004, 419r)、「1834年から1853年にかけて『ベンガル・アジア協会ジャーナル』(*Journal of the Asiatic Society of Bengal*)誌に13もの植物学、気候学にかんする論文や旅行記を掲載し」(Jackson 2004, 724l)、「多くのヒマラヤ植物をヨーロッパに移入した」植物学者となったマイケル・パケナム(Michael Pakenham Edgeworth,

エッジワースの父フランシス・ボフォールは、リチャード・ラヴェルにとって下から 2 番目の子で、著名なパブリックスクールのひとつ、チャーターハウス(Charterhouse)や 1 年間の家庭教師のもとでの勉強を経て、ケンブリッジのトリニティ・コレッジ(Trinity College, Cambridge)へと進学した(Butler and Butler 1927, 246-47)。彼も、祖父や異母姉同様に優れた才能の持ち主であり、それはモズリー(Thomas Mozely, 1806-93)やカーライル(Thomas Carlyle, 1795-1881)の回想からもうかがい知ることができる<sup>4</sup>。また、彼は、ミルにも認められるほどで、「ある高貴な人物」の息子の家庭教師にミルはフランシス・ボフォールを推挙しようと考えたほどであった<sup>5</sup>。

ケンブリッジにおいて、フランシス・ボフォールは、数学の勉強に取り組んだが、これを苦痛に感じるだけでなく、ケンブリッジそのものにまで嫌悪したため、わずか 2 年ほどの在籍をもって退学した (Butler and Butler 1927, 247)。そして、数学ではなく、「神聖なる哲学こそわが花嫁」と決意した彼は、1831 年 10 月のロンドンで、「ロマンチックな偶然」によって、本物の花嫁と遭遇する(Carlyle 1851, 131)。ハムステッドにあるかつての寄宿先の女家主を訪ねたフランシス・ボフォールは、カタロニアから亡命していたエローレス将軍夫人とその 16 歳の娘ローサ・フロレンティーナの部屋に——家政婦の勘違いが原因で——通された。この出会いをきっかけとして、その 2 ヶ月後、フランシス・ボフォールとローサ・フロレンティーナは結婚した(Butler and Butler 1927, 248)<sup>6</sup>。

1812-81) などがいる(大嶋・大嶋 2001, 386)。

<sup>4</sup> 「エッジワースはカルタゴについての 1823 年の英文詩で第 2 位を獲得し、私は 3 位であった……その翌年の主題はサウル(Saul)であり、エッジワースは第 1 位となった」(Mozely 1882, vol.1, 42-43)。「彼はプラトンとともにカントにも通じていて、哲学と文学の素養が深かった」(Carlyle 1851, 130)。

<sup>5</sup> J.S.ミルは、ケンブリッジ時代の知己ケンプル(John Mitchell Kemble, 1807-57)への書簡(1840 年 6 月 26 日付)に、「私は、彼の著作が相当な力量と教養とをもちあわせた人物であることの証明だという理由で、彼を推挙するのみです」と書いている(Mineka 1963, 439)。

<sup>6</sup> エッジワースの母系エローレス家については、Hicks(1983)、Barbé(2004 and 2010)が詳しい。エッジワースに流れるスペインの血については、エッジワース家の分家の出で、のちに「エッジワース・カイパーベルト天体」の予言で有名な天文学者ケネス・エセックス・エッジワース(Kenneth Essex Edgeworth, 1880-1972)が次のように回想している。「彼は短髭を生やし、スペイン大公のような風采であったが、これは間違いなくスペイン人の母親から受け継いだものであった」(Edgeworth 1965, 13)。メイナード・ケインズも、「彼の顔つきにはエッジワース系よりもスペイン系の要素の方が多かった。広い額、長い鼻、オリーブ色をおびた顔、きちんと尖らせたあごひげ、それにその手はたくましく、彼の風貌は異彩を放っていた」(Keynes 1933, 266/訳 351)と叙述している。

この夫妻は結婚後、フィレンツェやロンドンで過ごし、後者においては、フランシス・ボフォールの才能を活かして大学進学や公務員試験を目指す学生を相手とした家庭教師業を営んだ(Carlyle 1851, 131-32)。このロンドン時代に、前述のとおり、ミルからその才能を高く評価されたものの、家庭教師業は概してうまくいかず、彼は1841年にはエッジワースズタウンに戻り、家督を継いでいた異母兄チャールズ・スニード(Charles Sneyd Edgeworth, 1786-1864)を手伝うようになった。カーライルによれば、彼は、「完全に哲学や思索を捨てて、無口で厳格な土地管理者、そして州の治安判事になった」のである(Carlyle 1851, 132)。

フランシス・ボフォール夫妻の間には、長男ウィリアム(William, 1832-33)——わずか1歳で他界したためにその存在はあまり知られていない——<sup>7</sup>、次男ウィリアム(William, 1835-63)、長女マライア(Maria, 1839-93)、三男アントニオ・エローレス(Antonio Eroles, 1841-1911)、四男デヴィッド・リード(David Reid, 1842-71)、五男リチャード・レストック(Richard Lestock, 1843-69)、そして末っ子として、エッジワースが生まれた。この末っ子は生後5ヶ月が経った1845年7月20日、エッジワースズタウンのセント・ジョン教会において、イシドロ・フランシス・エッジワースという名のもと——つまり、われわれに馴染みのある名前とは逆の順序の表記が彼の本名である——、アイルランド国教徒として、パウエル(J.H. Powell)という人物による洗礼を受けた<sup>8</sup>。

1845年に、エッジワースズタウンの一員として、この世に生を受けたエッジワースは、当然、1840年代後半にアイルランド全体を襲った「大飢饉」を経験したことになるが、この飢饉とほぼ同時期、ただしこの飢饉とは無関係に、いくつかの別れを経験した。1846年10月、父フランシス・ボフォールがダブリンにて37歳の若さで他界し(Burke 1879, 502)、さらに1849年5月にはマライア・エッジワースもエッジワースズタウンにて81歳の寿命

<sup>7</sup> 多くの場合、エッジワースは五男とされている(Keynes 1933, 251/訳 332; Creedy 1986, 8)。

<sup>8</sup> エッジワースの受洗日はエッジワースズタウン在住のジャック・ステュアート(Jack Stuart)氏が管理する『セント・ジョン教会モストリムないしエッジワースズタウン小教区洗礼簿』(*Register of Baptism of the St. John's Parish Mosttrim or Edgeworthstown*, 15)に記されている。エッジワースの本名については、Kendall(1967)、Barbé(2010)などでも指摘されているが、この洗礼記録がその有力な証拠といえるだろう。同記録には、リチャード・ラヴェルやマライアをはじめ、多くのエッジワース一族の洗礼記録が残されている。なお、エッジワースの洗礼記録は、2006年2月8日、ロングフォード県図書館(Longford County Library)のアーキビスト、マーティン・モリス(Martin Morris)氏の立ち会いのもと、ステュアート氏の自宅にて、筆者が確認した。

をまっとうした(McCormack 2004, 722r)。

フランシス・ボフォール亡きあと、エッジワース兄弟は伯父チャールズ・スニードの庇護のもとにあり、その教育は次男ウィリアムを例外として、家庭教師によっておこなわれた。これはイングランドの男子校に入学させたものの、その学校の風紀の乱れがひどかったあまりに、結局はウィリアムをエッジワースズタウンに連れ戻すことになった、という悪い前例があったためである(MSS Edgeworth E3/9)。

エッジワース家の家庭教師については、エッジワースの姉マライアによる手記によれば、「1855年のはじめ頃にポッタートン先生(Mr. Potterton)がやってきて……1856年のはじめ頃にインドから叔父パケナムが戻ってきたけれども、ちょうどその頃にフロイド先生(Mr. Floyd)がポッタートン先生の後任に就いた」(MSS Edgeworth E3/7)。しかし、マイケル・パケナムの娘、つまりエッジワースの従妹ハリエット・ジェシー・バトラー(Harriet Jessie Butler, 1851-1946)の手記には、「1856年に私たちが故郷に戻ったとき、フロイド先生がその職に就いており、記憶するに、それは1860年まで続いた。彼は良い教師であったものの、規律を守ることができない人物であったことは間違いない。立派な人物であったポッタートン先生がその職に就いたことはありがたかった。彼は良い教師であり、良い学者であり、紳士であった」(MSS Edgeworth E3/9)とある。フロイドとポッタートンという二人の人物がエッジワース家の家庭教師を務めたことは間違いなさそうであるが、その着任時期は一致しない。ただ、姉マライアの手記の方がより詳細で、「リチャードとフランシスは1857年の秋の間トリムに行き、1858年の春の間にもトリムにいた……1859年のはじめ頃にエルムズ先生(Mr. Elms)が家庭教師になった。1859年から1860年にかけての冬、リチャードが…熱病にかかったため、他の三人の兄弟たちはトリム(Trim)に滞在し、その春、ホバート先生(Mr. Hobart)が家庭教師となった」(MSS Edgeworth E3/7)。トリムにはエッジワースの伯母ハリエット(Harriet Butler, 1801-1889)とその夫、国教会のトリム教区司祭かつ同教区学校の教師でもあったリチャード・バトラー(Richard Butler, 1794-1862)が住んでおり、エッジワース兄弟がトリムに長期滞在したときには、彼らが家庭教師を務めた(Barbé 2010, 41; 44)<sup>9</sup>。

<sup>9</sup> バルベはエッジワース家の教師が次々と変わった一方で、エッジワースのトリム滞在期間の合計がかなりのものになるため、バトラー夫妻の貢献がもっとも大きかったと評価している(Barbé 2010, 46)。エッジワース兄弟は、母からスペイン語やイタリア語を、家庭教師たちからは古典や数学、そしてエウクレイデス原論(Euclides)を学んだ(Barbé 2004, 303)。

このようにエッジワース家の家庭教師は頻繁に変わったが、勉学以外において、幼少期のエッジワースの関心に影響力が強かったのは2歳年上のリチャード・レストックであり、それはハリエット・ジェシー・バトラーの手記からもうかがえる。

「小さなディック [リチャード・レストック] とフランクは、お互いに献身的で、……育ち盛りになると、彼らは自分たちだけの娯楽をもちました……。彼らは……奇妙な趣向に専心しました——その一つがスズメバチの養殖でした。彼らはスズメバチの巣を（たくさん）掘り起こして、それらの巣のうちの二つ、三つを（マライア伯母さんのシャクヤクの木に近い）読書室の窓のかなり近くにある正面芝生に移しました。このために、スズメバチたちは自然と屋内に入ってきて、頻繁に家の人間たちをその針で刺しました。以来、私はスズメバチに恐怖を感じるようになってしまいました。これはこの兄弟が自然と好んで取り組んだことのためでした」(MSS Edgeworth E3/7)<sup>10</sup>。

そして、1861年7月、この仲の良いリチャード・レストックとともにトリニティ・コレッジ・ダブリンで学ぶべく、エッジワースもダブリンへと向かった。

## 2-2. エッジワースとトリニティ・コレッジ・ダブリン

エッジワースが学んだトリニティ・コレッジ・ダブリンは、1591年のエリザベス1世の勅命により、「一般教養の勉学、そして徳と宗教との教化のより良い助力となるであろう技芸と能力とを若者たちや学徒たちに教育、訓練、教示する」(MacDowell and Webb 2004, 3)という目的のために、創設された。The College of the Holy and Undivided Trinity near Dublin を正式名とする同コレッジは、1592年3月3日、3人のフェローと3人の奨学生とをもって開学され(*ibid.*, 3)、以後オックスフォードやケンブリッジにおける教育を手本として、多くの才人を輩出してきた。

祖父リチャード・ラヴェルが半年ほど、そして兄の一人、アントニオ・エローレスが1855年から1860年にかけて在籍したこともあるこの大学の入学試験を、16歳のエッジワース

<sup>10</sup> エッジワースは後年、統計学研究との関連で蜂にかんする論文を複数発表することになるが、これはエッジワースズタウンでのリチャード・レストックとのこの遊びに由来するものだろう。

は<sup>11</sup>、リチャード・レストックとともに、1861年7月1日に受験した(TCD MUN/V/23/6; TCD MUN/V/24/4)<sup>12</sup>。この当時、7月、10月、そして11月に実施された正規の入学試験の「志願者はラテン語および英語による作文、算術、代数学（四則演算と有理数）、イングランド史、現代地理、そしてみずからの選択に基づいて……いずれか二冊のギリシャ語文献および二冊のラテン語文献を使って試験を受け〔た〕」(*DUC 1863*, 26)<sup>13</sup>。

エッジワースはこの7月の受験者のなかで1番の成績を修め、同月6日には「フランシス・エッジワース」(Fras. Edgeworth)の名前で、自費生として入学を許可された(TCD MUN/V/23/6; TCD MUN/V/24/4; *DUC 1862*, 180)。これをロングフォード県の『ロングフォード・ジャーナル』(*Longford Journal*)紙は、同月27日の記事で次のように報じた。

「ダブリン大学において先日実施された入学試験には例年よりも多くの志願者(97名)が集まった。その首席をエッジワースズタウン・ハウスのフランシス・エッジワース君が獲得したとの報に、われわれは喜びを感じる」(*Longford Journal 1861*, 5)。さらに彼は、その年の入学者を対象として12月に実施された入学優等賞(Entrance Prize)のギリシャ語韻文詩試験(Greek Verse)、および同散文詩試験(Greek Prose)において、それぞれ一位を得た(*DUC 1862*, 153)。

<sup>11</sup> ケインズによって、エッジワースがトリニティ・コレッジ・ダブリンに入学した年齢を17歳と記述されてしまったため(Keynes 1926, 143; 1933, 254/訳 336)、1862年に同コレッジに入学したと誤解され、この誤情報はBowley(1934)、Kendall(1968)、Stigler(1978)、Hicks(1983)、Creedy(1986)、Newman(1987)、Mirowski(1994b)へと踏襲され続けた(Barbé 2010, 73-74)。

<sup>12</sup> リチャード・ラヴェルは16歳のときにトリニティ・コレッジ・ダブリンに入学したが、6ヶ月ほどでダブリンでの生活に嫌気がさし、17歳からはオックスフォードのコーパス・クリスティ・コレッジ(Corpus Christi College)で学んだ(Butler and Butler 1927, 129; Foster 1888, 408r)。アントニオ・エローレスは1860年に学士号(B.A.)を、リチャード・レストックは1864年に学士号(B.A.)を、1866年には医学士号(M.B.)を取得した(*DUCG*, 179)。リチャード・レストックの入学時期も、エッジワースの姉マライアの手記から、エッジワースと同時期の1861年に入学したことがわかる(MSS Edgeworth E3/7)。バルベもこのマライアの手記にしたがっている(Barbé 2010, 46)。

<sup>13</sup> トリニティ・コレッジ・ダブリンのマニユスクリプツ・デパートメントのアイスリング・ロックハート(Aisling Lockhart)氏からの情報によると、1861年の入学試験では、ギリシャ語文献として、ホメロス『イリアス』(1~3歌)、『新約聖書』(「ルカによる福音書」、「ヨハネによる福音書」、「使徒行伝」)、エウリピデス『ヘカベー』、ソポクレス『アンティゴネー』、プラトン『ソクラテスの弁明』、ルキアノス、『ウォーカー選集』、クセノフォン『アナバシス』(1~3巻)、ラテン語文献として、ウェルギリウス『アエネーイス』(1~4巻)、ホラティウス『歌章』、『風刺詩』および『書簡詩』、サルティウス、リウィウスの『ローマ建国史』4・5巻、テレンティウス『アンドロスの女』および『自虐者』が提示された。

このようにしてエッジワースが入学したトリニティ・コレッジ・ダブリンは、10月から12月までのミクルマス学期(Michaelmas Term)、1月から3月までのヒラリー学期(Hilary Term)、4月から6月までのトリニティ学期(Trinity Term)という3学期制を採用し、進級および学位取得のためには、学生たちは所定数以上の学期単位を得なければならなかった(DUC 1863, 29)。この学期単位を取得するにはふたつの方法があり、「科学および古典学の講義にそれぞれ出席すること」——ただし、これは全講義数の四分の三に勤勉に出席することを意味する——、もしくは、翌学期はじめに実施される「学期試験に合格する」こと、という条件のいずれかを満たせばよかった(ibid., 29)。

エッジワースは、トリニティ・コレッジ・ダブリン在籍中、ほとんど講義に出席することとはなかった。記録上残っているのは、1863年のトリニティ学期、ギリシャ語欽定講座教授(Regius Professor of Greek)のスタック(Thomas Stack)による「ギリシャ語」に2回出席(全14回)、1864年のヒラリー学期、同じくスタックによる「ギリシャ語」に17回出席(全20回)、およびエラズマス・スミス講座自然哲学および実験哲学教授(Erasmus Smith's Professor of Natural and Experimental Philosophy)のガルブレイス(Joseph Allen Galbraith)による「科学」に10回出席(全12回)、同年のミクルマス学期、スタックによる「ギリシャ語」に17回出席(全21回)のみである(TCD MUN/V/30/21-24)。したがって、彼は、ほとんどの学期単位を学期試験——これらの試験は、筆記試験と口頭試験(*viva voce*)から成る——によって取得したことになり、その成績記録から判断するに、ギリシャ語、ラテン語、幾何学、代数学にはじまり、力学、天文学、数理物理学といった分野についても勉強していた。とりわけ全体を通じて、彼のギリシャ語、ラテン語にかんする成績は——10点満点の評価においてほぼすべてが9ないし10と——きわめて優秀なものであり、いわゆる「古典」教養の水準の高さを証明している<sup>14</sup>。

エッジワースが「古典」にかんする才能の優秀さを示した証拠はこれだけにとどまらない。トリニティ・コレッジ・ダブリンでは、毎学期、学期試験で優秀な成績を修めた学生のみを対象とした「優等試験」(Examination for Honors)が実施され<sup>15</sup>、1862年のミクル

<sup>14</sup> 資料1および資料2(本稿173-78頁)を参照のこと。

<sup>15</sup> 優等試験の種類は学年によって異なる。1年生は「数学」と「古典」、2年生は「数学」、「古典」、および「論理学」、3年生は「数理物理学」、「実験物理学」、「史学および英文学」、そして「古典」、4年生は「数理物理学」、「実験物理学」、「倫理学」、「史学、政治学および英文学」、そして「古典」であった(DUC 1864, 41)。なお、トリニティ・コレッジ・ダブリンでは、1年生をJunior Freshmen、2年生をSenior Freshmen、3年生をJunior

マス学期、1863年のミクルマス学期、1864年のヒラリー学期、トリニティ学期、ミクルマス学期と計5回の「古典」の優等試験において、彼はそれぞれ、1等（全受験者のなかで3番目）、1等（同1番目）、1等（同1番目）、1等（同3番目）1等（同3番目）の成績を修めた(*DUC 1863*, 144; *DUC 1864*, 152; *DUC 1865*, 146; 148; 151)。

さらに彼は、1863年のトリニティ学期、昇天祭後に古典奨学生(Classical Scholarships)の認定試験を受け<sup>16</sup>、全受験者中二番の成績で合格した(*DUC 1865*, 314)<sup>17</sup>。この試験は、「入学コースの古典〔入学試験時の古典リスト〕、そして3年生のトリニティ学期試験までの学部課程で扱うすべての古典」に加え、アイキネスの『クテシフォン弾劾』やタキトゥス、さらにはアリストテレス倫理学を試験範囲とした(*DUC 1863*, 14)。ケインズは、「生涯の終わりの頃には、彼は、あらゆる機会にあらゆる文脈において古典から自由に引用ができるという伝統に属する、ほんのわずかな生存者の一人であった」と回想しているが(Keynes 1933, 254/訳 337)、この訓練はすでにトリニティ・コレッジ・ダブリン在籍中からかなりの段階に到達していたといえよう。

「古典」以外にも優等試験に進んだ経験をもつエッジワースであるが、ここで注目しておきたいのは、1862年のトリニティ学期における「数学」優等試験で2等（全受験者のなかで9番目）の成績であることに加え、1865年のヒラリー学期における「倫理学」優等試験で1等（同4番目）の成績を修めていることである(*DUC 1866*, 158)。とりわけ、この「倫理学」優等試験は、バトラー主教の『説教集』やアリストテレスの『ニコマコス倫理学』などが試験範囲であり、この時期に多少なりともバトラーやアリストテレスにかんする知識を有しているという事実は、のちに彼がはじめて公表する論文が「マシュー・アーノルド氏によるバトラー主教の自愛論」(Mr. Matthew Arnold on Bishop Butler's Doctrine of Self-Love, 1876)であること、アリストテレスをのちの著作でしばしば引用し

---

Sophisters、4年生を Senior Sophisters と称した(*DUC 1863*, 29)。エッジワースの優等試験の成績については、資料2（本稿 177-78頁）を参照のこと。

<sup>16</sup> 「古典奨学生認定試験は昇天週間(Ascension week)の金曜日および土曜日、その翌週の月曜日および火曜日を使っておこなわれる。各日とも〔試験時間は〕午前9時から12時、そして午後2時から5時である」(*DUC 1863*, 53)。

<sup>17</sup> 古典奨学生のほか、科学奨学生(Scientific Scholarships)もあり、これら二つを総称して「奨学生」(Scholar)と呼んだ。ただし、奨学生は、イギリス国教徒（もしくはアイルランド国教徒）の学生が対象で、1855年からは非国教徒対象の奨学制度(Non-Foundation Scholar)もはじまった(MacDowell and Webb 2004, 214)。奨学生には、「食費無償、家賃割引、授業料割引、年間19ポンド9シリング3ペンスの俸給、ピロードの帽子とガウンを着用する権利が与えられた」(*ibid.*, 121)。

ていること、との関連で大変興味深い。

エッジワースはさらに、2年生から3年生へと進級する際に必要な1863年の「ミクルマス一般試験」(Michaelmas General Examination)において1等(全受験者のなかで1番目)の成績を得た(*DUC 1864*, 156)。そして、3年生以降、毎学期、優等試験でかならず「等」(Class)を得たものだけが受験できる「学士号優等試験」(Examination for Moderatorships)の受験資格こそ得られなかったものの<sup>18</sup>、1865年12月の「学士号一般試験」(General Examination for the Degree of B.A.)においても1等(1番目)を得ている(*DUC 1866*, 52)。この「学士号一般試験」をもってエッジワースは学士号(B.A.)を取得し、トリニティ・コレッジ・ダブリンを卒業した(*Catalogue of Graduates*, 175)。

ダブリンにおいて、優秀な成績を残したエッジワースは、多くの才人と交流する機会に恵まれた。たとえば、当時のトリニティ・コレッジ・ダブリンでは、「すべての学生は、入学時に、チューターであるジュニア・フェロー(Junior Fellow)のうちの一人から指導を受けなければならない」と定められており(*DUC 1863*, 54)、エッジワースは、今日ではイギリス歴史学派の経済学者の一人に数えられるイングラム(John Kells Ingram, 1823-1907)をチューターとした。イングラムは、同コレッジの卒業生で、当時はジュニア・フェローをほか、修辞学・英文学教授(Professor of Oratory and English Literature)を務めていた。このジュニア・フェローは、「学生の道徳的保護者としての責務を果たし、彼らにコレッジ当局からのあらゆる連絡を伝えるだけでなく、コレッジの課程を終えるために必要な指導をおこなった」(MacDowell and Webb 2004, 103)<sup>19</sup>。このため、イングラムはトリニティ・コレッジ・ダブリンにおいて、エッジワースと間近で接した人間の一人であったに違いない<sup>20</sup>。

イングラムは、イギリス歴史学派の経済学者として、経済学における演繹法批判で知られるが、エッジワースは次のように評価している。

<sup>18</sup> Moderator とはトリニティ・コレッジ・ダブリン独特の名称で、「現在でも『学士号優等試験』(honor examination for B.A.)の合格者のことを意味する」(MacDowell and Webb 2004, 214)。

<sup>19</sup> トリニティ・コレッジ・ダブリンにおけるフェローは、ジュニア・フェローとシニア・フェロー(Senior Fellow)とに区別されており、後者は、「理事長(Provost)とともに、平常評議会と認識されているコレッジの理事会」の運営にあたった(MacDowell and Webb 2004, 3)。

<sup>20</sup> のちにエッジワースはイングラムの他界に際し、『エコノミック・ジャーナル』誌に追悼文を寄稿し、「ほとんどすべてのミューズ(Muse)が才能豊かなイングラムのために涙しているだろう」とその死を惜しんだ(Edgeworth 1907, 299)。

「イングラムは純粋な推論の修練を楽しんだ。トリニティ・コレッジ・ダブリンの有力な長老たちの多く——グレーヴス(Graves)やサーモン(Salmon)やローワン・ハミルトン(Rowan Hamilton)——と同様に、彼は文学と高等数学というどこにおいてもほとんど融和しがたい研究とを結びつけた。サーモンは、その著書『高次曲線』(*Higher Plane Curves*)において、その数学分野にたいするイングラムの貢献を讃述した……。／さらに偉大なハミルトンは、刊行された書簡集に見られるように、みずからの数学的思索をイングラムに〔意見を求めて〕付託したものであった」(Edgeworth 1907, 299-300)。

このイングラムの同僚、サーモン(George Salmon, 1819-1904)やハミルトン(William Rowan Hamilton, 1805-65)といった数学者とは、エッジワースもつながりをもつ。サーモンは、エッジワースの兄たち、アントニオ・エローレスやリチャード・レストックのチューターであり(TCD MUN/V24/4)、とりわけ、後者との関係を考えれば、エッジワースがサーモンと直接接触した可能性もある。しかし、これは証拠がなく、推測の域をでない。

他方、ハミルトンとエッジワース家の関係は有名である。弱冠 18 歳にして光学理論についての論文を発表し(Lewis 2004b, 936l)、のちに四元数を発見するなど(*ibid.*, 936r)、ハミルトンは偉大な数学者であった。ハミルトンは、エッジワースの祖父リチャード・ラヴェルの発案により鉄の骨組みを用いて建てられた教会の尖塔を見学するため、1824年にエッジワースズタウンを訪れ、マライアをはじめエッジワース家の面々の知己となった(Hankins 1980, 35)。とりわけハミルトンは、エッジワースの父、フランシス・ボフォールと「美学の理論、科学と詩学との関係、そして『真実』と『美』との相対的領域」について議論する間柄であり(*ibid.*, 36)、ケンブリッジで数学を苦にしたフランシス・ボフォールを見かねたマライアが——実現こそしなかったものの——家庭教師を依頼した人物でもあった(*ibid.*, 100)。この二人の関係は生涯友好的なもので、フランシス・ボフォール他界後も、ハミルトンとエッジワース家との交流は続いた(Graves 1882-89, vol.2, 550-54; vol.3, 102-3)。

ヒックスは、「われわれは、彼〔ハミルトン〕がエッジワース一族と交流があったことを知っており、トリニティ〔・コレッジ・ダブリン〕にいた頃、エッジワースはハミルトンに紹介されているだろう」と推測しているが(Hicks 1983, 264)、これはハミルトンが数理論理学者ロビンソンに宛てた書簡(1864年12月6日付)が証明している。

「私たちみんながつい先日のフランシス・エッジワースの訪問を楽しみました——彼は会話のなかで『フランク』と呼ぶことを受け入れてくれました——私にとって二人目の『フランシス』は存在し得ないのです。ロビンソン夫人とストークス夫人によろしくお伝えください」(Graves 1882-89, vol.3, 168)<sup>21</sup>。

この翌年、ハミルトンは他界する。のちにエッジワースは『ハミルトン卿伝』(*Life of Sir William Rowan Hamilton, 1882-89*)への書評において、「ハミルトンを知っているものにとっては、オーブリー・ドゥ・ヴィア氏(Mr. Aubrey de Vere [1814-1902])がその友人との思い出を詠んだ詩がとりわけ適切であるように思われる。／汝の心は深く慕われ 永遠に若く(Thy heart's deep yearning and perpetual youth)／汝は礼儀正しく 汝は尊敬され そして汝は真実であった……(Thy courtesy, thy reverence, and thy truth...)」(Edgeworth 1889, 560)と述べたが、この詩こそ、「アイルランドのラグランジュであるだけでなく……アイルランドのパスカルおよびデカルト」(*ibid.*, 558)でもあったハミルトンとのみずからの思い出を代弁するものであろう。

トリニティ・コレッジ・ダブリンにおいて、イングラムやハミルトンといった才人たちと触れ合う機会に恵まれ、また、古典や倫理学にかんするオックスブリッジ流の教養を身につけたエッジワースは、さらなる勉学のためにオックスフォード大学に向かったのである。

### 2-3. オックスフォード大学におけるエッジワース

4年5ヶ月のトリニティ・コレッジ・ダブリン在籍期間中、エッジワース家にはさまざまな変化があった。1863年に次兄ウィリアムが、1864年には伯父チャールズ・スニードと母ローサ・フロレンティーナが、そして1865年には祖母フランシスが永眠した。チャールズ・スニードには実子がいなかったため、エッジワース家の財産は——彼の遺言執行人だった叔父マイケル・パケナムが必ずしも納得しなかったため、その相続をめぐる訴訟に数年間を費やしたのち(MSS Edgeworth E3/9)——エッジワースの兄アントニオ・エローレスが相続した(Burke 1879, 502)。マイケル・パケナムの見立ては正しく、アントニオ・エローレスはパリなど各地でギャンブルに興じ、このためにエッジワース家の財政は傾き

<sup>21</sup> ハミルトンにとって唯一の「フランシス」は、彼の友人であり、エッジワースの父フランシス・ボフォール・エッジワースである。

22、1870年代にはケインズがそう表現したように、まさに「斜陽階級」となってしまった (Keynes 1933, 255/訳 337)。

エッジワース家の財政状況が徐々に悪化しはじめていく最中、エッジワースは「ヒバーニアン奨学生」(Hibernian Scholar)という奨学金制度によってオックスフォードに行くことが可能となった(Barbé 2010, 55; Kendall 1968, 269)。Barbé(2010)、Kendall(1968)ともに、この奨学制度について明らかにしていないため、その詳細はわからないが、エッジワースがオックスフォードの記録に登場するのは、1867年1月27日のことであり、この日、彼はエクセター・コレッジ(Exeter College)に入学した(Foster 1888, 408r; Ivo Elliott 1934, 53)。

当時のオックスフォードは、トリニティ・コレッジ・ダブリンとは違って、10月中旬から12月中旬までのミクルマス学期(Michaelmas Term)、1月中旬から棕櫚の聖日(Palm Sunday)までのヒラリー(ないしは、レント)学期(Hilary (or Lent) Term)、復活祭後の水曜日から聖霊降臨日(Whit Sunday)前の金曜日までのイースター学期(Easter Term)、そして聖霊降臨日の前日から7月上旬までのトリニティ(ないしは、アクト)学期(Trinity (or Act) Term)という四学期制度を採っているので(*OUC 1867*, 98)<sup>23</sup>、エッジワースは1867年ヒラリー学期開始直後にエクセター・コレッジに入学したことになる。

エクセターに入って3ヶ月が過ぎた同年4月8日、エッジワースは文学士学位第一次試験(Responsions)を受験した<sup>24</sup>。同試験は、あらかじめ与えられたギリシャ古典およびラテン古典から各々が選択した著者の作品、算術、そしてエウクレイデス原論もしくは代数学

<sup>22</sup> アントニオ・エローレスは、1874年に裕福な未亡人フランソワーズ・デルシャール(Françoise Delcher)と結婚し、エッジワースズタウンに戻ったが、このときにエッジワースズタウン・ハウスの改装費用は妻が負担したという(MSS Edgeworth E3/9)。アントニオ・エローレスの浪費によるエッジワース家の没落ぶりは、エッジワース家の分家出身の天文学者ケネス・エセックス・エッジワースの自伝のなかでも回想されている(Edgeworth 1965, 12-13)。

<sup>23</sup> ミクルマス学期とヒラリー学期は各6週間、イースター学期とトリニティ学期は各3週間、もしくはこの二つの学期をあわせて48日間となるように設定しなければならなかった(*OUC 1867*, 98)。

<sup>24</sup> この当時のオックスフォードにおいて、文学士号(Bachelor of Arts)を取得するには——貴族の子息は8学期間と例外扱いされたが——12学期間の在籍期間と計3度の試験(文学士学位第一次試験、公式第一次試験(First Public Examination)、公式第二次試験(Second Public Examination))での合格が必要条件であり、公式第二次試験は人文学優等試験(Literæ Humaniores)、数学優等試験(Scientiæ Mathematicæ et Physicæ)、自然科学優等試験(Scientia Naturalis)、法学および近代史優等試験(Jurisprudentia et Historia Moderna)という四つの試験から一つを選択する形式であった(*OUC 1867*, 102-11)。

にかんする筆記試験および口頭試験が実施され(OUC 1867, 104)、エッジワースは、ソポクレスの『アンティゴネー』と『オイディプス王』、ホラティウスの『カルミナ』(1~3編)と『詩について』、そして代数学とを選択したとの記録が残されている(OUA UR3/1/3/1)<sup>25</sup>。

エッジワースがエクセターに在籍したのは1867年の短期間で<sup>26</sup>、その年のうちに彼はモードリン・ホール(Magdalen Hall)の奨学生となり<sup>27</sup>、さらにその翌1868年にはベリオル・コレッジ(Balliol College)へと移った。

ベリオルに移ったエッジワースをチューターとして迎えたのは、プラトン研究で著名な古典学者であり、1855年からオックスフォードのギリシャ語欽定教授(Regius Professor of Greek)を務めるジョウエット(Benjamin Jowett, 1817-93)であった。ベリオルを「オックスブリッジのもっとも傑出したコレッジの一つ」で、「優秀な卒業生をあらゆる分野に繰り出し、学位試験では毎年大量の最優等生を出し……学問的にもすぐれた業績を残し、卒業生からは立派な政治家、植民地総督、学者、法律家、文学者を輩出し、まさに歴史に残る名門コレッジ」としたのは、このコレッジのフェロー(1838-70)、そして学寮長(1870-93)であった「ジョウエットの功績」である(Annan 1999, 61/訳 61-62)。

ジョウエットは、1850年代には哲学者グリーン(Thomas Hill Green, 1836-82)、1860年代にはホメロスの優れた翻訳家ラング(Andrew Lang, 1844-1912)、法学者アンソン(William Anson, 1843-1914)、詩人マイヤーズ(Ernest James Myers, 1844-1921)、哲学者ネットルシップ(Richard Nettleship, 1846-92)、そしてのちにエッジワースにも影響を与えたバラット(Alfred Barratt, 1844-1881)、さらに1870年代にはトインビー(Arnold Toynbee, 1852-82)など、多くの優秀な「ベリオル・メン」を育てた。ジョウエットは、その「チューターとして有能さ、学生にたいする個人的な心配や彼らにたいする親切さについて疑う余地はない」(Hincheliff and Prest 2004, 757r)と評価されているが、「ベリオル・

<sup>25</sup> OUA UR3/1/3/1には、Die VIII Aprilis/Edgeworth, Ysidro Fr. e coll. Exon. Soph. Ant. O.R. Hor. Carm. i-iii. A. P. Alg. と記録が残っている。この意味の解読には、ボドリアン図書館(Bodleian Library)のニコラス・スミス(Nicholas Smith)氏の協力を仰いだ。

<sup>26</sup> ケンダル(Kendall)やクリーディーによれば、エクセター在籍期間はわずか1学期間とされるが(Kendall 1968, 269; Creedy 1986, 9)、Foster(1888)やIvo Elliott(1934)からその詳細は特定できない(Foster 1888, 408r; Ivo Elliott 1934, 53)。

<sup>27</sup> モードリン・ホールは1874年にハート・ホール(Hart Hall)と合併し、現在はハートフォード・コレッジ(Hertford College)となっている。なお、同コレッジのアーキビスト、トビー・バーナード(Toby Barnard)博士に2006年に問い合わせたところによれば、当時のエッジワースにかんする記録は現存しない。

メン」の一人であるエッジワースとの関係も——ナッフィード・コレッジに現存する書簡から伺うに——そのとおりであり、ケインズによれば、エッジワースは「ジョウエットの気に入り」であった(Keynes 1933, 255/訳 338)。

「親愛なるエッジワース君／素敵に数々の書籍をご恵贈くださり、御礼申し上げます。とても素敵に贈りものでした。私はそれらの大半に目を通しました。私は貴君の親族関係のほとんどをすでに理解しています。そのような家系の一員であること、とりわけマライア・エッジワースとの血のつながりは大きな荣誉であると私は思います。／本当に。／敬具 B.ジョウエット／ベリオル／4月22日 [1868? ]」(MSS Edgeworth D2/4)。

「パルヤード・コテージ(Palleyard Cottage) /\*\*\*\* /8月15日 [1868?] /親愛なるエッジワース君／日曜日の7時30分から私たちと食事をしませんか。6時に来ていただいて、それから始めましょう。／敬具 B. ジョウエット」(MSS Edgeworth D2/2)<sup>28</sup>。

さらに、ケインズは、のちのエッジワースの経済学への関心に大きく影響した人物がジェヴォンズであるとしながらも、「[エッジワース] がはじめて経済学にたいする刺激を受けたのは、かねてこの学科に大きな興味を持ち、ほぼその頃に時折これを教えていたジョウエットからであったかもしれない」(*ibid.*, 255/訳 338)と、ジョウエットの影響の可能性にも言及している<sup>29</sup>。ただし、残念ながら、これらを確認する証拠はない。

このジョウエットの弟子グリーンも、当時、ベリオルのフェローの一人であった。直接のチューターではなかったものの、のちにエッジワースのために書いた2通の推薦状——ベッドフォード・コレッジ(Bedford College)のギリシャ語教授職公募(1875年)、およびユニヴァーシティ・コレッジ・リヴァプール(University College, Liverpool)の論理学、精神・道徳哲学、および経済学教授職(Professorship of Logic, Mental and Moral Philosophy

<sup>28</sup> \*\*\*\*部分には、おそらく、地名が記載されているものと推測されるが、筆者には判読不可能である。

<sup>29</sup> マーシャルも、「彼は現代の経済学者を沸き立たせているたいていの問題に関与したが、彼自身の師はプラトンとリカードウであった」(Marshall 1893, 745; Keynes 1933, 179/訳 239)と、ジョウエットの経済学への関心の大きさを回想している。

and Political Economy)公募(1880年)——から判断するに、グリーンはベリオル在籍中のエッジワースと交流があったものと思われる。グリーンは、これらの推薦状において、「エッジワース君のベリオル在籍時から、私は彼のことをよく知っていました」(MSS Edgeworth D5/10; D7/9)と書き出している。両者が少なくともベリオル・コレッジで接触する機会があったことは、両者がともに写っている写真が証明している<sup>30</sup>。



しかしながら、1章で述べたようにエッジワースが契約の仲裁行為問題にかんして功利主義の役割に関心を寄せたのにたいし、グリーンは行為の決定要因を、「功利主義哲学が論じるような快・苦の感情や自然的欲望ではなく、自己意識的主体の自我満足の念」(野村1982, 32)に求めた。つまり、グリーンは功利主義を批判しており、ベリオル・コレッジ時代からの顔見知りとはいえ、両者の関心や思想はまったく違う方向性のものであった。

エッジワースはこのベリオル・コレッジ移籍後、2学期間学業に励んだのち、その後の5s学期を休学したという(Creedy1986, 9)。エッジワースは1869年のミクルマス学期に復帰して、公式第二次試験として人文学優等試験を受験し、この年度のトリニティ学期に

<sup>30</sup> PHOT18-10a, Balliol College, Oxford 所蔵。写真は1869年5月に撮影されたものであるが、最前列の最右、あぐらを組んで地面に直接座っている人物がエッジワースであり、写真左側の街灯にやや隠れ気味で椅子に座っている人物がグリーンである(PHOT18-10key)。なお、写真掲載については、ベリオル・コレッジのアーカイブス(Balliol College, Oxford, Archives)より許可をいただいている。

1等の成績として認定された(*The Historical Register of the University of Oxford* 1900, 295)。上述したように、公式第二次試験を受ける前に、公式第一次試験の合格が必要であり——この試験についてのエッジワースの記録は発見できていない——、また在籍学期数も規定に達していないように思える。しかしながら、のちに彼がオックスフォードのドラモンド講座経済学教授職に応募した際、その自薦文において、「トリニティ・コレッジ・ダブリンにいくつかの学期間、在籍していたので、これらをオックスフォードで在籍したものと勘定に入れることが認められました」(MSS Edgeworth D10/1/1)と述べていることから判断して、少なくとも在籍学期数については問題がなかったようである。

同試験は筆記と口頭試験からなっており、人文学優等試験の受験者は、神学とギリシャ古典およびラテン古典の知識を問われた(*OUC 1867*, 108)<sup>31</sup>。この口頭試験において、ケインズが言及したことによって有名となったエピソードをエッジワースは残した。

「オックスフォードには、人文学優等試験(Final Schools)における彼の『口頭試験』についての言い伝えがある。ある難解な問題を尋ねられて、彼は『簡単に答えましょうか、それとも詳しく答えましょうか』と聞いてから、半時間にわたって、2等になるはずであったものを1等に変えさせたほどの話し方でしゃべったということである」(Keynes 1933, 254-55/訳 337)。

このエピソードは、エッジワースがすでにトリニティ・コレッジ・ダブリンでギリシャ古典やラテン古典にかんして優秀な成績を修めていたことを考えれば、信憑性のある話であろう。なお、このときの試験では、記録によれば、四人の教員が試験官を務め、そのなかには古代史教授ローリンソン(George Rawlinson, 1812-1902)やリンカン・コレッジのテューターであったファウラー(Thomas Fowler, 1832-1904)が含まれている(*The Historical Register of the University of Oxford* 1900, 295)。このうち、ファウラーはのち

<sup>31</sup> 神学の試験内容には、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四つの福音書、および使徒言行録(以上、ギリシャ語で)、新約および旧約聖書に含まれる歴史書、そしてイギリス国教会の39箇条が含まれた。ギリシャ古典およびラテン古典については、文学士学位第一次試験の際に選択した以外の著者の文献を選ばねばならず——哲学者から1冊、歴史家から1冊という条件のもとで——、その選択肢として、前者については、プラトン『ゴルギアス』、『プロタゴラス』、ヘロドトス『歴史』、プラトン『国家』、アリストテレス『ニコマコス倫理学』、後者については、タキトゥス『年代記』、同『同時代史』、キケロ『義務について』、リウィウス『ローマ建国史』などが挙げられた(*OUC 1867*, 108)。

にエッジワースが大学教授職に応募した際に推薦状を寄せた人物の一人となる<sup>32</sup>。

ここまでエッジワースのオックスフォードでの動向について論じてきた。その成績から判断するに、学業の面ではエッジワースは順調であったように思える。しかし、このオックスフォード在学中、エッジワースはナポリにいた最愛の兄を亡くし、相当な落胆と喪失感が彼を襲った (Barbé 2010, 58)。事実、ジョウエットは次のような書簡 (1869年5月14日付) をエッジワースに送っているのである。

「親愛なるエッジワース君／貴君に起こった不幸を聞きおよび、大変気の毒に思っています。／私は、貴君が前に進むために力強さと勇気とを合わせたとしても、貴君の出発には疑念をいただいています。私は、試験官が貴君に許可を与えるとは期待できないと思っていますし、その期待ができて、今回がその事例だとしても、私は貴君のナポリ行を数週間遅らせるように強く説得します。／この種の試練は痛ましいことです。私は、これらの事柄が、私たち自身と神の手に私たちが委ねた人びととを尊敬するようにさせるのだと思うのです。私を信用なさい。敬具 B.ジョウエット」 (MSS Edgeworth D2/1)。

ジョウエットの書簡から判断するに、エッジワースの人文学優等試験受験に少なからず影響を及ぼしたことは間違いないだろう。この2年後の1871年にも、エッジワースは、兄の一人であるデヴィッド・リードを亡くした。ただ皮肉なことに、これら兄たちの他界によって、エッジワースは祖母フランシスの遺産の唯一の相続人となり、彼の経済状況は上向いたという (Barbé 2010, 66)。

エッジワースが文学士号(B.A.)を取得したのは、記録上、人文学優等試験において1等の成績を修めてから4年後の1873年のミクルマス学期のことであった (*OUC 1874*, 192)。エッジワースは、さらに、1877年のイースターからトリニティ学期の間に——つまり、1878年に——、文学士号を取得しており大学入学から27学期を経ていれば取得できる文学修士号(M.A.)を得た (*OUC 1867*, 102; *OUC 1878*, 221; Foster 1888, 408r; Ivo Elliot 1934, 53)。そしてこの後、エッジワースは独学しながら、大学に安定した教員職を探し始めることとなる。

<sup>32</sup> これについては3章64頁を参照のこと。

## 2-4. エッジワースの古典教養水準

バルベは、人文学優等試験がオックスフォード時代のエッジワースにとっての「ベスト・パフォーマンス」であったと同時に(Barbé 2010, 58)、エッジワースが、のちに大学教員職への応募を試みた際、トリニティ・コレッジ・ダブリンの勉学よりもオックスフォードでの勉学の方が履歴上目立ち、それがゆえに前者がこれまでのエッジワース伝のなかで軽んじられてきた、と指摘する(*ibid.*, 51)。バルベの指摘する通り、また本章で触れてきたように、エッジワースの古典教養の土台はトリニティ・コレッジ・ダブリン時代、あるいはそれ以前からできあがっていたと考えてよいだろう。ケインズの叙述にしたがえば、「少年の頃エッジワースズタウンでは、彼はよく青鷲の巣に腰をかけ、高いところでホメロスを読んでいたと言われている」(Keynes 1933, 266/訳 351)のである。

1881年にエッジワースが『数理精神科学』を上梓したとき、その書評のなかでジェヴォンズは、「時折、確かに、エッジワース氏の著作のなかで、言葉を自由に使いこなし、相当に優雅で表現力豊かな文体で書かれた句や節にも遭遇する。しかし、ただちにまたわれわれは謎〔めいた文章〕のなかに入り込む。次の著作を準備される際には、エッジワース氏にはみずからの努力という犠牲を払ってでも、読者の努力を軽減するよう務めてもらいたいのだが、それは高望みというものであろうか」(Jevons 1881, 583)と述べた。ダブリンとオックスフォードでオックスブリッジ流の教養を身につけたエッジワースとは対照的に、「哀れなスタンレー！破産した商人の息子は、オックスブリッジ流の文学教育のたしなみを欠いていたために、〔この著書の読解に〕悩んだ」(Mirowski 1994b, 31)のは事実であろう。ただし、エッジワースの古典にかんする能力はダブリンやオックスフォードの秀才たちのなかにおいても、とりわけ顕著なものであり、この点は——ジェヴォンズの古典教養の有無を問う前に——斟酌せねばならないだろう。

これまでみてきたように、エッジワースは家庭教師による教育を受けたのち、トリニティ・コレッジ・ダブリンにおいても、そして、オックスフォードにおいても、古典にかんする教養の高さを示した。ただし、この時点において、エッジワースが経済学や『数理精神科学』において使用した高等数学——微積分学——に触れた証拠は明確にはない。次章においては、1870年代から1880年代を通じて、倫理学からの派生という形で経済学に関心をもつきっかけとなる彼の友人との交流、そして経済学への関心を具現化するエッジワースの職歴を中心に扱うことにする。

## 第3章 エッジワースの交友関係と職歴——1870-80年代のエッジワース——

前章においては、ダブリンやオックスフォードでの大学生活を通じて、エッジワースが古典教養において優れた才能を発揮したことを示した。これと同時に、この時期の彼が、まだ経済学にたいする関心を明確には示しておらず、その教養についても未習得であることも明らかにした。彼がみずからの関心領域や活躍の場を経済学領域へと広げるのは、1870年代から1880年代のことである。

この時期のエッジワースは、サヴィル・クラブ(Savile Club)やアシニウム(Athenæum)といったジェントルメン・クラブへの入会によって交友を広げた。とりわけ、サヴィル・クラブで知り合った心理学者サリー(James Sully, 1842-1923)から広がった交流は、やがてエッジワースが経済学にも関心をもつ引き金となった。その結果として、それまでに「マシュー・アーノルド氏のバトラー司教の自愛論解釈」(1876)、『倫理学の新方法と旧方法』(1877)、「快樂主義的計算法」(1879)と倫理的著作を発表していたエッジワースは、みずからの研究手法として経済学的手法を取り込んだ——とはいえ、1章末尾で述べたように、シジウィックの倫理学を意識している——『数理精神科学』を上梓する。さらに彼は、1870年代から大学教員の職を求めてさまざまな大学の教員公募に応募していったが、1880年代以降はその主たる対象が経済学にかかわる講座となった。彼の経済学への関心の具現化は、これらの活動によっても見てとれる。

本章においては、主に1870年代から80年代までのエッジワースの動向や交友関係について触れながら、彼の対象領域が倫理学から経済学へと拡張されていった過程を、その経歴から考察していくこととする。

なお、本章は、その副次的な目的として、Barbé(2010)によって不正確に叙述されているエッジワースのキングズ・コレッジ・ロンドンにおける職歴を——バルベが参照していないキングズ・コレッジ・ロンドンのマニュスクリプツや『大学要覧』(*The Calendar of King's College, London*)に依拠して——正す役割を果たすだろう。

## 3-1. 独学するエッジワース——法律と数学——

バルベは、1869年の人文学優等試験で1等を取得した直後から、エッジワースが法律の勉強をはじめたと推測しており(Barbé 2010, 65)、その証拠として、エッジワースの姉メアリの知人であるロバート・ウィリアムズ(Robert Williams)からエッジワースに宛てら

れた書簡（日付無し）を挙げている。

「親愛なるエッジワース様／……ひと言助言いたします。コーパス〔・クリスティ・コレッジ〕に入りなさい。そしてエクセターには入らないことです。前者には入る価値があり、後者にその価値はありません。〔人文学優等試験での〕1等、おめでとうございます（あなたは絶対に1等獲得を確信していたでしょうが）……お姉さまによろしくお伝えください……。／敬具 ロバート・ウィリアムズ」(MSS Edgeworth D2/3/1)。

しかしながら、この書簡のかぎりでは、コーパス・クリスティ・コレッジやかつて在籍したこともあるエクセター・コレッジに再び戻る目的はもちろん、それが法律の勉強のためであるかどうかは明らかではない。ただし、彼が1870年代に法律の勉強に取り組んだことだけは明白な事実であろう。これは、1877年に四法曹院の一つ、イナー・テンプル法曹院(Inner Temple)にて、彼が法廷弁護士資格を取得したという事実によって証明することができる。もっとも彼は、その生涯において、弁護士として生計をたてることはなかった。彼が法廷弁護士資格を取得したのは、居住地域の治安判事を務めることもあった——彼の父フランシスもそうであったように——アングロ＝アイリッシュの地主一族の慣習にしたがっただけであろう(Barbé 2010, 85; Creedy 1986, 9)。しかし、彼は、この「職業的肩書きを手中にすることで、アカデミック・ルーレット(academic roulette)という危険な賭けを心配しなくて済むように」(Barbé 2010, 85)なったのである。

エッジワースは、のちにオックスフォードのドラモンド講座経済学教授職公募にたいする自薦状のなかで、この法律の勉強と同時に、数学の勉強に取り組んだとしている。

「オックスフォードを離れたのち、私は何年かにわたって数学を勉強しました……私は、1881年に出版した『数理精神科学』と題した著書のなかで、経済学に数学的着想を適用しようと試みました」(MSS Edgeworth D10/1/2)。

このことから判断すると、エッジワースはこの時期に、『倫理学の新方法と旧方法』や『数理精神科学』において用いることとなる微積分学などの高等数学を修得したと考えられる。

エッジワースが高等数学を大学で習得せずに独学した点は、さまざまな論者によって指

摘されている。たとえば、ボーリーは、「彼の数学的叙述は〔数学の〕体系的な訓練の欠如をあらわしている。彼は数学の原理にかんする素晴らしい眼識をもっていたものの、彼の問題の取り扱い方には簡易さや整然さが欠如している」(Bowley 1934, 114)と評価し、またサミュエルソンも、彼を「〔数学を〕独学した法廷弁護士」(Samuelson 1974, 1279 fn1)と呼んでいる。さらにクリーディーは、エッジワースが『数理精神科学』においてみずからの数式を指して、「このようにさまざまな数式表現の可能なひとつの理論は、間違いなく、本職の数学者(professed mathematician)ならば、より簡潔に、そして科学的に示すことができるだろう」(Edgeworth 1881, 24)と述べていることも、彼が高等数学を独学した根拠として挙げている (Creedy 1983, 158)。

このエッジワースの高等数学訓練への影響について、クリーディーは、トリニティ・コレッジ・ダブリンでの影響、家族の影響、そしてその他の影響という三点から考察している(Creedy 1983)。このなかでクリーディーは、トリニティ・コレッジ・ダブリンにおいてエッジワースが高等数学を訓練した明確な記録がないと述べているが(*ibid.*, 159)、これは前章において明らかにしたとおりである——トリニティ・コレッジ・ダブリン時代のエッジワースは代数レベルの数学までの勉強に留まっている。

二点目の家族の影響にかんしては、クリーディーは、数学者ハミルトン、数理物理学者ロビンソン、および物理学者ストークス(George Gabriel Stokes, 1819-1903)の存在に言及している(*ibid.*, 159)。ハミルトンとエッジワース家の関係は、前章において、すでに取り上げたとおりである。そしてまた、晩年のハミルトンがエッジワースと面会したことを伝える書簡の受取人がロビンソンであった<sup>1</sup>。

ロビンソンは、1814年から1823年にかけてトリニティ・コレッジ・ダブリンのフェローを務めたのち、アーマー天文台(Armagh observatory)の天文台長(astronomer)に任命された学者である(Bennett 2004, 418l)。1839年に最初の妻と死別した彼は、1843年にエッジワースの伯母ルーシー・ジェーンと再婚して以降、「エッジワースズタウンを頻繁に訪れる客人」(Creedy 1983, 159)となり、エッジワース家との関わりが深い人物でもあった<sup>2</sup>。

このロビンソンと前妻の娘メアリ・スザンナ(Mary Susanna)はストークスの妻となる(Bennett 2004, 419r; Wilson 2004, 862l)。クリーディーは、このストークスの文献をエッ

<sup>1</sup> 本稿 42-43 頁を参照のこと。

<sup>2</sup> マライア・エッジワースも「天文台を訪れることを楽しみにしており、ロビンソンに強い印象を与えた」(Bennett 2004, 419r)。

ジワースが『数理精神科学』において参照しているものの (Edgeworth 1881, 5)、同時に、「エッジワースとストークスとの間の何らかの関係の広がりについて、直接的な証拠はないように思われる」(Creedy 1983, 159)と述べている。しかしながら、実際には、ストークスはエッジワースに宛てて、現在オックスフォードのナッフイード・コレッジに所蔵されている以下の書簡(1878年4月3日付)を送っている。

「親愛なるエッジワース様／あなたが親切にも送ってくださった御著書『倫理学の新方法と旧方法』への礼状を早く書くべきでした。／私は今のところ、その本を拾い読みしたのみです。倫理学という領域のなかで数学と出会うことは予想外です。この本は細心の注意が求められると私は思います。ちょうど今私は仕事で手一杯ですので、休暇が来るまでこの本を読むことを延期せねばならないのではないかと懸念しております。／私たちはあなたのお姉さまの再訪に喜びました。それはまさにかつてお姉さまがエッジワースのお嬢さん(Miss. Edgeworth)であった頃、つまり私が思い起こすに、大胆にもあえて、メアリ・エッジワース(Mary Edgeworth)とお呼びしていた昔のことのような出来事でした……。／敬具／G.G.ストークス」(MSS Edgeworth D1/7)。

メアリ・エッジワース、つまりエッジワースの姉マライアは1871年に結婚していることから(Burke 1879, 502)、この書簡こそ、クリーディーの推測に反して、1871年以前からその交流があったことを示す証拠であることは間違いない。ただし、ロビンソンやストークスらとの間のこれらの家族交流や書簡の存在も、エッジワースの高等数学訓練について何も直接的な示唆を与えることはない。

エッジワースの高等数学訓練について、クリーディーが重要視しているのは、第三の観点、すなわち、その他の影響である。その手がかりを心理学者ジェームズ・サリーに求めるクリーディーは(Creedy 1983, 159)、このサリーを介してエッジワースが同い年のクリフォード(William Kingston Clifford, 1845-79)と知り合った可能性を指摘している(*ibid.*, 160)<sup>3</sup>。クリフォードは、1871年にユニヴァーシティ・コレッジ・ロンドン(University College, London)の応用数学教授となった数学者であり(Lewis 2004a, 122r)、主に幾何学

<sup>3</sup> クリーディーの指摘にあるように、エッジワースは『倫理学の新方法と旧方法』において、計三度、クリフォードについて言及している(Creedy 1983, 160; Edgeworth 1877, 13, 25, 87)。

研究の分野で業績を残し、エッジワース家と縁の深かった数学者ハミルトンの四元数研究を発展させた人物である(*ibid.*, 1231)。しかし、このクリフォードとエッジワースとの間の関係についても直接的な証拠は何も見つかっておらず、結局のところ、クリーディーの指摘は、あくまで可能性の域を出ることはない。

クリーディー同様、エッジワースの教養にたいするサリーの影響力の大きさに注目する点はバルベも同様であり(Barbé 2010, 79-81)、この二人の研究者が指摘するように、1870年代のエッジワースにとって、明らかにサリーの存在は非常に大きなものであった。というのも、エッジワースが1877年に上梓した最初の著作『倫理学の新方法と旧方法』の冒頭には、サリーへの謝辞が掲げられているからである<sup>4</sup>。このサリーとエッジワースとの関係については、次節で触れることとする。

### 3-2. エッジワースとサリー、ジェヴォンズ——交友関係の広がり——

サリーは、エッジワースの三歳年長で、1871年から72年にかけての冬に留学したベルリンにて、ヘルムホルツ(Hermann Ludwig Ferdinand von Helmholtz, 1821-94)やボアレーモン(Emil Du Bois-Reymond, 1818-96)に師事して、生理学を学んだ。また彼は、「心理学が正式な学問分野として浮上することに相当な意義をもった」(Richards 2004, 314r) 『マインド』誌の創刊と編集とに関わったアバディーン大学(University of Aberdeen)の論理学教授を務めたベイン(Alexander Bain, 1818-1903)の強い影響下にあった。このサリーが文学者や科学者たちとの交流を拓ける役割を果たしたのは、ロンドンのジェントルメンズ・クラブの一つ、サヴィル・クラブへの入会(1875年)である(Gurjeva 2004, 3161; Savile Club 1923, 120)。サリーは、自叙伝『私の生涯と友人たち——ある心理学者の追憶——』(*My Life and Friends: A Psychologist's Memories*, 1918)のなかで、次のように回想している。

「サヴィル・クラブは私の文学仲間や科学仲間を増やす助けとなった。私が思うに、ここで、まずロンドンの哲学研究者たちの優しき指導者シャドワース・ホジソン(Shadworth Hodgson)と知り合った。そして、才気縦横の若き数学者で思索家であっ

<sup>4</sup> 「私は、本書校正の校閲と修正とをしてくださり、そして多くの示唆を与えてくださった友人、『感覚と直覚』(“Sensation and Intuition”)、『悲観論』(“Pessimism”)などの著者でもある、ジェームズ・サリー氏に謝意を表します」(Edgeworth 1877, ii)。

たクリフォード(W.K. Clifford)、その多面的な知性ゆえに〔文学仲間や科学仲間という〕二つの分類の〔うちのどちらか〕一方に入れることはできない、エッジワース(F.Y. Edgeworth)に紹介されたのも、同社交クラブでのことであった」(Sully 1918, 164)。

サヴィル・クラブは1868年に創設され<sup>5</sup>、その創設時の会員には、エッジワースのダブリン時代以来の友人グレーヴス(Alfred Perceval Graves, 1846-1931)、オックスフォードでの人文学優等試験の試験官の一人であるファウラー、『数理精神科学』をはじめとしてエッジワースに多くの影響を与えたシジウィックらが名前を連ねている(Savile Club 1923, 2)。さらに、グリーンも創設直後に会員になるなど(*ibid.*, 6)、エッジワースの知己が多く所属していたこのクラブに、エッジワースはサリーよりも4年ほど早い1871年に入会した(*ibid.*, 110)<sup>6</sup>。当時の会則によれば、入会希望者は一人の会員の推挙と、一人以上の会員による支持がなければならなかったが(Savile Club 1874, 5)<sup>7</sup>、この点にかんして、学生時代の知己が多く既存会員であったエッジワースにとって障壁はなかっただろう<sup>8</sup>。

エッジワースはまた、1824年に創設され——したがって、サヴィル・クラブよりも古い歴史をもつ——「科学、文学、芸術、あるいは公職において、卓越した地位にある一定数の人びと」(Ward 1926, 115)で構成、維持されるジェントルメンズ・クラブであるアシニアムの会員でもあった(Barbé 2010, 88)<sup>9</sup>。たとえば、ナフィード・コレッジ図書館に所蔵

<sup>5</sup> サヴィル・クラブ創設は、「エレクトリック・クラブ」(Electric Club)と呼ばれていたクラブ内での意見相違に基づく分裂に端を発し、「1. あらゆる取り決めについての完全な簡素化、2. さまざまな職業や意見の男性の混合、そして入会にかんする慎重な手続き、3. 週一、二回の夕方の会合」(Savile Club 1923, 1)という原理のもとに、「外国の新聞や最良の地図とを豊富に取り揃えた」(*ibid.*, 1)新しいクラブ、「ニュー・クラブ」(New Club)として1868年に創設された。このクラブは、1871年にその所在地をサイヴィル・ロー15番地(15 Savile Row)に移したことにより、「サヴィル・クラブ」となった。

<sup>6</sup> バルベは、グレーヴスがエッジワースの紹介者であると推測している(Barbé 2010, 77)。

<sup>7</sup> さらにこの希望者は、運営委員会で審査され、委員6人以上の出席のもと、全会一致でなければ入会を承認されなかった(Savile Club 1874, 6)。ただし、普通会员の上限は500名に設定された。

<sup>8</sup> エッジワースが入会した翌1872年には、エッジワースが推挙人となり、兄アントニオ・エローレスもサヴィル・クラブに入会している(Savile Club 1923, 113; Creedy 1986, 13)。

<sup>9</sup> 『アシニアム史 1824-1925年』(*History of the Athenæum 1824-1925*)の「略伝」(Biographical Sketches)のなかには、エッジワースの名前は記されていない(Ward 1926, 117-353)。サリーもまた、その会員の一人であったが(Barbé 2010, 88)、『アシニアム史』においては、エッジワース同様、サリーの入会年も不明である。アシニアムの会員のなかにはエッジワースと縁ある人物が多く、優生学者ゴルトン、数学者ストークス、哲学者スティーブン(Leslie Stephen, 1832-1904)、経済学者ジェヴォンズ、トリニティ・コレッ

されるエッジワースの書簡のなかには、このアシニアムの便箋を使用したものがあり(MSS Edgeworth D1/13; D1/14)、のちのドラモンド講座経済学教授職への応募書類も、1890年12月にアシニアムにて書き上げられたものである(MSS Edgeworth D10/1/6)。また、1891年4月23日付でエッジワースから彼の友人グレーヴスに宛てられた書簡には<sup>10</sup>、「私が会員となっているアシニアムであなたといつかお会いしたく思います」(TCD 10047/47/163)とあり、彼は間違いなくアシニアムの会員であった。

エッジワースとサリーは、サリーの回想に基づけば、サリーがサヴィル・クラブに入会した1875年以降に知り合い、公私にわたって深い交流をもった。

1876年1月、「心理学と哲学とに捧げられるはじめての英文雑誌(English journal)」(Robertson 1876, 1)である『マインド』誌が創刊されると、エッジワースは「覚え書き」(Notes)として「マシュー・アーノルド氏のバトラー司教の自愛論解釈」を<sup>11</sup>、またサリーも二本の論文、一本の論評、二本の覚え書きを寄稿している。このなかでエッジワースとの関連で注目すべきは、「ドイツにおける生理学的心理学」(Physiological Psychology in Germany)と題された論文である。このサリーによる論文は、ドイツ実験心理学の礎石を据えたヴント(Wilhelm Max Wundt, 1832-1920)の『生理学的心理学要綱』(*Grundzüge der physilogischen Psychologie*, 1873-74)を「ドイツにおける新しい研究分野の境界線を規定した」(Sully 1876, 20)著作と評価し、さらに、この重要性を理解するためにドイツにおける心理学的研究の潮流についても紹介している<sup>12</sup>。

翌1877年、エッジワースは『倫理学の新方法と旧方法』を上梓した際、その冒頭において、サリーへの謝辞を掲載したことはすでに触れた。同書は、シジウィックとバラットという二人の哲学者の間の倫理学の手法をめぐる論争、そして、「精密功利主義」(Exact Utilitarianism)の数学的含意について扱った著作である(Barbé 2010, 82-83; Newman

ジ・ダブリンの教員マハフィー(John Pentland Mahaffy, 1839-1919)らも所属していた(Ward 1926, 164; 167; 256; 264; 272)。

<sup>10</sup> この書簡には年が書かれてらず、「1891年」についてはトリニティ・コレッジ・ダブリンの推測である。

<sup>11</sup> この覚え書きにおいて、エッジワースは、アーノルドがバトラーの「自愛」(self-love)の定義に潜む矛盾を取り上げたことに注目し、「バトラーの説にはどこか奇妙な難解さがあるに違いない」(Edgeworth 1876, 571)と結論づけている。ここで重要なことは、この時期における彼の関心が倫理学にあるという点である。

<sup>12</sup> 1877年にサリーが『悲観論』を上梓した際、ヴントから好意的な評価が寄せられた(Sully 1918, 168)。

1987 xxviii)<sup>13</sup>。この著作において、エッジワースは、功利主義における快樂最大化問題を扱うなかで、フェヒナー(Gustav Theodor Fechner, 1801-87)、ヴント、ヘルムホルツ、デルブーフ(Joseph Delbœuf, 1831-96)らの考え——「フェヒナーの法則」(Fechner's Law)——を取り入れ、ラグランジュ未定乗数法から快樂最大化条件を導出した(Edgeworth 1877, 40-79)。このうち、ヘルムホルツはサリーが師事した人物であり、ヴントの研究についてもサリーが1876年論文で紹介している。さらに、サリーは、フェヒナーの研究をイギリスに紹介することにおいて、大きな役割を果たした<sup>14</sup>。このようにドイツの心理学の紹介者であるサリーを通じて、エッジワースが「フェヒナーの法則」を理解したと考えることは十分に可能であろう<sup>15</sup>。

エッジワースは1870年代はじめからハムステッドのマウント・ヴァーノン 5番地(5 Mount Vernon)を居としていたが、このエッジワースに引き寄せられるようにして、サリーもハムステッドに移り住んだ。

「私には、独身の友(bachelor chum)と呼ぶ<sup>16</sup>、親密で長い付き合いとなった友人がいた。私をハムステッドに誘致したのは彼で、これは、私が思うに、ノーザン・ハイツ(Northern Heights)の健康さについて彼が賞賛したことと、彼を隣人にもつことができるという期待があったためでもあった。私は、彼の住居からほんの少しの距離にある小さな家(cottage)を自宅にすることによって、彼の親身な提案に応じた。私たちはほぼ毎日会い、あるときは朝食後の短めの散歩、またあるときは長めの徒歩旅行(tramps)で、これにはスタンレー・ジェヴォンズも加わったし、あるときはヘンドン

<sup>13</sup> シジウィック＝バラット論争、およびエッジワースの「精密功利主義」の内容については、次章において取り扱う。

<sup>14</sup> 1876年の『マインド』誌に掲載されたワード(James Ward, 1843-1925)の論文、「フェヒナーの法則解説の一試論」(An Attempt to Interpret Fechner's Law)は、その冒頭において次のように述べている。「フェヒナーの『生理学的』諸研究は、今や、この国においてもよく知られている——その大部分がサリー氏の『感情と直覚』のおかげである——」(Ward 1876, 452)。

<sup>15</sup> 『倫理学の新方法と旧方法』の内容については、次章にて取り上げることにするが、この著作における複数の箇所、エッジワースはその内容をサリーの示唆に負っていることを明らかにしている。たとえば、Edgeworth(1877, 14fn; 16fn; 31; 33; 71; 73)。

<sup>16</sup> この「独身の友」はエッジワースのことを指すと、Creedy (1986, 13)、Newman (1987, xxv)、Barbé (2010, 80)は述べている。

(Hendon)やエルストリー(Elstree)までスケート旅行に出かけた」(Sully 1918, 177)<sup>17</sup>。

このサリーの回想には、エッジワースとの関連において、二つの関心事が含まれる。その一つは徒歩旅行であり、もう一つはジェヴォンズとの交流である。

サリーは 1875 年頃からスティーブンと交流を持ちはじめ(*ibid.*, 296)、このスティーブンは、「1879 年の秋、サンデー・トランプス(Sunday Tramps)の構想を思いついた」(*ibid.*, 302)。サンデー・トランプスとは、スティーブンが招聘した会員たちで、学術的な議論——とりわけ哲学についての——を楽しみながら、20 から 25 マイルほどの徒歩遠足を楽しむ会であり、「この会の主たる会員は、創設者〔スティーブン〕の関係者や知人で構成された」(Whyte 2011)。『レズリー・スティーブン伝』(*The Life and Letters of Leslie Stephen*, 1906)を著したメイトランド(Frederic William Maitland, 1850-1906)は、次のように書き残している。

「スティーブンは、この会の記録をノートに書き留めた。彼に合流すると、それぞれの会員には番号が振られたので、この記録は簡素なものである。最初の徒歩遠足の記録を示すこととしよう。『2.11.79. H.P.G.S. 13 番地出発、ウィンブルドン(Wimbledon)、クーム・ウッド(Combe Wood)、リッチモンド(Richmond)を経て、ハマースミス(Hammersmith)へ。1、2、3、4、7』。これは、1879 年 11 月 2 日、スティーブン、ポロック(Pollock)、クルーム・ロバートソン、ジェームズ・コッター(James Cotter)、モリソン、ダグラス・フレッシュフィールド(Douglas Freshfield)の面々がスティーブンの自宅を出発し——大抵、集合場所はどこかの鉄道駅であった——、ここで示された経路をたどったことを意味している」(Maitland 1906, 359)。

メイトランドによる『レズリー・スティーブン伝』に収録されている「サンデー・トランプス」会員の名簿——スティーブンが残した記録から作成された——によれば、サリーの名前は 8 番目、エッジワースの名前は 13 番目に記されている(*ibid.*, 500)<sup>18</sup>。つまり、エッジワースもこの会の会員であり、『倫理学の科学』(*The Science of Ethics*, 1882)の執筆に

<sup>17</sup> サリーは 1878 年に、ジェヴォンズも 1876 年にハムステッドに移った(Gurjeva 2004, 314; Black 1977a, 184)。

<sup>18</sup> この名簿にしたがえば、1879 年から 1895 年にかけての活動期間において、同会の会員は 60 名にまで膨れ上がった(Maitland 1906, 500)。

取り組んでいたスティーブンの議論相手の一人であったろう。のちにエッジワースはスティーブンの『倫理学の科学』を『マインド』誌において書評することにもなる(Edgeworth 1882)。さらに、『倫理学の新方法と旧方法』において、エッジワースが言及したバラットがこの「サンデー・トランプス」の11番目の会員であることも興味深い事実である<sup>19</sup>。

次に、前述のサリーの回想における第二の関心事、つまりエッジワースとジェヴォンズとの交流に目を向けよう。ジェヴォンズは、1876年にマンチェスターのオウエンズ・コレッジ(Owens College)を離れ、母校であるユニヴァーシティ・コレッジ・ロンドンに経済学教授として戻ってきていた。そして、彼は、1876年10月にハムステッドのブランチ・ヒル2番地「ザ・チェスナッツ」(2 The Chestnuts, Branch Hill)と呼ばれる住居に移った<sup>20</sup>。ここはエッジワースの住居であるマウント・ヴァーノン5番地から徒歩で10分強の距離にある。

サリーによれば、「共通の関心事は彼〔ジェヴォンズ〕と私の友(chum)とを引き寄せ合い、このため、三人で何度も散歩を楽しんだり、スケート遠足に出かけたりした」(Sully 1918, 181)。サリーを介在してのこのようなエッジワースとジェヴォンズの交流がはじまったのは、1879年のことと推測される。同年7月、エッジワースは、『マインド』誌に「快樂主義的計算法」を発表した。すでに、エッジワースは、『倫理学の新方法と旧方法』において、快樂は快樂刺激について一階微分が正、そして二階微分が負とする関数式であらわすことができるとし(Edgeworth 1877, 42)、同論文においても、「快樂の増加率は、その財産が増加するにつれて、減少する」(Edgeworth 1879, 397; Edgeworth 1881, 61)ことを公準の一つとして考えたが、これはジェヴォンズの限界効用理論とその内容を同じくするものである。ただし、同論文においてジェヴォンズへの言及はなく、この論文が1881年に『数理精神科学』の第Ⅱ部後半「功利主義的計算法」として再録された際、エッジワースは、この公準にたいして、『経済学の理論』においてジェヴォンズ教授が提示したこの公準についての度重なる証明を参照せよ」(Edgeworth 1881, 61fn)との脚注を追加した。さらに、エッジワースの従妹ハリエット・ジェシー・バトラーが、「あなたの理論を高く評

<sup>19</sup> バラットは1881年5月に他界しているため(Barratt 1883, xxii)、「サンデー・トランプス」にはわずか2年ほどの在籍であったことになる。バラットの遺著『物理的超経験論』(*Physical Metempiric*, 1883)の序文は、バラットの妻による簡単なバラットについての伝記になっているが、ここにバラットのサンデー・トランプス在籍にかんする情報はない。

<sup>20</sup> 井上(1987)によれば、ジェヴォンズがこのハムステッドの家に移ったのは1876年10月11日のことである(井上 1987, 96)。なお、ジェヴォンズは1876年11月10日付の書簡をハムステッドの住所から送付している(Black 1877a, 184)。

価してくれ、その上に感じの良い仲間であるジェヴォンズさんというハムステッドの隣人に出会えたことは幸運でしたね」(MSS Edgeworth D2/8)とジェヴォンズについて触れる書簡を1879年12月27日付でエッジワースに送付している。これらの事実から、両者の交流開始時期は1879年7月から同年12月までという短い期間に限定することができる。

このジェヴォンズの『経済学の理論』、そして彼の推挙によって、マーシャルの著作——「外国貿易および国内価値の純粹理論」(Pure Theory of Foreign Trade and Domestic Values, 1879)や『産業経済学』(*Economics of Industry*, 1879)——にも触れ、エッジワースは経済学——限界効用理論——にも関心を広げることとなった(Edgeworth 1925a, 66)。このエッジワースとジェヴォンズとの交流は、ジェヴォンズが1882年にヘイスティング近くの海で溺れて他界してしまったため、3年にも満たないもので終わる<sup>21</sup>。しかしながら、人間の満足にかんする研究として、「限界効用理論に立脚した経済学的アプローチ」(福岡 1999, 189)という新しい説明道具をエッジワースに提供したジェヴォンズの功績は大きなものと言えよう。

### 3-3. エッジワースの就職活動——経済学教授職への応募——

前節でみてきたように、1870年代にエッジワースは、サヴィル・クラブなどのジェントルメンズ・クラブに出入りし、そこで知り合ったサリーから発展したジェヴォンズとの交流によって、経済学にも関心を広げることとなった。ケインズは、この時期のエッジワースの経済状況について、「アイルランドの斜陽階級の末息子のそのまた一番末の息子として、ロンドンに置いて急迫した財政状態のもとに幾年かを過ごした」(Keynes 1933, 255/訳337)と述べているが、以下ではエッジワースの職歴について触れたい。というのも、彼の職歴もまた、彼自身の関心の変遷を物語っているからである。

<sup>21</sup> ジェヴォンズの他界に際して、エッジワースはジェヴォンズの妻に以下の書簡を送っている。「マウント・ヴァーノン5番地／ハムステッド／8月16日／親愛なるジェヴォンズ夫人／私は崇拜する友人を失ったことに深い哀惜の念を抑えることができません。私は始終、感謝の意をもって、その研究において、同じ方向性ではあったけれども、測ることのできないほどに後塵を拝している人間に彼が施してくれた親切な激励や独特の知的同感を思い出します。その哲学的な笑顔で魅了し、その言葉を吸収させてくれた氷上やヒースで、もう二度とジェヴォンズさんにお会いできないと理解することは難しいことです。私は、彼の澄んだ、そして高尚な知性の影響のもとにあったことを、人生のなかの名誉の一つといつでも考えることでしょう。／心よりあなたとあなたの取り戻すことのできない喪失とに遺憾の意をあらわします。／敬具／F.Y. エッジワース」(Black 1977b, 201-02)。

1875年、エッジワースはベッドフォード・コレッジのギリシャ語教授職に応募した<sup>22</sup>。このとき、エッジワースのために推薦状を書いた一人、スコーンズは、「F.Y.エッジワース君はここで私のインド高等文官(India Civil Service)を目指す生徒たちと古典学(Classical work)に従事しました」(MSS Edgeworth D5/7)と書いている。また、別の推薦人であるレンも、同時期のエッジワースについて、「F.Y.エッジワース君は、二年間にわたり、『道徳科学』——論理学、精神および道徳哲学、そして形而上学——を私の生徒に教えていたことを証明いたします。これらの生徒はインド高等文官選考公開試験(open Competitive Examination for admission to the Civil Service of India)のために勉強していました」(MSS Edgeworth D7/14)と述べている。これらから判断して、1875年前後にエッジワースは、スコーンズやレンの私塾でインド高等文官を目指す学生たちを教えていたことに間違いはないだろう<sup>23</sup>。このとき、エッジワースはベッドフォード・コレッジのギリシャ語教授応募に落選したが、1877年から78年にかけての1年間、彼は非常勤講師としてベッドフォード・コレッジでギリシャ語を担当した(Tuke 1939, 341)。

エッジワースがジェヴォンズとの交流を深めはじめた1880年5月、キングズ・コレッジ・ロンドンでは——前任者の退職を受けて——論理学および形而上学教授職を公募した(KA/CS/M3, 262)。同年7月の評議委員会議事録(Council Committee Minutes)には、9人の志願者のなかからエッジワースを含む四人が当時の学長バリー(Alfred Barry, 1826-1910)による個人面談に進み、最終的にケンブリッジのセント・ジョンズ・コレッジのフェローであったモメリー(Alfred Williams Momerie, 1848-1900)が選出されたことが

<sup>22</sup> この際、エッジワースは、オックスフォードのジョウエット、グリーン、トリニティ・コレッジ・ダブリンのマハフィー(エッジワースの在籍時にはフェローで、ギリシャ語欽定教授スタックの助手で、当時は古代史教授)、パルマー(Arthur Palmer, 1841-97)(エッジワースとほぼ同時期を同コレッジで過ごし、当時はフェロー)、ティレル(Robert Yelverton Tyrell, 1844-1914)(エッジワースと同時期を同コレッジで過ごし、1871年からラテン語教授に就いていた)、イングラム、そして、スコーンズ(William Baptiste Scoones)とレン(Walter Wren, 1834-98)という8名からの推薦状を提出している(MSS Edgeworth D5)。

<sup>23</sup> 実際にエッジワースも、「私はレン氏のインド高等文官を目指す志願者たちの専門学校(establishment for the preparation of candidates)にて、論理学、精神および道徳哲学を二年間にわたって教えました。二度の試験で、それぞれ、最高点をとった志願者は、そして、非常に高い得点をとった幾人かの志願者は、私の生徒でした」(MSS Edgeworth D7/13)と述べている。レンの専門学校は、1867年以降、インド高等文官試験の志願者に特化し、1867年から1878年の期間に合格した452人のうち184人がこの専門学校の出身者であった(Curthoys 2006)。エッジワースやレンの叙述から判断すると、この184人のなかにはエッジワースの講義を受講した者が含まれているはずである。

報告されている(KA/C/M12, 328-29; KA/CS/M3, 263)<sup>24</sup>。

エッジワースがこの教授職を掴むことは叶わなかったものの、この応募が彼に一つの運を呼び込んだ。同年11月、キングズ・コレッジ・ロンドンの夜間部(Evening Class Department)で神学と論理学を講義していたボール(Charles James Ball)が退職したことを受け、同コレッジの学長バリーは、評議会において、先の論理学および形而上学教授職公募の際に面接まで進みながら落選した候補者のうちの二名にそれぞれ神学と論理学とを担当させることを提案した。このうち、エッジワースには論理学を任せることが決定された(KA/C/M12, 340-41)<sup>25</sup>。これによって、エッジワースは、キングズ・コレッジ・ロンドンに夜間部の論理学講師として迎えられた。

エッジワースは、1881年から1889年にかけて、キングズ・コレッジ・ロンドンの夜間部で、冬学期中(10月から3月)週1コマ(1時間)、論理学を講義し<sup>26</sup>、当初は教科書としてジェヴォンズの『論理学入門』(*Elementary Lessons in Logic*, 1870)やファウラーの『演繹的論理学要論』(*Elements of Deductive Logic*, 1867)および『帰納的論理学要論』(*Elements of Inductive Logic*, 1870)を採用した(*CKCL 1881*, 350)。1886年からはジェヴォンズによる入門書に替えてネヴィル・ケインズ(John Neville Keynes, 1852-1949)の『形式論理学の学習と演習』(*Studies and Exercises in Formal Logic*, 1884)を、1887年からはこれらに加えて、レイ(Prasanna Kumar Ray)の『学生のための演繹的論理学』(*A Text-book of Deductive Logic for the Use of Students*, 1886)を教科書として提示している(*CKCL 1887*, 411; *CKCL 1888*, 401)。また、1890年には、エッジワースは、論理学のかわりに、論理学および精神・道徳科学(Logic and Mental and Moral Science)という科目名で講義をおこなった<sup>27</sup>。彼が講義したのは冬学期だけではなく、時には夏学期(毎年4

<sup>24</sup> この公募において、エッジワースは、トリニティ・コレッジ・ダブリンの出身で当時コーク大学の歴史および英文学教授であったアームストロング(George Francis Armstrong, 1845-1906)、ペイン、ジェヴォンズ、サリー、バリーからの推薦状を提出した(MSS Edgeworth D6)。なお、ジェヴォンズからの推薦状は、Black (1977b, 99)にも収録されている。

<sup>25</sup> 神学(ギリシャ聖書クラス(Greek Testament Class))は、1879年からキングズ・コレッジ・ロンドンの礼拝堂付き牧師(Chaplain)にすでに就任しており、論理学および形而上学教授職の面接に残ったマッカーネス(Charles Coleridge Mackarness)に任された(KA/C/M12, 340-41)。

<sup>26</sup> エッジワースは1888年に同コレッジの経済学教授となるが、そのまま夜間部の論理学を担当した。

<sup>27</sup> エッジワースは、それまでの論理学の教科書に加え、論理学にかんしては、ミルの『論

月末頃から7月上旬)にも論理学、精神・道徳科学、あるいは論理学および精神・道徳科学という講義名で授業を担当した(CKCL 1885, 408; CKCL 1886, 427-28; CKCL 1889, 435-36; CKCL 1990, 445-46)<sup>28</sup>。

1881年——『数理精神科学』を上梓した年——、さらにエッジワースは二つの教授職に応募している。一つは、著作執筆を優先するためにジェヴォンズが退職したことによって空席となったユニヴァーシティ・コレッジ・ロンドンの経済学教授職であり、もう一つはユニヴァーシティ・コレッジ・リヴァプールに新設された論理学、精神・道徳哲学、および経済学教授職である。エッジワースは、前者においては、ジェヴォンズ、マーシャル、バリー、『マインド』誌の編集者ロバートソンからの推薦状を得、後者においても、ジェヴォンズ、マーシャル、バリーの他、ファウラー、グリーン、ベイン、フォックスウェル(Herbert Somerton Foxwell, 1849-1936)、レンからも推薦状を得て、みずからの応募書類に添えた。他分野から経済学という応募対象の変化は、エッジワースの経済学的アプローチへの関心の高まりを物語っている。とりわけ、リヴァプールの教授職への自薦状からは、エッジワースが、キングズ・コレッジ・ロンドンにおいて、単に論理学講師としてだけでなく、経済学にかんする研究や教育の実績を着実に積みはじめたことがわかる。

「私は、『倫理学の新方法と旧方法』(パーカー商会、1877年)と『数理精神科学』(キーガン・ポール商会、1881年)という2冊の著書を公刊しています。前者は表題の主題——道徳、そして道徳科学の論理的諸方法——を取り上げ、後者は道徳哲学と経済学とを等しく扱いました。／……私はキングズ・コレッジ・ロンドンで論理学を、クイーンズ・コレッジ・ロンドンでは経済学を講義しています。また、その支部、つまり、『ケンジントンでの女性のための講座』(“Lectures to Ladies at Kensington”)と称されるキングズ・コレッジの分校では論理学と経済学とを講義しています。私は『ロンドン大学拡張協会』(*London Society for the Extension of University*

---

理学体系』(*System of Logic*, 1843)やヴェンの『経験論理学』(*The Principles of Empirical or Inductive Logic*, 1889)、精神科学にかんしては、サリーの『心理学概論』(*Outlines of Psychology*, 1884)、ベインの『精神および道徳科学』(*Mental and Moral Science*, 1868)、道徳哲学にかんしてはシジウィックの『倫理学史』(*Outlines of the History of Ethics for English Readers*, 1886)や『倫理学の諸方法』(*Methods of Ethics*, 1874)も参照すべき文献として挙げている(CKCL 1890, 427-28)。

<sup>28</sup> キングズ・コレッジ・ロンドンにおいてエッジワースが担当した講義一覧については、資料3(本稿179頁)を参照のこと。

*Teaching*)の哲学および経済学講師に任命され、バタシー(Battersea)にあるこの協会  
で経済学を講義しています」(MSS Edgeworth D7/13)<sup>29</sup>。

しかしながら、これら両方の経済学教授公募にエッジワースは落選し、とりわけユニ  
ヴァーシティ・コレッジ・ロンドンの経済学教授職公募にかんしては、エッジワースと同  
様にマーシャルからの推薦を取り付けたフォックスウェルが選出されることとなった<sup>30</sup>。

ここで、エッジワースがさまざまな教授職応募の際に推薦状を寄せてもらうこととなっ  
たマーシャルやフォックスウェルとの交流がはじまった経緯について簡単に触れておく必  
要があるだろう。

ケインズの『エッジワース伝』では、エッジワースとマーシャルとの接触は、『数理精神  
科学』を書評したことがきっかけであったとされているが(Keynes 1933 255/訳 338)、こ  
の話は Creedy(1990, 19)によって否定されている<sup>31</sup>。マーシャルは、1880年1月24日付  
の書簡において、フォックスウェルに、エッジワースという人物による快樂主義にかんす  
る数学論文が『マインド』誌の何巻に掲載されているのかを尋ねている<sup>32</sup>。これは、マー  
シャルもエッジワースの存在を知っていることを前提とした書簡がジェヴォンズから届い  
たため、マーシャルはフォックスウェルに実際には知らないのだと告白している  
(Whitaker 1996, vol.1, 124)。一方、この書簡の受取人フォックスウェルは、のちに彼が  
書いた推薦状から判断するに<sup>33</sup>、このときすでに、ジェヴォンズを介してエッジワースと  
面識があり、マーシャルにエッジワースについての情報を提供した可能性が高い。

<sup>29</sup> 当時のキングズ・コレッジ・ロンドンの学長バリーも、その推薦状のなかで、エッジワ  
ースが同コレッジで経済学の講義を担当していることを次のように保障している。「私は大変  
喜んで、本学がかかわるケンジントンでの女性講座の経済学、そして本学〔夜間部の〕論  
理学講義において、エッジワース氏が尽くしてくれている貴重かつ精力的な奉仕について  
証言いたします」(MSS Edgeworth D7/3)。

<sup>30</sup> 他方、ユニヴァーシティ・コレッジ・リヴァプールの教授職にはマッカン(John  
MacCunn, 1846-1929)が選出され、彼は1910年まで同職を務めた(Black 1977b, 145fn1)。

<sup>31</sup> ケインズによる「エッジワース伝」の影響は強く、たとえば平井(2007, 112)においても、  
このまことしやかな誤認は——クリーディーの指摘があったにもかかわらず——否定され  
ていない。

<sup>32</sup> この論文は、エッジワースの「快樂主義的計算法」のことである。

<sup>33</sup> 「これら〔「快樂主義的計算法」と『数理精神科学』〕の素晴らしく示唆に富む研究論文  
の公刊の間に、共通の友人であるジェヴォンズ教授を通じて、エッジワース氏と知り合い  
になったことを光栄に思い、ジェヴォンズ氏の家やあちこちで、主には経済学について、  
しかし、しばしば倫理学や哲学の問題についても、多くの議論を交わしました」(MSS  
Edgeworth D7/14)。

マーシャルは翌2月、エッジワースにたいして、現在確認されている初めての書簡(1880年2月8日付)を送った。このとき、「快樂主義的計算法」や『倫理学の新方法と旧方法』を読み終えたマーシャルは、「人間行動に関係する科学における数学の領域について、私たちの間には非常に近い合意があるように思え……、功利主義的ドグマの解説にかんして、あなたはたいなる前進をなしたと考えています」(*ibid.*, 124)とエッジワースに賛辞を送っている。これこそがエッジワースとマーシャルとの最初の接触であった。

この交流のはじまりにおいて、マーシャルによるエッジワース評価は——『アカデミー』誌における『数理精神科学』の書評のなかで、エッジワースのことを「天才」(Marshall 1881, 157)と持ち上げてはいたが——、実際には決して高いものではなかった。とりわけ、それは経済学にかんして明らかである。マーシャルがエッジワースに初めての書簡を書いた翌月末、再度——おそらくエッジワースから届いた返信への再返信となる——書簡を送ったマーシャルは、経済学への数学の適用について、次のように述べている。

「経済学に解析学的推論よりも幾何学的推論を適用することについて、私はあなたが考えているように断定的な見解を持ち合わせていません。新しい問題に取り組むときに、私は解析学を通常用いますが、これは便利であるからです……。しかし、私は幾何学を用いることができるときには解析学を使おうとは思いません」(Whitaker 1996, vol.1, 125)。

1881年3月、エッジワースはマーシャルに『数理精神科学』の校正刷りを送付すると同時に、ジェヴォンズの後任人事に応募するため、推薦状を依頼した(*ibid.*, 134-35)。しかし、マーシャルは、すでにこの時点でネヴィル・ケインズとフォックスウェルのために推薦状を作成していたうえ、エッジワースからも同様の依頼があることは想定していなかった(*ibid.*, 132)。このとき女性を対象としたキングズ・コレッジ・ロンドンの講座で経済学を担当しはじめていたエッジワースであったが、マーシャルにとっては、彼との付き合いがはじまったばかりで、「経済学という主題にかんするエッジワースの知識にたいする評価はまだ固まっていない」状態であった(*ibid.*, 124)。このため、エッジワースには形式的な推薦状を作成するに留めたマーシャルは(*ibid.*, 135)、同年5月、最終的にジェヴォンズの後任に選出されたフォックスウェルにたいして、書評を書き終えてから再読した印象に基づけば、あまり経済学的な著作ではないうえに、抽象的すぎるために、『数理精神科学』に

失望し、「エッジワースに勝ち目はないと結論づけていた」(*ibid.*, 137)と伝えている。このように、この時点でマーシャルの目に映るエッジワース——『倫理学の新方法と旧方法』、「快樂主義的計算法」、そして『数理精神科学』の著者——は、あくまで功利主義的倫理学に取り組む学者であり、経済学にかんしては初学者であった。しかし、マーシャルが参加していたハムステッドでの「経済学サークル」(Economic Circle)にも加わり<sup>34</sup>、エッジワースは彼との交流を深めることとなった。

マーシャルがエッジワースの経済学者としての能力を他人にたいして明らかに認めたことを確認できるのは、1887年8月22日付の書簡である。この年、エッジワースはマンチェスターで開催された(同年9月1日から7日)イギリス科学振興協会F部会(経済学および統計学)において、フォックスウェル、ギッフェン(Robert Giffen, 1837-1910)、マーシャル、マーティン(John Biddulph Martin, 1841-97)、ニコルソン(Joseph Shield Nicholson, 1850-1927)、パルグレイヴ(Robert Harry Inglis Palgrave, 1827-1919)、シジウィックらとともに、「貨幣基準の価値変化の確定とその測定についての最良な方法にかんする研究」(investigating the best methods of ascertaining and measuring Variations in the Value of the Monetary Standard)を目的とした委員会の一人として報告をおこなった(Edgeworth 1887a, 247)。そして、同委員会の事務であったエッジワースは、この委員会報告にかんする「覚え書き」の草稿も作成したが(Edgeworth 1887b)、これを採用するかどうかをめぐって、マーシャルはフォックスウェルを説得する書簡を送っている<sup>35</sup>。

「エッジワースの草稿は立派なものでおもしろいものです。しかしながら、あなたがこれを採択しないと私は考えています。私は、この独創的な建議の再採択をただ訴え、F.Y.エッジワースの素晴らしい覚え書きが人の目にとまるようにすることが最良のことだと思っております」(*ibid.*, 249)。

このようにマーシャルにも一目を置かれる経済学者となったエッジワースは、周知の通

<sup>34</sup> 「経済学サークル」または「ハムステッド経済議論協会」(Hampstead Economic Discussion Society)は、ウィックステッド(Philip Henry Wicksteed, 1844-1927)、ウェブ(Sidney Webb, 1859-1947)、ショー(George Bernard Shaw, 1856-1950)などが参加し、1884年10月からエッジワースとフォックスウェルが加わった(Groenewegen 1995, 468)。

<sup>35</sup> Edgeworth(1887a and 1887b)は、Edgeworth(1925)の1巻に所収される「貨幣価値変化の測定」(Measurement of Change in Value of Money)の一部となる。

り、やがてイギリス経済学会（1890年創設）の事務局や『エコノミック・ジャーナル』誌（1891年創刊）の初代編集長を任され<sup>36</sup>、また、1891年にオックスフォードのドラモンド講座経済学教授公募の際には、マーシャルの支援を得るほどの経済学者となるのである。

#### 3-4. 初期におけるエッジワースの経済学講義

このように、1880年代前半のエッジワースは、他大学で経済学教授職を得ることはできなかったものの、キングズ・コレッジ・ロンドンでは女性を対象に経済学を教える機会に恵まれた。1829年に創設された同コレッジは、1881年の段階で神学部、一般文学および科学部、工学および応用科学部、医学部、夜間部を設けていたが、さらに女性への高等教育を振興する目的をもつ新しい学部（女子部(Department for Ladies)）の設置を構想していた(*KCKL 1881, 79-82*)<sup>37</sup>。この構想は、過去3年間におけるケンジントンでの女性のための講座の経験——每学期、平均して500人以上の登録があった——に基づくもので、この講座のなかに含まれる「論理学および経済学」をエッジワースが担当した<sup>38</sup>。

また彼は、「ロンドン大学拡張協会」(1876年設置)でも経済学の講義を担当した<sup>39</sup>。1885年の7頁ほどの分量のシラバス——表紙を除けば——に基づけば<sup>40</sup>、この拡張講座での

<sup>36</sup> マーシャルは当初、『エコノミック・ジャーナル』誌の編集者として、ネヴィル・ケインズを考えていたが、彼に断られたため、これをエッジワースに任せた。マーシャルのエッジワースへの信頼は厚いものになっており、1891年2月にエッジワースのドラモンド講座経済学教授就任が決定的なものとなったとき、「私は当然、あなたが編集者と事務局とを留任するべきだと思います。そして、あなたの給料のいくらかを手伝い人の雇用に使うべきです……そして、もちろん、編集者の仕事〔だけ〕ですら困難に感じることもありうることでしょうが、あなたがそうなるとは私は思っていません」(Whitaker 1996, vol.2, 7)と、マーシャルがエッジワースに任せた要職を慰留している。

<sup>37</sup> 女子部は1885年に開設され、エッジワースは1885年から1890年まで——つまり、キングズ・コレッジ・ロンドンを去るまで——、ここでラテン語上級編(Latin Advanced Class)を週1コマ(1時間)担当した(*CKCL 1885, 348; CKCL 1886, 360; CKCL 1887, 349-50; CKCL 1888, 345-46; CKCL 1889, 355-56; CKCL 1890, 365*)。

<sup>38</sup> その他、聖書および教会史、古代史および近代史、英文学、算術および数学、化学・生理学および植物学、和声学および描画(Harmony and Drawing)が開講されていた(*CKCL 1881, 80*)。

<sup>39</sup> これらの事実はエッジワースがユニヴァーシティ・コレッジ・リヴァプールの教授職に応募した際に提出した自薦状および推薦状によって保障される。詳しくは、本章64-65頁を参照のこと。

<sup>40</sup> このシラバスは、アイルランド国立図書館(National Library of Ireland)に所蔵されており、その表紙にはWith the author's kind regardsとサインされており、エッジワースから送付されたものであることがわかる。

エッジワースの講義は、「経済学の定義」<sup>41</sup>、「経済学の定義、生産と労働」、「労働」、「資本」、「資本化対消費(Capitalization versus Consumption)」、「成長法則、収益逡増」、「収益逡増と逡減」、「拡散(Diffusion)、交渉理論」、「交渉理論」、「交渉理論、交換」、「交換と分配」の11回で構成され、ジェヴォンズの『経済学入門』(*Primer of Political Economy*, 1878)、マーシャル夫妻の『産業経済学』、シジウィックの『経済学原理』(*Principles of Political Economy*, 1883)が参考書として挙げられた(Edgeworth 1885, 8)。

キングズ・コレッジ・ロンドンの論理学講師エッジワースは、バルベにしたがえば、1885年に同コレッジの経済学教授となり、その後、1888年に同コレッジの商業原理および商業実践(*Principles and Practice of Commerce*)教授職の公募には落選したという(Barbé 2010, 117; 151)。しかし、当時の同コレッジの評議会議事録や『大学要覧』を見るかぎり、これは不正確な情報である。たとえば、1885年から1887年の『大学要覧』の教員一覧において、エッジワースの職位は夜間部の論理学講師のままであり(*CKCL 1885*, 42; *CKCL 1886*, 42; *CKCL 1887*, 42)、彼の職位が経済学教授と記されるようになるのは1888年からである(*CKCL 1888*, 21)。

エッジワースが1885年に応募したのは、キングズ・コレッジ・ロンドンの商業原理および商業実践教授職である。この教授職に選出されたのはレヴィー(Leone Levi, 1821-88)で、エッジワースには当時の学長ワース(Henry Wace, 1836-1924)から落選が通知された。しかしながら、この落選通知のなかには、「長きにわたって空席となっている経済学教授を復活させること、そして、あなたが受諾してくださるならば、同職にあなたを任命することについては評議会が賛同しています」(MSS Edgeworth D2/32)と<sup>42</sup>、エッジワースを同コレッジの経済学教授に据えることがほのめかされた。実際にこれが実現したのは3年後の1888年7月のことである。レヴィーが他界したことによって、この年の6月にふたたび商業原理および商業実践教授の人事が起こり、エッジワースは、フォックスウェル、ギッフェン、マーシャル、シジウィックらの推薦状に加え、すでに他界したジェヴォンズがか

<sup>41</sup> エッジワースによれば、「[経済学の] もっとも狭い定義とは、交換の理論である。幾分広めの定義とは、利己的な分子(self-interested particle)の間の交渉理論である。おそらくもっとも広い定義とは、富の増大にかかわる条件の科学、ならびにそれにかかわるアート、というものである」(Edgeworth 1885, 2)。

<sup>42</sup> キングズ・コレッジ・ロンドンの経済学教授職は、リチャード・ジョーンズ(Richard Jones, 1790-1855)が辞任した1854年以降(Pullen 2004, 619r)、空席となっていた。

つて寄せた推薦状も添えて<sup>43</sup>、これに応募した(MSS Edgeworth D9)<sup>44</sup>。7月になると、キングズ・コレッジ・ロンドンは、この人事案件を二つの教授職人事——経済学教授の復活、そして商業および商法教授(Professorship of Commerce and Commercial Law)の新設——へと変更し、経済学教授としてエッジワースを採用する決定が最終的に下された(KA/C/M13, 329)。

1888年にキングズ・コレッジ・ロンドンの「一般文学および科学部」は、その名称から「科学」という語句が取り外されて、「一般文学部」(Department of General Literature)に改変された(KA/C/M13, 302)。この一般文学部では、より実学を志向して、ラテン語やギリシャ語のかわりに、現代語学——フランス語、ドイツ語、スペイン語、イタリア語——、商業地理学、経済学を教えることになった(KA/C/M13, 329)。経済学教授エッジワースが担当した経済学は、この一般文学部用のものである。1888年と1889年における彼の経済学講義(通年)は、富、交換と分配、土地保有、産業協力と協業、国際貿易理論、貨幣、銀行論、価格変動などが予定され、「ロンドン大学拡張協会」で挙げた3冊に加えて、サイムズ(John Elliotson Symes, 1847-1921)の『経済学』(*A Short Text-book of Political Economy*, 1888)が参考書となった(*CKCL 1888*, 106-07; *CKCL 1889*, 111-12)。

エッジワースは、1890年7月、キングズ・コレッジ・ロンドンのトゥック講座経済科学および統計学教授(Tooke Professor of Economic Science and Statistics)であったロジャーズ(James Edwin Thorold Rogers, 1823-90)の退職を受け、その後任として、経済学教授から同教授職に身分が変更された(KA/C/M14, 48)。このトゥック講座は、1年間に義務付けられた最低20回の講義のうち、経済科学の知識の大衆への普及を促進する目的で——若者や日中は仕事に従事している人びとが出席できるように——、最低10回の講義は夜間に行なう必要があったため(*CKCL 1890*, 122)、夜間部で開講されており、1890年のエッジワースによるトゥック講座も同様であった。このとき、エッジワースは、一般文

<sup>43</sup> その他、ユニヴァーシティ・コレッジ・リヴァプールの経済学および商学講師ゴナー(Edward Carter Kersey Gonner, 1862-1922)、王立統計協会の名誉事務官でイギリス科学振興協会の前F部会会長でもあったマーティン、エディンバラ大学経済学教授のニコルソン、パルグレイヴ、王立統計協会の前会長ローソン(Rawson W. Rawson, 1812-1899)、論理学者ヴェン(John Venn, 1834-1923)が推薦状を寄せた。ジェヴォンズによる推薦状は、エッジワースがユニヴァーシティ・コレッジ・リヴァプールの教授職に応募したときのものである。

<sup>44</sup> この応募書類(自薦状および推薦状)は、関西学院大学図書館にも *To the Council of King's College* として所蔵されている。

学部の経済学講義とトゥック講座の講義とを担当することとなったが、前者は、『大学要覧』上のシラバスが簡素で具体的な内容が割愛されたうえに、参考書もマーシャル夫妻の『産業経済学』のみとなった(CKCL 1890, 111)。他方、トゥック講座のシラバスは、1888年と1889年の経済学教授としての講義シラバスをほぼそのまま転用し、参考書には、マーシャル夫妻の『産業経済学』、そして出版されたばかりの『経済学原理』(*Principles of Economics*, 1890)が挙げられた(*ibid.*, 346-47)。

エッジワースによるトゥック講座は、わずか1年しか開講されなかった。1891年2月、エッジワースは、オックスフォードのドラモンド講座経済学教授に選出されたことを理由に、キングズ・コレッジ・ロンドンを退職する意向を同コレッジの学長ワースに伝え、同年3月には評議会がこれを承認したからである(KA/C/M14., 105)<sup>45</sup>。

「親愛なる学長様／オックスフォードのドラモンド講座経済学教授職選出の結果として、キングズ・コレッジのトゥック講座教授を辞任しなければならなくなったことは大変申し訳のないことです。私はトゥック講座教授に付随する榮譽を軽視することはないとお考えください。むしろ、私をやる気にさせてきたのは、その榮譽への敬意でした。私が同時に二つもの重要な教授職に就くことは、他の科学者たちにとって公正を欠く行為であるように思うのです。／私がキングズ・コレッジ教授から大きく距離をおくことになる措置を取ることがはなはだ不本意なことであることは言うまでもありません。／本当です。／敬具 F. Y. エッジワース」(KA/IC/E80)。

ドラモンド講座経済学教授は、1888年からトゥック講座の前任者ロジャーズが務めていたが、1890年10月12日に彼が突然他界したことによって、オックスフォードは後任者を求めることになった。エッジワースは即座にこれに反応した。彼のオックスフォード時代の恩師ジョウエットは、同月20日付でマーシャルに書簡を送り、「本学の経済学教授職にとって誰が一番いい候補者だと思いますか。エッジワースよりも秀でた人物はいるでしょうか。彼は私が何らかの影響力をもつならば支援して欲しいと手紙に書いてきました」(Whitaker 1996, vol.1, 342)と、助言を求めた。このとき、マーシャルからの助言を受け

<sup>45</sup> キングズ・コレッジ・ロndonは、1891年5月にエッジワースを同コレッジのフェローに任命し、同年6月には彼の後任としてカニングガム(William Cunningham, 1849-1919)を選出した(KA/C/M14, 117; 120)。カニングガムは1897年までこの任を務めた(Koot 2004, 706r)。

て、ジョウエットはエッジワースを支援することを決めた(Kadish 1982, 194-200; Reisman 1990, 195)。

1890年12月に正式に同教授職に応募したエッジワースは(MSS Edgeworth D10/1)、アシュレー(William James Ashley, 1860-1927)、パルグレイヴ、スミス(Hubert Llewellyn Smith, 1864-1945)らと競合した結果、翌年2月21日に選出された<sup>46</sup>。このとき、同教授職人事に携わった審査員は、当時の首相でオックスフォード大学の名誉学長のソールズベリー侯(Robert Arthur Talbot Gascoyne-Cecil, 1830-1903)、当時の大蔵大臣ゴッシェン(George Joachim Goschen, 1831-1907)、オックスフォード大学の近代史欽定教授フリーマン(Edward Augustus Freeman, 1823-92)、ワイト講座道徳哲学教授ウォレス(William Wallace, 1844-97)、そしてオール・ソウルズ・コレッジのフェローである歴史学者ドイル(John Andrew Doyle, 1844-1907)の五名であった。このうち、ウォレスとドイルはエッジワースと同じベリオル・コレッジの出身者であった。とりわけウォレスはジョウエットから強い影響を受けた学者であり、エッジワース支援の立場をとったジョウエットの意向が働いたことは十分に想像できる。また純理論的研究を実践的問題に適用することを毛嫌いだした学者であったドイルもエッジワースの業績が「完全に理論的性質のもの」であったため、彼も文句なくエッジワースを選んだ(Kadish 1982, 200)<sup>47</sup>。そして、当時イギリス経済学会の会長でもあったゴッシェンには<sup>48</sup>、同学会の事務および同学会誌『エコノミック・ジャーナル』誌の編集長という役職にあったエッジワースをドラモンド講座経済学教授職に就けることで、オックスフォード大学の学徒たちを「イギリス経済学の主流派の囲い」(*ibid.*, 200)のなかへ戻せるとの目論みがあった。さらに、前任者のロジャーズが学内外の政治問題に過激に関わったため(*ibid.*, 177)、「オックスフォード大学人と同様に、第二のロジャーズを採用することは避けたいと考えていたソールズベリー侯やゴッシェンにとって

<sup>46</sup> マーシャルはエッジワースがドラモンド講座経済学教授に選出されたことを受け、「万歳！万歳！万歳！たいへん喜ばしいことです」(Whitaker 1996, vol.2, 7)と書簡(1891年2月16日付)を送った。ナッフイード・コレッジ所蔵のエッジワース関連書簡には、彼のドラモンド講座経済学教授就任を祝福する31通もの書簡が含まれる(MSS Edgeworth D3)。このなかのネヴィル・ケインズからの書簡によれば、エッジワースが同教授に選出されたことは、1891年2月25日付の『タイムズ』紙で発表された(MSS Edgeworth D3/11)。

<sup>47</sup> しかし、本稿6章、7章で取り上げるように、のちにエッジワースは理論的研究を実践的問題へと適用していくことになる。

<sup>48</sup> イギリス経済学会最初の会合は、1890年11月21日午後、ユニヴァーシティ・コレッジ・ロンドンにて、ゴッシェンを会長として、この学会の設立やこれに関連して『エコノミック・ジャーナル』誌創刊の計画について話しあう形でおこなわれた(Anon. 1891, 2)。

エッジワースの政治問題に関心のない性格は魅力的でもあった」(ibid., 200)。この結果、トインビー(Arnold Toynbee, 1852-83)らイギリス歴史学派の学風を継承できる存在として同教授職の有力候補であったアシュレーも落選し、エッジワースが「経済学におけるイギリスでもっとも高名な教授職の一つ」(Creedy 1986, 10)に就くこととなった<sup>49</sup>。以後、彼は、「イギリス経済学の有名な指導者」たるマーシャルに次ぐ「二番手」的存在の経済学者として(Creedy 1990, 18)、同職を1922年まで務めることとなる<sup>50</sup>。

### 3-5. 倫理学から経済学への拡張——二つの意味において——

これまで1870年代から1880年代にかけてのエッジワースの交友関係や職歴を中心とした考察を通じて、次のことを述べてきた。第一に、当初は倫理学や哲学にあったエッジワースの関心が、心理学者サリーとの出会いをきっかけに広がった交友関係によって、経済学にも拡張されるようになったこと、そして第二に、これにともなって実際に彼が大学に得ようとした職も、他分野から経済学の教授へと変化していったことである。

注目すべきは、ジェヴォンズと知り合った1879年秋以降に着手しはじめた経済学研究を含めた成果である『数理精神科学』が、マーシャルから経済学的な著作ではないと評価されていることである。ジェヴォンズと知り合う以前のエッジワースの著作にたいする「功利主義的ドグマを前進させた」とのマーシャルの評価もあわせて考えれば、『数理精神科学』も単なる経済学的著作ではなく、功利主義的な著作であると考えることが自然であろう。

本章では、しかしながら、エッジワースの『倫理学の新方法と旧方法』、「快樂主義的計算法」、そして『数理精神科学』といった著作に言及しながらも、具体的に、彼がどのように功利主義の研究に取り組み、そしてまたそこにどのように経済学的手法を導入したのかについては触れてこなかった。また、1章で言及したシジウィックの『倫理学の諸方法』との関連についても明確にしていない。これらについて、次章において論じる。

<sup>49</sup> エッジワースは、オックスフォードに移ったあとの1891年と1892年もキングズ・コレッジ・ロンドンの女子部で特殊講義(Special Course)を担当し、1891年ミクルマス学期は「統計学の使用について」、1892年ミクルマス学期は「経済学要論」と題した講義をおこなった(CKCL 1891, 371-72; CKCL 1892, 388)。前者では教科書や参考書はないが、後者ではマーシャルの『産業経済学』が挙げられ、エッジワースは「学生にはこの本を注意深く勉強することを強く推奨」(CKCL 1892, 388)した。

<sup>50</sup> エッジワースのドラモンド講座経済学教授時代の教育については、Kadish(1993, 76)に詳しい。

## 第4章 『数理精神科学』と精密功利主義

## ——シジウィック＝バラット論争からの独自展開——

2章および3章においては、『数理精神科学』出版前後までのエッジワースの知的環境やその関心の変遷を、彼が受けた教育や交友関係、そして職歴から——つまり、外縁的な部分について——考察した。他方で、『数理精神科学』に至るまでのエッジワースの著作の中身については触れてこなかった。このため、本章は、これらの著作に触れつつ、1章末尾で立てた問題——なぜエッジワースは倫理学にも大きな関心を寄せ、その関心を経済学にまで拡張させたのか、『数理精神科学』がその著作全体として有している目的や意図とはなにか——の解明を目的とする。

倫理学とエッジワースとの関係を考えるにあたって、エッジワースを功利主義的倫理学者として評価し、『数理精神科学』を「あまり経済学的な著作ではない」(Whitaker 1996, vol.1, 137)と感じたマーシャル同様、シュンペーターも、「エッジワースの地位を見計る」第一の観点として、「功利主義」を挙げている(Schumpeter 1954, 830/訳下巻 152)。

この功利主義の側面から、『数理精神科学』における契約の不確定性の存在とその仲裁原理にかんするエッジワースの議論を整理し、考察する試みは、Collard(1975)や根岸(1985)、Creedy(1986)、Newman(1987)、中野(1995)、松嶋(2005)らによってなされてきた。中野(1995)によれば、エッジワースの『数理精神科学』における議論は「功利主義原理の正当化」のためのものであり、それは「不確定性のもとでの選択の問題として契約論的に功利主義を正当化する方法」と「利他心に基づいて〔功利主義を〕正当化する方法」という二つの論法によってなされる(中野 1995, 176)。このうち、前者の論法を中心に評価しているのがクリーディー、根岸および松嶋であり、他方、後者を中心としての評価はコラードや中野によってなされている。このなかで、たとえば、松嶋は「『私的利益』と『公共的利益』の安易な同一視を廃した功利主義のプロトタイプ」(松嶋 2005, 53)と、他方、中野は、「功利主義の人間観を修正し、利他心を組み込む……試み」と指摘している(中野 1995, 178)。

これら従来の研究は、確かにエッジワースの功利主義に焦点をあてているものの、その考察範囲は『数理精神科学』第Ⅱ部前半部の「経済的計算法」(Economical Calculus)——とりわけ、エッジワース・ボックスにかかわる部分——に限定されているため、あくまで

経済理論的、経済学説史的な取り扱いの域にとどまっている<sup>1</sup>。したがって、同じく第Ⅱ部後半部の「功利主義的計算法」(Utilitarian Calculus)において展開されたエッジワースの功利主義論を割愛している、という難点をもつことは否めない<sup>2</sup>。そもそも「功利主義的計算法」は、1879年の論文「快樂主義的計算法」を、表題の変更をおこなって、『数理精神科学』に再録したものである。つまり、時系列的には、「功利主義的計算法」(「快樂主義的計算法」)→「経済的計算法」という執筆順序であり、この事実から後者の議論を補強するために前者が用意されたと考えることができる。いわば、『数理精神科学』は「快樂主義的計算法」論文の完成版なのである。

エッジワースはみずから、この第Ⅱ部の特徴について、次の二点を明らかにしている。すなわち、第一に、『数理精神科学』第Ⅱ部が、「各々が個人効用最大へと向かう快樂の力の均衡体系」を考察する「経済的計算法」と、「各々および全体が普遍的効用最大へと向かう〔快樂の力の〕均衡体系」を考察する「功利主義的計算法」とで構成されること(Edgeworth 1881, 15-16)、第二に、これら二つの部分を合わせた第Ⅱ部全体の目的が、「シジウィック氏の快樂主義の区分——行動の原理が一般的に幸福最大化であると定義される『方法』の分類——が徹底されたものではないため」(*ibid.*, 16)、シジウィックの『倫理的諸方法』(ethical methods)への補足を示す」(*ibid.*, v)ことである。

エッジワースが掲げたこの目的は、『数理精神科学』における功利主義論研究に重大なヒントを提示している。それは、同書における彼の功利主義論の全容を明らかにするために、これら二つの「計算法」を一對のものとして扱わなければならないこと、また、同書とシジウィックの「倫理的諸方法」、すなわち『倫理学の諸方法』との間の密接な関係を考察せねばならないこと、である。

前章でみたように、エッジワースとシジウィックとの関係は、『数理精神科学』にはじまるものではない。エッジワースは、『数理精神科学』出版以前の1877年に『倫理学の新方法と旧方法』を出版している。同書は、「バラットの『物理倫理学』とシジウィックの『〔倫理学の〕諸方法』とを検証しながら、これらの諸方法の比較を試みる」(Edgeworth 1877, 1)ことを目的とした。この書物の出版に前後して、『マインド』誌上において、シジウィックとバラットは前者の著作である『倫理学の諸方法』(*The Methods of Ethics*, 1874)の内

<sup>1</sup> 『数理精神科学』の構成については、本稿10頁を参照のこと。

<sup>2</sup> 「功利主義的計算法」において論じられたエッジワースの快樂受容能力についての議論に注目した研究には、Peart and Levy(2005)が存在する。ただし、これも従来の研究と同様に「経済的計算法」と「功利主義的計算法」との関連を省略している。

容をめぐって——エッジワースの言葉をそのまま用いるならば——「論争」(Controversy)を繰り広げた(*ibid.*, ii)。このように、シジウィックの『倫理学の諸方法』、シジウィックとバラットとの間の論争(シジウィック＝バラット論争)は、『数理精神科学』以前のエッジワースの関心にとって重要な位置を占めており、『数理精神科学』がどのように生成されたかという観点からも——これらの関係を精査する必要がある。

このような必要性から、本章では、シジウィック＝バラット論争を契機として、エッジワースの『数理精神科学』が、倫理学を含む、重層的で多面的な知的源泉から生成されたことを論証する。

#### 4-1. シジウィック＝バラット論争の構図

シジウィックが『倫理学の諸方法』第6版序文において告白したところによれば、「各個人は自分自身の立場を目指すべきである」という立場と「各個人は人びと全般の幸福を目指すべきである」という立場が両立するためには、「社会全体の善のために自分の幸福を犠牲にすることが正しいことである」との理解が必要となるため、シジウィックはこの二つの立場の両立に疑問を感じるようになった(Sidgwick 1906, xvii)。

シジウィックはこのような疑問にしたがって、『倫理学の諸方法』において、人間の行為の究極目的を、(1)自分自身の最大幸福とする「利己主義」(Egoism)、(2)直感的に判断される義務や徳にしたがうこととする「直観主義」(Intuitionism)、(3)人びと全体の最大幸福とする「功利主義」(Utilitarianism)、という三つの「実践理性」をあくまで中立的な立場から検証しようとした<sup>3</sup>。この彼の問題設定は、これらの実践理性の相互関係とその衝突——もしそのようなことがありうるならば——による問題点を明確にすることも含まれた(Sidgwick 1877a, 13)。

大きな枠組みでとらえるならば、シジウィックは、三つの実践理性のうち、直観主義と功利主義との関係、利己主義と功利主義との関係を取り扱った(行安 1992, 116)。前者の関係にかんするシジウィックの理解では、直観が世界全体の幸福を善と認識させ、その善が世界全体をより幸福にするため、直感主義と功利主義の間には対立が認められない。直観主義は功利主義に矛盾しないだけでなく、むしろ功利主義に合理的な基礎をもたらす(Sidgwick 1877a, 456)。他方、後者の関係については、世界全体の幸福の増進がすべての

<sup>3</sup> ここでの語法は、奥野(1999)にしたがった。シジウィックの実践理性とは、「ある真意の認知に基づいて衝動や動機を与え、意志を促す能力」(奥野 1999, 68)のことである。

個々人にとっての利益になることを保証する神のような存在を証明できないため、「功利主義的義務とそれにしたがって行動する個人の最大限の幸福とが分かち難く結びついていることを経験的根拠に基づいて満足のいくよう論証することはできない」(ibid., 463-64)。シジウィックは、「同感」と「宗教」という二つの観点から利己主義と功利主義との一致の可能性を検討したが、その「完全な統合」にはたどり着くことはできなかった。このようにして、利己主義と功利主義とがそれぞれ独立した原理であることを認めざるを得なかったシジウィックの体系は「実践理性の二元性」と呼ばれる。

その序文における中立宣言にもかかわらず、シジウィックの『倫理学の諸方法』は、その構成からも直観主義や利己主義を否定し、功利主義のみを肯定的に捉える立場にある書物と誤解を受けやすかった<sup>4</sup>。シジウィック自身、第2版の序文において、初版にたいするさまざまな批判を紹介しており、そのなかにおいて、「また別の批判者は、私の主要な目的が『利己主義の抑圧』であるという憶測に基づいて論文を著した」(ibid., xi)と述べている。著者名こそ明示されていないが、この論文とは、その表題から、1877年の『マインド』誌に掲載されたバラットの「利己主義の「抑圧」」(The 'Suppression' of Egoism)を指すと考えるのが順当であろう<sup>5</sup>。

この論文において、バラットは、シジウィックが倫理学の「物理的証明」(Physical proof)を割愛し、「内生的証明」(Introspective proof)をも反駁しないままに、「直観的証明」(Intuitionist proof)のみを取り扱い、その結果として利己主義を「抑圧」している、と批判した(Barratt 1877, 167)。バラットによると、シジウィックの『倫理学の諸方法』は、客観的な善を直観的に認識する「道德能力」の存在が前提となっており、その「道德能力」を通じて「理性」が命じる諸公理(axioms)や諸原理(principles)の分類をおこなっているにすぎない。これを指してバラットは「直観的証明」と呼び、「諸方法」と称しているにもかかわらず、シジウィックがこの「直観的証明」という方法論にのみ依っていることに不満を示した。

<sup>4</sup> 『倫理学の諸方法』は、利己主義と直観主義の二つが先に論じられ、最後の第四部に功利主義的方法が論じられるという展開をみせており、あたかも功利主義が三つのうちでもっとも重要な方法であるかのような印象を与える……第2版序〔文〕では、この著作で彼が直観主義と利己主義の二つの方法を攻撃し功利主義を擁護した、と一部の人びとにみなされたのは誤解だと嘆いている」(奥野 1999, 26)。

<sup>5</sup> バラット以外にシジウィックを批判した人物として、ベイン、ブラッドレー(Francis Herbert Bradley, 1846-1924)、グリーンが挙げられる(Schneewind 1977, 192; 行安 1992, 196)。

バラットは『物理倫理学』(1869)を上梓しているように、倫理学への物理科学的手法の導入を提唱した人物であり、シジウィックが前提とした「道德能力」に客観性が欠如していることを問題視した。「道德能力」が客観性をともなっていなければ、このとき、直観的に認識されるそれぞれの人間の義務は、「自分が自分の義務と考えるもの」(*ibid.*, 169)であり、あくまで主観的なものにすぎない。それゆえに、道德能力が示す義務の正当性を確認するためには客観的な善が必要である。バラットはその重要性を「聴覚のみからわれわれはいかにしてその音があらゆる人間にとって同じ意味合いをもつ、つまり同じ関係にあることを理解できるのか」(*ibid.*, 169)、と音響学にたとえた。音響学の場合、同じ条件下における空気の振動という物理的な基準によって、音の異同は判断可能である。バラットは、音響学におけるこの空気振動が果たす役割を、倫理学においては「快樂」という客観的な善がになう、と述べる。彼は、感覚組織を保護する物理的な刺激は快樂、逆にこれを損傷させる物理的な刺激は苦痛(負の快樂)というように分類でき(Barratt 1869, 290)、「快樂」という刺激がこのように物理的な側面から観察可能である、つまり、そこに客観的基準を見出すことができると考えたからこそ、「快樂」を客観的な善としたのである。

この物理科学的手法に基づく客観的証明を「物理的証明」と呼んだバラットにたいして、シジウィックは倫理学の物理科学化には否定的であった。彼は、バラットの見解にたいするリプライを『マインド』誌に掲載し、次のように述べている。

「倫理学の「物理的な手法」にかんしては……そのような方法は不可能である、と述べることで十分である。倫理的な結論は、論理的にいて、倫理的な前提をもってはじめることによるのみ到達することができる。いかに倫理的な前提が得られるか、それを考えることは私の計画のどこにも含まれない」(Sidgwick 1877b, 412)。

『倫理学の諸方法』における「物理的証明」の欠如を指摘したバラットは、続いてシジウィックが「内省的証明」にたいして反駁しなかったことを注視する。バラットによると、快樂を普遍的な動機としながらも、シジウィックは直観的に認識される義務を重要視したために、その証明が不完全なものになってしまった(Barratt 1877, 173)。シジウィックがこれを矛盾なく主張するためには、快樂と苦痛とを自発的行為の唯一の動機として、それらの強度に応じて行動することが「自省」によって与えられることに反証を挙げなければならないのだが、これを彼は無視したとバラットは述べている。

このように、バラットは『倫理学の諸方法』に展開された方法を「さまざまな『倫理学の諸方法』ではなく、同一の方法による異なる帰結」(*ibid.*, 168)と批判的にとらえたが、シジウィックの「実践理性の二元性」を批判し、自説を展開した。

バラットによると、行為の目的は快樂であり、組織に属する行為者は自分の行為にたいして内在的な関係と外在的な関係を有するという。したがって、行為には内在的原理と外在的原理という二つの原理がある。彼が述べるには、内在的原理とは組織を構成する単位である個人自身の快樂最大のための原理、すなわち、「利己主義」である。他方、外在的原理とは組織のための原理であり、全体の幸福を目指す「功利主義」にほかならない。バラットは、人間の実践理性として、これら二つの原理が混じり合っていることを認める。しかし、これらは同等の関係ではなく、行為者が属する組織が高度、複雑であればあるほど、周囲との調和を考え、利己主義よりも功利主義に比重をおくようになる。これを言い換えれば、組織がもっとも簡素なときは利己主義しか存在しない、ということになる。したがって、彼は、人間の本質的な性向とは利己主義であり、功利主義はのちになって育まれたものである、と主張する。そして、功利主義への「動機」について考えるとき、それは賞賛や非難などのために行為の帰結や信念を変更することによって生じ、「どのような種類の功利主義の倫理上の価値(*Ethical value*)も利己主義という一つの方法としてのみ存在しうる」(*ibid.*, 185)とバラットは結論づけた<sup>6</sup>。シジウィックは、このようなバラットの見解にたいして、明示的な反論をおこなっていない。やがてこの二人の間の論争の波は、エッジワース自身にも及び、最終的には1881年のバラット他界によって結末を迎えることとなる。

以上のように、倫理学における「諸方法」の解釈をめぐる見解の相違に加え、「実践理性の二元性」を認めざるを得なかったシジウィックと功利主義も利己主義という基本原理へと還元されることを主張したバラットとの対立、これこそエッジワースが「論争」と呼んだシジウィック＝バラット論争の基本構図である。

#### 4-2. シジウィック＝バラット論争と『倫理学の新方法と旧方法』

エッジワースが1877年に出版した書物の正式表題は、『倫理学の新方法と旧方法、ある

<sup>6</sup> バラットは、1878年の『マインド』誌に、「倫理学と精神発生学」(*Ethics and Psychogony*)を掲載した。このなかで彼は、『倫理学の諸方法』が第2版になってかなりの部分が変わったことを認める一方で、シジウィックが心理学や倫理学の側面から精神発生学について考慮していないと主張した(Barratt 1878, 277)。

いは『物理倫理学』と『倫理学の諸方法』であり、同書は前節で基本構造を明らかにしたシジウィック＝バラット論争を取り上げた著作である(Keynes 1933, 256/訳 33)。同書は、その表題が示すように、『物理倫理学』においてバラットが示した方法を「新方法」と、そして『倫理学の諸方法』においてシジウィックが示した方法を「旧方法」と位置づけているが、必ずしも前者を後者に優る方法であると論じているわけではない。

同書において、エッジワースはまず、バラットの倫理学への物理科学的方法の導入について懐疑的な立場をとる。その懐疑は、第一に、この方法の適用範囲にある。かりに快樂と苦痛とを物理的刺激に基づいて把握できるのであれば、単純な有機体や自然の力にまでその適用範囲を拡大できるはずであり、人間や動物の行動に適用範囲を限定するバラットの方法は恣意的なもの、とエッジワースは認める(Edgeworth 1877, 3)。さらに、たとえその適用範囲を認めるとしても、バラットの方法では、人間の無意識的な行動をうまく説明できないうえ、行為の動機となる快樂は物理的刺激によって経験されるため、みずからの意識のなかに生じる感情（意識的感情）としての快樂を含むことはできない。さらなる懐疑は、物理的刺激によって把握できる快樂をあらゆる人間行動の動機としたとき、非快樂的なことを選好する行為の存在が物理倫理学にとって難問となる点にある。この難問を回避するためには非快樂を選好する行為をありえないこととして説明しなければならないが、エッジワースによれば、バラットはこの命題について明確には検証していない(*ibid.*, 5)。エッジワースは、この非快樂的選好は、「先祖伝来の習慣」で、確かに存在するものと主張するが、これにたいして、バラットは「倫理学と精神発生学」(Ethics and Psychogony, 1878)において、この「習慣」も一般的な快樂主義的法則の例外や変容ではなく、習慣的な行為もその帰結はともかくとして、その行為にたいする欲望という快樂から生じるものと、エッジワースに反論した。また、意識的感情としての快樂が自分の方法のなかに含むことはできないとする見解も不適切であり、自発的な快樂や苦痛も「心理＝化学的に」(psycho-chemically)、つまり心理学と化学とを結びつけることなどによって、直接的に把握可能となる、とバラットはエッジワースに異を唱えた(Barratt 1878, 281)。このように、エッジワースも『倫理学の新方法と旧方法』を通じて、シジウィック＝バラット論争のなかに取り込まれていくこととなった。

しかしながら、エッジワースは必ずしも全面的にバラットの方法を疑わしく思っていたわけではない。上述のような懐疑点があるとしても、いくつかの条件（仮定）さえ満たすことができれば、バラットのいう物理倫理学には可能性がある、とエッジワースは考えてい

た。とりわけエッジワースが重要視した条件とは、生理学的に非快楽的行為の脳的要因をつきとめることが可能であるということ、そして、会話をつかさどる脳の一部の欠損が知的退行を招くことが研究されているように、生理学によって義務とそれをつかさどる物質的条件を確かめることができること、である(Edgeworth 1877, 14-18)<sup>7</sup>。

これらの仮定が必要なために物理倫理学は「もろい建造物」のようにみえるかもしれないが、これらの仮定を容易に転覆させることもまた難しい、とエッジワースは述べている(*ibid.*, 17-18)。たとえば、生理学にかかわる条件にかんしては、実際に道徳的行為者を解剖してその脳を調べることはできないとはいえ、比較解剖学の分野において知性や意思作用と脳の大きさの個人差とを関連づける研究がなされている状況を考えれば<sup>8</sup>、近視眼的には倫理学の方法としてまだまだ「曙光」(dawn)の状態とはいえ(*ibid.*, 22)、物理倫理学にも可能性がまったくないわけではない、と彼は主張する。

「物理倫理学が必要とする一層の仮定は、多くの人びとにとって、物理倫理学が行き過ぎているように(*reduction ad absurdum*)思えるだろう。同時に、なかには、物理学的な導出という光源からのかすかな光が倫理学的研究の暗い箇所を照らしはじめてるように見える人びともいることだろう」(*ibid.*, 20)。

さらに、エッジワースは、自然科学と倫理学との間には科学的な隔たりを根拠とする後者への物理科学的手法導入否定論にも対峙し、演繹科学が異なる現象の組み合わせから演繹可能であることを強調した(*ibid.*, 18)。すなわち、バラットが音響学における空気の振動と音の印象とを結びつけて考えたように、エッジワースは物理学と倫理学という二つの学問領域の橋渡しをする一つの法則に注目をしたのである。

エッジワースが注目をしたのは、当時ドイツで興隆しはじめていた感覚の強度(感覚量)を刺激強度(刺激量)から演繹する実験心理学(精神物理学)における「フェヒナーの法則」(Fechner's Law)であった<sup>9</sup>。簡単に述べると、フェヒナーの法則は、感覚量を $\gamma$ 、刺激

<sup>7</sup> このような考えは、fMRIなどによる脳の血流量測定を感情や感覚の定量的分析と結びつける今日の神経経済学に類似している(Cammere, Loewenstein and Prelec 2005, 9; 江頭 2010, 308n)。

<sup>8</sup> この叙述にかんして、エッジワースはヴントの『物理学的心理学』に依拠している(Edgeworth 1877, 20n)。

<sup>9</sup> フェヒナーは、物質的な世界を通じて精神的な世界は理解される、との考えから、同じ

量を $y$ 、丁度可知差異(just noticeable difference)を $\kappa$ 、刺激閾を $\beta$ としたとき、 $\gamma = \kappa(\log y - \log \beta)$ という関係であらわされる。ここで刺激閾とは、それよりも弱くすると刺激を感じなくなる刺激量の値のことであり、また丁度可知差異とは刺激閾から少しずつ刺激を増減して、はじめてその増減を感じる際の刺激の増減量のことを指す<sup>10</sup>。

「功利主義を吟味するにあたって生じる計量的問題」(Keynes 1933, 256/訳 339)は、このフェヒナーの法則を快樂計算法へと応用することによって可能となり、所与の刺激から最大量の快樂を生み出すために好ましい諸条件を演繹可能にする「准フェヒナーの法則」(quansi-Fechnerian Law)とみずから称した快樂測定公式 $\pi = \kappa|f(y) - f(\beta)|$ を提示する(Edgeowrth 1877, 42)。この場合、 $\pi$ は快樂刺激にたいする感覚量、 $\kappa$ は快樂受容能力、 $y$ は快樂刺激の量、 $\beta$ は快樂刺激の刺激閾であり、この式は、快樂感覚量を快樂刺激量について一階微分すると正、二階微分すると負という性質をもつ。つまり、エッジワースは、「フェヒナーの法則」を快樂感覚量と快樂刺激量との関係に置き換えている。もっとも「フェヒナーの法則」をそのまま転用したわけではなく、「フェヒナーの法則」においては定数として扱われた $\kappa$ や $\beta$ を、ヘルムホルツやデルブーフらによる「フェヒナーの法則」への修正を受容することによって、これらを変化しうる係数と位置づけた。

客観的に快樂を測定できるというエッジワースの意図を具現化したこの関数式の背景には、功利主義を考えるうえでの重要な問題、すなわちミルのように快樂の質の差を考える功利主義にたいするエッジワースなりの解答を含んでいる。たとえば、ケーキを食する

---

くドイツの生理学者ヴェーバー(Ernst Heinrich Weber, 1795-1878)の研究を出発点として、「精神物理学」を打ち立てた。『精神物理学』(*Elemente der Psychophysik*, 1860)に代表されるフェヒナーの研究は、心理学者ヴントに影響を与えた。ドイツ実験心理学については、1879年に世界最初の倫理学実験室をライプチヒに創設したヴント、あるいは、もう少し遡ってフェヒナーの『精神物理学』をその創始と評価されている(今田 1962, 180-84)。<sup>10</sup> ここで、はじめに与えられる刺激量を $y$ 、わずかに知覚できる刺激量の増分を $dy$ とすれば、 $y$ と $dy$ との比率は常に一定であり、 $dy/y = \kappa$ とあらわすことができる。これを「ヴェーバーの法則」(Weber's Law)といい、 $\kappa$ が丁度可知差異である。いま、刺激量 $y$ にたいする感覚量を $\gamma$ 、 $dy$ による感覚量の増加を $d\gamma$ とすれば、 $d\gamma = \kappa dy/y$ となり、これがフェヒナーの基本公式となった。丁度可知差異1回を感覚量1として測定すれば、刺激の一定比が増加するごとに感覚量1が増加するので、感覚量 $\gamma$ が1, 2, 3, ...,  $n$ と増加するためには、刺激量 $y$ は、 $(1+\kappa)$ ,  $(1+\kappa)^2$ ,  $(1+\kappa)^3$ , ...,  $(1+\kappa)^n$ , と増加せねばならず、この関係は $\gamma = \log y$ である。しかし、刺激量が少なすぎると感覚は生じないので、識閾(はじめて刺激を感じる際の刺激の強さ)を $\beta$ とすれば、感覚の強度は、識閾の感覚から今与えられている感覚に達するまでの丁度可知差異の数によって表される。これによって、 $\gamma = \kappa(\log y - \log \beta) = \kappa \log y / \beta$ という数式が成立し、フェヒナーの法則に基づく感覚の測定公式が導出される(今田 1962, 186-87; 外林他 1981, 173l; 316r; 388l)。

快樂と高潔な行為をおこなう快樂との比較を考えるにあたって、これを可とする功利主義と——ミルのように快樂の質の問題へといざなうことによって——否とする功利主義とが存在していた。エッジワースによれば、快樂に質の差があるように思えるのは、快樂量に桁がまったく異なるほどの大きな開きがあるためで、どのような快樂にたいしても同一単位計測可能性を肯定できる。そして、このような考えこそ、二つの立場の功利主義の「中道」であるともエッジワースは述べている(*ibid.*, 26)。この考えは、上述の「准フェヒナーの法則」において、 $t$ を時間要素としたとき、「時間要素 1 単位あたりの 1 感覚要素」として  $\pi dt$  によってあらわすことが可能であり、彼は快樂の基数的個人比較を容認したのである。

エッジワースはこのように与えられる快樂測定公式において、 $\kappa$ および $\beta$ が各個人によって異なることが考えられるため、これらの変化に応じて、最大量の快樂を生じるために一定量の刺激を所与の諸個人の間でどのように分配すべきか、という問題を検証した。この検証において、彼はラグランジュ未定乗数法を用い<sup>11</sup>、その結論として、 $\kappa$ および $\beta$ が各個人によって等しい場合にのみ「平等分配」がふさわしく、そうでない場合には「より大きな快樂受容能力をもつものには、より多く快樂をもたらす財産を分け与えるべきである」(*ibid.*, 47)ことを導き出した。そして、彼は平等分配が導きだされる事例を不平等分配の「特殊事例」と位置づけ、「すべてのものを同じものと数え」(*ibid.*, 55)、平等性へと導くベンサム主義の一側面を否定する立場——精密功利主義(*exact Utilitarianism*)——を表明したのである。この立場は、のちの『数理精神科学』においても継承されることになる。

シジウィック=バラット論争におけるもう一つの論点であった「実践理性の二元性」にもエッジワースは目を向け、基本的にシジウィックの実践理性についての定義を容認したうえで、道徳感情の「進化」(*evolution*)という概念によって、これを功利主義側へと統合しようとした。すなわち、彼は、「利己主義者も一般的善を求める欲求を涵養する力と動機とをもちえよう。実際、純粋な功利主義者ほどにではなくても、進化するなかで数世代のうちには、純粋な功利主義者にかぎりなく近づいた功利主義者になるだろう」と主張している(*ibid.*, 33)。ここでエッジワースのいう道徳感情の進化とは、彼が普遍的幸福は洗練した人びとの間に生じると述べていることにしたがえば(*ibid.*, 33)、具体的には社会的・階層的進歩にともなう利他的感情の拡大を意味している。これは、「実践理性の二元性」の

<sup>11</sup> クリーディーの指摘では、このエッジワースによるラグランジュ未定乗数法の使用は、社会科学におけるもっとも早い事例である(Creedy 1980b, 371)。

解決方法についての正確な説明というよりもエッジワースの期待とも受け取れるのだが、この解決方法は——後述することになるが——『数理精神科学』において、別のツールを用いて再論されることとなる。

このように、『倫理学の新方法と旧方法』におけるエッジワースは、バラットの倫理学の物理科学化の将来的な可能性を認めた一方で、「実践理性の二元性」をめぐっては、シジウィックともバラットとも異なる結論を導き出していた。

3章で述べたように、『倫理学の新方法と旧方法』出版後、エッジワースは、のちに『数理精神科学』第Ⅱ部「功利主義的計算法」として再録される「快樂主義的計算法」(1879)を発表する。『倫理学の新方法と旧方法』同様、「快樂主義的計算法」においても、エッジワースは、快樂の増加率が逓減的であることを公準としており、みずからの快樂概念をそのまま継承し続けた。この「快樂主義的計算法」発表後、サリーを介してジェヴォンズと知り合い、エッジワースの経済学研究が開始される。これによって、エッジワースは、効用を「強度」と「時間」という二つの次元によって把握する概念や初歩的な加算的効用関数形をジェヴォンズの『経済学の理論』から引き(Edgeworth 1881, 7; 20)、さらにこれらの効用概念をみずからの快樂概念と連結させることが可能となった。つまり、ジェヴォンズの影響によって、それまでの「功利主義による哲学的=倫理的アプローチ」、そして「精神物理学的アプローチ」に加えて、「限界効用理論に立脚した経済学的アプローチ」という新しい説明ツールを手にしたのである(福岡 1999, 180)。

#### 4-3. エッジワースによるシジウィック=バラット論争への解答

前節において言及したシジウィック=バラット論争とエッジワースの『数理精神科学』——序文、第Ⅰ部、第Ⅱ部（経済的計算法、功利主義的計算法）、付録7編から構成される——との間にいかなる関係が存在するのか、を明らかにすることが本節の目的である。

エッジワースは、上述したように、『数理精神科学』の序文において、シジウィックの『倫理学の諸方法』を意識した叙述をおこなっている。

「快樂の計算法（第Ⅱ部）は、二種類——経済的計算法および功利主義的計算法——とに分割することができる。この分割の原理は、シジウィック氏の「倫理的諸方法」への補足を提示している」(Edgeworth 1881, v)。

さらに彼は、『数理精神科学』第Ⅱ部の導入において、シジウィックの快樂主義の区分が徹底されたものではない、と述べている。エッジワースによれば、「純粹利己主義的な方法と純粹功利主義的な方法という両極端な方法の間には無限の数の非純粹的な方法が存在する」(ibid., 16)ため、ある主体の道徳的構造がこれら二つの方法の混合状態(μικτήρις)をとる可能性も十分に考えられる。このため、エッジワースが目指したのは、次のことである。すなわち、純粹功利主義者は、「自制」(self-limitation)の原理に基づいて、競争者に博愛(benevolence)を与えることが有益であると考え、逆にたとえ「演繹的な利己主義者」(Deductive Egoist)であっても功利主義的計算法を必要とする、換言すれば、いかなる道徳的構造をもつ人間であっても功利主義という実践理性を必要とする、ということである。これらを分析することが『数理精神科学』の「経済的計算法」の真の目的であった。

エッジワースは、「経済的計算法」において数学的手法を取り入れるため、『数理精神科学』第Ⅰ部において、数理科学と道徳科学との間における類似性を指摘し、また物理科学におけるエネルギーと道徳科学における快樂の役割を同じものとみなす。これは、『倫理学の新方法と旧方法』において提示した「精神物理学的アプローチ」をさらに補強しようとする彼の試みである。

エッジワースが、数理科学同様に、道徳科学にも数学を適用しようとするのは、文章による演繹的説明が枝葉末節な点で批判を浴びやすく、数学を用いた方がより明確かつ論理的な説明が可能になるとの考えに基づいており、これら両科学の類似性は、「一般的様相の類似」と「とくに顕著な特徴の類似」という二点から指摘された。

前者の「一般的様相の類似」については、第一に、数学的推論が「量的資料」(quantitative data)のみでも適用可能であること、第二に、最大化問題が主たる研究対象であること、第三に、尺度単位が存在すること、から論じられる。

第一に、エッジワースによれば、「数字的資料」(numerical data)でなくとも「量的資料」さえあれば数学的推論を適用できる。「数字的資料」とは、その名のとおり、数字(数値)によって示された資料のことであるが、たとえこのような資料がなくとも、大小、多少、増減、正負、最大最小といった量的関係のみを把握した資料によっても数学的推論は可能である<sup>12</sup>。

次に、このように推奨される「量的資料」による数学的推論は、たとえば流体力学や物

<sup>12</sup> この自明な一例は、「 $a$ は $b$ より大きく、 $b$ は $c$ より大きい、それゆえに $a$ は $c$ より大きい」という三段論法である(Edgeworth 1881, 2)。

理学における最大化問題に用いられるが、この際、われわれは数字で示された資料ではなく、その量の「増加率の減少」(*decrease of rate of increase*)に注目する(*ibid.*, 6)。この最大化問題は数理科学のみならず、道徳科学においても主たる研究対象である。というのも、道徳科学の範疇に含まれる経済学は、「最大効用を各々が生じるような諸要因の取り決め」を、政治学や(功利主義的)倫理学は「総効用の合計の最大をもたらす取り決め」を研究するからである(*ibid.*, 6-7)。したがって、これらの学問は、変分法と同様、「曖昧な量的関係」から最大を確定するため、「数学という[数理科学と]同じ手法を用いなくてもよい理由はどこにもない」(*ibid.*, 7)。

最期に、エッジワースはジェヴォンズにしたがって、効用に「強度」と「時間」という二つの次元があり、これらの次元の単位はそれぞれ、「わずかにでも知覚可能な増分」(*ibid.*, 7)と定義づける。これによって、「時間1単位の間、快樂強度1単位を経験する個人」(*ibid.*, 8)を1と数えることができる。これは数式でこそ明示してはいないが、『倫理学の新方法と旧方法』において提示した「准フェヒナーの法則」における快樂単位の考えと同じである。そして、ここに「数」という三つ目の単位が出現することによって、個人間、あるいは集団間での効用比較も可能となる。つまり、エッジワースは基数的効用概念を容認し、より多くの強度、時間、数を有する快樂をより大きなものとして扱えるとしているのである<sup>13</sup>。

ここで問題となるのは、「時間」や「数」はそれぞれ時計やセンサス(census)によって把握可能であるのにたいして、「強度」については「客観性という信頼できる基礎」から離れていることである(*ibid.*, 8)。この点についてエッジワースは次のように述べ、第一の類似に関連づけ、序数的効用に通じる概念にも触れることによって、解決しようとしているように思われる。

「快樂の原子は識別することも認識することも容易ではない。それは砂よりも連続的であるが、液体よりも不連続なものである……／われわれは人生の黄金の砂を数え上げることはできない。われわれは限りない愛の「無数の微笑み」を数えることもできない。しかし、ある場合にはより大きな、他の場合にはより小さな快樂単位の集ま

<sup>13</sup> 他者の効用測定について、エッジワースは、より多くの観察を得ることによって、つまり、より広範な平均(wider average)によって、その不確実性を補正することができることを考えた。「これはまさに、確率論にしたがって、決して完全ではない機器を用いたとしても、より多くの観察によってより十分な正確さを獲得できることと同じである」(Edgeworth 1881, 102)。

り、[すなわち] 幸福の量があることを観察できるように思われる。そして、それで十分なのである」(ibid., 8-9)<sup>14</sup>。

以上の三点からなる「一般的様相の類似」は、文字通り、あくまで数理科学と道德科学との間の外観上の類似である。これらの類似以上にエッジワースが「とくに顕著な特徴の類似」、すなわち本質的な類似とみなしたのは、それぞれの科学において「エネルギー」と「快樂」とが果たす役割である。数理物理学や力学における中心概念は「エネルギー」であり、その主要な研究対象は「最大エネルギー」である。これは道德科学において合理的行動の目的とされる「最大快樂」に類似している。何より、本来視認することのできない電気エネルギーの最大問題ですら、ラグランジュ未定乗数法を用いることによって理解できるようになったのであれば、快樂エネルギーも同様に扱うことができるはずである。彼は、このような考えのもと、それぞれの領域における「エネルギー」と「快樂」の役割を同じものとみなすことが可能なため、「快樂はエネルギーと同一事象(concomitant)である」(ibid., 9)という特殊な想定を採用する。そして、「少なくとも、人間を快樂機械とみなす概念は、社会科学における力学的用語および数学的推論の使用を正当化し、促進することだろう」(ibid., 15)というこの有名な句をもって、エッジワースは、明確に道德科学への数学的方法の導入を推奨すると同時に、「経済的計算法」における、みずからの「ダイアグラム」分析においても数学的方法を用いたのである。

エッジワース自身の「ダイアグラム」分析については、すでに1章において述べているので、ここでは簡単にその本質についてのみ再論しておく。彼は、あらゆる契約取引者が——経済学で考えられるような純粹に自己利益を追求する——利己主義者であること、自由な情報交換が存在すること、そして完全な競争フィールドに必要な四つの条件が満たされていることを仮定したうえで、ロビンソン・クルーソーとフライデーとの間の労働契約について考えた。このとき、契約の不確定性は、この競争フィールドに参加するクルーソーとフライデーの(クローンの)数が少なければ少ないほど増大し、逆に彼らの数が多ければ多いほど減少する——契約がより確定性を増す。そして、彼らの数が無限に達したとき、経済学における完全競争状態となり、契約は一点に確定される。エッジワースが参考とし

<sup>14</sup> 清水(1972)は、このエッジワースの叙述を序数的効用概念とみなしている(清水 1972, 126)。しかし、本稿終章でみるように、エッジワースは必ずしも序数的効用理論を積極的には認めていない。ここでの議論において、エッジワースがより重要かつ優先したのは、道德科学への数学的手法の導入であったのだろう。

たジェヴォンズの交換理論では、「無差別の法則」（一物一価の法則）によって交換比率が——どのような状況においても——一意に決定されてしまうのにたいして、エッジワースの契約理論的説明においては、完全競争状態を除いて、交換比率は一意ではなく、ここにエッジワースによるジェヴォンズ批判がみられる、といってもよい。

この契約につきまとう不確定性は、各々の取引者の効用と社会全体の効用が同時に最大となる「功利主義的取り決め」を選択するという仲裁原理によって回避され、契約はこの「取り決め」が示す「功利主義的な点」において達成される。この「功利主義的な点」は自分の効用と「有効同感係数」によってウェイトづけした他者の効用との和を最大にする点であり、エッジワースによるこれらの論証は、いかに純粋な利己主義者——エッジワースの言葉では「演繹的な利己主義者」——が存在したとしても、功利主義という実践理性なしでは行為できないことを意味している。

この論証のなかに、シジウィック＝バラット論争の焦点の一つとなった「実践理性の二元性」問題にたいするエッジワースの解答が提示されている。シジウィックが「利己主義」と「功利主義」との間の一致を「宗教」と「同感」という二つの観点から検討したのにたいして、エッジワースは「宗教」に頼る必要も、また、かつて『倫理学の新方法と旧方法』において持ちだした「進化」への期待に直接的に頼る必要もなくなったのである<sup>15</sup>。彼が「経済的計算法」において成功したのは、『倫理学の新方法と旧方法』の時とは異なる新しいツール、すなわち、経済学的な契約理論の説明を通じて導きだした「同感」による「実践理性の二元性」の統合である。この意味において、エッジワースの議論は、たしかに、「功利主義の人間観を修正し利他心を組み込む……試み」であったと評価されよう。これとともに、彼の論証には、功利主義を利己主義の一種とみなし、利己主義こそ人間の本質的性向と主張したバラットへの反駁をも含んでいることも理解せねばならない。人間を利己的とみなす経済学は、バラットが本質的な人間の性向とした利己主義を実践理性とする者のみで構成される社会を仮想し、その帰結を分析するために便利なツールであった。この分析の結果、バラットの主張とは逆に功利主義こそ人間の本質的性向であることを導き出したエッジワースは、この功利主義の中身についても考えなければならぬため、「経済的計算法」に続いて、すでに「快樂主義的計算法」として発表していた「功利主義的計

<sup>15</sup> 「宗教の重要性を軽視することは断じて快樂にかんする哲学が意図するところではないが、現在の研究において、そして人間本性のより低い要素の取り扱いにおいて、われわれは利己心の原理から功利主義の原理、あるいは少なくともその実践へのより明白な変転、より現実的な移行を求めるべきである」(Edgeworth 1881, 52-53)。

算法」が必要となる。このように、「功利主義的計算法」は「経済的計算法」に下支えされてその意義を果たす議論であり、言い換えれば、『数理精神科学』は「快樂主義的計算法」を論理補強した、まさに完成形なのである。

エッジワースが考える「功利主義」については「功利主義的な点」にかんする彼の叙述のなかにすでにヒントがある。われわれは、エッジワースの「功利主義的な点」が、量的に平等な分配（「量的中庸」(quantitative mean)）ではないことに注意しなければならない。彼は、この「量的中庸」が「功利主義的な点」の近傍に存在する可能性を認めるものの、これを「功利主義的な点」とはみなさない。この二つがしばしば同じものとみなされるのは、「功利主義的」という言葉のなかに「平等性」が暗黙的に了解されているためであると主張するエッジワースは、「質的中庸」(qualitative mean)こそ「功利主義的公正」であると「経済的計算法」の末尾において示唆している。「量的中庸」と「質的中庸」という二つの「中庸概念」を比較したとき、エッジワースが用いる「功利主義」あるいは「功利主義的」という言葉の内側には独特の概念が含まれていることは明らかである。彼が考える「功利主義」あるいは「功利主義的」とはどのようなものなのか。これについては、「功利主義的計算法」に委ねられる。

#### 4-4. エッジワースの「精密功利主義」

エッジワースは、『数理精神科学』序文において、「功利主義的計算法」の概要について簡単に触れている。そのなかで彼は、この計算法のテーマを、行為の目的としての「最大幸福原理」の証明、そしてシジウィックの功利主義の批判的取り扱い、としている。より具体的には次のとおりである。

「〔私は〕功利主義のなかに必然的に平等性が含まれるという想定を否定する。なぜならば、感覚を有する人たちの幸福にたいする受容能力が異なるならば……諸状況の平等がもっとも幸福をもたらす取り決めであるとは想定できないからである」(*ibid.*, vii)。

このように、彼は明らかに功利主義の暗黙的了解である「平等性」を容認しておらず、この主張は前著から継続しておこなわれている。このような立場をとるのは、彼がシジウィックの『倫理学の諸方法』をはじめ、ベンサム主義的な功利主義思想にたいして疑念を抱い

ていたからにはほかならない。

エッジワースは、ベンサムが人間の行為の目的に精密な数量的手法を適用しようとしたことについては高い評価を与えている(*ibid.*, 117)。しかしながら、最大幸福原理をあらわす「最大多数の最大幸福」という語句の解釈について、彼は独自の見解をもって批判的にとらえた。すなわち、彼はランプをたとえとして、「(より多くの燃料を与えられた)少数のランプが得る大きな光を想像すれば……その基準は確かな意味合いを与えるのか」(*ibid.*, 117-18)と述べる。このランプのたとえは『倫理学の新方法と旧方法』においても見出され、さらにこのたとえにたいする答えも、「限られた数の最良の火口(burners)にあかりを灯すべきであり、もっとも多くの燃料は最良のランプに投じられるべきである」(Edgeworth 1877, 74)と提示されている。これをもって彼が意味しようとするのは、一定量の分配物(distribuend)が一定数の分配者(distributes)に与えられるとき、少数の者が分配物の大部分を所有することによって、集団全体の総幸福が最大になることもありうる、ということである。当然のことながら、このような分配による幸福最大化を肯定するためには、ランプの性能に優劣があること、言い換えれば、個人の幸福にたいする受容能力に大小があることが前提である。このとき、平等分配は、エッジワースが『倫理学の新方法と旧方法』ですでに指摘しているように、個人の幸福にたいする受容能力が等しい場合にかぎり容認される。

シジウィックは、エッジワースが引用して指摘するように(Edgeworth 1881, 124)、「同じように幸せになるために、なかにはより多くの〔分配物〕を必要とする人間もおり、あまり〔分配物〕を必要としない人間もいるのである」(Sidgwick 1877a, 256n)と述べており、個人の幸福にたいする受容能力の差異には目を向けていた。さらにシジウィックは、分配問題において、最大幸福を得るために平等に分配されるべきは「幸福をもたらす財産」(means of happiness)ではなく、「幸福」そのものであるとも主張する(Sidgwick 1877a, 385n)。エッジワースやシジウィックのように、個人の受容能力の差異を認めるとき、最大幸福を達成するためには財産はもちろん、幸福も平等に分配されるべきではない。ところがシジウィックは、この個人の受容能力の差異を考慮する快樂主義的計算法をその複雑さゆえに不明瞭であるとしたために、「功利主義原則はこの問題に何も解答を与えない」(*ibid.*, 384)と消極的な姿勢を取った。これと同時にシジウィックは、以下のように述べることで、ベンサム主義を容認するにいたる。

「ほとんどの功利主義者が暗黙のうちに、あるいは明白に適用している原理は、純粹平等の原理である。それはベンサムの定式において与えられているように、『すべての人は一人とみなされ、誰も一人以上とみなされない』ということである。そして、この原理は明らかにもっとも単純で、特別な正当化を必要としない唯一のものである。なぜなら……その人間の扱いを違えなければならぬ明白な根拠がなければ、他の人間と同じ方法でその人を扱うことが合理的であるに違いないからである」(ibid., 385)。

このシジウィックの立場を「矛盾」とみなしたエッジワースは、「功利主義的計算法」において、功利主義における「最大幸福原理」についての精密化をはかった。

エッジワースはまず、次の四つの定義(definitions)を羅列的に提示する。

- (1)「快樂〔という言葉は〕一般的に『好ましい感情』にたいして用いられる」(Edgeworth 1879, 394; Edgeworth 1881, 56)。
- (2)「財産(*means*)は快樂の分配を可能にする近似手段である」(Edgeworth 1879, 394; Edgeworth 1881, 57)。
- (3)「同量の任意の財産にたいして、より大きな快樂量を獲得する、そしてまた(同量の)任意の財産の同じ増分にたいして、より大きな快樂量を獲得するならば、その個人は他者よりも幸福にたいする受容能力が大きい」(Edgeworth 1879, 395; Edgeworth 1881, 57)。
- (4)「同量の任意の労働がなされたとき、こうむった疲労量がより少ない、そしてまた(同量の)任意の労働の同じ増分にたいして、こうむった疲労の増分がより少ないならば、その個人は他者よりも労働の受容能力が大きい」(Edgeworth 1879, 395-96; Edgeworth 1881, 59)。

ここで(3)と(4)は、「財産」と「労働」、「快樂」と「苦痛」を置き換えた正負関係にあり、エッジワースは(4)の現実性が自明であるため、これと逆の符号関係をとる(3)もまた現実的なものとして確立できるとする。

つづいてエッジワースは、「快樂は測定可能であり、あらゆる快樂は同一単位で計測可能である」(Edgeworth 1879, 396; Edgeworth 1881, 59)ことを公理としてたてる。これは前

節で触れたように、「准フェヒナーの法則」によって保障され、快樂の基数的な個人間比較を容認する。

このような諸定義や公理のもとにおいて、快樂の増分は財産が増加するにつれて減少すると考えられるため、それぞれの個人がゼロの幸福状態にあるのに必要な最小限の財産を保有していることを前提とすれば(Edgeworth 1879, 398; Edgeworth 1881, 63-64)<sup>16</sup>、財産の増分はもっとも快樂にたいする受容能力が大きい人に、その次の財産の増分は二番目に大きい受容能力をもつ人に与えられるだろう。このような方法によって分配がおこなわれれば、たとえ少数のものにのみ財産が分配されたとしても、彼らの快樂にたいする受容能力が大きいと、集団としての総快樂最大は達成される、というのがエッジワースの考えるところである。したがって、「一般的には、快樂にたいしてより大きな受容能力をもつ人がより多くの財産と快樂を得るべきである」(Edgeworth 1879, 398; Edgeworth 1881, 64)。同様に、疲労の増加は労働量が増加するにつれて増大すると考えられるため、労働の最初の増分はもっとも労働にたいする受容能力（苦痛にたいする耐性）が大きい人に、その次の労働の増分は二番目に大きい受容能力をもつ人に与えられるべきである。このようにして、エッジワースによれば、「労働にたいする受容能力がもっとも大きい人がより多くの労働をなすべき」(Edgeworth 1879, 399; Edgeworth 1881, 66)、つまり、労働に耐えられる人が多く労働するべきなのである。

ここで問題となるのは、いかにして個人の快樂や労働にたいする受容能力を確かめることができるのか、ということである。この点について、エッジワースは、これら二つの受容能力は釣り合いをとりながら、進化と共に増大する、という見解を唱える(Edgeworth 1879, 400; Edgeworth 1881, 68)。この考えは、ハーバート・スペンサー(Herbert Spencer, 1820-1903)やバラットにしたがったものである。これはたとえば、『倫理学の新方法と旧方法』において、「進化とともに感情はより強いものとなる」としたスペンサーを援用しながら、その感情とともに快樂を感じる資質、同感、美的感情、高潔さにたいする感覚もより大きくなると論じている点(Edgeworth 1877, 72)や『数理精神科学』において、「バラッ

<sup>16</sup> 同様の前提は、『倫理学の新方法と旧方法』においても、次のように、すでに見られる。「同じ量の資糧から 100 人の哲学者たちは 100 匹のカプチン猿(capuchin monkeys)よりもより多くの幸福を引き出すだろう。しかし、おそらく 100 匹の小猿を健康かつ幸福にしておくための資糧では 20 人の哲学者たちを養うこともできないだろう！このとき——フェヒナー [の法則の適用] に先立って——生活の必需品からなる『最低水準』(threshold)が存在し、それらすべては感覚が快樂を経験しはじめるより前に想定されなければならない」(Edgeworth 1877, 76)。

ト氏が述べるように、『進化の尺度において人間がより高等になればなるほど、快樂にたいする受容能力もより高いものになる、ということが（一般的に言って）事実であるように思われる』（Edgeworth 1879, 395; Edgeworth 1881, 58）とバラットを援用している点からも明らかである。

このような受容能力と進化との関係についての考えをエッジワースは教育にも適用し、結論として、同じ程度の進化によって人間全体が進歩することは望ましいものの、これを達成するためにすべての人びとに同じ教育を与えることには反対した。「というのも、進化の序列においてもっとも高度なものが教育と改善をもっとも受け入れるものであることがもっともらしいからである。一般的な進歩において、もっとも進歩した人間がもっとも多く進歩する」（Edgeworth 1879, 400; Edgeworth 1881, 68）というのが彼の考えであった。

しかしながら、快樂や労働にたいする受容能力が教育によって後天的に増大する（あるいは減少する）ことはないのであろうか。この疑問についてエッジワースは、「遺伝について知られていることに直面すれば、まったく主張することはできない」（Edgeworth 1879, 395; Edgeworth 1881, 59）と取り合おうとはしない。同様の主張はこれだけにとどまらない。遺传的選択の働きのために——族内婚が指導されないかぎり——、親世代の受容能力が優れていることがその世代にとって、そしてその後のあらゆる世代にとっても有益である、とも彼は述べている (*ibid.*, 70-71)。『倫理学の新方法と旧方法』において社会的・階層的進歩を指していたエッジワースの「進化」概念は、『数理精神科学』にいたって——より正確には 1879 年の「快樂主義的計算法」にいたって——、ゴールトンの『遺伝的天才』 (*Hereditary Genius*, 1869) からの引用が垣間見られるように (Edgeworth 1879, 402; Edgeworth 1881, 72; Galton 1869, 415)、優生学的な思考を内包するようになる。同階層においても各個人の受容能力には多少の差異が存在するが、全体的な傾向として遺传的に優れた受容能力を受け継ぐ人びとが上層階級であり、彼らはより進歩することが可能である。これこそがエッジワースの「進化」概念であった。

このようにして快樂や労働にたいする受容能力は、全体としては階級差によって、また細かくは個人によって各々異なるため、「功利主義」の暗黙的了解である「平等性」がそのまま「分配的正義」とはなりえない。『倫理学の新方法と旧方法』においてすでに主張したとおり、財産の不平等分配が最大幸福をもたらすための「分配的正義」として適切なのである。エッジワースは、「平等性」という語句がもつ力を、ホメーロスが『イーリアス』のなかで描いたゼウスにたとえる。

「ゼウスは幾多の城壁をすでに地上に打ち崩し、この後続きて崩すべし、ゼウスの神威はものすごし」(Edgeworth 1879, 405; Edgeworth 1881, 77)<sup>17</sup>。

エッジワースにとって、「平等性」によってうち崩されるように思えたのは、「慣行 (convention) という外壁」であるが、この「慣行」こそが「適切な不平等分配」のために社会的に重要なものである、と説明される。

ここでエッジワースのいう慣行とは、具体的には、階級差や性差である。たとえば、階級の存在を考えたとき、貴族たちがより多くの報酬を得るのは、快樂にたいする受容能力の大きいものが同時に兼ね備える優れた技能と豊かさ才能とを有するためである。逆に下層階級には、彼らにとってもっとも可能であるように思われる仕事（肉体労働）が割り当てられる。また、女性が厳しい労働から免除されるのも、労働にたいする受容能力のより大きな強者、すなわち男性がより多くの労働をすべきだからである<sup>18</sup>。これらの慣行には、経済学が与える以上に、功利主義的な根拠が存在する、とエッジワースは主張する。「将来社会の階級について、常識は平等なユートピアをまったく期待しない」(Edgeworth 1879, 407; Edgeworth 1881, 79)と述べるエッジワースの目には、「生活にかんする競争の原理」が「功利主義的選択」(utilitarian selection)へと人びとを導くように映ったのである。

以上で説明されたような功利主義をエッジワースは「精密功利主義」(exact Utilitarianism)と呼んだ。そして、この「精密功利主義」は政治学の目的を与える、と彼はいう。利害衝突を調整するための政治的契約は、彼によると、二つの性質を備えていなければならない。第一に、明確で確固たるものであり、普遍的に同じ意味において解釈されなければならない性質、第二に、現状よりも別の契約によってより良い生活を送れる、と能力に優れた階級（上層階級）が考えることのないようにする性質である。この二つの性質を考えたとき、エッジワースは二つの功利主義の適用が可能であるとする。すなわち、「万民同等的功利主義」(isocratical Utilitarianism)と「精密功利主義」あるいは「貴族制的功利主義」(aristocratical Utilitarianism)である。前者は「平等性」を重視する功利主義であるため、第一の性質において優れており、後者は不平等性を認めるため、第二の性

<sup>17</sup> 邦訳については、土井晩翠訳(1995, 56)を参考とした。

<sup>18</sup> しかしながら、このような「思いやり」は同性の強者から弱者へは与えられることはない。なぜなら、同性同士の場合、博愛へと向かわせる自然的本能が欠如しがちであり。「思いやり」という義務を感じさせるために必要な「強さ」という規準も曖昧である、とエッジワースは主張する(Edgeworth 1879, 406; Edgeworth 1881, 79)。

質において優れている。エッジワースが第二の性質を重視していることは、これまでの説明に加え、『あらゆる男性とあらゆる女性とを同じものと数える』原理は、まさに慎重に適用されるべき」(Edgeworth 1879, 407; Edgeworth 1881, 81)であり、そして「共産主義社会において（もしそのようなものがあるとすれば）、生産物の分配はオウエンの原理よりもフーリエの原理に基づくべき」(Edgeworth 1879, 407; Edgeworth 1881, 81)と述べていることから明らかである。また、彼は平等投票権ではなく、ミルが『代議制統治論』(*Considerations on Representative Government*, 1861)において主張した複数投票権が是認されるべきであるとした。これはエッジワースがミルの主張した賢明さに加えて、各個人の幸福にたいする受容能力を考慮したためであった。

『数理精神科学』の翌年、サンデー・トランプスの仲間スティーブンが出版した『倫理学の科学』への書評においても、エッジワースは以下のように同様の考えを持ち出している。

「『われわれには、他人の判断よりもある人間の判断に格別な重要性を割り当てるため……の根拠がないため、平均的な判断から生じる基準は劣った基準、あるいは価値の低い基準であるに違いない』[とスティーブンは述べている]。しかし、それぞれの感覚者の幸福を『同じものと数える』ことは……功利主義の第一原理とは別物である。獣的人間(brute)の感情は、愚者の見解と同様、勘定に入れるべきではあるが、ほとんど考慮すべきでない」(Edgeworth 1882a, 446-47)。

このようにエッジワースが「功利主義」あるいは「功利主義的」という言葉を用いるとき、その背後には、各個人の受容能力の差異の存在に基づいて名目的な「平等性」を否定的にとらえる「精密功利主義」、あるいは「貴族制的功利主義」が強調されているのである。

#### 4-5. 『数理精神科学』の真意とその評価

これまで述べてきたように、エッジワースの『数理精神科学』は、シジウィックやバラットを中心に、さまざまな知的源泉から生成された著作物であり、1879年の「快樂主義的計算法」の完成形ともいうべき著作であった。

1870年代後半のエッジワースの視線は、シジウィック=バラット論争を端緒として、「実

「実践理性の二元性」という問題に向けられていた。彼は『倫理学の新方法と旧方法』においては道德感情の進化という概念をもって、利己主義の功利主義の側への統合を主張した。ただし、この段階におけるエッジワースの解説は彼の期待ともいえるべきもので、「実践理性の二元性」の解決方法としては説得力を十分に有するものではなかった。

『倫理学の新方法と旧方法』から4年を経た『数理精神科学』においては、ジェヴォンズの限界効用理論に基づく交換理論を批判的に摂取しながら、より厳密な議論が展開された。エッジワースは、その際、「ダイアグラム」を利用することにより、利己主義者たちの間の契約には不確定性が存在し、その仲裁原理として功利主義が必要不可欠であることを結論した。しかし、彼の契約理論は、経済学という枠組みに収まるものではない。ここには、「実践理性の二元性」という問題が、市場における取引契約に内在する不確定性として認識されている。したがって、エッジワースが示したのは、シジウィックとバラットとも異なる、利己主義世界における利己主義適用上の限界と功利主義への統合という「実践理性の二元性」にたいする一つの解答でもあった<sup>19</sup>。

実践理性としての功利主義の重要性を明らかにすることによって、エッジワースの「快樂主義的計算法」は生きてくる。つまり、『数理精神科学』において、同質を前提とした個人についての議論（「経済的計算法」）から異質な個人から構成される社会全体についての議論（「功利主義的計算法」＝1879年の「快樂主義的計算法」）へと視点を移し、独自の功利主義論を展開することが可能となったのである。松嶋(1989, 43; 2005, 49)が認めるように、エッジワースはシジウィックを高く評価していたが<sup>20</sup>、ベンサム主義を採用したシジウィックの功利主義に納得していなかったことは本章4節において述べたとおりである。彼の功利主義は、バラットの倫理学の物理科学的手法に影響を受け、快樂の同一単位計測可能性を前提とした<sup>21</sup>。さらにスペンサーらの進化論にゴールトンからの影響を付加した優生学的な進化概念に基づいて、個人の快樂や労働にたいする受容能力の差異を強調したエッジワースは、「平等性」を批判し、各個人の受容能力に応じた財産の「不平等分配」こそ「分配的正義」とする。また彼は、ランプのたとえにみられるように、最低水準の幸

<sup>19</sup> 実際に彼は、「具体的な19世紀の人間の大部分が、非純粹利己主義者(*impure egoist*)であり、混合功利主義者(*mixed utilitarian*)である」という見解に賛同している(Edgeworth 1881, 104)。

<sup>20</sup> 「利己主義と功利主義との間の峻別は、シジウィック氏がその類まれなる手腕をもって引き出した」(Edgeworth 1881, 102)。

<sup>21</sup> 周知のとおり、このような考えは、個人間効用比較を否定したロビンズの批判対象となる(Robbins 1935, 84-85/訳 128-29)。

福が満たされていることを前提に、全体として効用が最大となるのであれば、分配の偏重を容認した。このような内容を含む彼の「精密功利主義」（「貴族制的功利主義」）は、シジウィックの功利主義にたいする補足であるのみならず、完全平等を仮定するベンサム主義的功利主義への批判であり、また、ミルのような快樂の質の差を考える功利主義にたいする反論でもあった。以上のようなエッジワースの考えは、のちの「課税の純粹理論」(1897)においても、一部その形を変えながら継承されることとなる。

この『数理精神科学』についての代表的な書評としては、マーシャルによるもの(Marshall 1881)とジェヴォンズによるもの(Jevons 1881)とが挙げられる。マーシャルは、その書評において——3章で言及したように、すでに「快樂主義的計算法」に目を通していたこともあってか——「経済的計算法」に注目し、エッジワースを「天才」と讃えたが、同時にその抽象的な議論の複雑さと数学的すぎる点を批判している。他方、マーシャルの書評とは対照的に「功利主義的計算法」を主に取り上げたジェヴォンズも、『数理精神科学』を非凡な著作と賞賛する一方で、エッジワースの議論に全面的に賛成したわけではなかった。たとえば、エッジワースの性差にかんする考えについては、オーストラリアに滞在した際に、アボリジニナルの夫が妻に荷物を運ばせ、これに妻が従わないときには夫から暴力を受ける光景を目にしたジェヴォンズは、「人類学者たちは今のところ原始社会における女性の不運な地位について理論的に納得させることにほとんど成功していない」(Jevons 1881, 582)と述べている。少なくともジェヴォンズは、エッジワースの慣行にかんする議論を厳格な公平性についてというよりも社会のヒエラルキーについてのものと評価した。

ジェヴォンズと同じく、アロー(Kenneth Joseph Arrow)のように、エッジワースの議論を社会階級というヒエラルキーの正当性を訴え、また性差の容認と理解する論者もいるが<sup>22</sup>、エッジワースにとっては当時の慣行こそ、上層階級と下層階級という二層社会を考えただけの場合、精密功利主義に基づいて肯定される以外のなにものでもなかった。実際、彼は、この精密功利主義的な基礎をもつ社会を、「最良のものへの一次近似である自然の景観」と評価し、その景観に感銘を受ける、とすら述べているのである(Edgeworth 1879, 408; Edgeworth 1881, 82)<sup>23</sup>。

<sup>22</sup> 「『数理精神科学』 77-79 頁において、読者は階級差別、そして何よりも性差別にたいする全面的な正当化を目にすることができる」(Arrow 1994, 94)。

<sup>23</sup> 『倫理学の新方法と旧方法』においては、エッジワースは、三層社会を考えている。こ

このように、『数理精神科学』は、シジウィック=バラット論争を端緒とし、みずからもその論争の一部に取り込まれることとなる『倫理学の新方法と旧方法』を経て、哲学、心理学、そして経済学などさまざまな思想を摂取しながら、倫理学と経済学とを接合する著作となったのである。それゆえに、経済理論的・経済学説史的取り扱いの域にとどまる従来の研究では、『数理精神科学』の部分的理解にすぎないと言えるだろう。これは同書にたいするマーシャルの印象のほか、エッジワースみずからも、ユニバーシティ・コレッジ・リヴァプールの論理学、精神・道徳哲学、および経済学教授職に応募した際に、『数理精神科学』を道徳科学と経済学とを等しく扱った著作と述べていることから明らかである(MSS Edgeworth D7/13)。つまり、『数理精神科学』は功利主義的倫理学と経済学とを取り扱った著作であり、このことは、たとえシュンペーターがエッジワースの位置を見定めるうえで功利主義という観点を挙げつつ、以下のようにも述べているとしても、功利主義的な議論を抜きにして『数理精神科学』は成立しえないことを意味するのである。

「エッジワースの場合もジェヴォンズの場合と同様、その経済学的著述のいずれかから功利主義をとり除いたとしても、その科学的内容には何ら影響するところがないのである」(Schumpeter 1954, 831/訳下巻 153)。

---

の場合、快樂受容能力が無限に改善されることは期待できないため、各層を占める人数を考慮した場合、「もっとも洗練された社交界仲間(coterie)でも、もっとも多い労働者階級もなく、幸福な中産階級が莫大な量(the earth)を受領すべきである」(Edgeworth 1877, 78)と述べている。

## 第5章 エッジワースと経済学方法論争

エッジワースのもともとの関心が（功利主義的）倫理学にあり、1879年のジェヴォンズとの出会いを契機として、彼の経済学研究は、それまでの倫理学研究に結び付けられるような形をとりながら、後発しておこなわれるようになったことは前章まで述べてきた。エッジワースがジェヴォンズの影響のもとで経済学研究をはじめたのとまさに同じ時期、イギリスにおける経済学を取り巻く状況は一種の危機的状況にあった。これはジェヴォンズによる次の一文からも明らかであろう。

「最近、この〔経済〕科学の論理的方法にかんして、いや、このような科学が本当に存在するかどうかの問題にさえ言及しながら、評論や雑誌において顕著な論争が続けられている」（Jevons 1879a, xv/訳 xviii）。

この危機的な状況は、自然科学者を中心に経済学の科学性を疑問視する声が出はじめたことに加え、レズリー、イングラム、ロジャーズらイギリス歴史学派による演繹批判に象徴されるように、演繹と帰納、抽象と現実とをめぐる1870年代後半に生じた経済学方法論争を引き起こした。これら経済学の方法をめぐる論争は、経済学クラブ(Political Economy Club)が主催した1876年の『国富論』出版100年記念式典やこれとほぼ同時期にイギリス科学振興協会のF部会（経済科学・統計学）において交わされ、それ以降、さまざまな論者によって講演、著書、論文など、さまざまな形をとって取り上げられた。

『数理精神科学』出版以降、エッジワースはこのような経済学方法論争の時代であった1880年代に経済学や統計学の研究を深化させると同時に、1888年のキングズ・コレッジ・ロンドンの経済学教授、1889年のイギリス科学振興協会F部会会長、1890年のキングズ・コレッジ・ロンドンのトゥック講座経済科学および統計学教授、さらにその翌年のオックスフォード大学ドラモンド講座経済学教授と、経済学界において一目をおかれる要職に就いた。この期間、彼は経済学方法論争にかかわるいくつかの経済書を書評し、またこの論争の主舞台となったF部会での会長就任講演「経済学への数学の適用」(On the Application of Mathematics to Political Economy, 1889)、そしてイギリス歴史学派の有力者であったロジャーズの後任として迎えられたドラモンド講座経済学教授就任講演「経済学の諸目的

と諸方法」(The Objects and Methods of Political Economy, 1890)において<sup>1</sup>、経済学の方法やその特徴を論じている。このようにエッジワースも経済学方法論争にかかわり、これはみずからの功利主義論を経済学に関連づけて論じた以上、避けられないことであった。

この方法論争におけるエッジワースの立場は、クリーディーによって次のように解説されている。

「エッジワースのアプローチは、当然ながら、頑なに演繹的でアプリオリなものであり、1880年代および1890年代において、このような立場は、とりわけ『歴史学派』経済学者たちから、かなりの批判をあびたことを思い起こさねばならない。エッジワースはそれゆえに演繹法にたいして多くの擁護を与えることを義務と感じ、これらはしばしば他の経済学者たちがいかに演繹法の使用を弁護しているかを示す形でおこなわれた」(Creedy 1986, 16-17)。

しかしながら、このクリーディーによる説明は、主に『数理精神科学』と1910年の論文「経済学への確率の適用」(Applications of Probabilities to Economics)に依拠しており(*ibid.*, 16-18)、経済学方法論争のなかでエッジワースが実際にどのような主張をおこなったかについては明示的でも説得的でもない。また、クリーディーはエッジワースが帰納的・歴史的方法をどのように考えていたのかについても明確にしていない。Hutchison(1953, 108/訳 125)や福岡(1999, 184-85)も、上述したエッジワースの諸講演のなかから彼の方法論についての言及の断片を紹介するにとどまっている。

このような事情に鑑みて、本章は1870年代後半に生じた経済学方法論争にたいするエッジワースの態度から、彼の演繹と帰納との関係への理解について論証する。

### 5-1. 経済学方法論争の幕開け<sup>2</sup>

先に触れたように、1879年にジェヴォンズは経済学の方法にかんする論争の存在を認め、これを「経済学の現在の混乱状態」(Jevons 1879a, xvi/訳 xix)と形容した。この混乱状態は1880年代に入っても変わることはなく、それはアメリカの経済学者ラント(Edward

<sup>1</sup> エッジワースのドラモンド講座経済学教授就任講演は、『エコノミック・ジャーナル』誌1巻(1891)においては、「経済学入門講義」(An Introductory Lecture on Political Economy)と題されて収録されている。

<sup>2</sup> 本節は主に、Hutchison(1953)、井上(1987 and 1989)、上宮(2000)を参考にしている。

Clark Lunt, 1863-1941)の『経済学の現状、およびその諸方法と諸目的とにおける急進的変化にたいする需要』(*The Present Condition of Economic Science and the Demand for a Radical Change in its Methods and Aims*, 1888)の冒頭からもうかがえる。

「経済科学の現状は息を殺して話すべき事柄である……ケアンズ教授が指摘するには、1821年にトレズ大佐が〔次のように〕経済学論争の速やかな終焉を予言している。『人間の知性の進歩において、どの科学においても研究者たちが論争する時代は、必然的に、全員一致の時代に先立つものである。経済学にかんしても、論争の時代は過ぎ去り、急速に全員一致の時代に近づきつつある。今後20年のうちに、その基本原理にかんする懐疑はほとんど存在しなくなるだろう』。ああ、人間の予測よ。この不適切な予言がなされてから20年の3倍もの時間が過ぎ去ったが、今日でも『全員一致の時代』は以前よりも遠いものになったように思われる」(Lunt 1888, 1-2)。

事実、この方法論争が下火になるのは1890年代に入ってからである<sup>3</sup>。

ジェヴォンズやラントが憂いた経済学方法論争の時代はどのようにして幕を開けたのだろうか。この幕開けは、1876年の経済学クラブによる『国富論』出版100年記念式典、1877年に生じた「イギリス科学振興協会」からのF部会排除運動、そして、このF部会排除運動を受けて、その翌年にイングラムがおこなったF部会会長講演、という三つの出来事を取りあげることによって、浮かび上がらせることができるだろう。

1876年5月31日に開催された経済学クラブの『国富論』出版100年記念式典には、同クラブの会員と運営委員の他、グラッドストーン(William Ewart Gladstone, 1809-98)やロー(Robert Lowe, 1811-92)ら閣僚、ジェヴォンズ、レズリー、ロジャーズら経済学教授、さらにフランスの大蔵大臣セイ(Léon Say, 1826-96)らのゲストを加えた計116人が出席した<sup>4</sup>。この式典は、議長を務めたグラッドストーンの「ちょうど100年前の『国富論』

<sup>3</sup> イギリスにおける経済学方法論争は1892年のカニンガムとマーシャルとの間の論争を境にして、「急に下火になり、1890年代の後半には過去のものとして語られるようになって」(佐々木 2006, 61)。

<sup>4</sup> この式典の完全な参加者名簿はPolitical Economy Club(1876, 61-63)に記されている。藤塚は同式典に「39名の会員と63名の著名なゲストが出席した」(藤塚 1973, 58)と述べているが、この名簿に掲載されている出席者は、36名の会員、3名の運営委員、8名の閣

の出版から生じてきたもっとも重要な帰結とは何であるのか。また、この著作の諸学説は、なお依然として、いかなる主要方向に適用されるのか」(Political Economy Club 1876, 5)という問題提起によってはじまり、直接的にはスミス(Adam Smith, 1723-90)評価を中心としながらも、経済学の方法、自由放任と国家の役割にかんする各界の見解の不一致を如実に示す場となった。

経済学の方法に関連しては、リカードウ正統派のローがスミスを演繹的・論証的な科学の建設者と評価したのにたいして、イギリス歴史学派のロジャーズはスミスの主たる功績を帰納的・歴史的研究と評価した。このなかでロジャーズは、スミスの地代論が歴史に基づくのにたいして、リカードウらのそれを想像にもとづく非現実的なものとみなし、リカードウ以降の演繹法にもとづく古典派経済学をその批判の対象とした(*ibid.*, 32-33)。この式典での論争は、古典派経済学がかつてのような支配力をもたなくなり、また経済学が方法・理論・政策それぞれの面で信頼感を失っている、ジェヴォンズのいわゆる「混乱状態」を象徴したものであった。

経済学の科学性にたいする不信は自然科学の立場からも突きつけられ、それはもともと自然科学の促進を目的としたイギリス科学振興協会から経済科学や統計学を扱うF部会を排除しようとするゴールトンの「F部会(経済科学および統計学)の維持に反対する見解」(Considerations adverse to the Maintenance of Section F (Economic Science and Statistics), 1877)によって具現化した。ゴールトンによれば、F部会の設置(1833)とその維持は、同部会が人間についての知識の重要な部分に関連する事柄を扱い、統計学が数学者を訓練するなどの形で他の諸科学にも影響を及ぼすからであった(Anon. 1877, 469)<sup>5</sup>。しかし、当時のF部会の報告の大半が社会問題を取りあげ、統計学の数学理論を扱っていないため、精密な測定と明確な法則という厳密な意味における「科学」に値しないとF部会の非自然科学性・非数学性が指摘された(*ibid.*, 471)。

これにたいして、ファー(William Farr, 1807-83)が、同部会に集う有能な経済学者や統計学者は、「科学的な測定や数的表現が可能な財産、生産、価値などを取り扱っている」(*ibid.*, 473)と反論し、さらにこの反論を受けて、イギリス科学振興協会の幹事であったギッフェンとチャブ(Hammond Chubb, 1830-1904)も、「F部会の主題がこの協会の他部会におい

---

僚と6名の経済学教授からなる名誉会員、63名のゲストから構成されている。

<sup>5</sup> イギリス科学振興協会の他部会の設置や名称の変遷については、井上(1989, 480)を参照のこと。

て取り扱われている主題と比べて『純粹に科学的』ではないという印象」こそ「明らかにもっとも非科学的である」(*ibid.*, 47)との判断をくださった。これによって F 部会は存続されることとなった。しがしながら、経済学の不信がもはや無視できない段階に達していたことは紛れも無い事実であった。

その翌年、前年の排除運動を受けて、この年の F 部会会長となったイングラムは経済学にたいする不信を回避するため、「レズリーのワインをコント主義という瓶に入れる」(Zouboulakis 2008, 96)形式をとりながら、コント的総合社会学の立場から四つの提案をおこなった。イングラムの提案は、第一に、経済現象の研究が社会にかんする他の諸側面の研究と体系的に結合されるべきこと、第二に、抽象と非現実的な単純化への過度な偏向は抑制されるべきこと、第三に、アプリアリな演繹的方法は歴史的方法と取り換えられるべきこと、第四に、経済法則とそれにもとづく実践的処方箋はあまり絶対的でない形で考えられるべきこと、である(Ingram 1878, 68-69)。

イングラムによれば、社会体系はさまざまな作用が一致したものであり、これらの作用を独立させたものとして扱うことは理論的にも実践的にも誤りに陥らせることになる(*ibid.*, 49-50)。また、経済学において人間本性の原理とされる「富への欲求」という単一の動機は個人、階級、国民、性別、社会状態に応じて異なると考えたイングラムは、抽象的な方法を否定したレズリーに依拠しながら<sup>6</sup>、現実に即さない誤った抽象が実践的目的の役に立たないというえ、「思索のために想像された創造物を客観的事実と誤解する」(*ibid.*, 58)、とその弊害を訴えた。複雑かつ多数の条件に依拠する社会の現象はアプリアリな方法によって決定することは不可能なうえ(*ibid.*, 59)、たとえ演繹法にもとづいたとしても単純な前提から導かれる結論は、「一定の性格を有する傾向についてのみであり、その傾向は帰結として生じる現象を構成する部分の一つ」(*ibid.*, 63)にすぎない、というのがイングラムの考えである。したがって、経済学がそのなかに統合されるべき「社会学の方法は、帰納的でなければならないだけでなく、歴史的でなければならない」(*ibid.*, 60)。つまり、イングラムは、経済学を知的・道徳的・政治的など社会の他の側面と結合させるために総合社会

<sup>6</sup> イングラムが依拠したレズリーの見解は、「経済学の哲学的方法」(On the Philosophical Method of Political Economy, 1876)において提示されている。レズリーは、この論文の結論を次のように二つにまとめている。「抽象的でアプリアリな方法は、富の性質、その大きさ、あるいはその分配を決定する法則について説明を何ら与えない」、「哲学的方法は歴史的でなければならない、国民の歴史の経済的的局面と他の局面との間の関連を追究しなければならない」(Leslie 1876, 189)。この二つの結論は、レズリーによるイギリス歴史学派宣言とみなすことができよう(馬渡 1990, 142)。

学のもとに包摂する必要性を強調し、社会学の方法として、従来の経済学のような演繹的・抽象的な方法ではなく、帰納的・歴史的な方法によることを主張したのである。

イングラムの主張を支持する流れは、その後しばらく F 部会の会長講演において続いた。たとえば、イングラムの翌年に会長となったルフェーブル(Charles Shaw Lefevre, 1794-1888)はその講演の冒頭において、社会学を高い地位に据え、経済学の偏狭な領域と方法とに異議を唱えたイングラムに「心から同意する」ことを表明した(Lefevre 1879, 479)。さらに、1881年の会長ダフ(Moutstuart Elphinstone Grant Duff, 1829-1906)は、F 部会の変遷を要約するなかで、イングラムの講演の概要も改めて紹介し、「イングラム教授が推奨した方針を適用しなければならない」(Duff 1881, 758)と、これに賛同した。

このようにして、経済学方法論争の時代が幕を開けた頃、エッジワースは倫理学研究に加えて、経済学研究をはじめたのである。

## 5-2. 『数理精神科学』における演繹的・抽象的方法の擁護

本節においては、エッジワースの経済学研究の成果が盛り込まれた最初の著作『数理精神科学』が、前節で概説した経済学方法論争の幕開けとの関係において、どのように理解できるのかを示す。事実、本節で明らかにするように、『数理精神科学』には経済学方法論争にたいするエッジワースの立場が多く表明されている。

ちょうど経済学方法論争が具現化しはじめた 1877 年、エッジワースは、『倫理学の新方法と旧方法』において、快楽感覚量と快楽刺激量との関係を「准フェヒナーの法則」として定式化した。ラグランジュ未定乗数法を用いることで、所与の快楽刺激量から最大快楽量を得るための諸条件を演繹的に導き出したエッジワースは、その結論として、快楽受容能力が各人の間で等しい場合には平等分配が、異なる場合には不平等分配が快楽最大化にとって適切である、と論じた。これは実験心理学と倫理学とを結合し、数学的に論証する試みであった。そして、経済学方法論争の真っ只中である 1881 年に出版した『数理精神科学』において、このような手法は倫理学や経済学を含む道德科学全体の数理科学化へと拡張された。この拡張は、快楽の数量的把握を前提とする功利主義に関心を寄せるエッジワースにとって回避することのできない問題であった。

前章で述べたとおり、『数理精神科学』第 I 部において、エッジワースは「道德科学」と「数理科学」との類似性をとりわけ「最大化」問題に見出し、「類推」という手法を用いて

7、前者への数学適用を推奨する。これは、文章による演繹的説明が枝葉末節な点で非難を浴びやすく、数学という助力を得ることによってその説明が正確性を増す、との考えにもとづいている(Edgeworth 1881, 116)。さらに彼が数学的推論を推奨する理由は二つある。それは第一に、数学に依拠せずに適切に問題を推論し、解決できるか否かは数学によってのみ判断できるためであり、第二に、常識にしたがって非数学的におこなわれる推論は演繹的推論固有の長所——たとえば、諸条件のなかでどの条件が必要条件で、どの条件が十分条件であるか——を見失いやすいためである。このように、エッジワースは、「常識という裸眼にとって部分的で不明瞭」なことでも、「数学という道具を通じれば一見のもとに明らかである」(ibid., 2-3)ことを強調した。

このように推奨される数学は、自然科学において最大エネルギー問題を取り扱うように、道徳科学においても最大快樂問題を取り扱うのに適しており、「快樂はエネルギーと同一事象である」(ibid., 9)との想定を可能にする。それゆえ、エッジワースは人間を「快樂」というエネルギーで動く「機械」とみなし、道徳科学に数学的方法を導入したのである。このようなエッジワースの立場は、経済学を含む道徳科学の自然科学性・数学性を認めるものであり、直接的ではないにせよ、F 部会排除運動におけるゴールトンの主張に対峙するものであった。

エッジワースの「ダイアグラム」分析は、以上のような見解にもとづいて可能となった。彼は「完全な競争フィールド」を構築するための仮定をおいたうえで<sup>8</sup>、ロビンソン・クルーソー( $X$ )とフライデー( $Y$ )の間の契約問題を例にとり、両者の無差別曲線とその間に横たわる契約曲線を図示した。この際、エッジワースは、1人の $X$ と1人の $Y$ 、2人の $X$ と2人の $Y$ 、3人の $X$ と3人の $Y$ と契約取引の場に両者のクローンを導入する、「数学的帰納法」という方法を用いている。この方法は、「帰納法」という言葉を含んではいるものの、数学が演繹的な方法である以上、その外見が帰納法的に見えるだけであり、その内実は演繹法そのものである。エッジワースは、この結論として、両者の数が少なければ少ないほど契約は不確定であり、逆に増えれば増えるほど契約に確定性が増し、最終的に無限に達したとき、契約は一点に決まる。彼はこれらの分析を、たとえば、「取引団体」が存在する事例においてもおこない、契約の不確定性について結論が変わらぬことを導き出した。

<sup>7</sup> エッジワースは、「類推」という方法がどのような論拠にもとづいて正当化されるかについては明らかにしていない。

<sup>8</sup> 本稿 12-13 頁を参照のこと。

このようにエッジワースの契約取引分析はあらかじめ与えられた仮定に依拠した、あくまで演繹的推論であり、彼自身もこれを認める(*ibid.*, 126)。ただし、エッジワースは、明確な解答を個別事例に与えなかったとしても、演繹的推論が厳しい非難にさらされる必要はないと主張する。彼によれば、この推論は、いわば、「試し書きのスケッチ」(*ibid.*, 126)であるが、そのスケッチ以上に説得的な論証を求めるような厳しい非難は必要ない。というのも、演繹法という「思索の高みからは遠方の田園の輪郭を識別することはできたとしても、眼下の平原のなかの間道を見分けることはできない」(*ibid.*, 126)ためであり、これによる推論も、「一般的な教示を与える力のみをもち、詳細な規則(detailed regulations)を与える力はもち合わせていない」(*ibid.*, 126)からである。問題は、この「一般的な教示」が現実に当てはめたときにも有効性をもつかどうかであり、そのため、「経験との比較、およびその一致による修正や立証をおこなう仮説演繹法」(hypothesis deductions)という方法がとられる(*ibid.*, 126)。

この「仮説演繹法」という演繹的推論の一般的特徴は、「ミルによって論理的には詳細に『論理学』において、実践的には用心を繰り返しながら『経済学』において示された」(*ibid.*, 126)という。また、『科学の原理』(*The Principles of Science*, 1874)におけるジェヴォンズなど、「ほとんどすべての方法論者たちもこのミルの手順に倣って」おり、「われわれは英知ある学者が識者にとって知性的であると理解したことを当然のことと考えなければならぬ」というのが、エッジワースの理解であった(*ibid.*, 126)。とはいえ、『科学の原理』におけるジェヴォンズの方法は、ミルの演繹法(帰納→演繹→検証)を「仮説→演繹→検証」へと変換したものであり(Jevons 1879b, 265-66; 千賀 2010, 178)、エッジワースの推論が完全な競争フィールドを実現するための諸仮定にもとづく以上、彼自身が採用しようとする方法が——ミルの方法以上に——ジェヴォンズ的な方法であることは間違いない。

エッジワースは、この演繹的推論に続く手続きである「検証」として、「ダイアグラム」によって解説した契約取引の不確定性にかんする議論が、より現実的な事例に適用したときにも普遍的な価値をもちうるかを検討する。彼がより現実的な事例として選んだのは、付録Ⅶの表題である「アイルランドにおける重大な危機」からも明らかのように、まさに『数理精神科学』が出版された頃に生じたアイルランドの土地問題である(*ibid.*, 136)。当時のアイルランドでは、入札小作制という特殊な農業制度のもとでおこなわれていたが、これはレズリーが古典派経済学に不信を抱く一因ともなっていた。レズリーによれば、経済学の基本原理にしたがって、あらゆる法律的規制をはずし、利己心に任せておけば、ア

イルランドの領主と小作人たちの契約は一つに決まるはずであるが、現実には裁判や法律に頼る傾向を増している、という(Leeslie 1870, 117-18)。さらにレズリーは、「経済学の哲学的方法」においても同様に、「利潤の均等化」という仮説に現実性がない、と批判しているように(Leeslie 1876, 183-84)、抽象化に基づく古典派経済学を現実の説明としてそぐわないものとみなしていた。

これにたいして、レズリーと同じくアイルランド出身のエッジワースは、先のクルーソーとフライデーとの間の契約問題を領主と小作人との間の地代契約という特殊事例へと適用する。もちろん、この適用は、土地の量という制約条件が存在するため、即そのままあてはめることができるわけではない。彼は、等しい量の土地を所有する同質の領主と同質の小作人とが同数である事例、領主と小作人の数がそれぞれ $p$ 人と $q$ 人の事例(ただし、 $p \neq q$ )、これら領主や小作人が団体を形成して取引する、より具体性をもたせた事例を分析し、どのような事例においても不確定性がやはり存在することを明確にした。このように、さまざまな競争フィールドや商品を想定したとしても、不確定性という「契約の本質的同一性」(Edgeworth 1881, 146)が見出されるため、エッジワースは次のように主張している。

「抽象において明確に見出されること、そして抽象のなかで認められることは、具体的ななかに浸されるとしても、つまりわれわれがそれぞれの側の当事者の数、小作人の性質、土地の量や質、団体の大きさなどが等しくないと想定するとしても、見失われることはないだろう」(*ibid.*, 144)。

このことから、エッジワースはクルーソーとフライデーとの間の競争的契約という単純な抽象的事例を、「両方の側の当事者の数が無限で、団体が存在せず、完全な競争フィールドであれば、契約は確定する」、「競争が不完全であれば、契約は不確定である」という、一般化可能な「契約の法則」をもっとも明確に提示するものとみなしたのである(*ibid.*, 146-47)。

エッジワースはさらに、利他的な動機(同感)による不確定性の回避が、利己心によって契約は確定しないというレズリーの見解をも包摂していることを強調する。彼は、「一種の統一化」は、「つねに一つのことを多くのことへと分けているが、多くのことを一つのことのなかに包摂しようとしないうような人びとにとっては不快なことらしい」(*ibid.*, 146)と述べているが、ここでの「優秀な人びと」のなかにレズリーが含まれることは、次の一文

からも明らかであろう。

「クリフ・レズリー氏はしきりに、さまざまな人によって異なる感情を『富への欲求、労働にたいする嫌悪』とする抽象概念からは何も得ることがない、などと説いている。しかし、彼は、雑多な個人の嗜好、そして自分が欲する事柄にかんするあらゆる情報とは無関係に、これらの抽象的な欲求によって動かされる個人間の交渉にかんする契約の一般理論を認めるだろう」(*ibid.*, 146)。

エッジワースは、このように抽象のもつ便宜性に訴え、演繹的・抽象的な方法を「レズリー氏が相当に強調している歴史的研究と同様に重要なものである」(*ibid.*, 147)と主張したのである。

『数理精神科学』出版の翌 1882 年、エッジワースは F 部会で「抽象的地代論」(*The Abstract Theory of Rent*)と題して、リカードウの差額地代論の解説的報告をおこなった。このなかで、土地の生産性はその土地への投資にも依拠していること、そして、このために土地の優劣を具体的に判定することが難しいことをリカードウやリカードウ学派も理解しており、彼らが示そうとしたのはあくまで一般的傾向のみである、とエッジワースは主張している。抽象的な方法を擁護する彼の姿勢は、同報告における彼の結論のなかに如実にあらわれている。

「抽象理論は、言うなれば、多様な現実の形の原版写真(*type-photograph*)である。それは、完全な真実への近似であるだけでなく、唯一の道程でもある。この偉大な発見者をあざ笑う人びとは、全体的な地図(*general map*)なしに、自分たちが小探検をしようとしている地域を発見できない者であることを忘れていたのである」(*Edgeworth 1882b, 642*)。

このようにエッジワースは経済学研究をはじめた直後から、経済学における演繹的・抽象的な方法を否定するイギリス歴史学派にたいして、この方法が一般的方向性を示すものであるとの見地から論陣を張ったのである。

## 5-3. 経済学方法論争の架空性

1880年代中頃になると、F部会会長講演において、先のイングラム講演にたいする反駁がおこなわれるようになった。それは、帰納的・歴史的方法を一方的に否定することではなく、その重要性を認めつつ、演繹的・抽象的方法も必要であるという論法でおこなわれた。

たとえば、1884年の会長パルグレイヴは、歴史的方法の重要性を認めただけで、どのような事実を観察すればよいのか、また観察された事実をどのように説明するかを考えるには演繹的・抽象的な理論が必要である、と述べた(Palgrave 1884, 607)。この翌年の会長シジウィックの講演では、仮説的要素を含む抽象的な経済学的推論の妥当性を検証するという意味において、歴史的方法の意義が認められた(Sidgwick 1885, 88)<sup>9</sup>。このシジウィックの見解について、エッジワースは、「この問題の概要は、抽象的推論というオルガノンが不可欠であるということであるように思われる。オルガノンは必要であるが、〔それだけでは〕十分ではない」(Edgeworth 1886, 177)と評している。

同年、マーシャルもケンブリッジで「経済学の現状」(The Present Position of Economics)と題した経済学教授就任講演をおこなった。この講演において、経済学者は事実には貪欲でなければならないが、それだけでは不十分であり、精査した事実にもとづいて理論というオルガノンの構築、そしてそれを用いて、社会問題の経済的な側面を処理する助けとしなければならないと、帰納的・歴史的な方法と演繹的・抽象的な方法とを両立させる必要をマーシャルは訴えた(Marshall 1885, 171/訳 27)<sup>10</sup>。このマーシャルの考えは、歴史学派と理論派との対立をできるかぎり回避しようとしたネヴィル・ケインズの『経済学の領域と方法』(The Scope and Method of Political Economy, 1891)に受け継がれる。ネヴィル・ケインズは、演繹と帰納との結合によってのみ経済学は発展可能であり、したがって経済学の方法とは、「観察による前提の形成」→「前提にもとづく演繹的推論」→「結論の観察による検証」という帰納の補助を得た、より完全な形式の演繹法、すなわち、ミルのいう「演繹法」とであると総括した(Keynes 1917, 216/訳 155; Mill 1843, 453/訳 3巻 302)。このネヴィル・ケインズの見解にたいして、エッジワースも、「われわれが経済学的方法の二重

<sup>9</sup> 補足しておくとして、イングラムのいう総合社会学の立場にかんしては、科学が確立されるためには学者たちの間での意見の一致と予測の力が必要であるが、その条件をまだ社会学は満たせていない、とシジウィックは否定的であった(Sidgwick 1885, 92-97)。

<sup>10</sup> 総合社会学にかんして、マーシャルもそのような学問は存在しえない、とシジウィック同様に否定的な立場をとった(Marshall 1885, 163-64/訳 17)。

の性質にかんして……正当な信頼を寄せるものである」(Edgeworth 1891b, 4)と賛意をあらわした。

イギリスにおける経済学方法論争は、大西洋を越えて、アメリカからも注目された。エッジワースによって方法論上の「優れた評論」(Edgeworth 1888a, 201)と評価され、のちに「[ネヴィル・]ケインズ氏の先駆者」(Edgeworth 1891b, 7)と位置づけられたラントによる『経済学の現状』がその証左である。ラントは、スミスやマルサス(Thomas Robert Malthus, 1766-1834)の研究が演繹的な方法と歴史的な方法とを組み合わせたものであり、もっぱら演繹的と評されるイギリス的方法是、実際のところ、レズリーのいうような「『実証なき』方法」(“no-case” method)ではなく、「『十分な実証をもつ』方法」(“enough-case” method)である、と述べる(Lunt 1888, 55-57)。また、ラントによれば、本当の意味での歴史学派は存在しない。というのも、イギリス歴史学派も自分たちが非難の対象としている先験的な推論やそのために必要な仮定を用いているからである(*ibid.*, 83)。これらのことから、ラントは、イギリスにおける経済学方法論争がいわば「架空の敵との戦い」にすぎず、本当に賢明な人間は、論争をすることもなく、みずから「歴史的」であるか、「正統的」であるかには関心を示さずに仕事をしている、と結論づけた(*ibid.*, 107)。

エッジワースは、このラントの見解を容認するだけでなく、みずからも同様の主張を展開した。これは、ラントへの書評を発表した約3ヶ月後にエッジワースが書き上げた一つの書評、ロジャーズの『歴史の経済的解説』(*The Economic Interpretation of History*, 1888)への書評のなかにみられる。ロジャーズは、同書においても、『国富論』出版100年記念式典と同様に、リカードウおよびリカードウ学派を激しく批判していた。しかし、エッジワースは、抽象的理論が経済学にとって不適切な方法であることをロジャーズは批判の根拠とすることができない、と主張した。なぜならば、同書のなかにロジャーズが演繹的推論を使用しているとみなせる——少なくとも、エッジワースはそうみなした——箇所が散見されるからである。たとえば、エッジワースは、ロジャーズの「演繹的推論の操作は第7講義のなかに存在するのだが、そこではイングランドの初期人口の推測が複数の細切れの情報から構築されて」(Edgeworth 1888b, 395)おり、別の箇所においても、「彼は、例外的にガラスと紙とが低価格であることから、これらの産業において改良がなされたと推測している」(*ibid.*, 396)と言及している<sup>11</sup>。さらに、エッジワースは次のようにも指摘

<sup>11</sup> このエッジワースの指摘にかんして、佐々木(2011)は、「前提と結論との関係が必然的ではないので、厳密な意味では演繹とはいえないであろう」と主張している(佐々木 2011,

する。

「諸部分の関係が明らかであり、詳細であり、必然的であるために……具体的な異論なしに、その存在を証明できる数字と平面図形との関係があるように、事実とは無関係に証明することのできる経済理論という部分がある。しかしそれでも、抽象はつねに具体にとってより良いものであり、原理を説明する事実にとって原理はより良いものである」(Rogers 1888, 267; Edgeworth 1888b, 396)。

このため、エッジワースも、少なくとも「ロジャーズ教授と正統とされる現在の経済学者たちとの間に経済学方法論争についての真の論争の原因が存在しないことは明白であろう」(Edgeworth 1888b, 396)と結論づけた。このように、エッジワースにとっても経済学方法論争とは架空的なものであると同時に、演繹的・抽象的な方法の重要性を再認識する場となったのである。

#### 5-4. エッジワースの経済学方法論

エッジワースは、1889年、経済学方法論争の主たる舞台ともなったイギリス科学振興協会 F 部会の会長に就任した。その2年後には、その前年に他界したロジャーズの後任としてドラモンド講座経済学教授としてオックスフォード大学に迎えられた。これらの職に就くのに際して、エッジワースはそれぞれ、「経済学への数学の適用」、「経済学の諸目的と諸方法」という表題で講演をおこない、経済学の方法やその特徴を明確に述べている。

このなかで、エッジワースは、経済学を「いくらかの完全性をもって、ギリシャ思想が憧れた種類の科学、たとえ実践はしなかったとしてもアリストテレスが考えていた種類の科学、すなわち、一般原理へと導きあげ、特定の結論へと導きおろす科学」(Edgeworth 1891c, 4)と位置づけ、この意味において同種の科学と考えられる数理物理科学が数学を必要とする以上、経済学も数学とは無縁ではいられない、と主張する(*ibid.*, 6)。

エッジワースは、スウィフト(Jonathan Swift, 1667-1745)が『ガリバー旅行記』の「ラピュータ」で描いたように、人間にかんする事柄を数学的に表現することにたいする批判を意識していた(Edgeworth 1889b, 274; Edgeworth 1896c, 711)。実際に、ジェヴォンズ

---

14fn)。

の数理経済学はイングラムによって、「学術的な玩具にすぎず、以前に放棄された形而上学的なものを復興するという、まさに実害を含んでいる」(Ingram 1885, 399; Edgeworth 1889b, 290)と批判されていた<sup>12</sup>。しかしながら、たしかに個人の行動は気まぐれなものかもしれないが、集団全体としては統計学における「大数の法則」のように一定の傾向をもつだろう。また、経済学における数学的推論は、最大・最小といった量に関係し、必ずしも数字は必要とせず、図はその理解の助力となるだろう。このような考えから、エッジワースは「代数学」と「幾何学」とが経済学の常用言語とみなした(Edgeworth 1889b, 275)。

このように数学の力を必要とする経済学において、より具体的な市場を考えた場合、それぞれの市場の相互依存性は無視できない。ある市場における取引が、他の市場における取引に影響することは十分に考えられる。この場合には、数理物理学においてなされるように、「他の事情が同じであること」を想定することによって、正しい見解への一次近似を得ることができよう。ただし、より複雑な市場を考える場合、代数学や幾何学によっても何らかの解答を得ることができないかもしれない。たとえそうであったとしても、「より複雑な問題の定式化はそれでもなお、いかなる精密科学(exact science)をも獲得することはできない、というソクラテスの教訓〔すなわち、無知の知〕を説くものとして、否定的な役割を果たす」(ibid., 281)とエッジワースは数学が果たす役割を評価した。

エッジワースによれば、数理物理学との比較において、たしかに経済学が未発達な部分を抱えていることも認識せねばならない。それは、第一に、数値的資料が欠如しがちなこと、第二に、地代論や貨幣論において各論者が主要因と想定するものが異なるように、何が主要因であり、どの要素が一次近似において見落とされているかが不明確なこと、である。したがって、「このような材料からは推論のための非常に精巧な部品を構築することは期待できないだろう」(ibid., 286)。その結果として、経済学の推論は記号的表現を含む簡素なものにとどまるだろう。また、その記号も必ずしも必要なものではないと言えるかもしれない。というのも、少なくともメンガー(Carl Menger, 1840-1921)たちは、明示的に数学を用いることなしに「正しい価値論」へとたどり着いたからである。このように、数

<sup>12</sup> 本稿 42 頁で取り上げたように、イングラムはトリニティ・コレッジ・ダブリンの数学者たちとの学術的交流を楽しんでおり、数学を全面的に批判したわけではなかった。数理経済学にたいする彼の厳しい態度は、エッジワースによって次のように説明されている。「経済学における数学的方法、そして、より一般的には、演繹的方法にたいするイングラムの敵意というパラドックスは、コント哲学への彼の傾倒によるものであったと説明できる」(Edgeworth 1907, 300)。

理物理学者にとっての数学ほどには、経済学者にとってのそれは普遍的な言語ではないため、エッジワースは、「実際、われわれの数学的構造物は、科学という大建造物が完成したときに取り払われる足場の一種のように、取り払われるべきである」(ibid., 287)と主張する<sup>13</sup>。

それでもなお、エッジワースが経済学における抽象的推論、とりわけ数学的推論を評価したのは、「確率計算が専門家によっておこなわれているのにたいして……学識ある者も学識のない者も経済学についての理論をうち立てている」ために、「諸科学との競争において、われわれはいわば、まったく無知の状態からかなり後退した地点から出発せねばならない、というハンディキャップを負っており、その無学よりもたちの悪い偏見を取り除くための努力が必要である」(Edgeworth 1891c, 4-5)からであった。つまり、偏見による論理の誤謬を見出だすために数学的推論は大きな役割を果たし、これによってはじめて経済学は、「誤りという負の位置から無知というゼロの地点」(Edgeworth 1889b, 285)にまでたどり着くことができる。まさに『「愚を欠くは智の第一歩なり」』(ibid., 285)ということなのである。

以上のように、エッジワースは経済学の抽象理論を擁護したが、それが即座に実践に役立つわけではないことも理解していた。抽象理論の有用性は狭義の意味で考えてはならない。あくまで山の頂上から下界を見下ろすように、一般的傾向にかんする見解を得ることこそ抽象理論の有用性なのである。この見解は『数理精神科学』をはじめ、常にエッジワースが述べたことである。ドラモンド講座経済学教授就任講演においても、彼は、理論を実践へと適用する場合には、「それぞれの段階において慎重さ、忍耐と注意とが必要」であり、「直接に自分たちの目の前にあるものを顧みずに、一般的見解に目を向ける人びとは滑り落ちる」(Edgeworth 1891c, 8)と警告した。というのも、現実の同じような事例は類似した諸原因によって起こるかもしれないが、その諸原因がまったく同じ配列であることはなく、結局のところ、あらゆる事例は別個のものとして考えなければならないからである。抽象理論は現実に応じて修正されなければならないが、この意味において、統計学や帰納的・歴史的方法がその助力となろう。

エッジワースは、前述のイングラムのような立場にたいしては、「われわれが発見しよう

<sup>13</sup> このエッジワースの主張は、多分にマーシャルによる『数理精神科学』にたいする書評から受けた影響がみられる(Marshall 1881, 158)。マーシャルの指摘については、本稿 97 頁を参照のこと。

と努めているものは……他の研究手段と比較したときの数学的推論の『最終効用』がどれだけかということである。一定量の数学的修練は……わずかな歴史的認識の付加よりも、もうすでに事実を蓄積している精神にとって価値ある獲得物であるように思われる」(Edgeworth 1889b, 290)と反論したが、基本的には前項で考察したように経済学方法論が架空のものであると考えていたため、「歴史学派と演繹学派との激しい論争について言及すれば……そのどちら側にも傾倒しない」(*ibid.*, 288)姿勢をとる。この姿勢は、ドラモンド講座経済学教授就任講演においても如実にあらわれている。彼は、「過去あるいは現在の事実からの直接的な観察および一般化」(Edgeworth 1891c, 11)と定義される歴史的方法を過大に評価することには警告を發しつつ<sup>14</sup>、次のように述べた。

「私は、自然と人間とのいずれが富の生産により多くのことを果たすか、という古い論議を解決しようとするなど思いもよらない、というのと同じ意味で、理論および歴史が果たす役割を厳密に確定しようとは思わない。富の生産者が『収益の限界』と呼ばれる一定の限界にまでさまざまな生産要素への投資を増やすのと同じように、経済的知恵という製造業において、われわれは活力というわずかな基金の一部を演繹的オルガノンという固定資本に、一部を歴史的経験という原材料のために費やすべきである。知的世界における収益の限界は、外界におけるそれと同様に、個人の性格によって異なるだろう。教養あるアテネの人びとがそうしたように、われわれにはお互いの研究にたいする不愉快な軽蔑を慎まねばならない以外、一般的な原則はまったくないのである」(*ibid.*, 11)。

エッジワースにとって正統派も歴史学派も基本的には演繹と帰納という二つの方法を採用し、ただその力点の置き方が異なるだけにすぎなかった。たとえば、エッジワースによれば、「イギリス歴史学派の始祖とみなすに値する」ジョーンズ(Richard Jones, 1790-1855)は、経験の重要性と過度な一般化の危険性を説きつつも、ある一定の範囲内において演繹的推論を破棄することはなかった(Edgeworth 1896b, 490-91)。この意味におい

<sup>14</sup> このエッジワースの発言の背景には、アシュレーによるトロント大学経済学教授就任講演、『政治科学とはなにか』(*What is Political Science?*, 1888)の存在がある。アシュレーは、同講演において、「多産な作業の方向性は、もはや可能なかぎりの勤めを果たした抽象的な演繹法の遂行ではなく、新しい研究方法——歴史的、統計的、帰納的——にしたがうことのなかにある」(Ashley 1888, 16)と自分の立場を表明している。

て、エッジワースは、「ジョーンズが主導的な立場にあれば、過度な一般化にたいする反発はもっと早い時期に到来したであろうし、その反発は節度あるものになっていただろう」(ibid., 490)との評価を下している。これにたいして、レズリーやイングラムのように、演繹をあからさまに拒絶する学者たちこそ「歴史学派の極派」(Edgeworth 1888a, 201)とみなすべきである、というのがエッジワースの主張であった<sup>15</sup>。

ここで最後に残される問題は、エッジワースがなぜ歴史的方法、すなわち「過去および現在の事実からの直接的な観察および一般化」を過大評価してはならないと述べたのか、である。この問題については、次節において論じる。

### 5-5. 帰納法における演繹的操作

エッジワースは、パルグレイヴ編『経済学事典』(*Dictionary of Political Economy*, 1894-99)において、「事実」(Facts)について、次のように寄稿している。

「事実：経済学において、あらゆる真の理論は事実に依拠する。しかし、その依拠はつねに同じ種類のものではない。それは直接的なものであったり、あるいは一連の演繹を通じてのものであったりする」(Edgeworth 1896a, 11)。

エッジワースによれば、ケアリー(Henry Charles Carey, 1793-1879)が、入植者たちは最初に劣等地を耕作すると主張したことは直接的な証拠に依拠している。しかし、優等地と劣等地とがその入植者たちのいるところから同距離にあるとすれば、彼らは優等地を選択することをわざわざ拒絶するだろうか。エッジワースは一般的な事実と特殊な事実が一致するときにもっとも強い証拠が存在すること<sup>16</sup>、逆にそれらが相反する場合には理論によって事実を説明するか、事実によって理論を修正するかのどちらかであるとした。このように、エッジワースは帰納法にも二種類の方法があることを指摘するが、それは彼の確率論や統計学の取り組みにおいても論じられる。

<sup>15</sup> ただし、エッジワースはパルグレイヴ編『経済学事典』の「空論家」(Doctrinaire)の項において、「空論家」を「事実を十分に顧慮せずに理論を適用する人を指して非難するための語句」(Edgeworth 1894, 623)と定義し、そのなかで彼は、この空論家の知的悪徳を指摘した点では、レズリーやイングラム、カニンガムを評価している(ibid., 633)。

<sup>16</sup> このエッジワースの指摘は、ミルの『論理学体系』(3編6章、6編9章および10章)にもとづく(Edgeworth 1896a, 11)。

経済科学と統計学を主題とする F 部会の会長を務めたように、エッジワースは確率論や統計学にも造詣が深かった。これらの分野における彼の最初の論文発表は、『数理精神科学』出版の2年後、1883年の「誤差の法則」(The Law of Error)である。ただし、これはただちに彼の確率論や統計学への関心が経済学に後発したものであるということの意味しない。というのも、『数理精神科学』の冒頭において、彼は、信念(*Belief*)、すなわち確率の計算法と感情(*Feeling*)の計算法とを対比させ、また「数量の科学は、統計学的方法によって行為と有効な欲望とを数字的に測定できるかぎり、人間の研究に相容れないものではない」(Edgeworth 1881, 1)と述べており、すでにこの頃から確率論や統計学にも彼が関心をもっていたことが伺えるからである。人間の感情と確率論および統計学との結合を目指すエッジワースの姿勢は、『メトレティケ、あるいは確率および効用の測定法』(*Metretike, or the Method of Measuring Probabilities and Utility*, 1887)においても見られる。ここでも彼は、効用の原理と確率論とが部分的には相似であり、また同一であると述べたうえで、これらの見解を補強すべく議論を進めている。この『メトレティケ』において、エッジワースが指摘した二種類の帰納法の差異について触れられている。

「カラスは黒色で一定の外形をしている、というありふれた例を考えてみよう。子どもや古代人にとって、唯一の前提は観察された多数のカラスである。ヒュームやミルの弟子は、この推論の信憑性(*safety*)にかんして議論をおこなうだろう——鳥の羽毛や骨格について予想される一定の知識を有効に加えるだろう」(Edgeworth 1887c, 24-25)。

エッジワースによれば、前者の方法が「初歩の帰納法」(*rudimentary Induction*)であり、後者が「秩序だった帰納法」(*methodical Induction*)である。

この違いをより明確にするために、エッジワースが挙げた具体的な例を考えてみる。同年代の就労児童と就学児童との身長比較をおこなう場合、それぞれの平均身長に目を向ける。このとき、それぞれの母集団の身長は一定の確率曲線にしたがうものと考えることができるが、われわれはすべての就労児童および就学児童の身長を調査することなしに、標本としてとらえられる各集団の算術平均の差異を比較する。この両者の集団に身長差が存在しない場合、両集団の平均身長は一致する。逆に、身長差が存在する場合には、両集団の平均身長に差異があらわれ、就学児童の平均身長が就労児童のそれを上回るとき、帰納

法的に、相対的に就労児童の身長は低くなる傾向があることが導かれよう。ただし、この比較作業において、「初歩的な帰納法」と「秩序だった帰納法」には明確な違いがある。

たとえば、二十の標本集団を比較して、就労児童の平均身長が就学児童のそれより低いことが観察されたために、就学児童には低身長の傾向があると導くことで満足するのは「初歩的な帰納法」である。これにたいして、より良い結論を得るための「秩序だった帰納法」とは、母集団から二十の標本集団を無作為に抽出することである。「このような事例において、現実味のない法則の出現が二十回ももたらされることはまったくありえない」(*ibid.*, 25)ためである。

とはいえ、この二つの標本集団の比較に偶然が入り込む余地はある。そのため、二つの平均の間の差異が偶然にもとづくものであるか、そうではないのかを確定する必要がある。より具体的にいえば、得られた結果について一定の集合が二つある場合、集合 A の結果と集合 B の結果とが——たとえば、ロンドンとパリとにおける男女出生率がそれぞれ 19 : 18 と 25 : 24 であること——まったく異なる、あるいは一定の範囲のなかで異なる確率を確定させなければならない。すなわち有意性の問題である。

この有意性の問題について、エッジワースは、自然科学的な観察理論という光をもって社会科学の系統的ではない部分を映し出すことができるだろうとみずからの願望を告白した「統計学の諸方法」(*The Methods of Statistics*, 1885)において取り組んでいる。彼によれば、統計学とは「平均(Mean)の科学」(Edgeworth 1885b, 24)であり、その主たる研究対象のひとつは、「提起された諸平均の間の差異がどの程度偶然であるか、それが法則の示すものであるかどうか、を見出すこと」(*ibid.*, 25)である。エッジワースは、同論文において、今日では、

$$f(x) = \frac{1}{\sqrt{2\pi\sigma^2}} e^{-\frac{1}{2\sigma^2}(x-\mu)^2}$$

とあらわされる標準正規分布の確率密度関数を、

$$y = N \frac{1}{\sqrt{\pi c}} e^{-\frac{x^2}{c^2}}$$

と記述し<sup>17</sup>、 $c$ をモデュラス(modulus)と呼んだ。このモデュラスは標準偏差  $\sigma$  に  $\sqrt{2}$  を乗じたものにあたる。エッジワースは、この確率密度関数のもとで、二つの平均の差を  $\mu_1 - \mu_2$ 、

<sup>17</sup> ただし、 $\mu$ は平均、 $\sigma^2$ は分散をあらわし、また $N$ は観察の総数である(Edgeworth 1885b, 184)。

そのモデュラスを $c_{\mu_1-\mu_2}$ としたとき、 $\frac{|\mu_1-\mu_2|}{c_{\mu_1-\mu_2}}$ を満たしているならば、その差を有意のもの

考えた。彼はこの検定法を次のように説明している。

「モデュラスがどのようなものであれ、直線 $XX'$ にそって原点から両側にそれぞれモデュラス2倍に等しい長さを測り……このようにして決定されるそれぞれの点において縦座標をとれば確率曲線と水平線との間に包含される総面積の断然より大きな部分（すなわち、0.995）はこれら二つの縦座標によって封じられるだろう。したがって、かりに誤差法則を満たす（たとえば） $N$ という統計総数のなかからわれわれが無作為に一つを選ぶならば、それが平均とモデュラスの2倍の大きさで異なることは極めてありえそうもないことであり、3倍ならばなおさらである」（*ibid.*, 185）。

まさに、この方法は有意水準 0.005 の両側検定である(蓑谷 1982, 58)<sup>18</sup>。

また、エッジワースは、平均がかかえる測定時の精度問題については、「ウエイト (*Weight*) という重要な原理」(Edgeworth 1887, 38)、すなわち加重原理を導入することができる」と述べる。そして、この加重原理は二つの方法に分けられる。第一に、かぎりなく多数の観察によって得られた誤差についての情報から具体的に導きだされたウエイトにしたがう方法、第二に、推測から導き出される粗雑なウエイトにしたがう方法、である。言い換えるならば、前者は「直接的な経験」にもとづき、後者は「演繹という手続きを通じて」おこなわれる(*ibid.*, 39)。当然、この後者の方法は数字的な正確さを備えているわけではない。それでもエッジワースは、たとえば、ある川の異なる水深での水流速度観察において、その正確性と水深との間に反比例関係があると想定している物理学の例などを挙げることによって、これらの方法が一般的なものであると肯定的にとらえたのである。

これらエッジワースの確率論や統計学についての叙述から、彼の帰納法についての見解は次のようにまとめることができる。すなわち、直接的な観察から事実を得ることは「初

<sup>18</sup> もっともエッジワースは、つねにこの方法を用いるべきだとは考えていない。彼は、ネヴィル・ケインズの『経済学の領域と方法』への書評において、次のように述べている。「限られた数の観察によって与えられる最大限のもっともらしい証拠を抽出するために誤差理論を有用に使うよりもむしろ、観察を増やすことによって確実性を得る方が一般的にはより良い……。統計学者は一般的に、相対的に小さな地所を大いに耕すことよりも、自分の農地を広げるためにより多くの支払いをおこなうアメリカの農業者と同じ立場にある」(Edgeworth 1891b, 6)。

歩的な帰納法」であり、その事実から偶然性を取り除いて一般化することが「秩序だった帰納法」であった。当然のことながら、偶然性の排除によってより良い帰結を得ることのできる「秩序だった帰納法」を評価したことから、帰納法にとっても演繹的操作が重要であるとエッジワースが考えていたことは明らかであろう。

#### 5-6. 方法論争と科学進歩

ここまで主に1870年代後半から1890年代へと連なったイギリスにおける経済学方法論争の流れのなかでエッジワースの演繹と帰納とをめぐる考えを考察してきた。その要点を整理し、本章をまとめることにする。

レズリー、イングラム、ロジャーズら、イギリス歴史学派による演繹批判によって経済学方法論争が幕開けた頃にエッジワースの経済学研究ははじまり、この論争による影響は『数理精神科学』のなかにも見出される。エッジワースは経済学を含む道德科学と数理科学との類似性を指摘することで前者にも数学的推論が適用可能であることを主張し、抽象的な「ダイアグラム」によって、契約取引には不確定性が存在するという「契約の法則」を導き出した。そして、この「ダイアグラム」を用いた契約取引分析をアイルランド土地問題という歴史的・具体的事象へと応用した場合にも、この法則が普遍的に説得力をもつことを示すことによって、彼は演繹的・抽象的な方法を擁護したのである。演繹は、詳細こそ与えないものの、一般的傾向を見渡すために必要というのが彼の考えるところで、これと同様のことは、たとえば、1915年の小冊子『戦費および経済理論から提言するその削減方法』(*The Cost of War and Ways of Reducing It Suggested by Economic Theory*)の冒頭においても、次のように述べられている。

「抽象化という幾分か遠い高みから物事を見つめたとき、経済理論は歩みが進められるべき精密な道よりもむしろ一般的方向性を指摘する。少なくとも、不明瞭な一般の見解から生じる誤った示唆を回避することができるだろう」(Edgeworth 1915, 3)。

ただし、エッジワースは演繹的・抽象的な方法のみを支持し、帰納的・歴史的な方法を否定したわけではない。1880年代中頃以降、いわゆる正統派が帰納的・歴史的な方法の重要性を認めたとうえで、演繹的・抽象的な方法の必要性を訴えたが、エッジワースもこの立場にあった。さらに、イギリス歴史学派による演繹的推論の使用を見出すことによって、

彼は経済学方法論争が架空のものであると考えるに至った。経済学者は自分の力の一部を理論に、また別の一部を歴史に向けるべきであるものの、その両者の比率についての原則はない、と述べたエッジワースのドラモンド講座経済学教授就任講演は、まさに経済学方法論争が有名無実であることを訴えたものであった。

また、エッジワースは演繹法を数学的推論にもとづいておこなうことで、その説明をより明確にできると考えていた。このため、『数理精神科学』をはじめ、各講演においても経済学における数学的推論の必要性が述べられた。もちろん、数字的資料が得られない点など、経済学には数理物理学などに比べて未発達な部分があることは間違いない。とはいえ、量的資料にもとづく数学的推論によってでも、経済学という学問が抱える偏見に起因する誤謬の発見とその除去を達成できる、とエッジワースは数学の果たす役割を評価したのである。

エッジワースは、このようにして数学的推論によって経済理論が構築されても、実践に適用するにあたっては「事実」にもとづいて修正されなければならない、という。この「事実」を直接的な観察からえる方法は、エッジワースが用いた呼称でいえば、「初歩的な帰納法」であるが、この方法は偶然性を含む可能性が否めない。この偶然性を可能なかぎり除去し、より良い帰結を得ることのできる「秩序だった帰納法」は、無作為抽出や有意検定法、加重原理を採用する方法であり、これらは演繹的操作を抜きにしては考えることのできないものであった。

以上のことから、演繹と帰納とが経済学の方法として対立するものであるどころか、そもそも帰納という方法自体が演繹の力を借りなければならぬため、これらの方法が相互補完的であるとエッジワースがみなしたことは明らかであり、この視点こそエッジワースが打ち出した独自の見解であると言えよう。彼は方法論について論争する人びとについて次のように述べている。

「彼らは、自分の説いていることは自分の実践していることほどには良くないのだと嘆くしかない。つまり、みずからの膨大なエネルギーとすばらしい才能とを投じて経済科学の進歩を振興しているのに、みずからの論争好きな短気さがこれを妨害している、と嘆くしかないのである」(Edgeworth 1888b, 396)。

エッジワースにとって演繹か帰納かという二者択一的方法論争は架空のものであるば

かりか、科学の進歩を阻害するものでもあった。彼はこの考えを生涯にわたって持ち続け、これは『エコノミック・ジャーナル』誌の編集者としての仕事にも適用された。エッジワースと同誌の共同編集者を務めたメイナード・ケインズによれば<sup>19</sup>、編集者としてのエッジワースは、「いつも決まって、時事的問題興味のあるものを採って、方法論など退屈な説明（これは往々にしてドイツの雑誌を無用なものにしているというのが彼の意見であった）を捨てるように力を添えたのであった」（Keynes 1933, 264/訳 348-49）。

---

<sup>19</sup> エッジワースとメイナード・ケインズが共同編集者として『エコノミック・ジャーナル』誌に携わったのは1918年から1925年にかけてである(Keynes 1940, 409)。なお、エッジワースは、1895年から1905年にかけてヒッグスを編集者補佐に迎えた以外は、1891年から1911年までの期間、一人で同誌の編集者を務めた。その後、エッジワースの後任としてメイナード・ケインズが編集者となった(*ibid.*, 409)。

## 第6章 エッジワースと最小犠牲原理——課税論への功利主義論の適用——

これまで見てきたように、エッジワースの経済学研究は、彼の功利主義研究の延長線上にあり、それゆえ彼の経済学は功利主義との結びつきを無視して考えることはできない。これは、「ダイアグラム」を用いた取引契約分析に見られるような純粋経済学に直結する理論研究のみならず、政策論にも深くかかわる彼の研究にも該当することである。たとえば、財政学において著名なマスグレイヴ(Richard Abel Musgrave, 1910-2007)は、その著書において、課税論にも目を向けた経済学者の一人にエッジワースを挙げている<sup>1</sup>。そのエッジワースの課税にかんする代表的論文、「課税の純粋理論」は、課税の「帰着法則、および等しい犠牲にかんする原理」(Edgeworth 1897, 64)を取り扱っている。「この論文のなかでもっとも関心をひいた箇所」(Creedy 1981, 89/訳 97)である後者について議論をはじめると、彼は次のように述べている。

「この論題に値する『純粋』という名に値するだけの推論の度合いと前提の強度とを与える解釈が少なくとも一つ存在する。このように特徴づけられる見解とは、納税者の感じる犠牲が財政負担の分配における支配的な要因であるということ、つまり……課税の快樂主義的原理、あるいは特別な意味における課税の功利主義的原理、にしたがっているということである」(Edgeworth 1897, 100)。

『純粋理論』とは、一つまたは若干のアプリオリな前提から、演繹的な推論によって導出された理論体系」(松嶋 2005, 65)を意味しており、エッジワースは、上の引用からも明らかなおとおり、みずからの所得課税にかんする議論のアプリオリな前提を「功利主義」に置いている。このエッジワースの所得課税論は、松嶋(2005)のみならず、Musgrave(1959)、井藤(1969)、Creedy(1981 and 1986)、Daunton(2001)、菊池(2006)らによっても取り上げられており、彼が理論的には「最小犠牲原理」(principle of minimum sacrifice)に基づいて累進課税制度を推奨し、それが功利主義的基礎から展開されたものであるという点につ

<sup>1</sup> 「経済学の一分科としての財政学は、種々の研究経歴をもっている。偉大な経済学者のなかのある人びと——とくにリカードウ、ヴィクセル、エッジワース、およびピグー——は課税理論およびそれほどしばしばではないが公共支出の理論の樹立を試みた」(Musgrave 1959, v/訳 1 巻 9)。

いては、いずれの論者からも異論はない。

しかし、本論4章において取り上げたように、『数理精神科学』をはじめとする著作に見られたエッジワースの功利主義論はベンサム主義批判を含み、またシジウィックの功利主義論とも必ずしも一致するものではない。それにもかかわらず、前述したエッジワースの所得課税論についての解説において、このような事実注意到注意を喚起し、エッジワースの『数理精神科学』の方法論や同書における「精密功利主義」——あるいは、「貴族制的功利主義」——との連続性あるいは断絶性にまで言及する論者は皆無であるように思われる。もちろん、エッジワースの課税論に言及する論者の大半が財政学者で、その論点が彼の功利主義論ではなく、他の経済学者との課税論との相違にあることも影響しているだろう。他方で、たとえば、菊池(2006)は、エッジワースとシジウィックとがともに功利主義者であることを前提に両者の所得課税論を比較するが、この両者の功利主義の違いを——その主眼がシジウィックの所得課税論におかれていることもあり——『数理精神科学』にまで遡って検討していない。また、「この主題〔犠牲説〕はもちろん『数理精神科学』をさらに応用したものである」(Creedy 1981, 89/訳 98)と言及してはいるものの、Creedy(1981 and 1986)や松嶋(2005)は、『数理精神科学』における同質のロビンソン・クルーソーと同質のフライデーとの間の契約取引分析を検討したのち、個人間の異質性を考察に含めた同書の「功利主義的計算法」の議論に触れることなく、「課税の純粹理論」をはじめとするエッジワースの所得課税論へと接合している。このような議論の展開は、かりにエッジワースが「課税の純粹理論」において「精密功利主義」の立場を放棄しているのであれば整合的ともいえるが、もしそうでないのであれば、彼の主著『数理精神科学』のなかで提示された功利主義論と彼の所得課税論との関係性をも見えにくいものにしてしまうだろう。

このような事情にもとづき、本章においては、『数理精神科学』におけるエッジワースの功利主義論と彼の所得課税論との関係性をより詳細に考察することを目的とする。

### 6-1. イギリスにおける所得税制度の展開<sup>2</sup>

本章の主眼はあくまでエッジワースの功利主義論と所得課税論との関係にあるが、まずはエッジワースが生活を送ったイギリスにおける所得税制度について概観しておくことにする。

<sup>2</sup> 本節は主に Shehab(1953)、土生(1997)、本郷(2007)、松嶋(2005)を参考としている。

イギリスにおいて、1799年に小ピット内閣がナポレオン戦争の戦費調達を目的として導入した所得税制度が再びその姿を現すのは<sup>3</sup>、自由貿易体制の確立を目指した第二次ピール内閣（1842年）のもとにおいてである。単一税率（約2.9%）で導入されたこの所得税制度は、自由貿易体制と引き換えにイギリスが喪失する関税収入の補填を目的とした3年間の臨時税であった。しかし、財政状況が好転しなかったイギリスは1845年、1848年と同制度を更新し、1851年からは単年ごとに更新されるようになった。

このような状況のもと、1853年にグラッドストーンは、所得税率の漸次引き下げとその終着として1860年の同税廃止計画を提案した<sup>4</sup>。現実には、同計画を遂行するどころか、クリミア戦争（1853-56年）による国家経費の急増<sup>5</sup>、英仏通商条約（1860年）の締結による関税収入の減少によって、この所得税廃止計画は頓挫した<sup>6</sup>。

再度、所得税廃止が再び議論されるようになるのは1874年のことである。ジェヴォンズが、「われわれは今や国家的繁栄の充実した朝(full morning)にあり、正午に近づきつつある」(Jevons 1906, 1)と述べたように、1850年代半ばから1870年代中期までのイギリスはまさに経済的繁栄の頂点にあった。この経済的繁栄による自然増収は所得税率を低水準に落ち着かせ<sup>7</sup>、1874年の総選挙において自由党、保守党両党は、その公約に所得税廃止を掲げられた。しかし、1870年代後半の「大不況」到来にともなう税収の停滞や「帝国主義時代」の対外政策による国家経費——とりわけ軍事費——の膨張という現実に直面し、選挙に勝利した保守党政権は公約を果たすことができなかった。

このように、もともとは関税収入の減少を補い、均衡財政を目指すための臨時税として設けられたはずの所得税は恒久化の一途をたどった。ただし、1870年代に二度の低額所得控除の拡充がおこなわれたように、所得税は低所得者の税負担を軽減する方向にも進みだした(土生 1997, 19; 34)。また、「大不況」の影響のために「19世紀が終わりに近づくにつれ、『社会主義的』な考え('Socialistic' ideas)がイギリス政治思想に浸透していった」

<sup>3</sup> 小ピット内閣が導入した所得税制度は、ナポレオン戦争の終結とともに、1816年に廃止された。

<sup>4</sup> 1853年から最低課税額が100ポンドに設定された(土生 1997, 19)。

<sup>5</sup> 1855年から1856年にかけての同税率はおよそ6.7% (1ポンドにたいして1シリング4ペンス) に達した(土生 1997, 19)。

<sup>6</sup> これらの結果、60ポンドの所得控除を設けたものの、それを超える所得には単一税率での所得税が課せられた。

<sup>7</sup> 「イギリスの国家経費は1860年代はじめから1870年代中期まで絶対額でもほとんど増大せず、これにたいして国民所得は顕著な増進を続けたので、国家経費の国民所得比は急速な低下傾向をたどった」(土生 1997, 19-20)。

(Shehab 1953, 189)という事情もあり、財政難という問題を抱えながら、イギリスでは、「1880年代半ば以降、差率原理(principle of graduation)〔累進課税〕が、他の分配諸原理とならんで、ますます多くの信奉者を獲得していった」(ibid., 190)。Shehab(1953)によれば、これらの動きは、チェンバレン(Joseph Chamberlain, 1836-1914)の『ラディカル・プログラム』(*Radical Programme*, 1885)、自由党大蔵大臣ハーコート(William Harcourt, 1827-1904)による相続税への累進性導入(1894年)、そしてエッジワースの「課税の純粹理論」に象徴される(ibid., 190)。

そもそも所得への累進課税は、概念として、決して新しいものではない。「課税における等しい犠牲」を出発点として、ミルは所得にたいする免税点以上での比例税を主張したが、そのミルによれば、累進課税は、「イギリスでも、ヨーロッパ大陸でも、ともに、富の不平等を緩和するための手段として国家は課税という道具を使用すべきであるという根拠を公然とかかげて、擁護主張されてきたものであった」(Mill 1848, 810/訳5巻35)<sup>8</sup>。しかし、結論としてミルは、このような課税が富者の勤勉と節約とにたいする罰金に相当するという理由で累進課税に反対した(ibid., 810-11/訳5巻36)。ミルと同じく免税点以上での比例税を推奨したシジウィックも、「このような課税〔累進課税〕が分配の観点から正当化するものであることを認めなければならない」(Sidgwick 1883, 566)とその意義は認めたが、富者と貧者との間の金銭的犠牲を量的比較することが不可能であるためにその適用範囲が恣意的にならざるを得ないこと、そして、その結果として資本蓄積の阻害や生産への悪影響が生じることを考慮して、累進課税に反対した(ibid., 566-67)。

これにたいして、1880年代半ば以降、チェンバレンは、『ラディカル・プログラム』において、「差率化所得税は、イギリスでも、ヨーロッパ大陸でも、ともに、長らく擁護されてきた。……ミルが唱えた原理とは、課税において等しい犠牲であるべき、ということである。絶対的な完全性をもってこの説を実行にするのは非常に困難ではあるものの、これまでのような富者のためではなく、そのかわりに、貧者のため、寛容な解釈へと偏すべきである」(Chamberlain 1885, 218-19)と述べ、累進所得税導入を推奨した。ハーコートも、ミルが例外的に容認し、「勤労所得者と不労所得者との間の所得税負担を再調整する効果」(Shehab 1953, 194)を有する「累進相続税」を導入することと1なる。もともとハー

<sup>8</sup> ただし、ミルは所得者の勤勉や節約とは関係のない遺贈や相続にたいする税にかんしては、累進税の適用を容認している(Mill 1848, 812/訳5巻37)。また、シジウィックも多くの資産を相続する階級に重い相続税を課すことを承認している(Sidgwick 1901, 580)。

コートは、累進所得税の一種で、一定額以上の所得にたいして通常とは異なる税率を課す超過所得税(surtax)を構想していた。しかし、「累進所得税実施に不可欠な高額所得者の数、所得分布状況などの基礎的データをもっていなかった」(藤田 2002, 185)ため、これを断念し、より導入が容易であった相続税の累進化に踏み切った。いずれにせよ、1880年代以降、累進所得税はイギリスが目指した方向性であったことは間違いない。その結果、この所得税の累進化は、1910年、ロイド＝ジョージ(David Lloyd George, 1863-1945)の「人民予算」によって達成されることとなる。

この所得税の累進化に「最終的な経済的基礎を与え」(松嶋 2005, 65)、この問題にかんして「英語圏にもっとも大きな影響を与えた」(Hayek 1960, 435/訳 7巻 241)論文こそ、エッジワースの「課税の純粹理論」であった。

## 6-2. エッジワースの利益説批判の特徴

マスグレイヴによれば、課税理論には大きく「利益説」(benefit approach)と「能力説」(ability-to pay approach)という二つの接近法があり、この両者ともがスミスの租税論にその起源をもっている。前者は租税を公共サービスの受益者が支払うべき対価とみなす考え、後者は公共サービスとその受益との関係を切り離し、租税を支払い能力に応じて支払うべきものとみなす考え方である。言い換えるならば、「利益説」は「交換的正義」、「能力説」は「分配的正義」を尊重する。このうち、納税者の犠牲を租税分配の支配的な要因であると考えているエッジワースの立場は、マスグレイヴによって「能力説」と説明され、実際にエッジワースは「利益説」を批判している。本節では、まずエッジワースがなぜ「利益説」を批判したのか、を考察する。

エッジワースは、「利益説」がすでに「ミルやセリグマン教授、他の大家たちによってまさしく拒絶されたものである」(Edgeworth 1897, 102)ことを認めている。しかしながら、エッジワースはミルやセリグマン(Edwin Robert Anderson Seligman, 1861-1939)による利益説批判の理由を明示していない。このため、エッジワースの利益説批判の特徴を浮かび上がらせるには、ミルやセリグマンらの利益説批判を取り上げておく必要がある。

ミルは利益説を、「保護を受けるべき財産を2倍所有している人は……2倍の保護を受けているわけであり、したがって売買の原理に基づき、それにたいして2倍の〔租税〕を支払うべきであるという根拠」(Mill 1848, 807/訳 5巻 29)の上に成り立つものと解釈した。しかし、第一に、10倍の財産を所有することが10倍の保護を受けることになるとは必ず

しも言えず、また第二に、社会的弱者の方が国家の保護を必要としているのであるから、こういった人びとこそより多くの租税を支払わなければならない、としてミルはこの利益説を批判したのである(*ibid.*, 807-08/訳5巻30-31)。

他方、セリグマンも、「利益説は、租税が個々の市民が得る利益にたいして一定の関係で値付けされねばならない、という考えである」(Seligman 1894, 79)との理解を提示するが、同時にその公共サービスからの個々人の受益を測ること、そして、これらのサービスに要した費用を個々人に振り分けること(個別化)が実行不可能である点を指摘した。その結果、彼もまた「利益説は課税についての唯一の説明としては大抵無視することができる」(*ibid.*, 86)と結論づけている。さらに、エッジワースが『数理精神科学』をはじめとする著作においてしばしば意識したシジウィックも、彼の『経済学原理』において次のように述べる<sup>9</sup>。

「個人主義的観点からは課税の問題を扱う場合、政府がなすサービスを個別化する余地があるかぎりでは、この原理〔利益説〕がもっとも首尾一貫した方法であることを私はたしかに認める。しかし、政府のもっとも重要な——そして、実際にはもっとも費用のかかる——機能にかんして、この原理を適用することはほとんど不可能であると考え」(Sidgwick 1901, 559)。

つまり、セリグマン同様、シジウィックも公共サービス——王室、陸海軍、外交、戦争目的のために発行した国債への利子支払いなど(*ibid.*, 559)——の個別化が困難であることを理由に、利益説の採用を見送った。

これらの論者は、公共サービスとその受益者の各々が負担すべき費用との関係を個別化できないとの視点に立っている。彼ら同様、エッジワースも、政府によるサービスの便益が個人に配分できるものであれば、それにたいして個人は対価を支払うべきであるが、一般的な公共サービスはそのようなものではない、との見解をもっている。

「一般的に、郵便局のような公共サービスの利用に政府が課税する場合、消費者が支

<sup>9</sup> シジウィックは、初版にたいするエッジワースをはじめとする学者たちからの批判を受けて『経済学原理』の修正や加筆をおこなって第2版を出版したものの、「根本的な意義にかんするいずれの点も自分の観点を変えていない」(Sidgwick 1901, vii)と述べている。

払わねばならない価格は、完全競争体制におけるような、その人が得る便益の基準ではない。国家の費用で軍事的理由のために維持される道路の利用や子どもの無償教育のように、かりに個人に無料でサービスが供給されたとしても、政府にかかる費用はそのサービスを利用する個人固有の便益の基準ではない」(Edgeworth 1900, 158)。

これに加えて、エッジワースの利益説批判の特徴は、以下のように、公共サービスとその対価との関係——つまり、交換比率——が不確定であると主張する点にある。

「われわれは、経済的交渉が一般的に最終効用に対応する一つの交換比率でうまくおこなわれるという状況を、その類似した本質的特徴としてみなしてはならない。このような状況は競争によって成し遂げられるもので、[租税のような] 政治的契約の事例には存在しないのである」(Edgeworth 1897, 102)。

エッジワースによれば、政府と公共サービスの受益者との関係は、雇用者と労働組合との間の合意のようなもので、「より正確には、競争に左右されない経済的交渉に類似している」(*ibid.*, 102)。すなわち、かつて『数理精神科学』の「経済的計算法」において示したのと同様、彼は、政府と公共サービスの受益者との間に競争者が無限に存在することはないため、無数の「最終決着点」が横たわり、公共サービスとその経費との交換比率が不確定であると主張する。それゆえ、エッジワースは、「一つの価値事象(value-phenomenon)としての租税概念」(*ibid.*, 102)は反論に耐えられないものとみなしたのである。

さらにエッジワースは、利益説に代わる原理を導き出すために、『数理精神科学』の「経済的計算法」での議論——彼によれば、これは功利主義の「経済的側面についてのアプローチ」(*ibid.*, 101)である——をここでも援用する。競争が存在しない二人、もしくは少数の利己主義的主体の間で取引する場合、自分の利益を追求する利己心は相互対立を引き起こし、この取引を停止させるかもしれないが、利己的な経済主体も「友好(amity)というより繊細な力を感じるようになり」(*ibid.*, 102)、双方の当事者の総効用の合計が最大となるような契約を結ぶだろう。この説明において結ばれる契約とは、まさに彼が『数理精神科学』の「ダイアグラム」において述べた「功利主義的な点」に他ならない。「このように、利己的な当事者たちに功利主義を推奨することは……頼むに足りないものではないのである。当事者たちにあるとされる公共精神の度合いが高ければ、なおさらなのである」(*ibid.*, 103)。

最大幸福原理を人間の行為の基準——実践理性——として想定できるというこの根拠に基づいて、エッジワースは課税負担の分配問題に功利主義的原理を適用したのである。

### 6-3. エッジワースの犠牲説評価

前節で考察したように、エッジワースは「利益説」を退け、「課税の功利主義的原理」を採用した。セリグマンやマスグレイヴにしたがえば、エッジワースの議論は大きく「能力説」の論者に分類され<sup>10</sup>、彼はこの「能力説」に属する「課税の功利主義的原理」、すなわち、「最小犠牲原理」（最小犠牲説）のみを課税の純粹理論として適用した。この「最小犠牲原理」以外にも「いくつかの他の原理——たとえば、より客観的な意味合いにおいて、『能力』(ability)や『支払い能力』(faculty)」の原理——を考へることもできるが、これらは純粹理論の領域にふさわしいとはまったくみなすことができない(Edgeworth 1897, 101)とエッジワースは主張している。

このようなエッジワースの主張は、セリグマンを意識してのものである。ミルのように納税による消費支出の減少から生じる効用の減少に着目する課税論とは別に、セリグマンは納税のために資金を回せなくなるために失われる生産能力に着目する課税論を展開し、「支払い能力」には「生産能力」と「消費能力」という二つの意味合いを含んでいると考へた(Seligman 1894, 191; Edgeworth 1897, 101fn)。これにたいして、エッジワースは、「これらの用語〔『能力』や『支払い能力』〕は、しばしば主観的な犠牲の原理に適用され」(Edgeworth 1897, 100fn)、効用が「生産の全量と分配の平等性とを双方変化させるものと一般的に考へられる要因である」(Edgeworth 1900, 155)ことから、ミルと同じく、効用の減少、すなわち「主観的な犠牲」のみに着目した。つまり、エッジワースはいわゆる犠牲説の立場をとったのである。しかし、その犠牲説にしても、複数の考へが存在するにもかかわらず、それらの無差別的な採用にはエッジワースは難色を示している。このため、本節では、彼のいう「最小犠牲原理」について概説したうえで、その他の犠牲説（犠牲原理）がどのような理由で純粹理論として考へることができないのかを考察する。

エッジワースは、「課税の功利主義的原理」を課税の純粹理論として考へるにあたって、一つの大きな前提を置いている。それを示唆しているのが次の一文である。

<sup>10</sup> 「能力説」はセリグマンの語法では faculty theory である(Seligman 1894, 127)。

「基本的な問題は、一般的な目的のために、つまり、市民の特定階級に分配されてはならない利益のために用いられるこれらの税の分配を決定することである」(Edgeworth 1897, 103)。

エッジワースは、このように述べることによって、所得税の負担分配問題を社会の全構成員の問題として取り扱い、『数理精神科学』の「功利主義的計算法」で言及したような階級差やその階級差にもとづく快樂受容能力の差異を考慮する必要性をなくしている。この議論において、まず彼が考えねばならないのは、平均的な快樂受容能力をもつ構成員、あるいは「経済的計算法」の「ダイアグラム」分析で導入したような同質の主体にたいする租税負担問題となったのである。

より端的に言えば、同一効用関数をもつ納税者を前提条件として、エッジワースは、功利主義の至上命題である「最大幸福」原理を適用する。これは、「いかなる政治体制の公平性(equity)を考察するにしても、適用されるべき基準は最大幸福原理である」(Edgeworth 1899a, 130)とのエッジワースの思想に基づいている。そして、「課税によって獲得される純効用の合計が最大にならねばならないという条件は、このとき、不効用の合計が最小とならねばならないという条件へと変換される」(Edgeworth 1897, 103)こととなる。このようにして導出される最小犠牲原理は、エッジワースによれば、「純粹功利主義からの直接的な所産であり、課税における至高の原理である」(*ibid.*, 106-07)。この「純粹功利主義」とは、「ベンサムが平等性を説いた形のことである」(*ibid.*, 101)とのエッジワースの叙述から、社会の全構成員を等しいものとみなすベンサム主義を彼が採用し、この課税論において、同一効用関数を前提としていることは間違いない。

このとき、課税による社会の総不効用を最小とするには、それぞれの納税者の限界不効用が等しくなるような課税が求められる。これは課税後の所得を平準化するような累進課税の適用を意味し、この考えは「均等限界犠牲原理」(均等限界犠牲説)と位置づけられる。均等限界犠牲 $MS$ は、所得を $Y$ 、納税額を $T$ 、所得から得られる総効用を $U(Y)$ とすれば、 $MS = dU(Y - T)/d(Y - T)$ とあらわすことができる。

しかし、徴収されるべき税総額にたいして、貧富の差が著しい場合、社会の構成員の一部のみが課税対象となり、全員が税負担する必要性はなくなる。エッジワースはこの問題の解決方法として、課税によって、「より高い所得をある水準にまで切り下げるべき」ことを主張する(Edgeworth 1897, 103)。ただこの方法だけでは最小犠牲に必要な「一般限界条

件が完全には満たされない」(ibid., 103)ため、より豊かな者にはより貧しい者の便益のために課税し、完全に富裕が平等となるようにすべきとも述べる。これはすなわち、極端に貧しい個人の所得をも平準化させ、所得の限界効用が等しい水準となるまで高めるために、エッジワースが「負の所得税」(生活補助金)をその視野に入れているということに他ならない(Creedy 1981, 90/訳 98)。「19世紀後半に累進課税を擁護した人たちが一般に強調したのは、犠牲の平等を達成することだけに自分たちの目的があり、所得の再分配にではない」(Hayek 1960, 436/訳 7巻 78)とハイエク(Friedrich August Hayek, 1899-1992)は述べているが、少なくともエッジワースにかぎっては、このハイエクの理解は適用できない。

上述のような最小犠牲原理は、なぜ「課税における至高の原理」とエッジワースによって位置づけられることとなったのだろうか。

エッジワースは、最小犠牲原理の他にも、快樂主義的な課税理論が存在し、そのうちでもっともよく知られているものとして、「均等犠牲原理」(principle of equal sacrifice)と「比例犠牲原理」(principle of proportional sacrifice)とを挙げている。前者は各納税者の課税による犠牲量を等しくする考え(「均等絶対犠牲説」)であり、均等絶対犠牲 $AS$ は、 $AS = U(Y) - U(Y - T)$ とあらわすことができる。他方、後者は各納税者の犠牲比率を等しくする考え(「均等比例犠牲説」)で、均等比例犠牲 $PS$ は $PS = \frac{U(Y) - U(Y - T)}{U(Y)}$ とあらわされる。これら二つの原理を「同等的犠牲原理」(principle of like sacrifice)とエッジワースは一括して呼んだが、この「同等的犠牲原理」は「最小犠牲原理」との比較において難点が存在するため、彼の批判の対象となると同時に、「最小犠牲原理」が「至高の原理」に位置づけられるのである。

エッジワースが「同等的犠牲原理」を批判した第一の理由は、これらの原理から導き出される結論が想定する効用関数形によって異なるからである。エッジワースによれば、限界効用が所得の増加にたいして反比例的に減少するベルヌーイ効用関数——所得についての限界効用の弾力性が1である——を仮定する場合<sup>11</sup>、均等犠牲原理は比例税を示し<sup>12</sup>、比

<sup>11</sup> ベルヌーイ効用関数は、 $U = A \log\left(\frac{Y}{a}\right)$ とあらわされる。このとき、 $A$ は定数、 $a$ は生存に必要な最小額、つまり控除額である。

<sup>12</sup> 均等犠牲原理(均等絶対犠牲説)の条件は、 $U(Y) - U(Y - T) = \text{const.}$ である。このとき、 $\frac{dT}{dY} = \frac{U'(Y-T) - U'(Y)}{U'(Y-T)}$ を得る。ベルヌーイ効用関数であれば、課税後の所得の課税前の所得にたいする弾力性は1になるので、 $\frac{Y}{Y-T} \frac{d(Y-T)}{dY} = 1$ である。ここで、 $\frac{d(Y-T)}{dY} = 1 - \frac{dT}{dY}$ であることから、 $\frac{YU'(Y)}{(Y-T)U'(Y-T)} = 1$ が成立するので、比例税が成立することになる(Samuelson 1948,

例犠牲原理は累進税を示す(Edgeworth 1897, 108)。そして、彼は、比例税の立場をとった「ミルも他の少なからぬ大家たちも、その〔限界効用の〕減少が所得の反比(inverse ratio)よりも小さいとは考えていなかった」(ibid., 108)と、ミルをベルヌーイ効用関数採用者の代表格とみなしたが、それはミルが次のように述べているからである。

「1,000 ポンドのなかから 100 ポンドを徴収することは……10,000 ポンドのなかから 1,000 ポンドを徴収する……ことよりも、より重い課徴となる、と主張する人がたしかにあるであろう。しかし、この学説は、私には、それを採って課税の原則の根底とするには議論の余地が大きすぎ、またかりに真理であったとしても、そうするのに十分な程度まで真理ではないと思われる……。／ある人は、比例課税の原則は高額所得よりもむしろ中位の所得にたいして大きな負担となるものである……と確かに主張している。このことは、私には、疑わしいという以上であると思われる」(Mill 1848, 810/訳 5 卷 34-35)。

所得 1,000 ポンドにたいする 100 ポンドの課税と所得 10,000 ポンドにたいする 1,000 ポンドの課税とによる犠牲が等しくなるには、ベルヌーイ効用関数を仮定するより他ない。

しかし、効用関数は、かならずしもベルヌーイ型であるとはかぎらない。ベルヌーイ効用関数以上に限界効用が急速に減少する効用関数——所得にかんする限界効用の弾力性が 1 より小さい——を仮定することも可能である。それにもかかわらず、ベルヌーイ効用関数を仮定して論理を展開する大家たちはこの可能性を考慮していないため、「資本化(capitalization)を（個人のためであれ、他の人のためであれ）将来の満足にたいする所得の適用とみなしたとき、その資本化について、ベルヌーイ法則が示すよりも急速に飽和へと接近しえない理由を考えていない」(Edgeworth 1897, 109)とエッジワースは批判する。

かりに、 $dU/dY = Ae^{-(Y-a)^2}$  という所得の限界効用関数と絶対均等犠牲の仮定のもとに  $Y_1$  と  $Y_2$  という所得を有する 2 個人を適用すれば、この 2 個人が支払う税額の比は、 $Y_1:Y_2$  ではなく、 $e^{+(Y_1-a)^2} : e^{+(Y_2-a)^2}$  となるはずであり<sup>13</sup>、所得が高くなるほど、この格差は拡大していく。そして「もし均等犠牲ではなく、比例犠牲が企画されているなら、なおさら拡大するのである」(ibid., 110)。このように、「比例税所得税はベルヌーイ法則という仮定のうえ

227/訳 234)。

<sup>13</sup>  $A$ は定数、 $a$ は控除額であり(Edgeworth 1897, 109-10)、 $Y \geq a$ 、 $a > 0$ である。

で均等犠牲原理によってしか正当化することができない」(ibid., 110)もので、「なんらかの偶有的な助力」(ibid., 110)が必要な課税方法である。

所得にかんする限界効用の弾力性が 1 より小さい効用関数を仮定するならば、「均等犠牲原理も比例犠牲原理も累進税を与え、累進度は後者のほうが前者よりも高くなる」(ibid., 110)<sup>14</sup>。つまり、ベルヌーイ効用関数さえ仮定しなければ、「この点において、二種類の同等的犠牲原理は、強制と剥奪という場合は除くが、納税者にもたらされる不効用を考慮することに限定される最小犠牲原理に似ている」(ibid., 111)。

| 犠牲原理の種類 |                      | ベルヌーイ効用関数 | 非ベルヌーイ効用関数 <sup>15</sup> |
|---------|----------------------|-----------|--------------------------|
| 同等的犠牲原理 | 均等犠牲原理<br>(均等絶対犠牲)   | 比例税       | 累進税                      |
|         | 比例犠牲原理<br>(均等比例犠牲)   | 累進税       | 累進税                      |
| 最小犠牲原理  | 均等限界犠牲原理<br>(均等限界犠牲) | 累課税       | 累課税                      |

表 6-1：エッジワースによる各犠牲原理の分類とそれらから得られる課税方式(筆者作成)

しかし、その内実は似て非なるものである。均等犠牲原理は、前提となる効用関数形が異なれば導かれる結論も異なるため、限界効用の逓減率にかんする仮定をたてる必要やこの率を精密に確かめねばならないがそれが不可能であるとの見解がある以上、誰にとっても明瞭な原理とは言えない。これにたいして、最小犠牲原理が「仮定するのは、一般に容認されていること、すなわち、効用は財産の増加に比例しないというジェヴォンズ的な『[限界] 効用逓減法則』のみである」(ibid., 117)。他方、比例犠牲原理については、いずれの効用関数形においても累進税を導く点においては均等な限界犠牲を考える最小犠牲原理と大きな差異はないが、課税後の社会の総効用を最大にする——課税による犠牲を最小とす

<sup>14</sup> 均等絶対犠牲説を採用し、かつ所得にかんする限界効用の弾力性が 1 以下であるとき、 $\frac{Y}{Y-T} \frac{d(Y-T)}{dY} < 1$  である。 $\frac{d(Y-T)}{dY} = 1 - \frac{dT}{dY}$  であることから、 $\frac{YU'(Y)}{(Y-T)U'(Y-T)} < 1$  となり、累進課が導かれる。ただし、所得にかんする限界効用の弾力性が 1 より大きい効用関数の場合、いずれの犠牲説を適用した場合でも逆進税が導かれる (Samuelson 1948, 227/訳 234)。

<sup>15</sup> ただし、この場合の非ベルヌーイ効用関数の弾力性は 1 未満を想定している。この弾力性が 1 より大きい場合、逆進税が導かれる (Musgrave 1959, 101/訳 1 巻 149)。

る——という積極的な根拠をもちえない。それがゆえに、これらの原理は純粹理論を称するに値せず、最小犠牲原理が「至高の原理」として主張できるのである。

さらにエッジワースは、均等犠牲(*equal sacrifice*)と均等限界犠牲(*equal-marginal sacrifice*)とを混同してしまったために不明瞭になってしまったが、ミルも自分と同じ最小犠牲原理を推奨していると述べることによって、この原理の正当化と権威づけをおこなう。

「政府が彼ら〔人びとや諸階級〕にたいしてどのような犠牲を要求するにしても、その犠牲は、すべての人にたいし及ぶかぎり同等の力をもって負担となるようにしておかなければならない。このことは、しかし、同時に全体のうえに生じる犠牲を最小とするような方法であることに注意しなければならない」(Mill 1848, 806-07/訳 5 卷 28; Edgeworth 1897, 115; Edgeworth 1899a, 131)。

エッジワースは、「課税の公平性」について述べたこの箇所を、まさに、ミルが「疑わしき均等犠牲の原理よりも平等性のための真の功利主義的推論を採用すべき」(Edgeworth 1897, 115)ことを明示しているとの解釈している。そして、ミルが相続税にたいして累進税の適用を認めた点を「ミルの思想における均等犠牲と平等性(*equality*)との結合——最小犠牲からの推論——」(Edgeworth 1899a, 131)とみなしたのである<sup>16</sup>。

エッジワースによれば、このミルにしたがって、均等犠牲原理にもとづいて累進税を擁護する学者たちのなかには、無意識的かつ暗黙裡に、犠牲を最小とする功利主義を適用しているものもある。もちろん、無条件的に、そして限界効用逓減法則にかんする資料をとりたてて提示していないことを加味すれば、彼らの累進税擁護論が比例犠牲原理に基づいているとの説明も可能性として残る。それでもなお、犠牲を最小とすることを前提していることを最重要視すれば、彼らの真意が「均等犠牲でも、比例犠牲でもなく、(最小犠牲を

<sup>16</sup> エッジワースはその確かな証拠として、『経済学原理』において、相続にかんするミルの叙述に注目している。「ミルは相続の制限についての提案をはじめ持ちだしたとき、次のように述べている。『誰の目にも明らかなように、中庸の自立生活をしている人の幸福と、その5倍も大きいものをもっている人の幸福とには、大差があるわけではない。5倍も大きい後者も、それが与える楽しみから測れば、また財産の5分の4の別の処分方法による永久的福利から測れば、大差はないのである』。そして、のちの相続にかんする章では、彼は『富の集積ではなくて、富の分散が望ましいというより深い思想』について言及している」(Edgeworth 1897, 115; Mill 1848, 225/訳 2 卷 64; 891/ 訳 s 5 卷 195)。

導く)均等限界犠牲」(Edgeworth 1897, 116)にあり、そのように理解するほうがミルの言説をより整合的に理解できるのである。

「われわれは不明瞭な前提と誤った推論との間の妥協を強いられているのだけれども、混乱を最小にする道筋とは、いわば——その前提がいくらか不明瞭で、その推論がいくらか誤っていると想定するのではなく——その前提がかなり混乱していて、その推論がかなりの的確だということではないか」(*ibid.*, 116)

このように、エッジワースは、同等的犠牲原理のかわりに最小犠牲原理を用いるように提案する。

「羅針盤が発明される以前の昔、星を頼りに舵を握った船乗りは、光り輝く一点とっていたものが、望遠鏡を用いることによって、実際には、お互いに何百マイルもお互いに離れた物体からなる、一つの連星であることに気づいたとしても、その進路をほとんど変更しないだろう。現在の財政学(*fiscal science*)の状況においても同様に、問題(*affairs*)は諸原理からこのように途方もない距離にあるけれども、犠牲説がいくつかの明確な目的を含んでいるとの発見は、行為の深刻な変更を指示するものとは理解されないのである」(*ibid.*, 117)。

エッジワースが言わんとするところは、第一に、その細部にかんして、確かに各々の犠牲原理は異なるものであるが、彼が理解するミルのように「犠牲を最小とする」という方向を目指しているとするならば、同等的犠牲を最小犠牲に置き換えたとしても何ら大きな問題は生じない、ということである。これは目印にしていた星が実は連星であることに船乗りが気づいたとしても、大きな影響を感じず、船の進路も大きく変えることがないのと同じである。第二に、「純粹功利主義者が、等しく精密なものではないものの、両原理〔均等犠牲原理および比例犠牲原理と〕を真の原理にたいする等しく有用な近似として受け入れることはまったく難しいことではない」(*ibid.*, 117)ということである。というのも、最小犠牲という根拠が指し示されることによって、「むしろ、これら〔犠牲説〕の指示にしたがう義務がより明白なものとなる」(*ibid.*, 117)からである。

以上のように、所得にたいする累進課税を推奨するエッジワースの議論は、最小犠牲を

最大の根拠としており、「厚生」を重視する姿勢に基づくものである。この最小犠牲原理は、他の犠牲説のように想定される効用関数の差異によって導かれる帰結が異なることもない。さらには、この原理は、たとえ他の犠牲説が累進税を導き出すにしても、単に「公平」なだけではなく、「最小犠牲」、すなわち、「厚生」という大義を有するものであり、この点をエッジワースは高く評価したのである。

#### 6-4. 最小犠牲原理の実践への適用——精密功利主義の連続性問題——

前節で言及したように、エッジワースは最小犠牲原理より出発して、それを導き出す条件から限界犠牲を等しくするような所得平準化を達成する累進課税を結論した。富裕の分散が大きい場合には、より高い所得をある水準にまで切り下げるだけではなく、一般限界条件を満たすように、彼は、「理論的には、より豊かな者がより貧しい者の便益のために完全な富裕の平等が達成される程度にまで課税されるべきである」(Edgeworth 1897, 103)と「負の所得税」の導入をも視野に入れている。ここで注目すべきは、彼が「理論的には」と断りを入れている点であり、つまり実践への適用にかんしてはまた事情が異なることを意味している。

エッジワースは、限界効用を等しくする課税の導入によって完全な富裕の平等が達成され、このようにして、「社会主義という頂上(acme)が一瞬眺望される。しかし、それはただちに疑惑と留保とによって覆い隠されてしまう」(ibid., 104)と述べる。というのも、「実践的な賢明さが直にその〔社会主義という〕理想へと動き出すことを思いとどまらせる巨大な割れ目」(ibid., 104)が存在するからである。彼はこれをしっかりと認識している「チーフガイド」としてシジウィックの見解を引用し、労働意欲の減退や人口増加とそれによる労働効率性の低下の危険性を指摘する<sup>17</sup>。また、彼はミルにも言及し、「自由」への脅威にも注意を払っている<sup>18</sup>。しかし、エッジワースが所得の平準化という社会主義的な平等性

<sup>17</sup> 『第一に、生産物の分配におけるより大きな平等性は、究極的には、生産物の分け前が増加する階級の方では労働の成果よりも安逸が概して選好される結果、分配されるべき総量の減少が導かれると考えられる』。／また次のような危険もある——／『所得の平等化を通じて、より貧しい階級における所得増加は、現在以上により急速な進度での人口増加を引き起こすだろう。したがって、究極的には、平均的な労働者の分け前の増加分は、一部はより多数の子どもを養うために費やされ、一部はより多数となった労働の効率性における低下を通じて減少してしまうだろう』(Edgeworth 1897, 104; Sidgwick 1901, 519-20)。

<sup>18</sup> 「ミルの自由にかんする教訓の大意を凝縮した重要な文章は繰り返すに値する」。エッ

にたいする留保のなかで「本質的なもの」(intrinsic; *ibid.*, 105)とみなしたのは、人間の「幸福の受容能力」の差異である。エッジワースは次のように述べている。

「財産の平等性が幸福を最大にするというベンサム的な議論は、性質についての一定の平等性を前提条件として必要とする。しかし、さまざまな階級の幸福の受容能力が異なるならば、この議論は平等分配ではなく、不平等分配へと導かれる」(*ibid.*, 105)。

つまり、彼は所得平準化の実践を留保する理由の一つ——しかも本質的な理由——に『数理精神科学』における受容能力の差異を再び持ちだしているのである<sup>19</sup>。これについてはあとで再度触れることとして、所得を平準化させるような課税について、彼は、脱税の可能性(*ibid.*, 106)、さらには「貧しい人びとの略奪本能を覚醒し、革命に急き立てる危険性」(Edgeworth 1899a, 130)がともなうことをこの実践にかんするさらなる留保として挙げている。

これらの留保のため、「純粹功利主義の自明な革命的指令〔所得平準化の実践〕は常識の許す範囲にまで弱められる」(Edgeworth 1897, 106)。とはいえ、「アンシャン・レジュールのもとでのように、貧者がより大きな部分の課税を負うこと、あるいは……貧者にその所得に比例した一部を課税することは、現代において、容赦しえない」(Edgeworth 1900, 152)と考えるエッジワースは、ミルの見解を『経済学原理』から一部改変しながら援用することによって、富の成長を抑制するほどの「勤労と節約とにたいする課税」は「富の不平等を緩和するための手段」としてはならないものの、「このような不平等を軽減するために何らかの手段がとられることを望む点では誰にも劣らない」(*ibid.*, 106)との立場を表明する<sup>20</sup>。そして、この富の不平等を軽減する手段として、エッジワースは、ミル同様、相

---

ジワースは、自由を単に「単調な平等性によって脅かされる高度な財の一つ」というだけでなく、「知識と文化とを維持し発展させる機能」を有する、との理解を示している(Edgeworth 1897, 104)。

<sup>19</sup> そして、これらの議論について、エッジワースは『数理精神科学』を参照するように注をふっている(Edgeworth 1897, 105)。

<sup>20</sup> ミルは実際には、「私も、このような不平等を軽減するために何らかの手段が取られることを希望する点では、誰にも劣らないものであるが、しかし将来を考慮している人たちを犠牲として浪費的な人たちを救済することがないように、それが行なわれることを希望するものである。より高額の所得にたいしては、より低額の所得よりも、より高い税率をもって課税するということは、勤勉と節約とにたいして租税を付加することであり、ある

続の制限や不労利得(earned increment)への課税を挙げると同時に、カーヴァー(Thomas Nixon Carver, 1865-1961)に倣って<sup>21</sup>、「平等性と完全性との同様の調和」(*ibid.*, 106)を満たす所得への課税方法を採用する。それは、もっとも限界犠牲が小さいと思われる少数の高所得者から全課税額を徴収することによって犠牲量を最小とする方法であった。これは結局のところ、「より高い所得をある水準にまで切り下げる」(*ibid.*, 103)方法である。ただし、ここには課税対象となる人間の(独身や結婚、離婚などの)婚姻上の状態、子どもの数、年齢なども考慮する必要性もエッジワースは認めている(*ibid.*, 107)。これらの条件を考慮し、どのように所得課税に反映させるかをエッジワースは具体的には述べていないが、人間の効用のみならず、その人間がおかれている経済的生活状況——とそれに起因する満足、すなわち経済的厚生——にも配慮する姿勢は、のちに彼が言及した男女賃金論にもみられることとなる<sup>22</sup>。

ところで、エッジワースが推奨したような、少数の高所得者から全額を徴収することで社会の犠牲を最小とする方法には、その課税適用範囲やその負担を決定する際に、「人間の欲求や感情」といった「実体のない数量の推計」(*ibid.*, 121)をしなければならないという問題がともなう。これは恣意性を免れ得ないとシジウィックが懸念したことであるが、エッジワースは、課税負担の分配は、試験の採点方法と同様であると述べている(*ibid.*, 121)。彼によれば、数字によってあらわされる評点で知的能力を測ることは必ずしも明瞭なことではない。しかし、幾人かの副査がそれぞれ同じ受験生にたいして与えた評点を参考として、主査が最終的な評点や順位をつけることによって、一定の公正は確保されている、と

---

人がその隣人よりもより多く働き、より多く節約貯蓄したことにたいして罰金を課することである」(Mill 1848, 810-11/訳 5 卷 35-36)と述べている(傍点は筆者による)。つまり、ミルとエッジワースとは、その力点が異なる。この相違について、松嶋(2005)は、「公平な競争的市場メカニズムを支える政治的・社会的フレームワークの構築のために国家は力を尽くさねばならないとしながらも、市場メカニズムそのものへの介入は原則として望まなかった」(松嶋 2005, 71)ミルと「諸個人の利害対立の『仲裁者』として市場メカニズムの内部に〔国家が〕介入してくる」(*ibid.*, 71)ことを容認したエッジワースの姿勢に求めている。

<sup>21</sup> カーヴァーはエッジワースに先立って最小犠牲原理を唱えた人物であり、「分配の倫理的基礎と課税へのその適用」(*The Ethical Basis of Distribution and its Application to Taxation*, 1895)において、次のように述べている。「抑制〔つまり富の成長の阻止〕の最小量は、その社会のすべての構成員に等しい犠牲を課すことによってもたらされるが、犠牲の最小量はもっとも小さい最終効用をもっているごく少数の所得者から全課税額を徴収することによってもたらされる」(Edgeworth 1897, 107; Carver 1895, 97)。

<sup>22</sup> この詳細については7章において論じる。

というのがエッジワースの考えである。陪審員たちが損害賠償金を算定するときにも用いられているこのような方法は、少なからず誤差や不確定性を免れ得ないが、「実のある正義を保障する帰結へと調停することができる」(ibid., 121)のものであり、課税の適用範囲を推計する際にも適用すべきものである。そして、エッジワースは、「その種のいくらかおおまかな方法の計算こそが、われわれにできるすべてなのである」(ibid., 122)と結論した。

純粹理論レベルでは「公平」と「厚生」の双方の実現という意味で最小犠牲原理を採用しつつも、それを実践に適用する段階では「厚生」を優先したこのようなエッジワースの考えは、マスグレイヴによって、租税負担配分問題を「公平」から「厚生」へと移したと評価されることとなる(Musgrave 1959, 98/訳1巻164)。

ここで本章の本来の目的、すなわち、エッジワースの所得課税論と『数理精神科学』における精密功利主義との関係について立ち戻りたい。彼は、「課税の純粹理論」においても、最大幸福原理とともに平等性を説くベンサム主義を疑問視している。それは以下の引用で明らかであろう。

「功利主義のもっとも演繹的な形として、もっとも純粋な功利主義とは、ベンサムが平等性を説いた形のことである。この形をさらにもっとも純粋なもので、そのなかの第一原理は普遍的にもっとも容認されそうだとみなす人びとがいる。その原理は、行為の目的、あるいは行ないの規準として、幸福の合計最大を提唱している……。この概念は、著者によって数学的に定式化された。この定式によれば、あらゆる時間とあらゆる感覚を通じてこの快樂の総計量を増やすことにおいて、利己主義が決して完璧なものではなく、時間の隔たりが快樂の魅力を減じてしまうのと同様に、功利主義も決して完璧なものではなく、その利害を大きく相違する人びとは他人をそれぞれ『一人として教え』ないだろう。／この所見は、政治的行為の規則として功利主義を適用するときにはとりわけ適切であるように思われる。普通の市民(average citizen)が外国人の利害やその市民自身が属する階級とは無関係な市民の利害に十分に関心を払うことは期待できないし、遠い将来の子孫の利害にたいして関心をもつことは少しも期待できないであろう」(Edgeworth 1897, 101)<sup>23</sup>。

<sup>23</sup> ここでのエッジワースの主張は、『数理精神科学』における「有効同感係数」と関連している。彼が意図するところは、普通の市民が外国人を、あるいは、ある階級が他の階級の人間を自分と同等な存在とみなす(有効同感係数を1と考える)ことはないということ

すでに上で挙げたように、エッジワースは、各階級の受容能力の差異を本質的な理由として、最小犠牲原理から導きだされた所得平準化の実践適用を退けている。これは一見、『数理精神科学』で彼が言及した「精密功利主義」を想起させるものである。しかし、この背後にはエッジワースの考えの変転が見え隠れしている。

『数理精神科学』における「精密功利主義」とは、各個人の受容能力に差異があるため、幸福最大化は不平等分配によって達成される——平等分配による幸福最大化は各個人の受容能力が同一である場合のみで特殊例とみなされる——との考えである。ただし、エッジワースは、この受容能力について、優生学的な進化概念に基づき、上層階級のほうが下層階級に比べて優れているとも述べている。これが『数理精神科学』における議論が社会階級というヒエラルキーの正当化ともみなされる理由である。これにたいして、「課税の純粋理論」において、「幸福の受容能力」の差異の内容について、エッジワースは次のように脚注をつけている。

「この用語は、異なる個人たちが最低水準の幸福、すなわちゼロの幸福を得るために必要となるであろう財産量の差異、およびその点を上回る財産の同量の付加分から彼らを得るであろう効用量の差異の両方を意味するために用いている」(*ibid.*, 105 fn1)。

ここでのエッジワースの説明は、幸福にかんする閾値や丁度可知差異など<sup>24</sup>、快樂受容能力に差異があるというだけの言及にとどまっており、かつて彼が提示した優生学的な思考を見出すことはできない。この点は『数理精神科学』との大きな違いである。このように、エッジワースの功利主義論は、個人の受容能力の差異を重視し、ベンサム主義における平等性を批判する立場は維持し続ける点では以前の「精密功利主義」と同様の立場であるが、その受容能力の大小問題を明示的に階級差と結びつけていない点にエッジワースの変容がある。

このようなエッジワースの変容は、彼の所得課税論にも大きく現れているようにみえるかもしれない。それは、彼が最小犠牲原理を採用した理由の一つに、限界効用関数が右下

---

である。また、遠い将来の子孫に関心をもつことは少しも期待できないということも、エッジワースの功利主義が通時的なものでないというよりも、時間的隔たりが大きい場合、この有効同感係数がほぼ0になることを意味していると解釈するべきであろう。

<sup>24</sup> これらの用語については、本稿 82 頁を参照のこと。

がりでさえあれば効用関数形にはこだわらなくてよいことを挙げている点である。つまり、受容能力を階級差と結びつけることによって、また「フェヒナーの法則」を参考とすることによって、大枠ながら、効用関数の特定化を期待した『数理精神科学』での姿勢から、「課税の純粋理論」においては、その効用関数特定化には以前ほどにはこだわらない姿勢へと彼が転換しているようにもみえるのである。しかし、これは効用関数の形が異なっても得られる帰結が同じであるような原理こそ「純粋理論」にふさわしいとエッジワースが考えたからに他ならない。終章で取り上げるように、終生、エッジワースは効用の可測性について前向きな姿勢を示している。

#### 6-5. エッジワースの課税論とその方法——方法論における共通性——

以上で整理してきたように、エッジワースは、功利主義原理を課税理論に適用することを試みた。これは、第一に、課税理論の大きな接近法の一つである「利益説」にたいする彼の批判において見られる。そのエッジワースによる批判論法は、『数理精神科学』の「ダイアグラム」で用いた議論を活用したものである。すなわち、公共サービスとその対価との交換比率が不確定であるとの理由で利益説を批判すると同時に、この不確定性を調停する原理が功利主義であることから、課税負担の分配問題にも功利主義を適用しようとしたのである。

課税負担に功利主義原理を適用したエッジワースは、課税による犠牲を最小にすることでの社会の幸福最大を目指し、最小犠牲原理の立場を採用した。最小犠牲原理は、社会の構成員の効用関数が同一であるとき、各納税者の限界犠牲を等しくする累進課税を推奨し、これは所得平準化を結論するものである。この所得平準化のため「負の所得税」の導入をも考慮した彼を「福祉国家論」の先駆けとして評価することもできる。

この最小犠牲原理にかぎらず、犠牲の側面から課税の負担問題に言及するものとして、均等犠牲原理や比例犠牲原理も考えられる。しかし、エッジワースによれば、前者は前提となる効用関数形がベルヌーイ型か否かによって推奨される税制が異なるような原理は「至高の原理」とは言えない。他方、比例犠牲原理は、いずれの効用関数形によっても、最小犠牲原理同様に、累進税を導きだすが、最小犠牲原理が有する課税後の社会の総効用を最大にするという積極的な根拠に匹敵する論理をもたない。それゆえ、課税負担の分配問題に最小犠牲原理を適用することをエッジワースは推奨したのである。エッジワースの最小犠牲原理は、シジウィックを翻意させることこそできなかったが、マーシャルやピグー

に支持されることとなる<sup>25</sup>。

とはいえ、この最小犠牲原理から導き出される所得の完全なる平準化の実践、すなわち社会主義の適用にはエッジワースは慎重な姿勢を見せた。それは、労働意欲の減退、人口増加とそれによる労働効率の低下、自由への脅威、脱税の可能性、さらには貧民を革命に急き立てる危険性を彼が危惧したからであった。しかし、彼がより本質的な留保理由としたのは、人間の幸福の受容能力の差異の存在であった。エッジワースは、社会の構成員が同一の効用関数をもつとのベンサム主義的前提のもと、最小犠牲原理を適用したが、その帰結の実践においては、『数理精神科学』と同様、ベンサム主義に批判的な姿勢は崩していなかったのである。ただし、『数理精神科学』におけるような、上層階級と下層階級との間の受容能力の優劣にかんする優生学的思考は「課税の純粹理論」においては消散していることも考慮しなければならない。以上のことから、エッジワースの功利主義論のコアが、ベンサム主義批判、すなわち、功利主義における最大幸福と平等性との暗黙裡な結合の批判であったことは間違いないだろう。

エッジワースのこのような論理展開は『数理精神科学』と同じものである。同書第Ⅱ部前半部「経済的計算法」の「ダイアグラム」についての議論において、エッジワースは、ロビンソン・クルーソーとフライデーのクローンをそれぞれ導入することによって幸福の最大化を目指す功利主義を正当化したのち、その幸福最大化は、各人の快樂受容能力が異なる場合、財産の不平等分配によって達成されると主張した。他方、「課税の純粹理論」に

---

<sup>25</sup> シジウィックは1898年にエッジワース宛の書簡において、均等絶対犠牲原理を採用する立場を崩していない(Sidgwick and Sidgwick 1906, 560-61)。マスグレイヴは、マーシャルが均等犠牲原理の立場をとった証拠として彼の『経済学原理』を挙げている。マーシャルは、ベルヌーイ効用関数を「恣意的」なものとしながらも認めており、「現在もっとも広くおこなわれている課税制度は一般にベルヌーイの示唆した線に沿ったものである」(Marshall 1961, vol.1, 135/訳1巻201fn)と述べている。ベルヌーイ効用関数のもと、同時おこなわれていた比例税を導くのは均等犠牲原理である。しかしながら、マーシャルは、「課税の公平分配」(The Equitable Distribution of Taxation, 1917)においては、最小犠牲原理とほぼ同等の考えに転向している。「たとえ、10,000ポンドの所得から1,000ポンド差し引かれることによる個人の痛みが200ポンドの所得から20ポンド差し引かれる痛みと同量であったとしても、1000ポンドという追加的歳入を得るために生じる痛みは、所得10,000ポンドをもつ一人から徴収することによるものよりも、所得200ポンドをもつ50人から20ポンドずつ徴収することによるもののほうが、疑いなくはるかに大きい」(Marshall 1917, 348)。ピグーも、「政治理論にかんするかぎり、最大総厚生は、政府の正しい目標としてどのような場所でも承認されている……課税という特別な領域において、この一般原理は最小犠牲原理と同一である。その正当性は直観によって与えられるように私には思えるのである」(Pigou 1962, 43)と述べている。

においては、同一効用関数のもと、課税による犠牲の最小化を通じて所得平準化による幸福の最大化を正当化したのち、エッジワースは、各人の快樂受容能力が異なることを本質的な理由として、この所得平準化の実践を留保する。いずれの場合も、同質の個人を想定することから議論をはじめ、その応用については異質な個人へと展開している点に、エッジワースの方法論的な共通項を見出すことができよう。そしてこれらは、本稿5章で論じたように、抽象から具体、簡素から詳細へと導き下ろすという経済学方法論争に直面したエッジワースが説いたこととも合致するのである。

エッジワースの功利主義論および彼の方法論は、彼が終生関心を寄せたとされる男女賃金論においても同様に関係しており、これらについては次章において論じることとする。

## 第7章 エッジワースの男女賃金論

——『数理精神科学』から「男女への等しい労働にたいする等しい賃金」へ——

エッジワースは、1922年にも再び、イギリス科学振興協会 F 部会の会長を務めた。本稿5章において取り上げた1889年同様、1922年にもエッジワースは F 部会会長講演をおこない、この講演は「男女への等しい労働にたいする等しい賃金」(Equal Pay to Men and Women for Equal Work)と題された<sup>1</sup>。両性間の賃金問題を主題とした彼の講演は、その前年の会長ヒッチنز(William Lionel Hichens, 1874-1940)による「賃金決定の諸原理」(The Principles by which Wages are Determined, 1921)に続くものでもあった。この翌年にも、エッジワースは、F 部会において、「経済的厚生と女性賃金」(Women's Wages in Relation to Economic Welfare, 1923)と題した報告をおこなっている。このエッジワースの動きに前後して、『エコノミック・ジャーナル』誌にかぎっても、ラスボーン(Eleanor Florence Rathbone, 1872-1946)の「女性サービスの報酬」(The Remuneration of Women's Service, 1917)、フォーセット(Millicent Garrett Fawcett, 1847-1929)の「同一賃金同一労働」(Equal Pay for Equal Work, 1918)やハッチنز(Elizabeth Leigh Hutchins, 1858-1935)の「女性産業労働者の現状」(The Present Position of Industrial Women Workers, 1921)をはじめとして、女性労働やその賃金をめぐる論文が多く発表された。このように、両性間の賃金をめぐる問題は当時の経済学界が、そしてエッジワースみずからも注目した重要な論題であった<sup>2</sup>。

この問題に関心を向けたエッジワースについては、三人の経済学者たちによる証言が残っている。メイナード・ケインズによれば、「男性と女性との賃金の不平等という問題が一生彼の興味を惹き、それは1922年にイギリス科学振興協会の F 部会における会長講演の主題となった」(Keynes 1933, 258/訳 342)。さらに、『数理精神科学』にみられる「性の貴族制」についての叙述を取り上げることによって、メイナード・ケインズは1880年代からエッジワースがすでにこの問題に注目していたことを示唆している。次に、エッジワースに教えを乞うたハロッドは、みずからの論文「男女への等しい賃金」(Equal Pay for Men

<sup>1</sup> Equal Pay for Equal Work には「同一労働同一賃金」との訳語が定着しているが、後述するように、エッジワースの Equal Pay および Equal Work には複数の意味があるため、ここでは「等しい労働、等しい賃金」と訳す。

<sup>2</sup> 1918年から1925年にかけて、エッジワースがメイナード・ケインズとともに『エコノミック・ジャーナル』誌の共同編集者を務めた事実にも注意が必要である。

and Women)のなかでエッジワースについて言及することはなかったが、この論文について、「私はかつての恩師、F.Y. エッジワースが好んだ主題を自分も取りあげることに喜びを感じた」(Harrod 1972, xiii)と回想している<sup>3</sup>。ボナーも、『エコノミック・ジャーナル』誌に寄稿したエッジワース追悼論文のなかで、「彼ほど十分に、そして誠実に女性の経済的地位について論じた人間はおらず……、彼は女性たちの主張すべてに目をかけた」(Bonar 1926, 652)と<sup>4</sup>、エッジワースとこの問題の関連を証言しているのである。

メイナード・ケインズの示唆にしたがうならば、男女賃金問題は明らかにエッジワースが生涯を通じて大きな関心を寄せた論題であり、とりわけ、『数理精神科学』から1922年のF部会会長講演に至るエッジワースの議論における連続性は考察するに値する主題であるように思われる。

しかしながら、これまでのエッジワース研究において彼の男女賃金論はほとんど省みられることがなかった。たとえば、エッジワースの生涯や業績をまとめたCreedy(1986)やNewman(1987 and 2004)などもこの点についてはとりあげておらず、Creedy(1981)においても、男女賃金問題がエッジワースの業績のなかでも興味深いものであると述べられているにとどまる——紙幅不足を理由にその中身には触れられていない(Creedy 1981, 94/訳 103)。重厚な『エッジワース伝』であるBarbé(2010)においてようやく、エッジワースの女性賃金問題は1頁ほどの分量で要約的に紹介されているものの、そこには見逃している事実がある。「彼は、[1922年のF部会会長講演の]約30年前に、スマート(William Smart, 1853-1915)の『女性の賃金』(*Women's Wages*, 1892)の書評を1893年に書いたことを除けば、女性の賃金について…これ[F部会会長講演]以前に何も公刊していない」(Barbé 2010, 232)とバルベは述べているが、実際には——のちにイギリス首相を三期務めることとなる——マクドナルド(James Ramsey MacDonald, 1866-1937)の編集で出版した『印刷産業における女性』(*Women in the Printing Trades*, 1904)にエッジワースは序文を寄せている。他方で、経済学史上の著作における女性の地位および女性の経済活動の取り扱い

<sup>3</sup> ハロッドは1923年のミクルマス学期からオクスフォードで教鞭を執ったが、これと並行してエッジワースの講義に出席した(中村2008, 8)。なお、ハロッドによれば、同論文は1945年の「同一労働同一賃金王立委員会」(Royal Commission on Equal Pay for Equal Work)への証言をまとめたものである(Harrod 1972, xii)。

<sup>4</sup> しかし、エッジワースの実際の性格や行動は、学術上のものとは正反対のものであったとの指摘もある。ボナーによれば、彼は、「ヨークシャの散歩道で『男性を見つけられるなら、絶対に、女性には道を聞くな』と口にした」(Bonar 1926, 652)という。

に着目した Pujol(1992)においては<sup>5</sup>、エッジワースの男女賃金論もその考察対象に入り、大きく一つの章があてられた。ただし、プジョル(Michèle A. Pujol, 1951-97)が解説しているのは、主にエッジワースの F 部会会長講演についてであり——その目的がエッジワース研究にあるわけではないため——、彼の主著『数理精神科学』からの展開については触れられていない。このように女性労働やその賃金をめぐる問題への言及は、エッジワースの経済学や思想の比較的大きな部分を占めるにもかかわらず、ほとんど何もなされていないというのが実情である。

このような事情から、本章ではエッジワースの男女賃金論に焦点をあて、『数理精神科学』から晩年の F 部会会長講演にかけてのエッジワースの主張やその内容について、功利主義論や方法論との連続性も含めて精査する。

### 7-1. エッジワースの男女賃金問題への関心の萌芽

上述したとおり、メイナード・ケインズはエッジワースの男女賃金問題への関心が生涯を通じてのものであり、その萌芽を『数理精神科学』のなかに見出した。本節においては、この萌芽がどのようなものであったかについて概観する。

本稿 4 章ですでに論じたとおり、『数理精神科学』は、「実践理性の二元性」を認めざるを得なかったシジウィックの『倫理学の諸方法』における議論を補完する目的で書かれた著作である。再論することになるが、同書のなかでエッジワースは、「実践理性の二元性」を功利主義側へと還元することで解決し、さらにその功利主義の精緻化——彼の語法によれば、「精密功利主義」、あるいは「貴族制的功利主義」の提示——を目指した。

このなかでエッジワースは、「ダイアグラム」を用いながら、利己心に基づく契約の不確定性を仲裁する功利主義の重要性を明らかにしたが、この不確定性が両性の間にも存在すると述べている(Edgeworth 1881, 51)。また、仲裁原理となる功利主義について、彼は、社会の幸福最大化は快樂（苦痛）にたいする受容能力に優れたものから財（労働）を与えていくことによって達成されると主張し、「平等性」を暗黙裡に前提とするベンサム主義を強く批判した。これは、エッジワースにとって、社会の構成員の性質がそれぞれに異なる

<sup>5</sup> 同書の関心は、「方法論や論説における、新古典派による女性の取り扱い、そして資本主義経済における彼女らの地位を特徴付ける特定の傾向を、この学派の思想の起源にまで遡ることである……初期の新古典派の著作における女性の存在感の度合いや女性に固有の問題の範囲、女性や女性の経済活動に焦点をあてた理論的発達の本質、および平等を求めフェミニストにたいして経済学者たちがとった立場を考察する」(Pujol 1992, 1)。

ことが一般的事例であり<sup>6</sup>、その性質がすべて同じという事情はあくまでその特殊例にすぎなかったからである。したがって、両性間の性質の違いもエッジワースにとって当然のことであり、次のように——これはメイナード・ケインズも引用している(Keynes 1933, 258-59/訳 342)——述べられている。

「性の貴族制は同様に、男性がもつと考えられている幸福にたいする、行為や熟慮(ἐνεργειαί)にたいする、優れた受容能力に基礎を置いている。そして、次のような感情にも基礎を置いているのである。

女性に劣っている 彼女の熱情を私のものに比べれば

それは日光にたいする月光であり ワインにたいする水のようなものだ

一般に劣っていると考えられる女性の受容能力は、ある種の美と洗練にたいする独特な情緒にかんする特別な能力によって補われていると想定される。このような美にたいする優れた感覚にしたがって、近代女性はある種の財産(*means*)、つまりある種の贅沢と思いやりとのより大きな分け前を受け取っている……しかし、女性にたいする丁寧さ……には、他にも多くの要素がある。礼節あるヒュームは、それを弱者にたいする思いやりとして、情熱的なルソーは自然なこと(φυσικωτέρως)と説明した。いま、より弱い性にたいする思いやり、そして、礼節ある社会におけるある種の思いやりだけでなく、生活におけるより厳しい労働をいくばかりか免除されるという女性の権利は、功利主義理論にかなっているのである。すなわち、強者は、より多くの労働をおこなうだけでなく、疲労する場合には、より多くの疲労をこうむるように多くの労働をなすべきなのである。……総じて、真偽のほどは別としても、女性の本性についての現行の諸見解を考慮すれば、功利主義原理からの演繹されるものと近代女性のまわりを取り囲む無能力や特権との間には、見事な一致がみられるのである」(Edgeworth 1881, 78-79)。

このエッジワースの叙述のなかに、両性間における労働分配についての言及が明らかに見出される。すなわち、女性は男性よりも労働にたいする受容能力が低く、疲労しやすいため、女性は男性に比べて厳しい労働を免除されるのであり、女性を取り巻く見解や権利

<sup>6</sup> もっともエッジワースは最低限の幸福を全構成員に保障する。すなわち、この議論は、「それぞれの個人がゼロの幸福……を所有するのにまさに十分な最小の財産を保有し、そして保持するだろうという仮定からはじめる」(Edgeworth 1881, 62)。

は功利主義理論に矛盾しないばかりか、何らこれに抵触しないというのである。

女性の労働についての叙述は、『数理精神科学』付録Ⅱにおけるファニー・ケンプル (Fanny Anne Kemble, 1809-93)——アメリカの大農園主と結婚したイギリス人女優——の逸話にも見出される。

「ファニー・ケンプルは、夫の奴隷プランテーションを訪れた際、男性奴隷にも女性奴隷にも同一の労働が課されていることを目にした。それゆえに女性奴隷は、その〔肉体的な〕弱さのために、より一段と疲労していた。この夫がなすべき一定の労働量については決めるものの、この慈善家〔ファニー・ケンプル〕にその労働負担分配を任せるならば、どのような分配がもっとも慈善心に富む取り決めになるだろうか——それは男性が〔女性と〕同じだけ疲労する取り決め、あるいは男性がより多く仕事をするだけでなく、より多く疲労もする取り決めなのではなからうか」(ibid., 95)。

エッジワースがここでいう同じ疲労を男性と女性とがこうむる取り決めとは、仕事量ではなく、疲労、すなわち不効用で測った「等しい労働」概念に他ならない。つまり、仕事量が所与であるとき、男性と女性とが同一の仕事量をこなすのではなく、同一の限界疲労度になるように、仕事量は配分されるべきなのである。これは、エッジワースが累進課税制度を推奨した際に用いた最小犠牲原理に相通じるものがある。もっとも、等しい仕事量を与えたときに、より疲労度が高くなる女性に男性よりも高い賃金を支払うとの考えも論理的には可能であるものの<sup>7</sup>、エッジワースにはそのような考えはなかった。

エッジワースは、このように『数理精神科学』において、両性間における等しい不効用という意味においての「等しい労働」を提示している。そして、男性と女性との間には労働の受容能力の差異が横たわっていると考えた彼は、『「あらゆる男性と女性とを同一のものとする」原理はまさに慎重に適用されるべきである」(ibid., 81)と主張した<sup>8</sup>。

<sup>7</sup> ファニー・ケンプルの逸話では、奴隷労働がとりあげられているので、賃金については述べられていないが、たとえ賃金支払いがなかった——つまり、賃金水準がゼロである——としても、男性と同一の労働をする女性が追加的にこうむる疲労量にたいして金銭を与えることで——つまり、金銭獲得による効用によって疲労という不効用を——補償することは考えうるひとつの方法であろう。

<sup>8</sup> 再度確認し、そして強調しておくが、女性がすべてにおいて男性に劣っていると彼は言っているわけではない。上で引用したように、労働という点において女性は男性に比べて劣っているかもしれないが、これらは美や洗練といった女性に優勢な部分によって補完されて

メイナード・ケインズは、このように彼の女性労働をめぐる問題への関心の萌芽が見とれる『数理精神科学』を指して、「エッジワースでなくていったい誰が、〔18〕80年代において、その問題をこんな風に取り扱っただろうか」(Keynes 1933, 258/訳 342)と評価した。もともと、「性の貴族制」にかんする叙述を含む同書第Ⅱ部「功利主義的計算法」が、もともとは論文「快樂主義的計算法」として書かれたものであることを思い起こせば——他方、ファニー・ケンプルの逸話は『数理精神科学』のために書き下ろされたものである——<sup>9</sup>、メイナード・ケインズが指摘する『数理精神科学』公刊よりもさらに2年早い1879年からエッジワースはこの問題に着目していたのであり、彼の慧眼はなおさらに評価すべきであろう。

## 7-2. エッジワースと20世紀前後の女性労働問題

エッジワースは『数理精神科学』以降、経済学、確率論、統計学分野の論文を数多く発表すると同時に、それ以上の数の書評を残していった。これらの書評のなかにはスマートによる女性労働賃金問題についての講演録『女性の賃金』が含まれる。また、『エコノミック・ジャーナル』誌創刊時からその編集者を務めた彼は、「いつも決まって、時事問題的興味のあるものを採って」(Keynes 1933, 264/訳 348-49)いたが、これらのなかに女性労働問題をテーマとしたシドニー・ウェブ(Sydney Webb, 1859-1947)やフォーセットらの論文が含まれている。このように女性労働問題に関心を払っていたエッジワースは——『エコノミック・ジャーナル』誌創刊直後から Webb(1891)や Fawcett(1892)を採用していることから、その関心の深さがうかがえる——、20世紀に入ってすぐ、みずからも『印刷産業における女性』の出版にかかわった。

これらのエッジワースの動きは、19世紀末から20世紀初頭にかけての労働者たちを取り巻く環境の変化に連動したものである。シドニー・ウェブらによるフェビアン協会の創設(1883年)、チャールズ・ブース(Charles Booth, 1840-1916)やシーボム・ラウントリ(Seebohm Rowntree, 1871-1954)の貧困調査<sup>10</sup>、ボーリーによる家計費調査(1912年以降)、

---

いるとエッジワースは考えている。男性と女性とは異なる存在であり、それゆえ別個に考える必要があるとの理解がエッジワースの基本的な思想である。

<sup>9</sup> Edgeworth(1879, 406)を参照のこと。

<sup>10</sup> エッジワースは、ブースの1886年から91年までの調査結果をまとめた『民衆の生活と労働——東ロンドン——』(*Life and Labour of the People: East London*, 1889)、および『民衆の労働と生活——ロンドンでの継続調査——』(*Labour and Life of People:*

1888年の労働組合会議で認められた「同一労働同一賃金」原則にみられるような女性労働組合運動の勃興、最低賃金を保障する最低賃金法の成立(1909)とそれにともなう賃金局(Trade Boards)の設置<sup>11</sup>、ラスボーンらによる家族手当構想(1917)などがその代表例である。

本節の前半では、まずスマートの『女性の賃金』とそれにたいするエッジワースの反応を考察し、後半は『印刷産業における女性』におけるエッジワースの見解を整理する。

### (1) エッジワースとスマート、フォーセット

スマートの『女性の賃金』は、シドニー・ウェブの「類似労働にたいする両性の賃金の確証なき差異」(The Alleged Difference in the Wages paid to Men and to Women for Similar Work, 1891)に依拠した講演を文章化した著作である<sup>12</sup>。スマートは、シドニー・ウェブの労働分類と統計にしたがって、芸術的労働(artistic labour)と知的労働(intellectual labour)においては性差が賃金に影響を与えることはないが、単純労働(manual labour)と定型的単純労働(routine manual labour)にはその影響がみられるため、これら二つの労働に従事する女性の賃金が低水準である理由について議論している<sup>13</sup>。

スマートによれば、世間に流布している女性賃金が低廉である理由には五つあるというが、これらは反駁可能であるため、「これらの答えはすべて真実であるが、このそれぞれはせいぜい半面の真実なのである」(Smart 1892, 7)。第一の理由とされるのは、女性労働の需給関係であるが、これは需給による価格決定は自由競争市場におけるもので、物理的・歴史的・倫理的に流動性に欠ける労働市場は決して自由競争状態ではないとの反駁が可能

---

*London Continued*, 1891)を書評し、綿密な調査もないままに安易な考えに基づいて書かれた多くの著作による「裏付けのない印象はブース氏の統計調査が消散させた」(Edgeworth 1889c, 550)との評価を与えている。ラウントリーの調査は、1899年から1901年にかけておこなわれた。

<sup>11</sup> 1909年に成立した最低賃金法によって設置された賃金局は、雇用者、被雇用者、第三者によって構成され、とりわけ厳しい労働条件下にあるとされた裁縫業、レース業、くさり製造業、製箱業の四業種について、各業種における最低賃金を決定することを認められた(今井 2003, 251)。

<sup>12</sup> このスマートの講演は、エディンバラのクイーン・マーガレット・コレッジ(Queen Margaret College)およびグラスゴー大学(University of Glasgow)においておこなわれた。

<sup>13</sup> 単純労働は、たとえば、製造業における肉体労働、定型的単純労働は事務員や教員など事務的な労働、芸術的労働および知的労働は小説家や詩人などの仕事を意味する。シドニー・ウェブは、イギリスやマサチューセッツにおける統計から、製造業における女性賃金が男性賃金の三分の一から三分の二程度であり、事務職においても女性賃金が男性賃金を大きく下回ることを指摘した(Webb 1891, 636-37; Smart 1892, 5-7)。

である。第二に、女性が家計の大黒柱ではないとの理由には、芸術的・知的労働に従事する女性の賃金は、大黒柱か否かは関係なく支払われている事実によって反証できる。第三の理由には、女性の生活費の低さが、そして第四の理由には、女性労働の質の劣等さが挙げられるが、これらは彼女らが生活水準を低くしなければならないほどの賃金しかもらっておらず、同一業種でも両性で担当する業務が異なるという事実も考慮していない、とスマートは反論する。女性の賃金が低廉である理由の第五のものとは、女性が生産にたずさわる商品は低価格である、ということである。これにたいしてもスマートは彼女らの賃金が低水準であるために商品が低価格なのであると述べ、一般に考えられる理由が必ずしも十分な説明能力をともなっていないことを示唆したのである(*ibid.*, 7-17)。

では、スマートは女性賃金が低水準である理由をどこに見出すのか。スマートは、とりわけ、両性の従事する産業が異なる点——これはすでにシドニー・ウェブによって指摘されていることであった——に注目する。当初、両性が競争的である産業があったとしても、労働の質・量ともに劣る女性労働は雇用者にとってすべての労働者の賃金を引き下げる口実となり、そのために男性はより賃金の高い産業へと移動し、賃金の低い特定産業に女性は取り残されることになる。また、かりに男性が独占的である産業において賃金闘争やストライキが起こった場合には女性労働者が導入されるが、彼女たちには「それが『慣習的賃金』である」(*ibid.*, 21)との説明のもとに安価な賃金が支払われることになる。それゆえ、スマートは、「女性労働者の賃金は、世界がより貧しく、資本がより強力であった時代に固定された『慣習的賃金』である」(*ibid.*, 23)と結論し、女性が公正な賃金支払いを受けるために、女性労働組合の組織、そして、男性と同じ原理で女性に賃金を支払うべきことを世間に啓蒙すること、という二つの方法を提案したのである(*ibid.*, 30-31)。

エッジワースは、このようなスマートの見解にたいして、「いくつもの貢献を成した」(Edgeworth 1893a, 118)と評価し、「労働市場は自由ではなく、慣習がその機能を妨げている」(*ibid.*, 118)ことを強調した。これと同時に、このスマートによる「慣習」の影響にたいする理解についてエッジワースは、『エコノミック・ジャーナル』誌(1892年3月)における、この主題についてのフォーセット夫人の重要な論文と共に読む価値がある」(*ibid.*, 119)とスマートと同じくウェブ論文に依拠したフォーセットの論文「女性賃金にかんするシドニー・ウェブ氏の論文」(Mr. Sidney Webb's Article on Women's Wages, 1892)にも眼を向けることを促した。

フォーセット論文は、前述のウェブ論文を補足するためのものであり、産業的に労働

市場が制限、分割されているため、有効な競争がおこなわれていない点に着目する。フォーセットによれば、男性が就くことのできる産業——鉱工業、銀行など——の利益率は女性が就くことができてもっとも利益率の高い産業——綿糸産業、綿布産業——よりも高い。労働者がより高い賃金を求めて他産業に転職するとき、男性の場合、その選択肢となる諸産業の賃金水準は全体として高いのにたいして、女性の場合、それがどうしても低くなってしまふ。このため、たとえば、両性が従事できる仕事で、この両者の能力が同等であっても、他にこの女性の選択肢となりうる仕事の賃金水準が低いために、その賃金は男性のものよりも低くなるのである。

フォーセットは、このように両性を取り巻く労働市場の条件が異なるため、1888年に労働組合会議において認められていた「同一労働同一賃金」の原則は、名目的なものに過ぎず、「原理、方策の両面において、誤りである」(Fawcett 1892, 176)と考えた。彼女にとっては、職業訓練によって女性が男性並みの利益性の高い産業にも従事できるようにすることが先決であった。

このフォーセットの労働市場分析は、『印刷産業における女性』の序文において参照されるなど、エッジワースにも影響を与えることとなる。

## (2) エッジワースと『印刷産業における女性』

1904年に公刊された『印刷産業における女性』は、その編者マクドナルドによれば、女性産業評議会(Women's Industrial Council, 1894-1919)によって着手され、王立統計学会(Royal Statistical Society)、王立経済学会(Royal Economic Society)、ハッチンソン・トラスティー(Hutchinson Trustees)から選出された代表者たちが組織した委員会による研究成果をまとめたものである。この委員会の研究は、労働組合規定や職業規定の欠如、徒弟制度の不統一など、労働環境が男性とは異なる女性労働を取り巻く状況に注意を向けるためのものであった。そのなかで印刷産業が取り上げられたのは、同じ女性労働者でも未婚と既婚との賃金格差が小さく、男性との競争や機械の影響など、単なる一産業にかんする研究に留まらず、社会全体についての研究になりうると考えられたからである(MacDonald 1904, xvi-xvii)。エッジワースは、これらの組織のうち、王立経済学会の代表者として同委員会の会合に出席した(*ibid.*, v)<sup>14</sup>。ただし、同書の各章の文責はブラック

<sup>14</sup> 「この委員会に、女性産業評議会は A. ブラック氏(Miss A. Black)、C.ブラック氏(Miss C. Black)、ハモンド氏(Mrs. Hammond)、フォックス氏(Mr. Stephen N. Fox)、そしてマ

(Clementina Black, 1854-1922)、ボーリー、マクドナルドらにあり(*ibid.*, xvii)、エッジワース自身はその序文を担当するだけにとどまっている。彼はこの序文のなかで、次のように述べている。

「いくらか新しい光が投げかけられている女性労働にかんする諸見解のなかで、等しい労働、あるいはあまり違わない量の労働にたいする報酬として、なぜ女性がしばしばかなり少ない賃金を受領せねばならないか、ということが問題となっている。これは……社会生活との関係において、非常に高い実践的重要性をもつ問題であるだけでなく、より抽象的な観点から、相当に理論的関心のある問題でもある」(*ibid.*, v)。

全10章および8編の付録から構成される同書は、家庭労働や既婚女性の労働、印刷産業における技術、女性賃金にかんする統計などの考察もその内容として含んでいるにもかかわらず(*ibid.*, xii-xiii)、彼はその序文のほぼすべてをこの女性の低賃金問題の要約的解説に充てた。ここに彼の男女賃金問題への関心が明確なものとしてうかがえる。

エッジワースは、同委員会の調査結果に基づいて——シドニー・ウェブやスマート、フォーセットらが述べたように——、両性間の賃金の不平等が現実かつ大きなものであることを改めて認識し、この不平等を「効率性においてさほど変わらない生産要素にたいして企業家がまったく異なる率の支払いをしている、というパラドックス」(*ibid.*, v)と位置づけた。さらに彼は、たとえ女性が男性と同じ労働をしているようで実際には同じ労働ができていない場合があったとしても<sup>15</sup>、女性の労働はその賃金格差ほどには劣っていないと主張する(*ibid.*, vii)。しかし、このように両性が同一産業に従事することは、極めて例外的なことである。たとえ両性が同一産業に従事していたとしても、女性は男性とは別のより報酬の少ない分野に押しやられるため、両性の賃金を直接的に比較することはできないと述べた彼は、上述したフォーセットの見解——女性に開放されている産業の低い賃金水準が全体として女性全体の低賃金を招いている——に賛同している(*ibid.*, vii)。

エッジワースによれば、女性が報酬の少ない分野に押しやられる要因として、力強さと

---

クドナルド氏、王立統計学会はベインズ氏(Mr. J.A. Baines)、王立経済学会はエッジワース教授、そしてハッチンソン・トラスティはボーリー氏(Mr. A.L. Bowley)を代表者とした」(MacDonald 1904, xv)。

<sup>15</sup> 「たとえば、男性の給紙係は、女性がすることのない活版の運搬や機械の細々とした整備をおこなう」(MacDonald 1904, vi)。

いった生理学上における男性の優越性に基づく自然独占以上に、人為的独占が大きく影響している(*ibid.*, vii-viii)。

エッジワースが人為的独占とみなしたのは、慣習、工場法、そして労働組合の存在である。すなわち、第一に、雇用者から依頼されみずからできる仕事でも、それが慣習的に男性労働者の仕事であれば——たとえ単純で簡単な工程であっても——、その仕事は男性労働者のものであるとして、女性労働者は決してその仕事をしようとはしないという(*ibid.*, viii)。第二に、工場法により超過労働時間がなくなり、男性労働者が毎日のように働くことのできる体制が整ったこと——長時間労働によって疲弊した男性労働者に替わって女性労働者が雇用される機会の減少——、そして、第三に——印刷産業において——男性労働組合が女性労働組合よりもはるかに力をもっており、安価な賃金で働く女性労働者の業界参入を阻害していることこそ、これら人為的独占の最たるものなのである(*ibid.*, viii-ix)。ときとして、両性を同条件で雇用することを認める労働組合があるものの、「あらゆる状況のもとで、同一労働にたいして男性と同一の賃金を主張するように女性を促すことは、男性と比べて産業的に効率的ではないあらゆる女性たちを完全に労働から排除することになるだろう」(*ibid.*, x)。「同一労働同一賃金」という一見したところ平等主義的にみえる方針が女性を報酬の少ない職業へと追いやっていることも、この調査から判明した事実であり、フォーセットと同様に、この原則が労働市場の実情に照らして非実践的であることをエッジワースは強調した(*ibid.*, x)。

このような事情のもと、さらにエッジワースは、女性労働者が男性によって、あるいは家族生活のために、補助を受けているという状況を考慮すれば、女性の賃金は低廉に抑えられるため、両性間に自由な競争を持ち込めば、労働者全体の賃金を下げ、労働の質も低下させてしまうとも主張した。ただし、彼はこれを避ける方策についてこの序文で言及することはなく(*ibid.*, x)、またこの序文冒頭で触れたように、抽象的観点に立って理論的に論じることもなかった。これらは1922年のF部会会長講演で扱われることとなる。

概して、『印刷産業における女性』に携わることを通じて、エッジワースは、両性間の賃金問題と関連して、慣習のみならず、工場法や労働組合の力の不均衡という、その他の人為的な力によっても、女性に男性ほどには労働選択の自由がないことを実証的に把握したのである。以上のように、『印刷産業における女性』における序文は、女性賃金問題を扱ったエッジワースの著作であり、バルベの認識とは逆に、スマートの書評から1922年のF部会会長講演までの期間においても、エッジワースはこの問題にしっかりと目を向けてい

たのである。

### 7-3. 女性賃金問題をめぐる F 部会会長講演——両性間の完全競争——

1914年から1918年にかけての第一次世界大戦は、女性労働需要、そして男性に代わって女性が労働する機会を増加させた。この意味において、エッジワースが認めた慣習という人為的独占の影響は多少なりとも軽減された。イギリス科学振興協会においても、1917年から1919年にかけて、「産業における女性による男性の代替」(Replacement of Men by Women in Industry)という研究委員会に総額50ポンドの助成金が出されていることから、「男性に代わる女性労働力」にたいする戦時下の関心はうかがい知ることができる(BAAS 1917, xiii; BAAS 1918, xi; BAAS 1919, lxiii)。しかし、第一次世界大戦の終結は女性労働需要を急落させ、戦時に上昇した賃金が再び戦前の水準へと戻った事例も報告されるなど(Hutchins 1921, 462)、女性労働者を取り巻く状況は決して安定的なものではなかった。

このような状況のなか、エッジワースが二度目のF部会会長となる前年(1921)、その年の会長ヒッチنزは、みずからの講演「賃金決定の諸原理」の一部において、両性間の「等しい労働にたいする等しい賃金」について言及した。この講演において、ヒッチنزは、異職種で「等しい労働」を定義することは難しく、「実際、男性および女性にかんして、異なる職種につく傾向がみられる」(Hichens 1921, 104)と述べている。彼によれば、第一次世界大戦初期を例外として、両性が就く仕事は無差別ではなく、労働の細分化によって女性は女性専門の労働へと集約されたという。さらに女性が代替した仕事も戦争から帰還した男性に再度とってかわられ、労働の区分けはさらに拡大したため、そもそも両性間の賃金比較は有用ではないと主張された。したがって、ヒッチنزは男性労働と女性労働とを等しいものとして扱うことを疑問視し、さらには女性の就職口が男性よりも少ないこと、女性の生活費が男性よりも少ないこと、平均勤続年数が結婚のために短く経験が男性よりも少なくなることを理由に、「概して、女性の賃金を男性に支払われるものよりも低くすべきことは避けられない」(ibid., 104)と結論づけたのである。

エッジワースによる1922年のF部会会長講演は、前年のヒッチنز講演を批判的に引き継ぐものである。エッジワースは、「等しい労働にたいして男性も女性も等しい賃金を受けとるべきか」という問題が、「男性社会(masculine circle)において、しばしば、女性の労働は男性のそれとは決して等しくない、あるいはめったに等しいものにはならない、と

いう見解によって片づけられてしまっている」(Edgeworth 1922, 431-32)と問題提起し、この講演において、両性間の「等しい労働にたいする等しい賃金」をめぐる諸問題とその解決のための手段とを検討する必要性を表明したのである(*ibid.*, 431)。

エッジワースは、アリストテレスがかつて「等しい」を「数字的平等」と「比例的平等」とを区別したように、「等しい労働」にも複数の意味が含まれることを指摘し、一義的な意味で「等しい労働」を定義することを批判する。というのも、彼によれば、「等しい労働」の定義は、第一に「等しく労働を選択する自由」、そして第二に「等しい不効用」、という二つの意味で解釈できるからである。

エッジワースの説明にしたがえば、同重量の銀と鉛とを運搬する場合、前者の方が大きな価値をもたらすため、雇用者は銀を運搬する労働者に多くの報酬を支払う。他方、実際に運搬する労働者にとっての負担は同じであり、その選択は無差別である。完全競争体制においては、需給調整の結果、銀運搬および鉛運搬にたいして支払われる賃金は等しい水準に決定されるだろう。つまり、「等しく労働を選択する自由」の結果、「等しい賃金」はもたらされるはずであるが、この原理を両性間にも適用できるのであろうか。したがって、両性の間に完全競争が適用されるべきかという問いが生じる。

しかし、額面における「等しい賃金」がかならずしも平等であるわけではない。エッジワースは、もうひとつの定義を提示するにあたって、「女性の特有の職業の報酬はつねに、私が信じるに、男性によっておこなわれる技術と不愉快さの度合いとを等しくする職業の報酬をはるかに下回る」(Mill 1848, 400/訳 2 巻 380; Edgeworth 1922, 433)と、ミルを引用する。このミルの叙述から、エッジワースは、「等しい労働を……等しい不効用と解釈するならば、等しい賃金とは賃金から得られる等しい満足と解釈することができるだろう」(Edgeworth 1922, 434)と、第二の解釈を提示する。これは、すでに彼が『数理精神科学』において示した不効用に基づく「等しい労働」概念と同じものであるが、このとき、その賃金から男性と女性とがそれぞれ等しい満足を得ることができるのか、つまり経済的厚生という「厚生経済学」(economics of welfare)の問いへと変換された。

エッジワースのいう経済的厚生は、ピグー(Aurthur Cecil Pigou, 1877-1959)の『富と厚生』(*Wealth and Welfare*, 1912)を参照していることから(Edgeworth 1922, 434; Edgeworth 1923, 487)、ピグーのいう所得額から直接的に得られる「満足という精神的生産物(psychic return of *satisfaction*)」(Pigou 1912, 4)と考えてよい。エッジワースのこのような説明は、その視野を経済的なものに局限する姿勢のように思えるかもしれない。し

かし、このように局限した問題にたいする解答は、経済的厚生以外の幸福——道徳的善や精神的善——という「あらゆる意味における問題への解答にかんする資料を与えることができる」(Edgeworth 1922, 434-35)と、幸福全体へのその拡張をも彼は視野に入れている。

以上のように、エッジワースは、両性間の完全競争の是非、等しい賃金による両性間の満足の等しさの是非、という二つの問いをたてたが、これらの問いの間には矛盾は生じない。彼によれば、完全競争が富の増加を導くように、富の増加は経済的厚生の増加を導く、つまり同じ目的をもつためであり、純粋経済学の問題である第一の解釈は、より広義の経済学(厚生経済学)の問題である第二の解釈のなかに包摂可能であるためである(*ibid.*, 434)。これら二つの意味での「等しい労働」にともなう生じる問題の検討がエッジワース講演の真の課題であった。

最初の問いについて、エッジワースは、レッセ・フェールが富の最大化を導くため、「あらゆる部類の間の競争は制限されるべきではない」(*ibid.*, 435)との基本姿勢を示したが、これを単純に両性の中に入れることには反対した。というのも、女性には雇用にかんして男性よりも有利な点があるためである。具体的には、両性間の比較において、第一に、生産効率を維持するための生活必需品は女性の方が少ないこと<sup>16</sup>、第二に、女性には補助金が出やすく、低い労働条件を受け入れやすいこと、第三に、家族の扶養には不十分な賃金にたいする不本意さが慣習や伝統のために男性ほどにはないこと、が挙げられた(*ibid.*, 436)。これらの利点によって、すべての女性は競争に参入しやすい存在であり、その参入による賃金低下は一時的に生産の最大化をもたらす。しかし、長期的にはウォーカー(Francis Amasa Walker, 1840-97)が懸念した「労働の低下」を導くだろうとエッジワースは懸念を示した<sup>17</sup>。

この懸念は、『印刷産業における女性』において、すでに彼が案じたことでもあるが、このF部会会長講演においては、その回避策として、労働市場に一定の規制をかけることを推奨する。彼が考えた規制とは、1909年に成立した最低賃金法によって、適用業種を拡大しながら導入されつつあった賃金局をさらに漸次的に拡張し、最終的にはあらゆる産業に

<sup>16</sup> エッジワースは、「ラウントリーによれば、その比率〔女性の必需品：男性の必需品〕は4:5である」(Edgeworth 1922, 436)と、ラウントリーの見解にしたがい、この点においてはスマートと意見を異にしている。

<sup>17</sup> 「ウォーカーによれば、賃金低下は労働者の肉体とその効率を低めるだけでなく、彼らの自尊心と社会的飛躍の意欲をも失わせる。低賃金は……品性の欠如による労働の質の低下を累積的に生みだし、雇用者にも結局、利益をもたらさないであろう」(西岡 1997, 225)。

適用することであった<sup>18</sup>。これによって、「最低賃金以上での」という意味では完全ではないが、両性間の間での自由な競争が実現することになる<sup>19</sup>。

ここでエッジワースは議論を簡素化するために、家族を扶養する必要のない独身男性労働者と独身女性労働者との間の競争を仮定する。現実においては、かならずしもこの両性の間での競争は自由なものではない。というのも、男性労働組合は雇用者に圧力を行使し、大きな不利益とならないかぎり、雇用者もこの圧力に譲歩するため、女性はわずかな職種へと追いやられたり、男性と対等な訓練を受けられずにいたりするからである。また、フォーセットだけでなく、みずからも『印刷産業における女性』において指摘したように、男性と同条件という意味では平等にみえる取り決めも、女性には不利益である。これは、男性労働組合が男性と同等の労働を求めため、女性としては平均的であっても、これに応じきれない女性が労働市場から排除されてしまうからである(*ibid.*, 438-39)。このような自由競争に反する圧力は女性労働組合がより力をもつことによって中和すべきと、かつてスマートが主張したように、エッジワースも女性労働組合の興隆に期待を寄せた(*ibid.*, 440)。これによって、労働市場における両性の関係が、ガキ大将と下級生の関係から、大学試験によって審査される男子学生と女子学生の関係になることをエッジワースは望んだのである(Edgeworth 1923, 492)。

しかしながら、理想的な競争においても、たとえば子守と炭坑夫のように両性それぞれにとって一般的ではない職種が存在するため、両性ともに平等かつ自由にあらゆる職業を選択することは難しい。このため、エッジワースは、女性のみが就ける諸産業(A)、両性ともに就ける諸産業(B)、女性の参入が不可能あるいは難しい諸産業(C)で構成される社会を想定し、一般的な経験から、Aにおける週あたりの平均所得( $W_a$ )がCにおけるそれ( $W_c$ )よりも小さいことを認める(Edgeworth 1922, 443)<sup>20</sup>。他方、両性にたいして開かれているBに

<sup>18</sup> 最低賃金法の施行は1913年2月のことである。当初、裁縫業、レース業、くさり製造業、製箱業の4業種(25万人)をその対象として業種別に最低賃金を設定したが、1918年にその適用範囲は拡大され、約60業種(100万人以上)に適用された(飯田 1996, 383; 小山 1978, 219)。

<sup>19</sup> ただし、エッジワースは、次のように、極端に能力の低い階層を最低賃金法によって労働市場から排除した状態を考えた。「このようにして、労働市場を台無しにする無力な階層、B階層〔極貧者(the very poor)=臨時的稼得者(casual earnings)〕、を隔離するチャールズ・ブースの計画にしたがえば、両性間の労働分配および賃金分配(あるいは配給分配というべきか)はどのようになるであろうか」(Edgeworth 1922, 437)。

<sup>20</sup> エッジワースは、進化の過程で女性が男性同様に力強くなる、科学技術が進歩することによって筋力が求められなくなる、もしくは女性が携わる労働(タイピングなど)への需

おけるある産業*i*において、同一賃金率( $w_{bi}$ )であっても平均的男性は平均的女性よりも多く労働単位をこなすことができることから、男性の週あたり所得( $W_{bi}^m$ )と女性のそれ( $W_{bi}^w$ )との関係は $W_{bi}^m > W_{bi}^w$ となるだろう(*ibid.*, 441-43)。エッジワースは、それゆえに、「男性労働者と女性労働者との間のあらゆる競争制限が取り外されたとしても、一般的な印象と通常の経験に基づく推論として、男性の労働者の平均収入がかなり高くなることを依然として見出すことができる」(*ibid.*, 442)と結論した。

ところで、両性が参入できる諸産業(*B*)において、両性ともが同一賃金率( $w_{bi}$ )であることは適切なのであろうか。エッジワースによれば、雇用者たちは女性よりも男性の雇用を優先したいと考える傾向にあるという。これは、しばしば、女性が結婚により一人前になる前に退職することや緊急時——たとえば、逃げる無賃乗車客を追いかけるときなど——にはあまり役立たないためである。つまり、両性とも就労が可能で同じような作業をおこなっているものの、その労働内容の細部や効率において両性の身体的差異が原因で差異が生じる。彼はこれらを「『二次的』差異」(“secondary” differences)と呼んだ<sup>21</sup>。そして、この差異のために同一産業における男性には $w_{bi}^m$ 、女性にはその $w_{bi}^m$ から一定率を割引いた賃金率 $w_{bi}^w$ を設定すべき——つまり、 $w_{bi}^m > w_{bi}^w$ ——との考えが、第一次世界大戦中の戦時内閣委員会やラスボーンによって推奨された(*ibid.*, 445)。

フォーセットは、戦時中の経験——女性労働が男性労働を代替したこと——から女性が男性に劣るとされたことの大部分は想像上のものであったとして、この割引賃金率の議論を批判した(Fawcett 1918, 2-3)。エッジワースもこの割引賃金率を批判的にみたが、フォーセットとは異なり、この割引率を適正に算定することの困難さをその理由とした。

「男性労働者との比較として女性労働者にたいする雇用者の需要に相応する割引を委員会は客観的に申し分なく計算することはできない。それは観念上の競争の作用によってのみ決定され、その作用も観念のなかに存在するだけである」(*ibid.*, 445)。

---

要が増大すれば、 $W_a$ と $W_c$ との間の格差は縮小するだろうと、長期における格差解消の可能性は否定しなかった(Edgeworth 1922, 443)。しかしながら、プジョルは、1922年以降、現代においてタイピングの需要は高まり、秘書の需要は増加したが、依然として炭鉱夫の方が賃金は高く、このようなエッジワースの見解を疑問視している(Pujol 1992, 99)。

<sup>21</sup> 他方、子守と炭鉱夫のように、もともと就労可能な産業が性別によって分かれるような差異は、エッジワースはそのような言葉を用いてはいないが、「一次的差異」と理解できよう。

この議論にたいするエッジワースの提案は、二次的差異の存在を認めつつも、 $w_{bi}^m$ と $w_{bi}^w$ という性別賃金率を適用するかわりに、両性の賃金率を $w_{bi}^*$ ——ただし、 $w_{bi}^m > w_{bi}^* > w_{bi}^w$ ——に統一することであった(Edgeworth 1922, 445)。この「二次的差異」を反映させない賃金率である「職業賃金率」(occupational rate)は、男性にとって賃金率の低下を意味する。これによって、他の仕事への転職を望む男性たちのかわりとして女性の雇用が増え、結果として両性間の労働再分配が達成されると、エッジワースはその効果に期待した<sup>22</sup>。

以上のエッジワースの議論を簡単に整理しておこう。彼の議論は、大きく次の三つの論理的構造からなっている。第一に、等しい労働にたいする等しい賃金は自由競争によってもたらされる。第二に、労働市場は自由競争ではない。それゆえに、自由競争がもたらされれば等しい賃金は達成され (Pujol 1992, 95)、さらに富の増加と(経済的)厚生が増加が得られる。ここでエッジワースがいう自由競争とは、賃金局の設置とその拡大によって最低賃金が保障され、女性労働組合が男性労働組合と同等の力をもつ状態のことであった。そして、両性が自由に参入できる諸産業においては、両性間の労働再分配のため、性差による「二次的差異」を反映させず、両性の賃金率を同水準とする「職業賃金率」の適用を主張したのである。

#### 7-4. 女性賃金問題と家族手当制度——経済的厚生の観点——

前節におけるエッジワースの議論は、彼自身が述べたように(Edgeworth 1922, 437)、簡易化のため、独身の男性労働者と女性労働者との間の競争を仮定してきた。しかし、「われわれはいま、概して男性がみずからの所得で妻や家族を養っているという一般的事実に遭遇する」(ibid., 448)ため、エッジワースは家族を扶養する男性労働者の存在を考察に組み込み、経済的厚生の観点を盛り込んだ議論へと進む。

男性が妻および家族を扶養することは、エッジワースによれば、「文明世界のいたるところで是認されている規範」(Edgeworth 1922, 448)である<sup>23</sup>。他方、未婚女性労働者にかん

<sup>22</sup> ただし、 $w_{bi}^w$ を求めるために必要な割引を算定することが難しい以上、どのようにして $w_{bi}^*$ を算出するのかについては、エッジワースは明示していない。また、エッジワースは、たとえば男性校長の存在感が少年たちに及ぼす影響力が女性校長のそれとは異なるような事例——これを「『三次的』差異」(“tertiary” difference)と彼は呼んだが(Edgeworth 1922, 445)、これは性差によって生じる無形的な差異と解釈できる——には「職業賃金率」を適用できないと考え、どちらの性が携わろうとその生産物の価値が変わらないような産業にのみその採用を限定した(ibid., 447)。

<sup>23</sup> エッジワースは、ラウントリーやタウシグ(Frank William Taussig, 1859-1940)、ミ

しては、ラウントリーによれば、「12.06%の女性のみが部分的、あるいは完全に、自分以外の誰かを扶養しているに過ぎ〔ず〕」、父親の死を原因とする事例を除けば、「その割合は4.12%にまで下がる」(Edgeworth 1922, 449; Rowntree 1921, 36)。このラウントリーの調査結果を根拠として、彼は、フェビアン協会による「賃金所得のある女性の3分の2は完全に自活しているだけでなく、自分以外に扶養するものを抱えている」との見解を疑問視し、あくまで主たる扶養者は男性であると考えた(Edgeworth 1922, 449)。

かりに両性間で等しい賃金を享受している——同一賃金率かつ生産性が両性の間で等しい——場合、「等しい労働にたいする等しい賃金〔という考え〕は、一方が自分の賃金から不平等な控除を条件づけられているならば、もはやまったく公平ではないように思われ」(*ibid.*, 449)、経済的厚生観点から男性労働者が賃金額において優位をもつことは不合理ではない。すなわち、男性が家族を扶養せねばならない事情において、両性間の等しい賃金は男性に等しい満足を決して与えない——両性の効用関数は異なる。このように、エッジワースの不平等性の功利主義論はここにも現れ、この考えは1923年のF部会報告でも再び取りあげられた。

「男性と女性にたいする平等賃金に有利な仮定は、女性の大半が免除されている義務、つまり家族の扶養、から大半の男性が免れないという反論に遭遇する」(Edgeworth 1923, 493)。

しかしながら、この議論は女性労働者やその権利を擁護する人びとに受け入れられにくいものであり、両性の間に衝突を招くこともエッジワースは理解していた(*ibid.*, 449-50)。彼はこの仲裁案として、すなわち両性が「競争の自由へと歩み寄るひとつの段階として考察するに値する」(*ibid.*, 450)ものとして、ラスボーンが提起した「母性手当」(endowment of motherhood)の妥当性を検討したのである。

ラスボーンは、ウェルズ(Herbert George Wells, 1866-1946)が『新マキャベリ』(*The New Machiavelli*, 1911)において、「時代を担う児童の養育費を男性である父親の給料に追加して男性労働者の給料を高くするのではなく、このような費用は、社会の再生費用なので、社会が〔これを〕直接女性に支払うシステム」(大塩 1996, 148)として提案した「母性手

---

ルを引用し、彼らもこの規範を承認していると述べている(Edgeworth 1922, 448-49)。

当」に影響を受けた。彼女は、これを実施することによって、同一労働同一賃金の獲得と女性の地位の向上とを目指した。さらに彼女は 1917 年に「家族手当協会」(Family Endowment Society)を創設し、ウェルズの「母性手当」構想を、全国的制度、全額国庫負担——財源は租税——、妻への支給、受給対象は妻および子ども、所得制限なしを骨子とした現金給付による「家族手当」構想へと発展させた(大塩 1996, 149; 渡辺 1976, 54)。このラスボーンの構想とは独立してベアトリス・ウェッブ(Beatrice Webb, 1858-1943)も 1918 年の「産業における婦人にかんする戦時内閣委員会」(War Cabinet Committee on Women in Industry)の報告において家族手当制度構想を論じているが、エッジワースは、前述のとおり、家族扶養を理由とした両性間の不平等賃金を解消する手段としてこれらの家族手当制度構想を評価した。そして彼はその利点と難点とを分析し、さらにその難点を避ける代替案の可能性を探ったのである。

エッジワースが家族手当制度の利点として挙げたのは、第一に、男性には扶養すべき家族があるという弁解を無力化することである。これによって、「もはや家族を養う義務から解放された男性が、同じく自由な女性と極力競争しないですむ理由はな [くなる]」(Edgeworth 1922, 451)。また、全国の母親に支給される子ども手当(children's allowance)によって、各家庭の子どもの養育費事情が賃金におよぼす不公平感を是正することも期待でき、「それが完全なものであるならば、確かに無視できないもの」(*ibid.*, 452)と、彼はこの利点を評価した。

しかしながら、エッジワースの分析によれば、家族手当制度にはこれらの利点とともに難点が同居する。それは第一に、家族手当にもちいる巨額な資金の管理に役人を増やすことが必要なこと<sup>24</sup>、第二に、その財源の確保にある種の危険がともなうことである。ラスボーンは、すべての所得者への一定率課税での財源確保を提案したが、エッジワースは、高所得者から労働者への所得移転という意味で、累進課税による方法をより現実的であると評価した。しかし、その場合でも貯蓄を抑制するという弊害はつきまとうであろう。第三に、妻が稼ぐと夫は怠惰になる傾向にあるが、無償の手当はこれと同じ効果を持ちうること、第四に、この手当が人口増加を刺激し、資源にたいする将来的な人口圧力が懸念されることである。この第四の点にかんしては、ウェルズやピアソン(Karl Pearson,

<sup>24</sup> エッジワースによれば、「家族手当協会」の報告書では、その費用は、児童を対象とする 6 年間給付ならば年間 1 億 5400 万ポンド、15 歳までの児童を対象とする給付ならば年間 2 億 4000 万ポンドと試算された。またベアトリス・ウェッブも、これらについての費用を年間 2 億 5000 万ポンドと推測した(Edgeworth 1922, 450)。

1857-1936)が国家による出生規制付きの母親手当を主張したが、そのような形での人口規制はあてにならないものであると、エッジワースは反論している(Edgeworth 1923, 494)。そして最後に、第四の難点と関連するが、この人口増加は、どのような刺激を与えても改善することのない先見性がない無責任な階層——ブースのいう A 階層（最下層＝臨時日雇労働者、浮浪者など）や B 階層（極貧者＝臨時的稼得者）に相当する——の増加と考えられることである。たとえ累進課税による財源で手当を支給したとしても、これでは困窮者に施しを与える立場になる人びとにたいする罰的な意味合いのものになってしまい、エッジワースはとりわけ、「中産階級を破滅へと急き立てる」(Edgeworth 1922, 454)、と警告を発した。

家族手当制度に以上のような難点がともなうならば、同制度の利点を活かしつつも、これらの難点を避ける代替的な手段を考えなければならない。エッジワースは、ラスボーンによる家族手当構想にたいする直接的代替手段として、学童給食無償化、家族手当の制限的給付、労働組合などによる互助的再分配、という三つの方法を挙げている(*ibid.*, 456-57)。

この当時、1914年の改正学校給食法により、その費用の半分を国庫が負担する形で学童への学校給食が実施されていた(小山 1978, 202-03)。エッジワースが提案した「学童給食無償化」は、これを全額国庫負担にすることによって、男性の家族扶養にたいする負担感を軽減し、両性間の賃金不平等を解消することを意図したものである(Edgeworth 1922, 456)。さらにこの方法にかかる費用は年額 1250 万ポンドと、年額 1 億ポンド以上の費用を要するラスボーンの家族手当構想よりも、かなり少額で済み、この点もエッジワースが評価した要因である(*ibid.*, 456)。

エッジワースが次に挙げた家族手当の制限的給付はラウントリーの試算が根拠となっている。ラウントリーは、家族手当給付を三人以上の子どもがいる家庭に限定することによって、その費用を少額（年間 800 万ポンド）に抑えることができると計算し、エッジワースも、費用の縮小という点で、この方法に賛同した (*ibid.*, 456)。

第三の提案である「労働組合などによる互助的再分配」は、労働組合などの組織が分担金を拠出し、それを家族の大きさに応じて、その妻たちの間で再分配することを意味している。国家による家族手当制度が成立するか否かは、その主財源となる雇用者（資本家）たちの理解にかかっているのにたいして、組合員たちによるこの方法であれば、立法化する必要もなく、互いが理解するだけで十分である。とりわけ、エッジワースは、未婚男性とまだ子どもを抱えていない夫たちに、将来自分が父親となる日に利益を享受することを

予期してこの基金に応じるべきである、と呼びかけた(*ibid.*, 457)。

これら三つの提案において、エッジワースはその優先順位を必ずしも明確にはしていない。ただ、これらに共通して言えるのは、第一次大戦後の苦しい国家財政を考えると、ラスボーンのような大規模な費用を要する国家による「家族手当」構想は現実的ではないと彼が判断したことである。エッジワースは、1924年に『既婚女性の経済的地位』(*The Economic Position of the Married Women*)を書評している。同書の著者、歴史家フィッシャー(Herbert Albert Laurens Fisher, 1865-1940)の妻レティス・フィッシャー(Lettice Fisher)も、国家財政から判断して、国家による家族手当は難しいとの見解を表明し(Fisher 1924, 20; Edgeworth 1924, 447)、エッジワースは、みずからと同じ考えをもつ彼女を、「経済学の問題をなす動機とその影響について精通している」と高い評価を与えた(Edgeworth 1924, 447)。

このようにエッジワースは、国家による家族手当には反対の立場をとったが、男性に家族の扶養義務がある状況において、両性間の経済的厚生観点から、なんらかの給付なしには両性間の満足最大化は達成できないと考えていたのである。

#### 7-5. 男女賃金問題と功利主義

ここまで、『数理精神科学』から「男女への等しい労働にたいする等しい賃金」に至るエッジワースの著作を通じて、彼の男女賃金論を概説してきた。その要点を整理し、本章をまとめることとする。

エッジワースの男女賃金論は、大きくは二つの論点から構成される。すなわち、「等しい労働」を「労働選択の等しい自由」と解釈する点、および「等しい不効用」——そして、「等しい賃金」を「等しい満足」——と解釈する点である。もっともこれらの論点は断絶していない。エッジワースは、まず両性間の「労働選択の等しい自由」の可能性を検討した。そして、両性が等しく競争できる産業において「等しい賃金」が実現したとしても、その賃金が両性にとって「等しい満足」となるかについても議論しており、これら二つの論点は連続している。

このうち前者については、スマートの著作にたいする書評やフォーセットの論文だけでなく、みずからも『印刷産業における女性』出版にたずさわることによって、実際の労働市場には、慣習、工場法、労働組合といった人為的独占の影響によって、そのような自由がないことを19世紀末から彼は認識していた。これは、とりわけ、『印刷産業における女

性』のために彼が著した序文の内容から明らかであろう。1922年のF部会会長講演においては、この人為的独占を除去するため、彼は女性労働組合の興隆と、より低い労働条件を受け入れやすい状況に置かれがちである女性労働者のために賃金局の設置とその拡大という方法で最低賃金を保障することによって、両性間の競争を認めた。さらに、前年のF部会会長ヒッチنزが男性と女性の労働市場を別個のものと考えたのにたいして、エッジワースは両性が参入できる産業があり、そこでは性差による「二次的差異」を考慮しない「職業賃金率」を適用することで、両性間の労働再分配が達成されると主張したのである。

後者の「等しい労働」を「等しい〔限界〕不効用」とする解釈は、1879年の「快樂主義的計算法」や1881年の『数理精神科学』におけるエッジワースの精密功利主義論以来の考えであり、1922年のF部会会長講演は、晩年にいたるまで彼がこの功利主義的な考えを継続して持ち続けた証左である。この意味で、エッジワースの経済学的著述から功利主義を取り除いたとしてもその科学的内容に影響を与えないとしたシュンペーターの解説は、やはり的を射た理解とは言えない。

エッジワースは、同じ生産効率をもつ独身の両性が等しい賃金を得ることは容認する。しかし、男性労働者が全般的に家族扶養者であることを考えると、額面において等しい賃金は男性労働者にとって不公平なものであり、彼らの賃金が高いことは理にかなっていないとの理解を示した<sup>25</sup>。ここで注目すべきは、エッジワースが、『数理精神科学』や「課税の純粹理論」においては、不平等分配を肯定的に捉える根拠として個人の快樂受容能力の差異を据えたのにたいして、晩年の男女賃金論にかんしては、個人の経済的生活状況の差異を重視したことである。ここに彼の経済的厚生への関心が読み取れる<sup>26</sup>。

もっとも男性労働者の賃金が自分たちよりも高額であることは、女性労働者にとって容易に受け入れられることではなく、両性間の「衝突」につながる。この衝突は社会の幸福を決して最大化させることはない。それゆえ、エッジワースは、この扶養義務から解放することで男性の満足を減退させず、女性の満足を増進するという点で評価できる仲裁案――

<sup>25</sup> このようなエッジワースの議論は、両性の労働者の置かれた状況が独身という同質な存在から家族扶養をする男性労働者とそうではない女性労働者という異質な存在へと、つまり単純な事例からより複雑な事例へと議論が展開されており、これまでの章で言及したエッジワースの方法論に合致している。

<sup>26</sup> このようなエッジワースの態度は、「次第に哲学的基礎にたいしては懐疑的な態度を取るとともに、こうした基礎が本当はどれほど不確実なものであろうとも、その上に首尾よく立てられた実際の応用にたいしては実用主義的な態度をとるようになった」(Keynes 1933, 259/訳 343)とのケインズの評価につながったと考えられる。

—学童給食無償化、制限的家族手当給付、互助的再分配——を提示することになる。

この仲裁案は、エッジワースがそのように明言しているとおりに、またプジョルが指摘するように、家族扶養のために所得の一部を犠牲にする男性への保障が前提となっている (Edgeworth 1922, 449; 457; Pujol 1992, 109)。家族扶養に不十分な所得しか得ていない女性や無給の家事労働に従事する女性——場合によっては男性も含む——を考慮したときには不公平なアプローチであり、「厚生経済学者として、そしてあらゆる [女性の] 主張の支持者としてのエッジワースの評価に疑問を抱くことは避けられない」 (Pujol 1992, 109)。たしかに、ラウントリーの統計に基づいて、家族を扶養する未婚女性労働者の割合 (12%) を小さなものとして扱った点をみれば、このプジョルの批判は免れないものだろう。

しかし、1923年のF部会報告「経済的厚生と女性賃金」において、彼は次のように述べている。

「古い [女性] 排除政策と (家族への給付金によって安全に守られた) より規模の大きな競争の自由との間で躊躇している人間には、女性労働者にたいするより高い報酬とより大きな独立とに向かってなされる道を好意的に解釈するように勧告する。女性の願いをくじき、女性の地位を貶めることは、経済騎士道 (economic chivalry) に矛盾するのである」 (Edgeworth 1923, 493-94)。

彼は、同論文のなかで、偉大な経済学者が騎士道と現代産業とが矛盾しないことを示したと述べながら、集産主義批判を主題としたマーシャルの「経済騎士道の社会的可能性」 (The Social Possibilities of Economic Chivalry, 1907) を参照している (Edgeworth 1923, 491)。つまり、エッジワースのいう「経済騎士道」はマーシャルのものと同義と考えることが自然であろう。この言葉を信じるならば、エッジワースが、国家による負担を最小限にすることに心を配りながら、当時の女性たちを取り巻く環境や彼女たちの地位向上や満足増進を目指したことは間違いない。少なくとも、『印刷産業における女性』の序文が、女性労働者を取り巻く現状認識にとどまったのにたいして、F部会会長講演が両性労働者間の不平等性を——効用面での平等性から——認めつつ、その状況を変える政策提言も含んでいる。このことは彼の経済学において一つの進歩と言えよう。

## 終章 エッジワースの功利主義論と経済学

## ——不平等の功利主義、効用可測性の肯定——

これまで、エッジワースの主著『数理精神科学』を議論の起点として、彼の功利主義論と経済学とが深く密接に関係していることを論じてきた。

ダブリンやオックスフォードでの学生時代を通じて、現存する大学資料を見るかぎり、エッジワースが経済学を学んだ形跡を明確に確認することはできない——彼は主に古典で優秀な成績を修め、その古典知識の深遠さはのちの著作に反映された。エッジワースの第一著作『倫理学の新方法と旧方法』は、(1) 倫理学の物理科学化の是非、(2) 実践理性の二元性の是非、を焦点としたシジウィック＝バラット論争を主題とし、そこからも明らかのように、彼は功利主義的倫理学を研究の出発点とした。この著作において、エッジワースが快樂測定公式の参考とした「フェヒナーの法則」などドイツ実験心理学にかんする知識は、心理学者のサリーとの交流によって得たものと考えられる。そして、このサリーを介して、ジェヴォンズとの交流が始まり、エッジワースの経済学研究が 1879 年頃を開始された。彼が経済学研究を開始したのは、みずからの功利主義論における快樂概念とジェヴォンズの限界効用概念が類似したものであったからである。エッジワースの研究において経済学が後発分野であったことは、彼のアカデミック・キャリア——ギリシャ語講師や論理学講師など経済学以外の分野から経済学教授へとシフトした——をみても明らかである。

そもそも、エッジワースの主著『数理精神科学』自体が、シジウィックの『倫理学の諸方法』への補足を目的としていることから、これを単に経済学的な著作として扱うことはできない。それゆえ、同書において提示された「ダイアグラム」と「エッジワース・ボックス」とは連続性を有するとはいえ、経済学理論の観点からのみその連続性の真偽を問う 1970 年代の論争そのもの自体、ブラウグの指摘する「神人同型説的罪悪」および「詭弁的 神人同型説的罪悪」を犯している危険性がある。

『数理精神科学』で論じられたのは、利己的取引者の間での契約の不確定性の存在とそれを回避する仲裁原理としての功利主義の重要性であり、これはすなわち、シジウィック＝バラット論争における「実践理性の二元性」問題への解答——功利主義こそ人間の実践理性である——を示すものであった。「ダイアグラム」はその解説のための一つのツールとして理解される。また、功利主義といえども、エッジワースの考えるそれは平等性と結び

つくベンサム主義ではなく、各人の快樂受容能力の差異を認め、最大快樂のための不平等分配を是とする功利主義——彼自身の呼称では「精密功利主義」——であった。これはエッジワースが、「[最大多数の最大幸福という] ポピュラーな言葉が功利主義の純粋な理論を平等主義の方向へ歪めているのを不愉快に感じていた」(Harrod 1971, 42/訳 74)からである。ハロッドが回想するに、「エッジワースは、[最大多数の最大幸福] では、最大多数のランプから最大多数の光を求めるようなものだ、と嘲笑しながら言っていた」(ibid., 42/訳 74)という。エッジワースが、初期の二つの著作において、ベンサム主義批判のために用いたランプのたとえを想起すれば、これは簡単に受け入れることができよう。彼のこのような立場は、功利主義にも多くの解釈が存在することに改めて注目させるものでもある。

快樂受容能力の差異を認めることで不平等分配による幸福最大化を目指すエッジワースの功利主義論は、その差異が階級差に基づくとの主張こそ消失したものの、その後の彼の経済学を下支えし、所得課税論や男女賃金論など、晩年にいたるまで彼の政策論にも反映された。この意味において、エッジワースの経済学は決して不平等性の功利主義と切り離すことはできない。

所得課税論においては、エッジワースは、『数理精神科学』における「ダイアグラム」の議論を援用し、市場の不確定性の議論を持ち出すことで「利益説」を否定すると同時に、功利主義の重要性を改めて示した。そして、犠牲説の立場を採用した彼は、そのなかでも課税による不効用を最小にすることで社会の最大幸福を目指す「最小犠牲原理」を推奨するなど、常に功利主義を意識している。ただし、ここでも各人の快樂受容能力の差異を理由に、彼は「最小犠牲原理」と同義である「均等限界犠牲原理」の現実社会への完全なる適用——社会主義の実現——を拒絶し、必要な税額を一部の高所得者から徴収することを推奨した。つまり、エッジワースの所得課税論にも不平等性を認める功利主義論が展開されている。

男女賃金論においてもこの姿勢は変わらない。男性と女性との労働の受容能力の差異を認めるエッジワースは、等しい労働を「等しい疲労（または不効用）」と、また等しい賃金を「等しい満足」と位置づけている。彼は最低賃金を保障した状態での自由競争が両性間の同一賃金を実現すると理論的には考えたが、男性による家族扶養が普遍的であるならば、「等しい満足」という条件を満たすために男性賃金が女性賃金以上でなければならないと主張した。このように、エッジワースは賃金にかんしても経済的厚生観点から不平等分配を認めている。この考えは女性労働者やその擁護者には受け入れがたく、両性を満足さ

せる仲裁案として、彼は家族手当制度を評価した。これは男性労働者を満足させつつ、女性労働者の満足をも満たすもので、エッジワースの「ダイアグラム」における「功利主義的な点」と同じものである。

以上のようなエッジワースの議論はいずれも快樂主義的なものであり、つまり、効用の可測性およびその個人間比較が前提となっている。この前提は、エネルギー最大化について研究する物理学と同じく、道徳科学も快樂最大化がその主題であることをその理由に、快樂測定公式（「准フェヒナーの法則」）を提示することによって——メイナード・ケインズのいう「功利主義的心理学」という立場から——より積極的に打ち出された。この測定公式にみられるように、快樂を数量的に把握できると主張することによって数学的な推論を導入することを可能にした彼の議論は、道徳科学の自然科学性を容認したのもであった。

メイナード・ケインズは、このようなエッジワースの「功利主義的心理学」への傾倒はやがてなくなり、「知的生涯の全体を通じて、彼は自分の基礎が足元から崩れ去るのを感じていた」（Keynes 1933, 262-63/訳 347）と述べている。それは、メイナード・ケインズによれば、『数理精神科学』において採用した原子の仮説が有機的統一や分離性、非連続性などのために精神科学ではうまく作用せず、「測定ではなく、せいぜい一次近似にすぎない」（*ibid.*, 347/訳 262）からであった。そして、「これらすべての点をエッジワース以上によく意識していた者はいなかった」（*ibid.*, 347/訳 262）という。

しかしながら、このようなメイナード・ケインズの評価には疑問が残る。本稿 5 章においてみたように、数学的推論、すなわち演繹的・抽象的方法をしばしば用い、またイギリス歴史学派の批判からそれらを擁護したエッジワースは、これらの方法が、詳細を与えるものではなく、全体的傾向、すなわち一次近似を与えるものであると述べたはずである<sup>1</sup>。とすれば、一次近似に過ぎないことで彼が悲観したとの認識は短絡的なものではないだろうか。

エッジワースから経済学を学んだハロッドは、「一再ならず、快樂の個人間比較は可能である、とエッジワースが強調しているのを耳にしたことがある」（Harrod 1971, 43/訳 75）と証言している。そのハロッドによれば、『数理精神科学』において無差別曲線を発明し、序数的効用概念に通じる考えをも提示したにもかかわらず（清水 1972, 125-26）、エッジ

<sup>1</sup> 詳しくは、本稿 106 頁および 108 頁、112 頁を参照のこと。

ワースは、「無差別曲線が多くの場合に基数的測定を不要にしてくれるという意見には賛成しなかった」(Harrod, 43/訳 75)。確かに、エッジワースは、『数理精神科学』において、より多くの観察をおこない、より広範なデータからの平均を求めることによって可能となる、と快樂の個人間比較にたいする十分な期待を表明している(Edgeworth 1881, 102)。これに限らず、彼はさまざまな著作において効用の可測性に肯定的な文章を残している。

たとえば、パルグレイヴ編『経済学辞典』の「快樂および苦痛」(Pleasure and Pain)において、エッジワースは、「均衡があらゆる当事者にとってもっとも利益のある状況であるとみなすならば……反功利主義者たちのなかには認めることを拒否しているものもあるけれども、当然のことながら、快樂を総計できる可能性はある」(Edgeworth 1899b, 117)と寄稿している。さらに、他界する3年前にあたる1923年の時点においても、エッジワースは「さまざまな個人が感じる満足には比較の余地があり」(Edgeworth 1923, 487)、「ある共同体の経済的厚生を、個々の構成員たちが享受する満足の総計、と考えることが可能となる」(*ibid.*, 487)との見解を示している。

とりわけ、エッジワースが効用の可測性について可能性を見出している一例として挙げられるのは、『価値および価格の理論の数学的研究』にみられるフィッシャーの考えである。同書においてフィッシャーは、個人間の効用比較を「神秘的なもの」とみなして、序数的効用概念を提示したが<sup>2</sup>、エッジワースはむしろそのフィッシャーの効用測定にかんする叙述に注目している。

「統計学者は、人間のなかでもっとも似通っている効用——食べ物の効用——、および一定の種の単純労働による不効用のような、もっとも似通っている不効用から着手できる。……さまざまな種類の商品にかんする効用曲線が構築されれば、統計学者は総効用および総不効用、利得、無視できない意味合いをもつ使用価値(utility-value)の大まかな統計を作成することができる。人間は消化(digestion)と疲労とにおいて大同小異である。食べ物や労働の基準が確立されれば、被服、住居、家具、書籍、美術作品にたいしてのように、人間の似通っていない効用にも簡単に適用できる」(Fisher 1892, 131; Edgeworth 1893b, 41)。

<sup>2</sup> エッジワースは、フィッシャーが提示した序数的効用理論を「経済学を道德哲学から分離する大きな割れ目」(Edgeworth 1893b, 41)と評している。

エッジワースは、この人間の効用測定を食べ物と単純労働の側面から捉えようとするフィッシャーの考えを「功利主義者にたいする貴重ないくつかのヒント」(Edgeworth 1893b, 41)とみなしている。すなわち、みずからの功利主義研究を経済学研究に適用し、また経済学研究を功利主義研究にフィードバックする、というように、エッジワースの功利主義論と経済学との関係は密接なものである<sup>3</sup>。同様の姿勢は、1922年の「男女への等しい労働にたいする等しい賃金」においても見出される。それは、経済的厚生の問題への解答が道徳的善や精神的善を含む幸福全体の問題への解答を考える際の資料となりうる、と彼が述べていることから明らかである(Edgeworth 1922, 434-35)。したがって、メイナード・ケインズがいうような功利主義から経済学の限界理論へのエッジワースの関心の移行はなく、また、シュンペーターが述べるように、その両者を切り離すことも困難なことなのである。

以上が本稿の結論であるが、最後に、本稿が残した課題——今後の研究課題——についても整理しておきたい。本稿では、『倫理学の新方法と旧方法』や『数理精神科学』といったエッジワースの著書、さらに経済学方法論、所得課税論、男女賃金論などにかんする論文や書評を中心に、彼の功利主義論と経済学との関係について精査してきた。しかしながら、Baccini(2003)にみられるようにエッジワースは多産な著述家であり、彼の全著作に占める本稿で取り扱った著作の割合は決して高いものとはいえない。エッジワースの契約理論との関連性が深いとされる国際貿易理論——1903年の関税改革論争における彼の見解を含む——や独占理論、戦争の経済学——第一次世界大戦前後に彼が出版した各種の戦時パンフレット、および戦争の経済学にかんする書評を含む——など、本稿において明示的には取り上げることができなかった彼の経済学分野の業績も数多い。本稿で明らかとした彼の功利主義論と経済学との関係性が、エッジワースのこれらの著作においても通徹されているかどうかは精査すべき問題であろう。

他方で、本稿との関連性でいえば外在的な問題として今後の課題となるのは、自然科学的な観察理論という光をもって社会科学の系統的ではない部分を映し出すとの願望をもっていたエッジワースの確率論および統計学と功利主義論との関係である。本稿ではほとんど目を配ってこなかったエッジワースの確率論や統計理論であるが、本稿で取り扱った

---

<sup>3</sup> エッジワースは、社会主義的政治学(socialistic politics)においてさえ——抽象的経済学以上に——功利主義的分配を制御するために効用測定は重要である、との認識を示している。ただし、エッジワースは社会主義を推奨したわけではなく、「課税の純粹理論」に見られるように社会主義を批判する立場にあった(Edgeworth 1897, 104-05)。

エッジワースの著作だけを見ても、これらの分野を意識した言説は随所に散りばめられており<sup>4</sup>、これらの分野に彼が注目し、多くの業績を残したことは紛れもない事実である。メイナード・ケインズは、確率論と功利主義とにたいするエッジワースの態度を対比させて、次のように述べている。

「エッジワースははじめ、確率概念にたいして論理的基礎よりもむしろ物理的基礎を求める側に強く傾いて、確率の度数理論の支持者として出発した。これはあたかも、功利主義的倫理学の支持者として、彼が形而上学的基礎よりもむしろ物理的基礎にくみする側に傾いていたのと同じである。しかし、いずれの場合にも、彼の心は異論にたいして敏感であり、またいずれの場合にも、時が経つにつれて、異論の重みは頭のなかで減少するよりむしろ増大していった。にもかかわらず、彼はどちらの場合にもこれら当初の推定を他のものと取り替えることはしなかったため、その結果、彼はしだいに哲学的基礎にたいしては懐疑的な態度を取るとともに、こうした基礎が本当はどれほど不確実なものであろうとも、その上に首尾よく立てられた実際の応用にたいしては実用主義的な態度をとるようになった。その結果は、彼の興味を中心に徐々に確率から統計学の理論へ、功利主義から経済学の限界理論へと移っていくことになったのである」(Keynes 1933, 259-60/訳 343)。

本章においてみてきたように、晩年においてもエッジワースは効用の可測性にたいして可能性を見出しており<sup>5</sup>、当初からみずから抱いていた物理的基礎や哲学的基礎に疑問を感じたために功利主義から経済学へと移行したわけでも、そもそもその物理的基礎や哲学的基礎に不信の念を抱いたわけでもない。この意味で、エッジワースの「功利主義から経済学の限界理論」への移行というメイナード・ケインズの評価は妥当なものとはいえない。となれば、今後は彼の「確率論から統計学」への関心移行という評価についても検討する必要があるだろう。この問題こそ、今後の課題のなかでもっとも重要かつ大きなものであろう。

<sup>4</sup> たとえば、エッジワースが所得の限界効用関数の一例として用いた数式  $dU/dY = Ae^{-(Y-a)^2}$  は、彼が用いた正規分布の確率密度関数  $y = N \frac{1}{\sqrt{\pi c}} e^{-\frac{x^2}{c^2}}$  によく似ている。本稿 117 頁および 132 頁を参照のこと。

<sup>5</sup> 本稿 170 頁を参照のこと。

## 資料 1 : エッジワースのトリニティ・コレッジ・ダブリンにおける成績

(P は筆記試験、VV は口頭試問試験を、数字はエッジワースの成績、□は成績未記入を表す。()内は、大文字小文字の記載を含めて、TCD MUN/V/30/21-24 の原文まま、[]内は筆者による補足を意味する。)

## 1862 年

## (1) ヒラリー学期試験 (Hilary Examination)

幾何学(geom[etry]) P □, VV □

算術(Arith[metic]) P □

ギリシャ古典(Greek) P □, VV □

ラテン古典(L[atin]) □

作文(C[omposition]) □

## (2) トリニティ学期試験 (Trinity Examination)

幾何学(geom[etry]) P 9, VV 8

算術+代数(Arith[metic]+Algebra) P 10

ギリシャ古典(Greek) P 9, VV 10

ラテン古典(Lat[in]) 10

作文(Comp[osition]) 8

## (3) ミカエルマス学期試験 (Michaelmas Examination)

幾何学(geom[etry]) P 10, VV 9

算術+代数(Arith[metic]+Algebra) P 6

ギリシャ古典(Greek) P 8, VV 10

ラテン古典(La[atin]) 10

作文(Comp[osition]) 10

## 1863 年

## (1) ヒラリー学期試験 (Hilary Examination)

数学(Mathematics) : エウクレイデス幾何学(Euc[lid]) P 4, VV 4,

三角法(Trig[onometry]) P 4, VV 8 \*

代数+算術(Alg[ebla]+Ar[ithmetic]) P 5, VV □

論理学(Logic) P 5, VV 9 1/2

ギリシャ古典(greek) 10

ラテン古典(Latin) 10

作文(Comp[osition]) 10 /

\* エウクレイデス幾何学と三角法をあわせて「数学」と処理されている。

(2) トリニティ学期試験(Trinity Examination)

ロック論理学(Locke' s Log[ic]) P □, VV □

エウクレイデス幾何学+三角法(Euc[lid]+Trig[onometry]) P □, VV □

代数+算術(Alg[ebla]+Arith[metic]) P □, VV □

ギリシャ古典(Greek) □

ラテン古典(Latin) □

作文(Comp[osition]) □

(3) ミカエルマス学期試験

論理学または力学(Log[ic] or Mech[anics]) P 7, VV 5

エウクレイデス幾何学+三角法(Euc[lid]+Tri[gonometry]) P 10, VV 10

代数+算術(Alg[ebla]+Arith[metic]) P 4

ギリシャ古典(Greek) 10

ラテン古典(Latin) 10

作文(Comp[osition]) 8

1864 年

(1) ヒラリー学期試験 (Hilary Examination)

実験物理学(Exp[erimental] Phy[sics]) P □, VV □

論理学(Logics) P 3, VV 8

力学(Mech[anics]) P 4, VV 4

ギリシャ古典(greek) P 9, VV 10

ラテン古典(Latin) 9  
作文(Comp[osition]) 6

(2) トリニティ学期試験(Trinity Examination)

実験物理学(Exp[erimental] Phy[sics]) : 電気学(Elect[ricity]) □ 熱学(Heat) □\*  
天文学(Astronomy) P □, VV □  
力学(Mechanics) P □, VV □  
論理学(Logic) □  
ギリシャ古典(greek) □  
ラテン古典(Latin) □  
作文(Comp[osition]) □

\* 電気学および熱学をあわせて「実験物理学」と処理されている。

(3) ミカエルマス学期試験

実験物理学(Exp[erimental] Phy[sics]) □  
天文学(Astronomy) P 0, VV 2  
数理物理学(Math[ematical] Phys[ics]) P 4, VV 5  
論理学(Logic) P 2, VV 7  
ギリシャ古典(greek) 10  
ラテン古典(Latin) 10  
作文(Comp[osition]) 6

1865 年

(1) ヒラリー学期試験 (Hilary Examination)

実験科学(Exp[erimental] Sci[ence]) □  
倫理学(Ethics) P 4, VV 9  
天文学(Astron[omy]) P 1, VV 2  
数理物理学(M[athematical] Phy[sics]) P 4, VV 3  
ギリシャ古典(G[ree]k) 10  
ラテン古典(Lat[in]) 6

作文(Comp[osition]) 6

(2) トリニティ学期試験(Trinity Examination)

実験物理学(Exp[erimental] Phy[sics]) □

天文学(Astron[omy]) P □, VV □

数理物理学(Math[ematical] Phy[sics]) P □, VV □

倫理学(Ethics) P □, VV □

ギリシャ古典(G[reek]) □

ラテン古典(Lat[in]) □

作文(Comp[osition]) □

(3) ミカエルマス学期試験

実験物理学(Exp[erimental] Phy[sics]): 物理学(Ph[ysics]) □, 化学(Ch[emistry]) □\*

天文学(Astronomy) P 5, VV 6

数理物理学(Math[ematical] Phys[ics]) P 6, VV 10

論理学(Logic) P 9, VV バトラー(B[utler]) 7,

ペイリーおよびステュアート(P[aley]&S[tewart]) 7\*\*

ギリシャ古典(G[reek]) 10

ラテン古典(Lat[in]) 9

作文(Comp[osition]) 10

\* 物理学と化学をあわせて「実験物理学」として処理されている。

\*\* 口頭試問試験はバトラー、ペイリーおよびステュアートという 2 つに分かれている。

(以上、TCD MUN/V/30/21-24 より筆者作成)

資料 2 : エッジワースが受けた優等試験の試験範囲

(1) 1862 年 トリニティ学期

試験科目 : 数学

試験範囲 : 代数 (ただし、方程式論(*general theory of equation*)は含まない)

(2) 1862 年 ミカエルマス学期

試験科目 : 古典

試験範囲 : ヘロドトス 1, 2, 3 卷

リウィウス 22-25 卷、これら両方を含む

(以上、*DUC 1863*, 43 参照)

(3) 1863 年 ミカエルマス学期

試験科目 : 古典

試験範囲 : ホメロス『イリアス』終わりの 12 歌

ウェルギリウス『アイネーイス』6-12 卷、これら両方を含む

(4) 1864 年 ヒラリー学期

試験科目 : 古典

試験範囲 : エウリピデス『フェニキアの女たち』、『ヒュポリュトス』、  
『アウリスのイピゲネイア』

プラウトゥス『メナエクムス兄弟』、『壺』

テレンティウス『フォルミオ』、『自虐者』

(5) 1864 年 トリニティ学期

試験科目 : 古典

試験範囲 : ソポクレス『コロノスのオイディプス』、『アンティゴネー』、  
『ピクテーテース』

ラテンの風刺詩人、ホラティウス『風刺詩』、

ユウェナリス『風刺詩集』1, 4, 14 編

(6) 1864 年 ミカエルマス学期

試験科目：古典

試験範囲：アイキユロス『アガメムノン』、『テーバイ攻めの7将』

ラテンのエレゲイア調詩および叙情詩、

ホラティウス『歌章』1, 2巻とエポード

(以上、*DUC 1864*, 43 参照)

(7) 1865 年 ヒラリー学期

試験科目：倫理学

試験範囲：バトラー主教『説教集』(序文含む)、ただし公席での説教(Sermons on Public Occasion)は除く

バトラーの徳論(Butler's Essay on Virtue)

アリストテレス『ニコマコス倫理学』2編(原文)

スミスの古代道德体系についての見解 (Smith's view of Ancient Moral Systems)

(以上、*DUC 1865*, 46 参照)

資料 3 : キングズ・コレッジ・ロンドン時代のエッジワースの主な担当講義<sup>1</sup>

| 暦 年     | 夜 間 部                                | 女 子 部          | 一般文学部 |
|---------|--------------------------------------|----------------|-------|
| 1881-82 | 論 理 学                                |                |       |
| 1882-83 | 論 理 学                                |                |       |
| 1883-84 | 論 理 学                                |                |       |
| 1884-85 | 論 理 学                                |                |       |
| 1885-86 | 論 理 学<br>論 理 学 (夏)                   | ラテン語上級編        |       |
| 1886-87 | 論 理 学<br>精神・道徳科学 (夏)                 | ラテン語上級編        |       |
| 1887-88 | 論 理 学                                | ラテン語上級編        |       |
| 1888-89 | 論 理 学                                | ラテン語上級編        | 経 済 学 |
| 1889-90 | 論 理 学<br>精神・道徳科学 (夏)                 | ラテン語上級編        | 経 済 学 |
| 1890-91 | 論理学・精神および道徳科学 <sup>2</sup><br>トゥック講座 | ラテン語上級編        | 経 済 学 |
| 1891-92 |                                      | 特殊講義<br>統計学の使用 |       |
| 1892-93 |                                      | 特殊講義<br>経済学要論  |       |

(CKCL 1881, 1882, 1883, 1884, 1885, 1886, 1887, 1888, 1889, 1890, 1891, 1892 より  
筆者作成)

<sup>1</sup> ケンジントンでの女性のための講座、およびロンドン大学教育協会にかんする記録は完全には把握できていないため、ここでは割愛した。

<sup>2</sup> この講義は、夏学期にも開講されているが、冬からの継続講義として実施された(CKCL 1890, 428 and 446)。

参考文献一覧

[マニユスクリプツ]

KA/C/M12, KA/C/M13, KA/C/M14 (King's College, London, Minutes of the Council);

KA/CS/M3, KA/CS/M4 (King's College, London, Council Committee Minutes);

KA/IC/E80 (King's College, London, Secretary's In-Correspondence)

: King's College, London Archives.

MSS Edgeworth: Nuffield College, Oxford.

このうち、MSS Edgeworth D9 は、関西学院大学図書館にも、*To the Council of King's College* (資料 ID: 0097216634) として所蔵されている。

OUA UR3/1/1 (Examination Register Responses 1851-70) : Bodleian Library, Oxford.

PHOT18-10a, PHOT18-10key : Balliol College, Oxford.

TCD MUN/V/23/6 (Main Admissions Registers for TCD),

TCD MUN/V/24/4 (Index to Main Admissions Registers for TCD),

TCD MUN/V/28/2 (Examinations Returns 1856-1866),

TCD MUN/V/30/21 (Term and Examination Returns from Michaelmas 1861 to Michaelmas 1862),

TCD MUN/V/30/22 (Term and Examination Returns from Michaelmas 1862 to Michaelmas 1863),

TCD MUN/V/30/23 (Term and Examination Returns from Michaelmas 1863 to Michaelmas 1864),

TCD MUN/V/30/24 (Term and Examination Returns from Michaelmas 1864 to Michaelmas 1865),

TCD 10047/47/163 (F.Y. Edgeworth Letter, 23rd April 1891(?))

: Manuscripts Department, Trinity College, Dublin.

Register of Baptism of the St. John's Parish Mostrim or Edgeworthstown  
: Mr. Jack Stuart, Edgeworthstown.

[文献]

- Annan, N. (1999), *The Dons: Mentors, Eccentrics and Geniuses*, Harper Collins Publishers, paperback ed., 2000 (中野康司訳、『大学のドンたち』、みすず書房、2002) .
- Anon. (1877), "Economic Science and the British Association", *Journal of the Statistical Society*, 40: 468-76.
- Anon. (1891), "Report of the Proceedings at the Meeting which Inaugurated the British Economic Association", *The Economic Journal*, 1: 2-15.
- Anon. (1907), "Correspondence of Ricardo with Maria Edgeworth", *The Economic Journal*, 17: 431-41.
- Arrow, K.J. (1994), "Edgeworths Ethik", in *Vertag und Wettbewerb: Edgeworths "Mathematical Psychics"*, Verlag Wirtschaft und Finanzen: 87-108.
- Ashley, W.J. (1888), *What is Political Science? An Inaugural Lecture given in the Convocation Hall of the University of Toronto, 9th November, 1888*, Rowsell and Hutchison.
- Aumann, R.J. (1964), "Markets with Continuum of Traders", *Econometrica*, 32: 39-50.
- Baccini, A. (2003), "Toward A Bibliography of Edgeworth's Writings", Samuels, W.J. (ed.), *Reserch in the Economic Thought and Methodology 21-C, Documents on Modern History of Economic Thought*, JAI: 271-301.
- Barbé, L. (2004), "Francis Ysidro Edgeworth's Catalan Grandfather", *European Journal of History of Economic Thought*, 11: 295-307.
- (2010), *Francis Ysidro Edgeworth; A Portrait with Family and Friends*, translated by Mary C. Black, Edward Elgar.
- Barratt, A. (1869), *Physical Ethics*, Thoemmes Press, 1991.
- (1877), "The 'Suppression' of Egoism", *Mind*, 2: 167-86.
- (1878), "Ethics and Psychogony", *Mind*, 3: 277-83.
- Barratt, D. (1883), "Preface", in Barratt, A., *Physical Metempiric*, Williams and Norgate: v-xxii.
- Bennett, J.A. (2004), "Robinson, (John) Thomas Romney (1873-1882)", Matthew, H.C.G. and B. Harrison (eds.), *Oxford Dictionary of National Biography*, 47, Oxford University Press:

- 418-19.
- Black, R. D. Collison and R. Könelamp(1972), *Papers and Correspondence of William Stanley Jevons*, 1, Macmillan.
- Black, R. D. Collison (ed.)(1973-81), *Papers and Correspondence of William Stanley Jevons*, 2-7, Macmillan.
- Black, R. D. Collison (ed.) (1977a), *Correspondence 1873-1878*, in Black, R. D. Collison (ed.)(1973-81).
- (1977b), *Correspondence 1879-1882*, in Black, R. D. Collison (ed.)(1973-81).
- Black, R. D. Collison, Coats, A. W. and Craufurd D. W. Goodwin (eds.)(1973), *The Marginal Revolution in Economics*, Duke University Press (岡田純一・早坂忠訳、『経済学と限界革命』、日本経済新聞社、1975) .
- Blaug, M. (1978), *Economic Theory in Retrospect*, 3rd ed., Cambridge University Press (久保芳和・真実一男他訳、『新版 経済理論の歴史』全4巻、東洋経済新報社、1982-86) .
- (ed.)(1992), *Pioneers in Economics, Alfred Marshall(1842-1924) and Francis Edgeworth(1845-1926)*, Edward Elgar.
- Bonar, J. (1926), “Memories of F. Y. Edgeworth”, *The Economic Journal*, 36: 647-53.
- Bowley, A.L. (1924), *The Mathematical Groundwork of Economics*, rep. by Kelley, 1965.
- (1934), “Francis Ysidro Edgeworth”, *Econometrica*, 2: 112-24.
- Burke, B. (1879), *A Genealogical and Heraldic History of the Landed Gentry of Great Britain and Ireland*, 6th ed., 1, Harrison.
- Butler, H. (1957), “The Country House – The Life of the Gentry”, in MacDowell, R.B. (ed.)(1976), *Social Life in Ireland 1800-45*, Mercier Press, 1976: 25-39.
- Butler, H.J. and H.A. Butler (eds.)(1927), *Black Book of Edgeworthstown and other Edgeworth Memories 1585-1817*, Feber and Gwyer.
- Camerer, C., Loewenstein, G. and D. Prelec (2005), “Neuroeconomics: How Neuroscience can inform Economics”, *Journal of Economic Literature*, 43: 9-64.
- Catalogue of Graduates who have proceeded to Degrees in the University of Dublin from Earliest Recorded Commencements to July, 1866: with supplement to December 16, 1868*, Smith and Foster, 1869 (DUCG).
- Carlyle, T. (1851), *The Life of John Starling*, 2nd ed., in Trail, H.D. (ed.)(1969), *Works of Thomas*

- Carlyle*, 11, AMS Press.
- Carver, T. N. (1895), “The Ethical Basis of Distribution and its Application to Taxation”, *Annals of the American Academy of Political and Social Science*, 6: 79-99.
- Chamberlain, J. (1885), *The Radical Programme*, Chapman and Hall.
- Collard, D. (1975), “Edgeworth’s Propositions on Altruism”, *The Economic Journal*, 85: 255-60.  
Also in Blaug, M. (ed.)(1992): 133-38.
- Creedy, J. (1980a), “Some Recent Interpretations of Mathematical Psychics”, *History of Political Economy*, 12(2): 267-76. Also in Blaug, M. (ed.)(1992): 166-80.
- (1980b), “The Early Use of Lagrange Multipliers in Economics”, *The Economic Journal*, 90: 371-76.
- (1981), “F. Y. Edgeworth, 1845-1926”, in O’Brien, D.P. and J.R. Presley (eds.)(1981), *Pioneers of Modern Economics in Britain*, Macmillan: 72-104 (井上琢智訳、「F. Y. エッジワース 1845-1926」、井上琢智・上宮正一郎・八木紀一郎他訳、『近代経済学の開拓者』、昭和堂、1986 : 73-105) .
- (1983), “F. Y. Edgeworth’s Mathematical Training”, *Journal of Royal Statistical Society, Series A*, 146, 1: 58-62. Also in Blaug, M. (1992): 243-47.
- (1986), *Edgeworth and the Development of Neoclassical Economics*, Gregg Revivals, 1992.
- (1990), “Marshall and Edgeworth”, *Scottish Journal of Political Economy*, 37: 18-39.
- Curthoys, M.C. (2006), “Wren, Walter (1834-1898)”, *Oxford Dictionary of National Biography*, Oxford University Press (URL: <http://www.oxforddnb.com/view/article/93449>, accessed 16th August 2011).
- Daunton, M. (2001), *Trusting Leviathan: The Politics of Taxation in Britain, 1799-1914*, Cambridge University Press.
- Debreu, G. and H. Scarf (1963), “A Limit Theorem on the Core of an Economy”, *International Economic Review*, 4: 235-46.
- (1969), “A Limit Theorem on the Core of an Economy”, *International Economic Review*, 4: 267-46.
- Duff, M.E.G. (1881), “Presidential Address to Section F”, *Report of the British Association for the Advancement of Science 1881*, John Murray: 752-58 (BAAS 1881).

- Edgeworth, F.Y. (1876), “Mr. Matthew Arnold on Bishop Butler’s Doctrine of Self-Love”, *Mind*, 1: 570-71. Also in Newman, P. (ed.)(2003): 259.
- (1877), *New and Old Methods of Ethics or “Physical Ethics” and “Methods of Ethics”*, James Parker. Also in Newman, P.(ed.)(2003): 175-248.
- (1879), “The Hedonical Calculus”, *Mind*, 4: 394-408.
- (1881), *Mathematical Psychics*, rep. by Kelley, 1967. Also in Newman, P. (2003): 1-150.
- (1882a), “Mr. Leslie Stephen on Utilitarianism”, *Mind*, 7: 446-47.
- (1882b), “The Abstract Theory of Rent”, *Report of the British Association for the Advancement of Science 1882*, John Murray: 642 (BAAS 1882).
- (1885a), *Syllabus of Lectures on Political Economy, delivered for King’s College, The London Society for University Extension, and other Institutions* (owned by the National Library of Ireland).
- (1885b), “Methods of Statistics”, in MaCann, Jr. C.R. (ed.)(1996), *F. Y. Edgeworth: Writings in Probability, Statistics and Economics*, 2, Edward Elgar: 24-60.
- (1886), “*The Scope and Method of Economic Science*. By Henry Sidgwick (Macmillan)”, *Academy*, 723: 177.
- (1887a), “Report of the Committee, consisting of Mr. S. Bourne, Mr. F.Y. Edgeworth(Secretary), Professor H.S. Foxwell, Mr. Robert Giffen, Professor Alfred Marshall, Mr. J.B. Martin, Professor J.S. Nicholson, Mr. R.H. Inglis Palgrave, and Professor H. Sidgwick, appointed for the purpose of investigating the best methods of ascertaining and measuring Variations in the Value of the Monetary Standard”, *Report of the British Association for the Advancement of Science 1887*, John Murray, 1888: 247-54 (BAAS 1887).
- (1887b), “Memorandum by the Secretary”, *Report of the British Association for the Advancement of Science 1887*, John Murray, 1888: 254-301 (BAAS 1887).
- (1887c), *Metretike, or the Method of Measuring Probabilities and Utility*, Temple Company.
- (1888a), “*The Present Condition of Economic Science*. By Edward Clark Lunt (Putnam’s)”, *Academy*, 856: 201.
- (1888b), “*The Economic Interpretation of History*. Lectures delivered in Worcester College Hall, Oxford, by James E. Thorold Rogers. (Fisher Unwin.)”, *Academy*, 868: 395-96.

- (1889a), “Robert Perceval Graves, Life of Sir William Rowan Hamilton, (Dublin: Hodges, Figgis and Co.; London: Longmans, 1889)”, in Newman, P. (ed.)(2003): 557-60.
- (1889b), “On the Application of Mathematics to Political Economy”, in Edgeworth, F. Y. (1925b), 2: 273-312.
- (1889c), “Charles Booth (ed.), Life and Labour, Vol. I --- East London, (London: Williams and Norgate, 1889), in Newman, P. (ed.) (2003): 550-54.
- (1891a), “La Théorie Mathématique de l’Offre et de la Demande et la Coût de Production”, *Revue d’Économie Politique*, 5: 10-28.
- (1891b), “*The Scope and Method of Political Economy*. By John Neville Keynes, M.A. (London: Macmillan and Co.), 1891”, in Edgeworth, F.Y. (1925b), 3: 3-7.
- (1891c), “The Objects and Methods of Political Economy”, in Edgeworth, F.Y. (1925b), 1: 3-12.
- (1893a), “Women’s Wages. By William Smart. (From the Proceeding of the Philosophical Society of Glasgow)”, *The Economic Journal*, 3: 118-19.
- (1893b), “*Mathematical Investigations in the Theory of Value and Prices*. By Dr. Irving Fisher. From *Transactions of the Connecticut Academy* (Vol. IX., July 1892.)”, in Edgeworth, F.Y. (1925b), 3: 36-41.
- (1894), “Doctrinaire”, in Palgrave, R.H.I. (ed.), *Dictionary of Political Economy*, 1, rep. by Macmillan, 1987: 623-24.
- (1896a), “Facts”, in Palgrave, R.H.I. (ed.), *Dictionary of Political Economy*, 2, rep. by Macmillan, 1987: 11-12.
- (1896b), “Jones, Richard (1790-1855)”, in Palgrave, R.H.I. (ed.), *Dictionary of Political Economy*, 2, rep. by Macmillan, 1987: 490-91.
- (1896c), “Mathematical Method in Political Economy”, in Palgrave, R.H.I. (ed.), *Dictionary of Political Economy*, 2, rep. by Macmillan, 1987: 711-13.
- (1897), “The Pure Theory of Taxation”, in Edgeworth, F.Y. (1925b), 2: 63-125.
- (1899a), “Answers to Questions put by the Local Taxation Commission”, in Edgeworth, F. Y. (1925b), 2: 126-49.
- (1899b), “Pleasure and Pain”, in Palgrave, R.H.I. (ed.), *Dictionary of Political Economy*, 3, rep. by Macmillan, 1987: 117.

- (1900), “Urban Rates”, in Edgeworth, F.Y. (1925b), 2: 150-214.
- (1904a), “The Theory of Distribution”, in Edgeworth, F.Y. (ed.)(1925b), 1: 13-60.
- (1904b), “Preface”, in MacDonald, J.R. (ed.), *Women in the Printing Trades: A Sociological Study*, Garland Publishing, Inc., 1980.
- (1906), “The Theory of Distribution”, in Edgeworth, F.Y. (ed.)(1925b), 1: 13-60.
- (1907), “John Kells Ingram”, *The Economic Journal*, 17: 299-301.
- (1915), *The Cost of War and Ways of reducing It suggested by Economic Theory*, Oxford University Press.
- (1922), “Equal Pay to Men and Women for Equal Work”, *The Economic Journal*, 32: 431-57. Also in Newman, P. (ed.) (2003): 377-99.
- (1923), “Women’s Wages in relation to Economic Welfare”, *The Economic Journal*, 33: 487-95.
- (1924), “Fisher, H.A.L., *The Economic Position of Married Women*”, *The Economic Journal*, 34: 446-49.
- (1925a), “Reminiscences”, in Pigou A.C. (ed.)(1925), *Memorials of Alfred Marshall*, rep. by Kelley, 1866: 66-73.
- (1925b), *Papers relating to Political Economy*, 3 vols. Macmillan and Co., Ltd.
- Edgeworth, K. (1965), *Jack of All Trades*, Allen Figgis.
- Fawcett, M.G. (1892), “Mr. Sidney Webb’s Article on Women’s Wages”, *The Economic Journal*, 2: 173-76.
- (1918), “Equal Pay for Equal Work”, *The Economic Journal*, 28: 1-6.
- Fisher, I. (1892), *Mathematical Investigations in the Theory of Value and Prices*, in Barber, W.E. (ed.)(1997), *The Works of Irving Fisher; The Early Professional Works*, 1, Pickering and Chatto: 44-148.
- Fisher, L. (1924), *Economic Position of Married Women*, Oxford University Press.
- Foster, J. (1888), *Alumini Oxonienses: The Member of the University of Oxford, 1715 to 1886*, 2, Parker and Co..
- Galton, F. (1869), *Hereditary Genius; An Inquiry into its Laws and Consequences*, University Press of the Pacific, 2001.
- Graves, R.P. (1882-89), *Life of Sir William Rowan Hamilton*, 3 vols., Arno Press, 1975.

- Groenewegen, P. (1995), *A Soaring Eagle: Alfred Marshall 1842-1924*, Edward Elgar.
- Gurjeva, L. G. (2004), “Sully, James (1842-1923)”, Matthew, H. C. G. and B. Harrison (eds.), *Oxford Dictionary of National Biography*, 53: 316-17, Oxford University Press.
- Halsey, A. (2004), “Beddoes, Thomas Lovell (1803-1849)”, Matthew, H. C. G. and B. Harrison (eds.), *Oxford Dictionary of National Biography*, 4: 756-58, Oxford University Press.
- Hankins, T.L. (1980), *Sir William Rowan Hamilton*, John Hopkins University Press.
- Harrod, R.F. (1971), *Sociology, Morals and Mystery*, Macmillan (清水幾太郎訳、『社会科学とは何か』、岩波新書、1975) .
- (1972), *Economic Essays*, 2nd ed., Macmillan.
- Hayek, F.A. (1960), *The Constitution of Liberty*, in Hamowy, R. (ed.) (2011), *The Collected Works of F. A. Hayek*, 17, Routledge (気賀健三・古賀勝次郎訳、西山千明・矢島鈞次監修、『自由の条件』(ハイエク全集 5-7 巻)、春秋社、1986-87) .
- Hichens, W.L. (1922), “The Principles by which Wages are Determined”, *Report of British Association for the Advancement of Science 1921*, John Murray: 95-109 (BAAS 1921).
- Hicks, J. (1983), “Francis Ysidro Edgeworth”, *Hermathena*, 135: 157-74.
- Hildenbrand, W. (1993), “Francis Ysidro Edgeworth: Perfect Competition and the Core”, *European Economic Review*, 37: 477-90.
- Hildreth, C. (1968), “Edgeworth, Francis Ysidro”, in Sills, D.L.(ed.), *International Encyclopedia of the Social Sciences*, 4, Macmillan Company and Free Press: 506-09.
- Hincheliff P. and J. Prest (2004), “Jowett, Benjamin (1817-1893)”, Matthew, H.C.G. and B. Harrison (eds.), *Oxford Dictionary of National Biography*, 30, Oxford University Press: 756-62.
- Howely, R.S. (1960), *The Rise of the Marginal Utility School 1870-1889*, University of Kansas Press.
- Hutchins, B.L. (1921), “The Present Position of Industrial Women Workers”, *The Economic Journal*, 31: 462-71.
- Hutchison, T.W. (1953), “F. Y. Edgeworth”, *A Review of Economic Doctrines 1870-1929*, Clarendon Press: 105-17 (長守善・山田雄三・武藤光朗共訳、「F.Y.エッジワース」、『近代経済学説史』上巻、東洋経済新報社、1957 : 124-35) .
- Ingram, J.K. (1878), “Position and Prospects of Political Economy”, Smyth, R.L. (ed.)(1962),

- Essays in Economic Method*, Gerald Duckworth and Co.: 41-72.
- (1885), “Political Economy”, *The Encyclopædia Britannica*, 19: Adam and Charles Black: 346-401.
- Inoue, T. and M. White (1993), “Bibliography of Published Works by W.S. Jevons”, *Journal of the History of Economic Thought*, 15: 122-47.
- (2001), “Bibliography of the published works of W.S. Jevons”, in Palgrave Archive (ed.), *The Writings on Economics of W.S. Jevons*, 1, Palgrave: xxvi-xliii.
- Ivo Elliot, B. (ed.)(1934), *The Balliol College Register 1833-1933*, 2nd ed., printed for private circulation, by John Johnson at the University Press.
- Jackson, B.D. (2004), “Edgeworth, Michal Pakenham (1812-1881)”, Matthew, H.C.G. and B. Harrison (eds.)2, *Oxford Dictionary of National Biography*, 17,Oxford University Press: 723-24.
- Jaffé, W. (1974), “Edgeworth’s Contract Curve: Part 1. A Propædeutic Essay in Clarification”, *History of Political Economy*, 6: 343-59. Also in Blaug, M.(1992): 92-108.
- Jevons, W.S. (1879a), *The Theory of Political Economy*, 2nd ed., in Palgrave Archive (ed.) (2001), *The Writings on Economics of W.S. Jevons*, 2, Palgrave (小泉信三・寺尾琢磨・永田清訳、寺尾琢磨改訳、『経済学の理論』、日本経済評論社、1981) .
- (1879b), *The Principles of Science: A Treatise on Logic and Scientific Method*, 3rd ed., Macmillan.
- (1881), “*Mathematical Psychics: An Essay on the Application of Mathematics to the Moral Sciences*. By F. Y. Edgeworth, M.A., Barrister-at-Law. London: Kegan Paul & Co., 1881. pp. viii, 150.”, *Mind*, 6: 581-83.
- (1906), *The Coal Question: An Inquiry concerning the Progress of the Nation, and the probable Exhaustion of our Coal-Mines*, 3rd ed., edited by A. W. Flux, Macmillan.
- Kadish, A. (1982), *The Oxford Economists in the Late Nineteenth Century*, Clarendon Press.
- (1993), “Oxford Economics in the Later Nineteenth Century”, Kadish, A. and K. Tribe (ed.), *The Market for Political Economy: The Advent of Economics in British University Culture, 1850-1905*, Routledge: 42-77.
- Kaldor, N. (1934), “A Classificatory Note on the Determinateness of Equilibrium”, *The Review of Economic Studies*, 1: 122-36.

- Kendall, M.G. (1968), “Francis Ysidro Edgeworth (1845-1926)”, *Biometrika*, 55: 269-75.
- Keynes, J.M. (1926), “Francis Ysidro Edgeworth 1845-1926”, *The Economic Journal*, 36: 140-53.
- (1933), *Essays in Biography*, in Moggridge, D.E. (ed.)(1972), *Collected Writings of John Maynard Keynes*, 10, Macmillan (大野忠男訳、『人物評伝』(ケインズ全集 10 卷)、東洋経済新報社、1980) .
- (1937), “Edgeworth, Francis Ysidro”, Weaver, J.R.(ed.), *The Dictionary of National Biography 1922-1930*, Oxford University Press: 284-85.
- (1940), “The Society’s Jubilee 1890-1940”, *The Economic Journal*, 50: 401-09.
- Keynes, J.N. (1917), *The Scope and Method of Political Economy*, 4th ed., rep. by Kelley, 1955 (上宮正一郎訳、『経済学の領域と方法』、日本経済評論社、2000) .
- Koot, G.M. (2004), “Cunningham, William (1849-1919)”, Matthew, H. C. G. and B. Harrison (eds.), *Oxford Dictionary of National Biography*, 14, Oxford University Press: 705-07.
- Lefevre, G.S. (1879), “Presidential Address to Section F”, *Report of the British Association for the Advancement of Science 1879*, John Murray: 479-88 (*BAAS 1879*).
- Leslie, T.E.C. (1870), *Land Systems and Industrial Economy of Ireland, England and Continental Countries*, rep. by Kelley, 1968.
- (1876), “On the Philosophical Method of Political Economy”, in Leslie, T.E.C. (1888), *Political and Moral Philosophy*, 2nd ed., Hoggis, Figgs and Co.: 163-90.
- Lewis, A.C. (2004a), “Clifford, William Kingdon (1845-1879)”, Matthew, H.C.G. and B. Harrison (eds.), *Oxford Dictionary of National Biography*, 12, Oxford University Press: 121-24.
- (2004b), “Hamilton, Sir William Rowan (1805-1865)”, Matthew, H. C. G. and B. Harrison (eds.), *Oxford Dictionary of National Biography*, 24, Oxford University Press: 934-37.
- Longford Journal (1861), *Longford Journal 27th July 1861*.
- Lunt, E.C. (1888), *The Present Condition of Economic Science and the Demand for a Radical Change in its Methods and Aims*, G.P. Putnam’s Sons.
- MacDonald, J.R. (ed.)(1904), *Women in the Printing Trades: A Sociological Study*, rep. by Garland Publishing, 1980.
- MacDowell, R.B. and D.A. Webb (2004), *Trinity College Dublin 1592-1952*, Trinity College Dublin Press.

- Maitland, F.W. (1906), *The Life and Letters of Leslie Stephen*, rep. by Thoemmes Antiquarian Books Ltd, 1991.
- Marshall, A. (1881), “Review of F.Y. Edgeworth’s *Mathematical Psychics: an Essay on the Application of Mathematics to the Moral Sciences.*”, in Groenewegen, P. (ed.)(1997), *Collected Works of Alfred Marshall*, 1, Overstone Press.
- (1885), “The Present Position of Economics”, in Pigou A.C. (ed.)(1925), *Memorials of Alfred Marshall*, rep. by Kelley, 1866: 157-60 (永澤越郎訳、「経済学の現状」、『マーシャル経済論集』、岩波ブックサービスセンター、1991 : 1-31) .
- (1893), “Obituary: Jowett, Professor Benjamin”, *The Economic Journal*, 3: 744-45.
- (1961), *Principles of Economics*, 9th ed., edited by Guillebaud, C.W., 2vols., Overstone (永澤越郎訳、『経済学原理』(全4巻)、岩波ブックセンター信山社、1985) .
- McCormack, W.J. (2004), “Edgeworth, Maria (1768-1849)”, Matthew, H.C.G. and B. Harrison (eds.), *Oxford Dictionary of National Biography*, 17, Oxford University Press: 719-23.
- Mill, J.S. (1843), *A System of Logic Ratiocinative and Inductive*, in Robson, J.M. (ed.)(1973), *Collected Works of John Stuart Mill*, 7, University of Toronto Press (大関将一・小林篤郎訳、『論理学体系』(全6巻)、春秋社、1949-59) .
- (1848), *Principles of Political Economy: with Some of their Application to Social Philosophy*, in Robson, J.M. (ed.)(1965), *Collected Works of John Stuart Mill*, 2-3, University of Toronto Press (末永茂喜訳、『経済学原理』、岩波文庫、1959-63) .
- (1873), *Autobiography*, in Robson, J.M. and J. Stillinger (eds.)(1981), *Collected Works of John Stuart Mill*, 1, Toronto University Press (朱牟田夏雄訳、『ミル自伝』、岩波文庫、1960) .
- Mineka, F.E. (ed.)(1963), *The Earlier Letters of John Stuart Mill 1812-1848*, in Robson, J.M. (ed.), *Collected Works of John Stuart Mill*, 13, University of Toronto Press.
- Mirowski, P. (ed.)(1994a), *Edgeworth on Chance, Economic Hazard, and Statistics*, Rowan and Littlefield Publishers, Inc..
- (1994b), “Marshalling the Unruly Atoms: Understanding Edgeworth’s Career”, in Mirowski, P. (1994a): 1-79.
- (1994c), “An Incomplete Bibliography of the Writings of Francis Ysidro Edgeworth”, in Mirowski, P. (1994a): 441-53.

- Mozely, T. (1882), *Reminiscences*, 2 vols., Gregg International Publisher, 1969.
- Musgrave, R.A. (1959), *The Theory of Public Finance: A Study in Public Economy*, McGraw-Hill Book Company (木下和夫監修、大阪大学財政研究会訳、『財政理論——公共経済の研究——』(全3巻)、有斐閣、1961-62)
- Nave, M. (2004), “Beddoes, Thomas (1760-1808)”, Matthew, H.C.G. and B. Harrison (eds.), *Oxford Dictionary of National Biography*, 4, Oxford University Press: 754-56.
- Negishi, T. (1961), “On the Formation of Prices”, *International Economic Review*, 2: 122-26.
- Newman, P. (1965), *The Theory of Exchange*, Prentice-Hall.
- (1987), “Francis Ysidro Edgeworth (1845-1926)”, Eatwell, E., Milgate, M. and P. Newman (eds.), *The New Palgrave: A Dictionary of Economics*, 2: 85-98. In Newman, P. (2003): xiii-xlix.
- (1990), “The Great Barter Controversy”, Whitaker, J.K.(ed.), *Centenary Essays on Alfred Marshall*, Cambridge University Press: 242-77 (坂口正志訳、「バーター大論争」、橋本昭一監訳、『マーシャル経済学の体系』、ミネルヴァ書房、1997 : 323-48) .
- (2003), *F. Y. Edgeworth's Mathematical Psychics and Further Papers on Political Economy*, Oxford University Press.
- (2004), “Edgeworth, Francis Ysidro (1845-1926)”, Matthew, H.C.G. and B. Harrison (eds.)(2004), *Oxford Dictionary of National Biography*, 17, Oxford University Press: 716-18.
- Palgrave, R.H.I. (1884), “Presidential Address to Section F”, *Report of the British Association for the Advancement of Science 1883*, John Murray: 605-12 (BAAS 1884).
- Pareto, V. (1906), *Manuale di Economia Politica*, Verlag Wirtschaft und Finanzen, 1992.
- Peart, J.S. and D.M. Levy (2005), “From Cardinal to Ordinal Utility Theory: Darwin and Differential Capacity for Happiness”, *The American Journal of Economics and Sociology*, 64(3): 851-79.
- Pigou, A.C. (1912), *Wealth and Welfare*, Macmillan.
- (1962), *A Study in Public Finance*, 3rd ed., Macmillan.
- Political Economy Club (1876), *Revised Report of the Proceedings at the Dinner of the Hundredth Year of the Publication of the Wealth of Nations, Right Hon. W.E. Gladstone, M.P., in the Chair*, Longmans, Green, Reader and Dyer.
- Price, L.L. (1926), “Francis Ysidro Edgeworth, F.B.A., M.A., D.C.L., Emeritus Professor of

- Political Economy, University of Oxford”, *Journal of the Royal Statistical Society*, 89: 371-77.
- Pujol, M.A. (1992), *Feminism and Anti-Feminism in Early Economic Thought*, Edward Elgar.
- Pullen, J.M. (2004), “Jones, Richard (1790-1855)”, Matthew, H.C.G. and B. Harrison (eds.), *Oxford Dictionary of National Biography*, 30, Oxford University Press: 619-20.
- Rader, J.T.(1964), “Edgeworth Exchange and General Economic Equilibrium”, *Yale Economic Essays*, 4: 133-80.
- Reisman, D. (1990), *Alfred Marshall’s Mission*, Macmillan.
- Report of the British Association for the Advancement of Science 1917*, John Murray (*BAAS 1917*).
- Report of the British Association for the Advancement of Science 1918*, John Murray (*BAAS 1918*).
- Report of the British Association for the Advancement of Science 1919*, John Murray (*BAAS 1919*).
- Richards, G. (2004), “Bain, Alexander (1818-1903)”, Matthew, H.C.G. and B. Harrison (eds.)(2004), *Oxford Dictionary of National Biography*, 47, Oxford University Press: 313-16.
- Robbins, L. (1935), *An Essay on the Nature and Significance of Economic Science*, 2nd ed., Macmillan, 1949 (中山伊知郎監修・辻六兵衛訳、『経済学の本質と意義』、東洋経済新報社、1957) .
- (1998), *A History of Economic Thought; the LSE Lectures*, Princeton University Press, paperback ed., 2000.
- Robertson, G.C. (1876), “Prefatory Words”, *Mind*,1: 1-6.
- Rogers, J.E.T. (1888), *The Economic Interpretation of History*, in Backhouse, R.E. and P.J. Cain (eds.)(2001), *The English Historical School of Economics*, 2, Thoemmes Press.
- Rowntree, S. (1921), *The Responsibility of Women Workers for Dependants*, Clarendon Press.
- Samuelson, P.A. (1948), *Foundations of Economic Analysis with a new introduction*, Atheneum, 1965 (佐藤隆三訳、『経済分析の基礎』、勁草書房、1967) .
- (1974), “Complementarity: An Essay on the 40th Anniversary of the Hicks-Allen Revolution in Demand Theory”, *Journal of Economic Literature*, 12: 1255-89.
- Savile Club (1923), *The Savile Club 1868-1923*, Neil and Co..
- (1874), *Savile Club: Rules and List of Members, July, 1874*, Kessinger Publishing’s Rare Reprints, 2010.
- Schneewind, J.B. (1977), *Sidgwick’s Ethics and Victorian Moral Philosophy*, paperback ed.,

- Oxford University Press, 1986.
- Schumpeter, J.A. (1954), *History of Economic Analysis*, Oxford University Press (東畑精一・福岡正夫訳、『経済分析の歴史』(上中下巻)、岩波書店、2005-06) .
- Seligman, E.R.A. (1894), *Progressive Taxation in Theory and Practice*, American Economic Association.
- Shubik, M.(1959), “Edgeworth Market Games”, in Tucker, A.W. and R.D. Luce (eds.), *Contributions to the Theory of Games*, 4, Princeton University: 267-78.
- Shehab, F. (1953), *Progressive Taxation: A Study in the Development of the Progressive Principle in the British Income Tax*, Clarendon Press.
- Sidgwick, H. (1877a), *The Methods of Ethics*, 2nd ed., Macmillan.
- (1877b), “Mr. Barratt on “The Suppression of Egoism”, *Mind*, 2: 411-12.
- (1885), “The Scope and Method of Economic Science”, in Smyth, R.L. (ed.)(1962), *Essays in Economic Method*, Gerald Duckworth and Co.: 73-97.
- (1901), *The Principles of Political Economy*, 3rd ed. Macmillan.
- (1906), *The Methods of Ethics*, 7th ed., in Thoemms Press (ed.)(1996), *The Works of Henry Sidgwick*, Thoemms Press.
- Sidgwick, A and E.M. Sidgwick (1906), *A Memoir*, in Thoemms Press(ed.)(1996), *The Works of Henry Sidgwick*, Thoemms Press.
- Smart, W. (1892), *Women’s Wages*, James Maclehouse.
- Sraffa, P. (ed.)(1952), *Letters 1821-1823*, in Sraffa, P. (ed.), *Works and Correspondence of David Ricardo*, 9, Liberty Fund (中野正監訳、『書簡集 1821年7月-1823年』(リカードゥ全集 9巻)、雄松堂書店、1975) .
- Stigler, S.M. (1978), “Francis Ysidro Edgeworth, Statistician (with Discussion)”, *Journal of the Royal Statistical Society*, Series A, 141: 287-313. Also in Blaug, M. (ed.)(1992): 139-65.
- Sully, J. (1876), “Physiological Psychology in Germany”, *Mind*, 1: 20-43.
- (1918), *My Life and Friends: A Psychologist’s Memories*, T. Fisher Unwin Ltd.
- Tarascio, V.J. (1972), “A Correction: On The Genealogy of the so-called Edgeworth-Bowley Diagram”, *Western Economic Journal*, 10: 193-97. Also in Blaug, M.(1992): 75-79.
- (1980), “Some Recent Interpretations of Mathematical Psychics: a Reply”, *History of Political Economy*, 12: 277-81. Also in Blaug, M.(1992): 176-80.

- Taylor, M. (2004), “Edgeworth, Francis Ysidro (1845-1926)”, Rutherford, D. (ed.), *The Biographical Dictionary of British Economists*, 1: 355-60.
- The Calendar of King's College, London, for 1881-2*, R. Clay, Sons, and Taylor, Printers, 1881 (CKCL 1881).
- The Calendar of King's College, London, for 1882-3*, R. Clay, Sons, and Taylor, Printers, 1882 (CKCL 1882).
- The Calendar of King's College, London, for 1883-4*, R. Clay, Sons, and Taylor, Printers, 1883 (CKCL 1883).
- The Calendar of King's College, London, for 1884-5*, R. Clay, Sons, and Taylor, Printers, 1884 (CKCL 1884).
- The Calendar of King's College, London, for 1885-6*, Richard Clay and Sons, 1885 (CKCL 1885).
- The Calendar of King's College, London, for 1886-7*, Richard Clay and Sons, 1886 (CKCL 1886).
- The Calendar of King's College, London, for 1887-8*, Richard Clay and Sons, 1887 (CKCL 1887).
- The Calendar of King's College, London, for 1888-9*, Richard Clay and Sons, 1888 (CKCL 1888).
- The Calendar of King's College, London, for 1889-90*, Richard Clay and Sons, Limited, 1889 (CKCL 1889).
- The Calendar of King's College, London, for 1890-91*, Richard Clay and Sons, Limited, 1890 (CKCL 1890).
- The Calendar of King's College, London, for 1891-92*, Richard Clay and Sons, Limited, 1891 (CKCL 1891).
- The Calendar of King's College, London, for 1892-93*, Richard Clay and Sons, Limited, 1892 (CKCL 1892).
- The Dublin University Calendar for the Year 1862*, Hedges, Smith and Co., 1861 (DUC 1862).
- The Dublin University Calendar for the Year 1863*, Hedges, Smith and Co., 1862 (DUC 1863).
- The Dublin University Calendar for the Year 1864*, Hedges, Smith and Co., 1863 (DUC 1864).
- The Dublin University Calendar for the Year 1865*, Hedges, Smith and Co., 1864 (DUC 1865).
- The Dublin University Calendar for the Year 1866*, Hedges, Smith and Co., 1865 (DUC 1866).
- The Historical Register of the University of Oxford, Being a Supplement to the Oxford University Calendar with an Alphabetical Record of University Honours and Distinctions completed to the End of Trinity Term 1900*, Oxford.

- The Oxford University Calendar 1867*, James Parker and Co., 1867 (*OUC 1867*).
- The Oxford University Calendar 1874*, James Parker and Co., 1874 (*OUC 1874*).
- The Oxford University Calendar 1878*, James Parker and Co., 1878 (*OUC 1878*).
- The Philosophical Society (1933), *The Oxford English Dictionary*, 8, Clarendon Press.
- Thomson, W. (2001), *A Guide for the Young Economist: Writing and Speaking Effectively about Economics*, Massachusetts Institute of Technology (清野一治訳、『経済論文の書き方——作成・プレゼン・評価——』、東洋経済新報社、2006) .
- Tuke, M.J. (1939), *A History of Bedford College for Women 1849-1937*, Oxford University Press.
- Varian, H.L. (1984), *Microeconomic Analysis*, 2nd ed., W.W. Norton and Company.
- Vind, K. (1964), “Edgeworth-Allocations in an Exchange Economy with Many Traders”, *International Economic Review*, 5: 165-77.
- Walker, D.A. (1973), “Edgeworth’s Theory of Recontract”, *The Economic Journal*, 83: 138-49.  
Also in Blaug, M. (ed.)(1992): 80-91.
- Ward, H. (1926), *History of the Athenæum 1824-1925*, William Clows and Sons, Limited, London and Beccles.
- Ward, J. (1876), “An Attempt to Interpret Fechner’s Law”, *Mind*, 1: 452-66.
- Weatherby, J.L. (1976), “Why was it called an Edgeworth-Bowley Box? A Possible Explanation”, *Economic Inquiry*, 14: 294-96.
- Webb, S. (1891), The Alleged Differences in the Wages paid to Men and to Women for Similar Work, *The Economic Journal*, 1: 635-62.
- Whitaker, J.K. (1996), *The Correspondence of Alfred Marshall*, *Economist*, 3 vols., Cambridge University Press.
- Whyte, W. (2011) “Sunday Tramps (act. 1879-1895)”, *Oxford Dictionary of National Biography*, Oxford University Press (URL: <http://www.oxforddnb.com/view/theme/96363>, accessed 16th August 2011).
- Wilson, D.B. (2004), “Stokes, Sir George Gabriel, first baronet (1819-1903)”, Matthew, H.C.G. and B. Harrison (eds.), *Oxford Dictionary of National Biography*, 52, Oxford University Press: 860-64.
- Zouboulakis, M.S. (2008), “Contesting the Autonomy of Political Economy: The Early Positivist Criticism of Economic Knowledge”, *The European Journal of the History of Economic*

*Thought*, 15(1): 85-103.

青山秀夫(1937)、『独占の経済理論』(青山秀夫著作集 第2巻)、創文社、1999。

飯田鼎(1996)、『ヴィクトリア時代の社会と労働問題——「セルフ・ヘルプ」と労働者および知識人——』(飯田鼎著作集第1巻)、御茶の水書房。

井藤半彌(1969)、『新版 租税原則学説の構造と生成』、千倉書房。

伊東光晴編(2004)、『岩波現代経済学事典』、岩波書店。

井上琢智(1986a)、「W.S.ジェヴォンズ著作目録・関連文献目録」、『経済学論究』、39(4): 113-46。

————(1986b)、「W.S.ジェヴォンズの往復書簡——ジェヴォンズ著作目録・関連文献目録補遺——」、『経済学論究』、40(3): 141-61。

————(1987)、『ジェヴォンズの思想と経済学——科学者から経済学者へ——』、日本評論社。

————(1989)、「イギリス科学促進協会 F 部会の歴史——新設(1833)からイギリス経済学会の創設(1890)まで——」、『経済学論究』、43(3): 459-89。

今井けい(2003)、『イギリス女性運動史——フェミニズムと女性労働運動の結合——』、日本経済評論社。

今田恵(1962)、『心理学史』、岩波書店。

上宮正一郎(2000)、「解題」、J.N.ケインズ著、上宮正一郎訳、『経済学の領域と方法』、日本経済評論社。

上宮智之(2011)、「Barbé, Lluís (translated by Mary C. Black): *Francis Ysidro Edgeworth: A Portrait with Family and Friends*, Cheltenham: Edward Elgar, 2010, xxxvi+291 pp.」、『経済学史研究』 53(1): 119-20。

江頭進(2010)、「19世紀の統計学の発達と経済学——帰納と演繹の転換——」、只腰親和・佐々木憲介編、『イギリス経済学における方法論の展開——演繹法と帰納法——』、昭和堂: 294-316。

大塩まゆみ(1996)、『家族手当の研究』、法律文化社。

大嶋磨起・大嶋浩(2001)、「解説」、『ラックレント城』、開文社出版。

岡田章(2007)、「ゲーム理論の歴史と現在——人間行動の解明を目指して——」、『経済学史研究』 49(1): 137-54 頁。

奥田満里子(1999)、『シジウィックと現代功利主義』、勁草書房。

- 菊池裕幸(2006)、「累進所得税と功利主義——シジウィックとエッジワース——」、『鹿児島経済論集』47(2)：81-106。
- 小山路男(1978)、『西洋社会事業史論』、光生館。
- 佐々木憲介(2006)、「W.カニンガムにおける理論と歴史」、『経済学研究』55(4)：43-64。  
———(2011)、「J.E.T.ロジャーズによる歴史の経済的解釈」、『経済学研究』61(1-2)：1-19。
- 清水幾太郎(1972)、『倫理学ノート』、講談社学術文庫(2000年)。
- 千賀重義(2010)、「ジェヴォンズにおける帰納と演繹」、只腰親和・佐々木憲介編、『イギリス経済学における方法論の展開——演繹法と帰納法——』、昭和堂：165-93。
- 外林大作・辻正三・島津一夫・能見義博編(1981)、『誠信心理学辞典』、誠信書房。
- 中野聡子(1995)、「交換理論の展開」、平井俊顕・野口旭編、『経済学の正統と異端——クラシックからモダンへ——』、昭和堂：162-84。
- 中村隆之(2008)、『ハロッドの思想と動態経済学』、日本経済評論社。
- 西岡幹雄(1997)、『マーシャル研究』、晃洋書房。
- 西村和雄(1990)、『ミクロ経済学』、東洋経済新報社。
- 根岸隆(1985)、『経済学における古典と現代理論』、有斐閣。
- 野村博(1982)、「T.H.グリーンの倫理思想」、行安茂・藤原保信責任編集、『T.H.グリーン研究』、御茶の水書房：27-50。
- 土生芳人(1997)、「19世紀イギリスの所得税」、『岡山商大論叢』33(2)：1-37。
- 平井俊顕(2007)、『ケインズ100の名言』、東洋経済新報社。
- 福岡正夫(1999)、「フランシス・イシドロ・エッジワース」、『歴史のなかの経済学——一つの評伝集——』、創文社：183-225。
- 藤田哲雄(2002)、「所得税の累進化は、なぜ相続税の累進化よりも遅いのか——イギリス所得税改革の一齣——」、『経済科学研究』6(1)：177-203。
- 藤塚知義(1973)、『経済学クラブ——イギリス経済学の展開——』、ミネルヴァ書房。
- ホメーロス、土井晩翠訳(1995)、『イーリアス』、富山房。
- 本郷亮(2007)、『ピグーの思想と経済学——ケンブリッジの知的展開のなかで——』、名古屋大学出版会。
- 松嶋敦茂(1989)、「「極大満足説」と現実」、『彦根論叢』257：25-53。  
———(1996)、『現代経済学史 1870-1970——競合的パラダイムの展開——』、名古屋大学出版会。

————(2005)、『功利主義は生き残るのか——経済倫理学の構築に向けて——』、勁草書房。

馬渡尚憲(1990)、『経済学のメソドロジー——スミスからフリードマンまで——』、日本評論社。

蓑谷千風彦(1982)、「不遇の統計学者エッジワース」、『三田学会雑誌』75(1)：39-64。

行安茂編(1992)、『H.シジウィック研究——現代正義論への道——』、以文社。

渡辺千寿子(1976)、「イギリスにおける家族手当論の展開について——家族手当法成立まで——」、『社会学部論叢』10：45-57。

初出一覧

第 1 章 エッジワースの「ダイアグラム」とその解釈

(論文)

- (1) 「エッジワースの「ボックス・ダイアグラム」とその伝統的解釈——1970年代におけるボックス・ダイアグラム論争を中心に——」、『経済学論究』58(4): 109-32 (2005年3月)。

第 2 章 エッジワースとその知的環境——その誕生から 1860年代にかけてのエッジワース——

(論文)

- (1) 「F.Y.エッジワースとその知的環境——生誕からトリニティ・カレッジ・ダブリン時代まで——」、『経済学論究』61(4): 47-81 (2008年4月)。

第 3 章 エッジワースの交友関係と職歴——1870-80年代にかけてのエッジワース書きおろし

第 4 章 『数理精神科学』と精密功利主義——シジウィック＝バラット論争からの独自展開——

(論文)

- (1) 「F.Y.エッジワース『数理精神科学』と功利主義——シジウィック＝バラット論争からの独自展開——」、『経済学史研究』49(1): 69-85 (2007年6月)。
- (2) “F. Y. Edgeworth’s *Mathematical Psychics* and his Utilitarianism: The Derivation from the ‘Sidgwick-Barratt’ Controversy”, School of Economics, Kwansai Gakuin University, Discussion Paper 37 (2008年3月) .

(学会報告)

- (1) 「エッジワースのボックス・ダイアグラムと功利主義——『数理精神科学』を中心に——」、経済学史学会関西支部会、第144回例会(名城大学)(2003年7月)。
- (2) 「『数理精神科学』における功利主義擁護論——エッジワースのボックス・ダイアグラムと功利主義——」、経済学史学会全国大会、第68回大会(北星学園大学)(2004

年5月)。

- (3) 「初期エッジワース功利主義思想の諸特徴——『倫理学の新方法と旧方法』(1877年)を中心に——」、経済学史学会全国大会、第70回大会(神奈川大学)(2006年5月)。
- (4) “F. Y. Edgeworth’s *Mathematical Psychics* and his Utilitarianism: The Derivation from the ‘Sidgwick-Barratt’ Controversy”, Young Scholars Seminar 2009, Japan Society of Economic Thought (Kansai University) (2009年3月)。

## 第5章 エッジワースと経済学方法論争

(論文)

- (1) 「エッジワースと経済学方法論争」、佐々木憲介・只腰親和編、『イギリス経済学における方法論の展開——演繹法と帰納法——』、昭和堂：260-90(2010年6月)。

(学会報告)

- (1) 「F.Y.エッジワースの経済学方法論」、経済学史学会関西部会、第154回大会(関西大学)(2008年7月)。

## 第6章 エッジワースと最小犠牲原理——課税論への功利主義の適用——

(学会報告)

- (1) 「F.Y.エッジワースの功利主義と犠牲説——「課税の純粹理論」(1897年)を中心に——」、経済学史学会関西部会、第150回例会(甲南大学)(2006年7月)。

## 第7章 エッジワースの男女賃金論——『数理精神科学』から「男女の等しい労働にたいする等しい賃金」へ——

(学会報告)

- (1) 「F.Y.エッジワースの男女賃金論——「男女への等しい労働にたいする等しい賃金」(1922)を中心に——」、経済学史学会北海道部会(北星学園大学)(2009年12月)。

## 謝 辞

本稿には、以下三つの助成金による研究成果が反映されている。独立行政法人日本学術振興会および大阪経済大学には記して感謝したい。

- (1) 2004-2005 年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）

研究課題番号：04J09363

研究課題名：「19 世紀後期英国経済思想史——F.Y.エッジワースを中心に——」

- (2) 2009-2011 年度科学研究費補助金（研究基盤 B）

研究課題番号：213300447（研究代表者：松井名津）

研究課題名：「イギリス経験論の展開と経済学方法論——歴史的・理論的連関——」

- (3) 2011 年度特別研究費（大阪経済大学）

研究テーマ：「エッジワース経済学への第一次世界大戦の影響」

本稿執筆にあたって、多くの方々ご助言やご助力をたまわった。とりわけ、井上琢智先生、篠原久先生、竹本洋先生、根岸紳先生（以上、関西学院大学）、故 R.D. Collison Black 先生（Queen's University, Belfast 名誉教授）、田中敏弘先生、故山本栄一先生（以上、関西学院大学名誉教授）、上宮正一郎先生（神戸大学）、橋本昭一先生、中澤信彦先生（以上、関西大学）、坂口正志先生（元富山大学）、小峯敦先生（龍谷大学）、本郷亮先生（弘前学院大学）、只腰親和先生（横浜市立大学）、佐々木憲介先生、松山直樹先生（以上、北海道大学）、松井名津先生（松山大学）、久松太郎先生（福山大学）、斉藤栄司先生（大阪経済大学）、南森茂太氏（関西学院大学大学院研究員）の皆様に厚く御礼申し上げます。また、筆者は、所属する経済学史学会はもちろん、経済学史研究会、近代経済学史研究会、経済学方法論フォーラム、関西ゲーム理論研究会、勤労育成思想研究会などの研究会においても、報告の機会に恵まれた。個別にお名前を挙げることはできないが、稚拙な報告に有益な批判とご助言をくださった研究者の方々にも感謝の意を表したい。

イギリスおよびアイルランドでの資料収集に際しては、Collison Black 先生はもとより、Ian Simpson Ross 先生（University of British Columbia 名誉教授）、Antoin E. Murphy 先生（Trinity College, Dublin 教授）、Trinity College, Dublin, Manuscripts Department および同 Department の Aisling Lockhart 氏、Longford County Library および同 Library Archivist の Martin Morris 氏、Edgeworthstown の Jack Stewart 氏、Bodleian Library および同 Library Archives Assistant の Nicholas Smith 氏、Balliol College Library、Nuffield College Library、King's College, London, Archives の方々および研究機関のお世話になった。これらの方々や研究機関のご好意と協力なしに本稿を完成させることは不可能であった。

もちろん、本稿の内容についての責任はすべて筆者にある。